

ISSN 1341-6952

東北大学埋蔵文化財調査年報19

第1分冊

仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点の調査
芦ノ口遺跡第5次調査

東北大学埋蔵文化財調査研究センター
2006

東北大学埋蔵文化財年報19第1分冊 正誤表

箇所	誤	正
78頁 図39 武家屋敷地区第7地点Ⅱ期の遺構(5)	図中のスケールの単位1m	図中のスケールの単位10cm

東北大学埋蔵文化財調査年報19

第1分冊

仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点の調査
芦ノ口遺跡第5次調査

東北大学埋蔵文化財調査研究センター
2006



3. 武家屋敷地区第7地点2号造構・24号土坑（Ⅱ期、南から）



4. 武家屋敷地区第7地点2号造構堆積土の状況（Ⅱ期、東から）



5. 武家屋敷地区第7地点1号遺構検出の大全身骨格（Ⅱ期、西から）



6. 武家屋敷地区第7地点2号遺構漆器出土状況（Ⅱ期、東から）



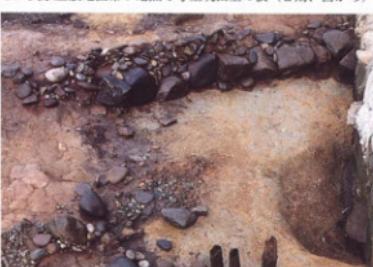
7. 武家屋敷地区第7地点1号井戸と内部に残された梯子（Ⅱ期、北から）



8. 武家屋敷地区第7地点4号土坑出土の俵（Ⅱ期、西から）



9. 武家屋敷地区第7地点桶埋設遺構（Ⅲ期、西から）



10. 武家屋敷地区第7地点2号土坑遺物出土状況（Ⅲ期、北から）



11. 武家屋敷地区第7地点池状遺構（Ⅲ期、西から）



12. 武家屋敷地区第7地点1号建物・2号建物（Ⅲ期、北から）



13. 武家屋敷地区第7地点Ⅳ期の遺構全景（北から）

序

東北大学構内には、仙台城跡二の丸地区をはじめとして、多くの埋蔵文化財包蔵地が知られている。本書は、2001年度に東北大学構内で実施した、施設整備に伴う埋蔵文化財調査や、それに関わる整理作業、研究活動などの事業概要をとりまとめたものである。当年度には、富沢キャンパスにおいて芦ノ口遺跡の第5次調査、川内北キャンパスにおいて仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点の調査を実施した。

芦ノ口遺跡第5次調査では、古墳時代の粘土探掘坑が発見された。従来は縄文時代の粘土探掘坑が知られていたが、それとは異なる時代にも粘土が探掘されていたことが明らかとなつた。粘土探掘坑の調査例は少なく、貴重な調査事例となるであろう。

二の丸北方武家屋敷地区第7地点では、礎石建物跡をはじめ様々な遺構が検出された。特筆されるものとして、極めて大規模なゴミ穴が検出され、膨大な量の遺物が出土した。本簡も大量に出土し、その記載内容から、18世紀前葉の享保年間に二の丸地区から出たゴミを捨てたものと考えられる。報告する遺物の量も極めて多くなるため、5分冊に分けて刊行することとした。第1分冊は、芦ノ口遺跡第5次調査の報告と、二の丸北方武家屋敷地区第7地点については検出遺構の報告までを掲載している。今後、第2分冊以降で、武家屋敷地区第7地点の出土遺物を順次報告していく予定である。年代の明らかな様々な種類の遺物が得られたこととなり、東北地方の近世考古学研究上、基準となる資料を提供することになると思われます。これらの成果が、広く活用されることを願うものです。

最後になりますが、調査の実施から報告書の刊行に至るまで、施設部を始め、大学内外の関係者および関係機関には、多くの御協力を賜りました。ここに厚くお礼申し上げます。

東北大学埋蔵文化財調査研究センター長

阿子島 香

例　言

1. 本年報は、東北大學構内において、東北大學埋蔵文化財調査研究センターが2001年度に行った遺跡調査、ならびに研究成果をまとめたものである。

2. 報告される遺跡と略号、調査期間、調査担当者は以下の通りである。

仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点（BK7）

本調査 2001年4月4日～11月23日 藤沢敦・柴田（旧姓京野）恵子・高木暢亮

芦ノ下遺跡第5次調査（TM5）

本調査 2001年11月26日～12月20日 柴田恵子・高木暢亮

3. 報告書の紙幅の関係から、2001年度の年報19は、5分冊に分けて刊行する。本書は、その第1分冊である。本書には、上記2遺跡の調査報告を掲載するが、その内、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点については、検出遺構の報告までを本書に掲載し、出土遺物については、第2分冊以降で報告する。

4. 調査・整理作業は、東北大學埋蔵文化財調査研究センターが行った。

5. 本年報の編集は、阿子島香の指導のもとに、藤沢敦・柴田恵子・高木暢亮が担当した。

6. 本文は、藤沢敦・柴田恵子・高木暢亮が分担執筆した。本文執筆分担は、以下のとおりである。第Ⅲ章4の検出遺構については、3名で共同して執筆した。

第Ⅰ章：藤沢敦

第Ⅱ章：柴田恵子

第Ⅲ章1～3：藤沢敦

第Ⅲ章4：藤沢敦・柴田恵子・高木暢亮

英文要旨については、柴田恵子が作成し、阿子島香が校訂した。

7. 発掘調査および整理・報告書作成にあたっては、以下の方々や関係機関から御指導・御協力を賜った。記して感謝申し上げる（敬称略）。

仙台市教育委員会、東北大學考古学研究室

8. 出土遺物・調査記録は、東北大學埋蔵文化財調査研究センターで保管・管理している。

凡 例

1. 方位は真北に統一してある。
2. 図1と図2は、それぞれ国土地理院作成の、2万5千分の1地形図「仙台西北部」と「仙台西南部」、1万分の1地形図「青葉山」を使用した。
3. 川内地区的仙台城跡二の丸地区、および二の丸北方の武家屋敷地区にあたる地域の地形測量図は、仙台市教育委員会の作成による「仙台城跡地形図」(縮尺500分の1)を使用した。
4. 国土座標値を用いる場合には、日本測地系と世界測地系の別を、それぞれ記入した。
5. 遺物の実測図および写真的縮尺は、それぞれに示した。
6. 引用・参考文献は、巻末にまとめた。また本文中で、「東北大學埋蔵文化財調査年報」を引用する場合は、年報1という形で略記した。
7. 掲図中のスクリーントーンは、特に指示しないものについては、以下の通りである。

遺構断面図 磚：■ 木：■

東北大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会 (2001年度)

委員長	センター長 (文学研究科 教授)	須藤 隆
委 員	川内地区協議会協議員 (経済学研究科 教授)	出 中 素 香
	青葉山地区協議会協議員 (歴史学研究科 教授)	小笠原 國 郎
	尾陵地地区協議会協議員 (医学研究科 教授)	伊藤 恒 敏
	片平地区協議会協議員 (電気通信研究所 教授)	中 村 慶 久
文学研究科 教 授		今 泉 隆 雄
文学研究科 教 授		大 藤 修 香
文学研究科 教 授		阿子島
東北アジア研究センター 教 授		入間田 宣 夫
理学研究科 教 授		藤 卷 宏 和
工学研究科 教 授		飯 潤 康 一
総合学術博物館 教 授		柳 田 俊 雄
施 設 部 長		加 太 孝 司
幹 事 施 設 部 企画課長		佐々木 紀 安

東北大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会専門委員会 (2001年度)

委員長	センター長 (文学研究科 教授)	須藤 隆
委 員	文学研究科 教 授	今 泉 隆 雄
	文学研究科 教 授	大 藤 修 香
	文学研究科 教 授	阿子島
	東北アジア研究センター 教 授	入間田 宣 夫
理学研究科 教 授		藤 卷 宏 和
工学研究科 教 授		飯 潤 康 一
総合学術博物館 教 授		柳 田 俊 雄
調査研究員 (文学研究科 助手)		藤 沢 敏
調査研究員 (文学研究科 助手)		京 野 恵 子
調査研究員 (文学研究科 助手)		高 木 鶴 亮
施 設 部 企画課長		佐々木 紀 安

目 次

巻頭カラー図版

序

例言

凡例

東北大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会

東北大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会専門委員会

目次

図目次

表目次

図版目次

第Ⅰ章 2001年度（平成13年度）事業の概要	1
1.はじめに	1
2.運営委員会・専門委員会	1
3.埋蔵文化財調査の概要	4
(1)川内地区の調査	4
(2)青葉山地区の調査	10
(3)富沢地区の調査	10
4.遺物整理作業	10
5.保存処理事業	10
6.資料保管状況	13
7.研究活動	13
第Ⅱ章 宮沢芦ノ口遺跡第5次調査（TM5）	15
1.芦ノ口遺跡の立地と周辺の遺跡	15
2.調査の経緯	15
(1)2000年度までの調査	15
(2)調査地点の位置	17
(3)調査の方法と経過	17
3.基本層序	18
4.検出遺構	19
5.出土遺物	23
6.まとめ	25
第Ⅲ章 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点（BK7）の調査	27
1.仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区の立地と歴史	27
(1)仙台城と城下の沿革	27
(2)二の丸北方の武家屋敷地区の変遷	28
2.調査経緯	35
(1)2000年度までの調査	35
(2)調査地点の位置	36
(3)調査の方法と経過	36
①1984年度試掘調査	36
②2001年度本調査	36
③記録方法	41
④遺構の名称について	42
⑤遺物の取り上げについて	42
⑥整理作業	43
⑦基本層序と時期区分	44
(1)基本層序	44

(2) 遺構の変遷段階の設定	50	① I期の遺構	58
(3) 各期の推定時期	50	② II期の遺構	70
4. 検出遺構	55	③ III期の遺構	99
(1) 江戸時代以前の遺構	56	④ IV期の遺構	118
(2) 江戸時代以降の遺構	58	(3) 小結	124

引用・参考文献

英文要旨

写真図版

※以上第1分冊

第Ⅲ章 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点（BK7）の調査

5. 出土遺物1 〈陶磁器・土器・土製品・瓦〉	第2分冊
6. 出土遺物2 〈木簡・墨書きある木製品〉	第3分冊
7. 出土遺物3 〈その他の遺物〉	第4分冊
8. 分析・考察	第5分冊

図 目 次

図1 東北大大学と周辺の遺跡	2	図33 武家屋敷地区第7地点 II期遺構配置図(1)	72
図2 仙台城と二の丸の位置	3	図34 武家屋敷地区第7地点 II期遺構配置図(2)	73
図3 仙台城跡二の丸・武家屋敷地区調査地点	5	図35 武家屋敷地区第7地点II期の遺構(1)	74
図4 青葉山地区調査地点	7	図36 武家屋敷地区第7地点II期の遺構(2)	75
図5 宮沢地区調査地点	9	図37 武家屋敷地区第7地点II期の遺構(3)	76
図6 保存処理作業室平面図	11	図38 武家屋敷地区第7地点II期の遺構(4)	77
図7 保存処理作業室の状況	11	図39 武家屋敷地区第7地点II期の遺構(5)	78
図8 収蔵遺物量の推移	12	図40 武家屋敷地区第7地点II期の遺構(6)	79
図9 芦ノ口遺跡第5次調査区と 周辺調査区の位置	16	図41 武家屋敷地区第7地点II期の遺構(7)	80
図10 芦ノ口遺跡第5次調査層序模式図	18	図42 武家屋敷地区第7地点II期の遺構(8)	81
図11 芦ノ口遺跡第5次調査6層上面遺構配置図	20	図43 武家屋敷地区第7地点II期の遺構(9)	82
図12 芦ノ口遺跡第5次調査検出遺構(1)	21	図44 武家屋敷地区第7地点II期の遺構(10)	83
図13 芦ノ口遺跡第5次調査検出遺構(2)	22	図45 武家屋敷地区第7地点II期の遺構(11)	84
図14 芦ノ口遺跡第5次調査出土石器	24	図46 武家屋敷地区第7地点II期の遺構(12)	85
図15 二の丸北方武家屋敷地区における 江戸時代の道路の復元	29	図47 武家屋敷地区第7地点II期の遺構(13)	86
図16 武家屋敷地区第7地点周辺の 絵図・地図(1)	32	図48 武家屋敷地区第7地点II期の遺構(14)	87
図17 武家屋敷地区第7地点周辺の 絵図・地図(2)	33	図49 武家屋敷地区第7地点II期の遺構(15)	88
図18 武家屋敷地区第7地点調査区の位置	37	図50 武家屋敷地区第7地点 III期遺構配置図(1)	100
図19 武家屋敷地区第1地点調査区と 第7地点調査区の関係	38	図51 武家屋敷地区第7地点 III期遺構配置図(2)	101
図20 武家屋敷地区第7地点調査区模式図	40	図52 武家屋敷地区第7地点III期の遺構(1)	102
図21 武家屋敷地区第7地点基本層序模式図	44	図53 武家屋敷地区第7地点III期の遺構(2)	103
図22 武家屋敷地区第7地点基本層序断面図(1)	46	図54 武家屋敷地区第7地点III期の遺構(3)	104
図23 武家屋敷地区第7地点基本層序断面図(2)	47	図55 武家屋敷地区第7地点III期の遺構(4)	105
図24 武家屋敷地区第7地点基本層序断面図(3)	48	図56 武家屋敷地区第7地点III期の遺構(5)	106
図25 武家屋敷地区第7地点基本層序断面図(4)	49	図57 武家屋敷地区第7地点III期の遺構(6)	107
図26 武家屋敷地区第7地点江戸時代以前の遺構	57	図58 武家屋敷地区第7地点III期の遺構(7)	108
図27 武家屋敷地区第7地点I期遺構配置図	59	図59 武家屋敷地区第7地点III期の遺構(8)	109
図28 武家屋敷地区第7地点I期の遺構(1)	60	図60 武家屋敷地区第7地点III期の遺構(9)	110
図29 武家屋敷地区第7地点I期の遺構(2)	61	図61 武家屋敷地区第7地点IV期遺構配置図	119
図30 武家屋敷地区第7地点I期の遺構(3)	62	図62 武家屋敷地区第7地点IV期の遺構(1)	120
図31 武家屋敷地区第7地点I期の遺構(4)	63	図63 武家屋敷地区第7地点IV期の遺構(2)	121
図32 武家屋敷地区第7地点I期の遺構(5)	64	図64 武家屋敷地区第7地点IV期の遺構(3)	122

表 目 次

表1 2001年度調査概要表	1	表6 武家屋敷地区第7地点関連絵図人名	34
表2 芦ノ口遺跡第5次調査出土遺物集計表	24	表7 仙台藩の家格	34
表3 芦ノ口遺跡第5次調査出土上部器観察表	24	表8 武家屋敷地区第7地点時期別造構一覧表	52
表4 芦ノ口遺跡第5次調査出土石器観察表	24	表9 武家屋敷地区第7地点遺構名称対照表(1)	53
表5 主要な仙台城下絵図	31	表10 武家屋敷地区第7地点遺構名称対照表(2)	54

図 版 目 次

図版1 芦ノ口遺跡		図版21 武家屋敷地区第7地点Ⅱ期の遺構(4)	151
第5次調査全景・検出遺構(1)	131	図版22 武家屋敷地区第7地点Ⅱ期の遺構(5)	152
図版2 芦ノ口遺跡第5次調査検出遺構(2)	132	図版23 武家屋敷地区第7地点Ⅱ期の遺構(6)	153
図版3 芦ノ口遺跡第5次調査検出遺構(3)	133	図版24 武家屋敷地区第7地点Ⅱ期の遺構(7)	154
図版4 芦ノ口遺跡第5次調査		図版25 武家屋敷地区第7地点Ⅱ期の遺構(8)	155
検出遺構(4)・出土遺物	134	図版26 武家屋敷地区第7地点Ⅱ期の遺構(9)	156
図版5 武家屋敷地区第7地点全景(1)	135	図版27 武家屋敷地区第7地点Ⅱ期の遺構(10)	157
図版6 武家屋敷地区第7地点全景(2)	136	図版28 武家屋敷地区第7地点Ⅱ期の遺構(11)	158
図版7 武家屋敷地区第7地点全景(3)	137	図版29 武家屋敷地区第7地点Ⅱ期の遺構(12)	159
図版8 武家屋敷地区第7地点全景(4)	138	図版30 武家屋敷地区第7地点Ⅱ期の遺構(13)	160
図版9 武家屋敷地区第7地点		図版31 武家屋敷地区第7地点Ⅱ期の遺構(14)	161
広域セクション(1)	139	図版32 武家屋敷地区第7地点Ⅱ期の遺構(15)	162
図版10 武家屋敷地区第7地点		図版33 武家屋敷地区第7地点Ⅱ期の遺構(16)	163
広域セクション(2)	140	図版34 武家屋敷地区第7地点Ⅱ期の遺構(17)	164
図版11 武家屋敷地区第7地点		図版35 武家屋敷地区第7地点Ⅲ期の遺構(1)	165
広域セクション(3)	141	図版36 武家屋敷地区第7地点Ⅲ期の遺構(2)	166
図版12 武家屋敷地区第7地点		図版37 武家屋敷地区第7地点Ⅲ期の遺構(3)	167
広域セクション(4)・縄文時代の遺構	142	図版38 武家屋敷地区第7地点Ⅲ期の遺構(4)	168
図版13 武家屋敷地区第7地点Ⅰ期の遺構(1)	143	図版39 武家屋敷地区第7地点Ⅲ期の遺構(5)	169
図版14 武家屋敷地区第7地点Ⅰ期の遺構(2)	144	図版40 武家屋敷地区第7地点Ⅲ期の遺構(6)	170
図版15 武家屋敷地区第7地点Ⅰ期の遺構(3)	145	図版41 武家屋敷地区第7地点Ⅲ期の遺構(7)	171
図版16 武家屋敷地区第7地点Ⅰ期の遺構(4)	146	図版42 武家屋敷地区第7地点Ⅲ期の遺構(8)	172
図版17 武家屋敷地区第7地点		図版43 武家屋敷地区第7地点Ⅲ期の遺構(9)	173
I期・I～II期の遺構	147	図版44 武家屋敷地区第7地点Ⅲ期の遺構(10)	174
図版18 武家屋敷地区第7地点Ⅱ期の遺構(1)	148	図版45 武家屋敷地区第7地点Ⅲ期の遺構(11)	175
図版19 武家屋敷地区第7地点Ⅱ期の遺構(2)	149	図版46 武家屋敷地区第7地点Ⅳ期の遺構(1)	176
図版20 武家屋敷地区第7地点Ⅲ期の遺構(3)	150	図版47 武家屋敷地区第7地点Ⅳ期の遺構(2)	177

第Ⅰ章 2001年度（平成13年度）事業の概要

1. はじめに

東北大大学には、仙台市内の各キャンパスに加えて、多くの研究施設がある。これらの各地区構内には、多くの埋蔵文化財が存在している（図1）。特に川内地区は、ほぼ全城が近世の仙台城跡二の丸地区と二の丸北方武家屋敷地区にあたっている（図2）。東北大大学構内での施設修復等に伴う埋蔵文化財調査については、1983年度に東北大大学埋蔵文化財調査委員会が組織されて以降、その実務機関である埋蔵文化財調査室が、調査の任にあたってきた。1994年度には、埋蔵文化財調査委員会を改組し、学内共同利用施設としての埋蔵文化財調査研究センターが設置され、調査委員会の事業を引き継いでいる。

2001年度においても、川内地区で大規模な調査が実施され、新たな資料を提供することとなった。本年報は、これらの調査成果、および同年度のセンターの研究教育活動など、各種事業についてまとめたものである。

2. 運営委員会・専門委員会

東北大大学埋蔵文化財調査研究センターでは、センターの運営に関する重要事項を審議する運営委員会と、運営委員会の下に埋蔵文化財調査に関する専門的事項を審議する専門委員会が設置されており、両委員会の審議をもとに運営が進められている。通常は、運営委員会は年度当初に一回開催し、そこで年間の事業予定・予算等を審議し、調査に関わる具体的な事項は、専門委員会をその都度開催して審議することとしている。

2001年度（平成13年度）は、運営委員会を3回、専門委員会を2回開催した。それぞれの開催月日・議事内容は以下の通りである。

埋蔵文化財調査研究センター運営委員会

- 4月12日 審議事項 (1) 平成13年度埋蔵文化財調査計画について
(2) 平成13年度センター運営費について
(3) 平成13年度整理作業計画について
(4) 東北大大学埋蔵文化財調査研究センターの組織見直しについて
(5) 平成13年度非常勤講師の委嘱について
(6) その他

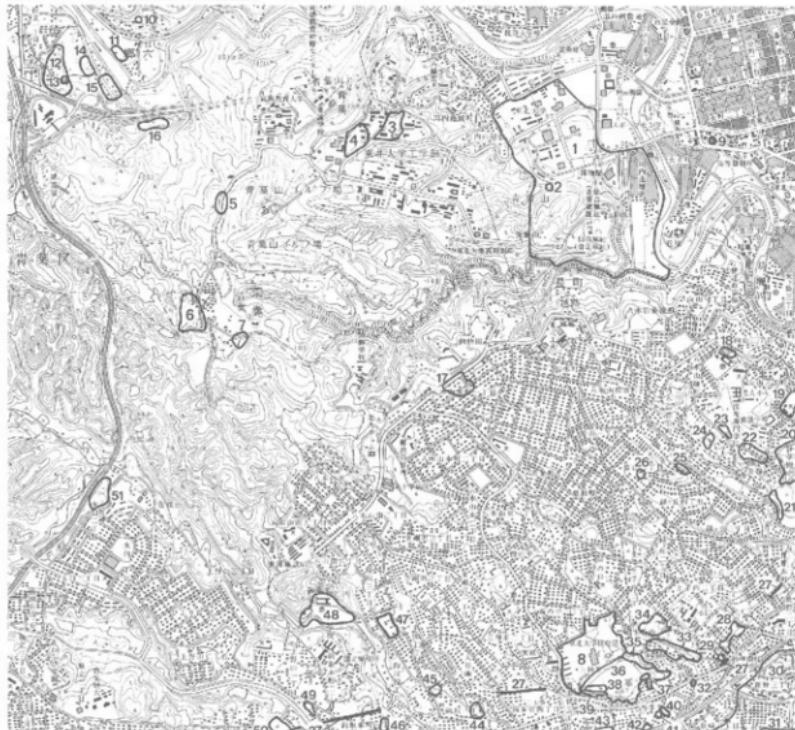
- 報告事項 (1) 平成12年度埋蔵文化財調査結果について
(2) 平成12年度センター運営経費決算について
(3) 平成12年度整理作業について
(4) 調査研究員の流用定員について
(5) その他

表1 2001年度調査概要表
Tab.1 Excavations on the campus in the fiscal year 2001

調査の種類	調査地點(略号)	原因	調査期間	面積	時期
本 調査	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地點(BK7)	マルチメディア総合研究棟新宮	5/7~11/23	810m ²	近世
	青森山E遺跡第7次調査(AOE 7)	理学研究科総合研究棟(初期)新宮	11/1~19	300m ²	縄文
立会調査	吉ノ口遺跡第5次調査(TM5)	GeV γ 線実験室新宮	11/26~12/20	512m ²	縄文～古墳
	川内地区駐輪場(2001-1)	駐輪場工事	4/9	—	—
	川内総合研究棟新宮(2001-2)	川内総合研究棟新宮	6/11	—	—
	マルチメディア総合研究棟新宮(2001-3)	汚水管工事	12/17~25	—	—
	国書館2号館東側(2001-4)	電気ケーブル埋設	3/18	—	—



- 1 : Ruin of Sendai Castle
- 2 : Kawauchi steles
- 3 : Aobayama Site Loc. B
- 4 : Aohayama Site Loc. E
- 5 : Aobayama Site Loc. C
- 6 : Aobayama Site Loc. A
- 7 : Aobayama Site Loc. D
- 8 : Ashinokuchi Site



- 1 : 仙台城跡 2 : 川内古碑群 3 : 青葉山遺跡B地点 4 : 青葉山遺跡E地点 5 : 青葉山遺跡C地点 6 : 青葉山遺跡A地点
- 7 : 青葉山遺跡D地点 8 : 芦ノ口遺跡 9 : 片平仙台大神宮の板碑 10 : 郡六大日如来の碑 11 : 葛岡城跡 12 : 郡六城跡
- 13 : 郡六建武碑 14 : 沼田遺跡 15 : 郡六御殿跡 16 : 郡六遺跡 17 : 松ヶ岡遺跡 18 : 向山高裏遺跡 19 : 萩ヶ丘遺跡
- 20 : 戻ヶ崎城跡 21 : ニツ沢横穴墓群 22 : 萩ヶ岡B遺跡 23 : 八木山線谷遺跡 24 : ニツ沢遺跡 25 : 青山二丁目遺跡
- 26 : 青山二丁目B遺跡 27 : 稲土手（廻餘土手） 28 : 紗押屋敷遺跡 29 : 紗押古墳 30 : 富沢遺跡 31 : 泉崎浦道路
- 32 : 金洗沢古墳 33 : 土手内窓跡 34 : 土手内遺跡 35 : 土手内横穴墓群 36 : 三神峯遺跡 37 : 金山窪跡 38 : 三神峯古墳群
- 39 : 富沢窪跡 40 : 喜町東遺跡 41 : 喜町古墳 42 : 原東遺跡 43 : 原遺跡 44 : 八幡遺跡 45 : 後田遺跡 46 : 町遺跡
- 47 : 神進山遺跡 48 : 御堂平遺跡 49 : 上野山遺跡 50 : 北前遺跡 51 : 佐保山東遺跡

図1 東北大学と周辺の遺跡
Fig.1 Archaeological sites and Tohoku University

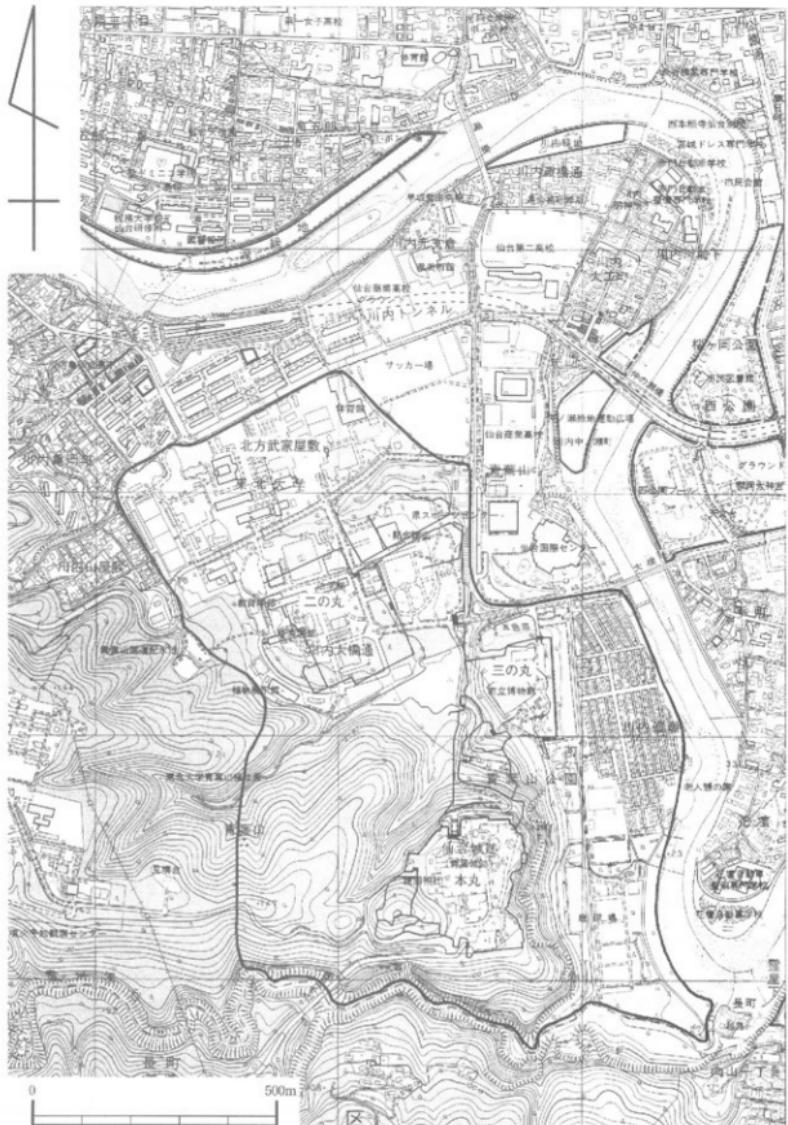


図2 仙台城と二の丸の位置
Fig.2 Distribution of Sendai Castle

7月27日	審議事項	(1) 東北大学埋蔵文化財調査研究センターの組織見直しについて (2) その他
	報告事項	(1) 東北大学百周年記念事業準備WGへの対応について (2) 東北大学埋蔵文化財調査年報14の作成と刊行について (3) その他
8月8日	審議事項	(1) 東北大学埋蔵文化財調査研究センターの組織見直しについて (2) その他
	報告事項	(1) その他
	埋蔵文化財調査研究センター運営委員会専門委員会	
4月12日	審議事項	(1) 平成13年度埋蔵文化財調査計画について (2) 平成13年度整理作業計画について (3) その他
	報告事項	(1) 平成12年度埋蔵文化財調査結果について (2) 平成12年度整理作業について (3) その他
10月10日	審議事項	(1) (川内) マルチメディア総合研究棟新宮に伴う埋蔵文化財調査について (2) (青葉山2) 総合研究棟Ⅲ期新宮に伴う埋蔵文化財調査について (3) (理) 核理研GeV γ 線実験棟新宮に伴う埋蔵文化財調査について
	報告事項	(1) その他

3. 埋蔵文化財調査の概要

2001年度は、川内地区・青葉山地区・宮沢地区において、本調査3件、立会調査4件、合計7件の調査を実施した。(表1)。

(1) 川内地区的調査

川内地区では、本調査1件と立会調査4件を実施した(図3)。

本調査を実施したのは、川内北地区のマルチメディア総合研究棟新宮に伴う、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点(BK7)の調査である。この調査では、多数の遺構・遺物が発見された。特に、18世紀前葉の広大なゴミ穴が検出され、木簡を始めとする、多種多様な遺物が大量に出土している。そのため、報告する必要のある遺物量が多く紙幅が膨大になるため、5分冊とすることとした。本書が相当する第1分冊では、検出遺構の報告までを掲載した(第Ⅲ章1~4)。出土遺物については、第2分冊以降において報告することとし、来年度以降に刊行する予定である。

立会調査は川内北地区が2件、川内南地区が2件であった。

川内北地区的1件は、駐輪場の整備に関わる工事に伴うものである。掘削規模が極めて小規模であったため、立会調査とした。もう1件は、マルチメディア総合研究棟新宮工事に伴い、污水管を迂回させる必要があったため、その工事に伴うものである。工事区域が、明治以降の盛土が厚い範囲と考えられたため、立会調査とした。いずれにおいても、遺構・遺物は発見されていない。

川内南地区的2件は、前年度に本調査を実施した、文系総合研究棟新宮に関連する付帯工事に伴うものである。1件は、新研究棟周辺の整備に関わるもので、建物東側の環境整備や、建物北側の渡り廊下設置などである。本調査の際に確認した近代以降の盛土の範囲に収まると考えられたため、立会調査とした。もう1件は、新研究棟

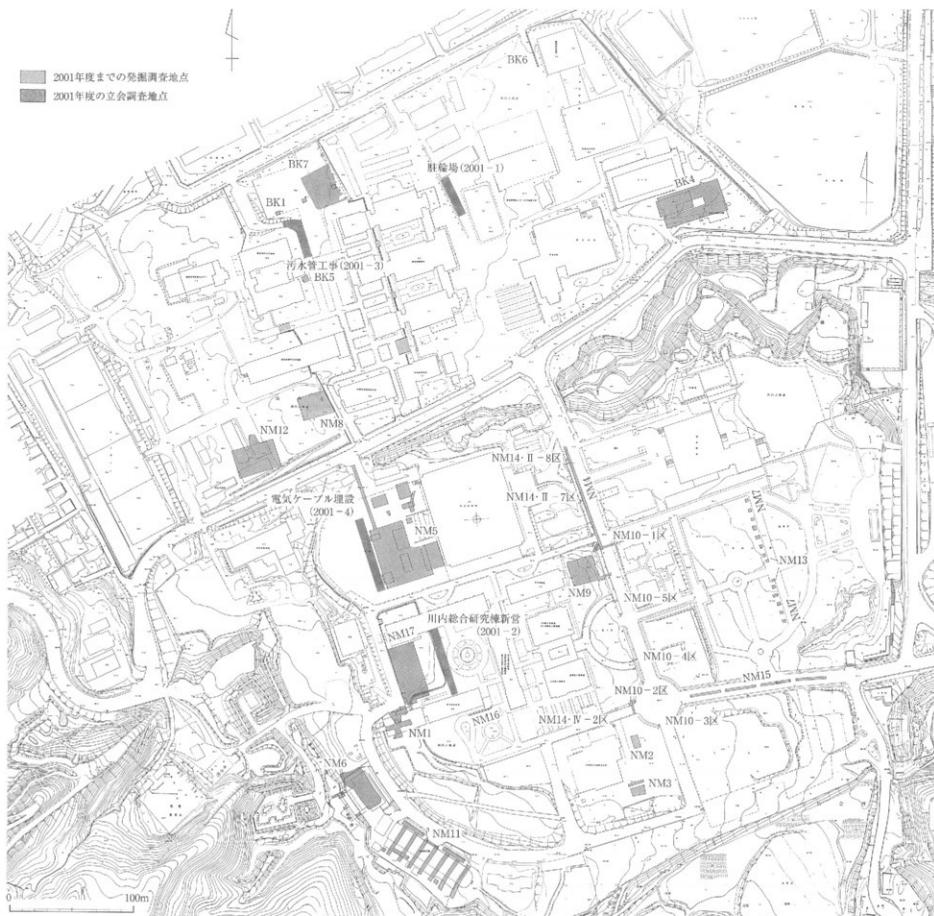


図3 仙台城跡二の丸・武家屋敷地区調査地点
Fig.3 Location of excavations until 2001 at Ninomaru (NM i.e. Secondary Citadel) and samurai residence (BK)

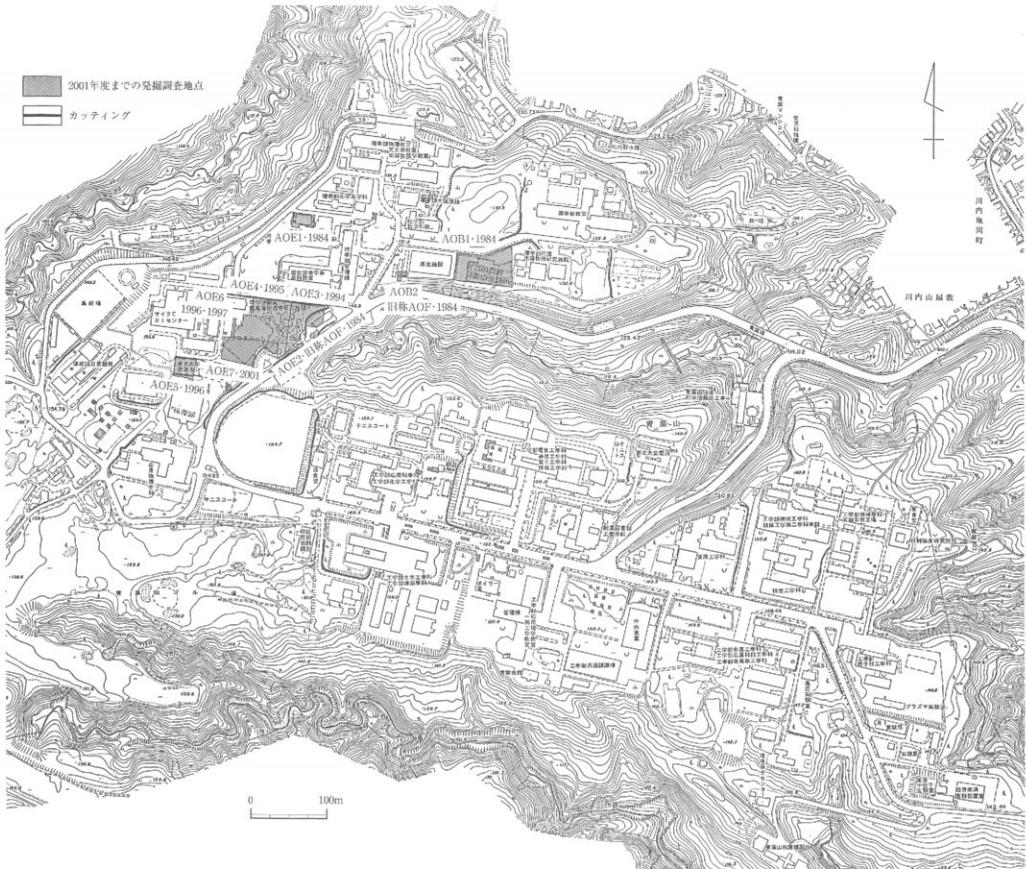


図4 青葉山地区調査地点
Fig.4 Location of excavations at Aobayama campus

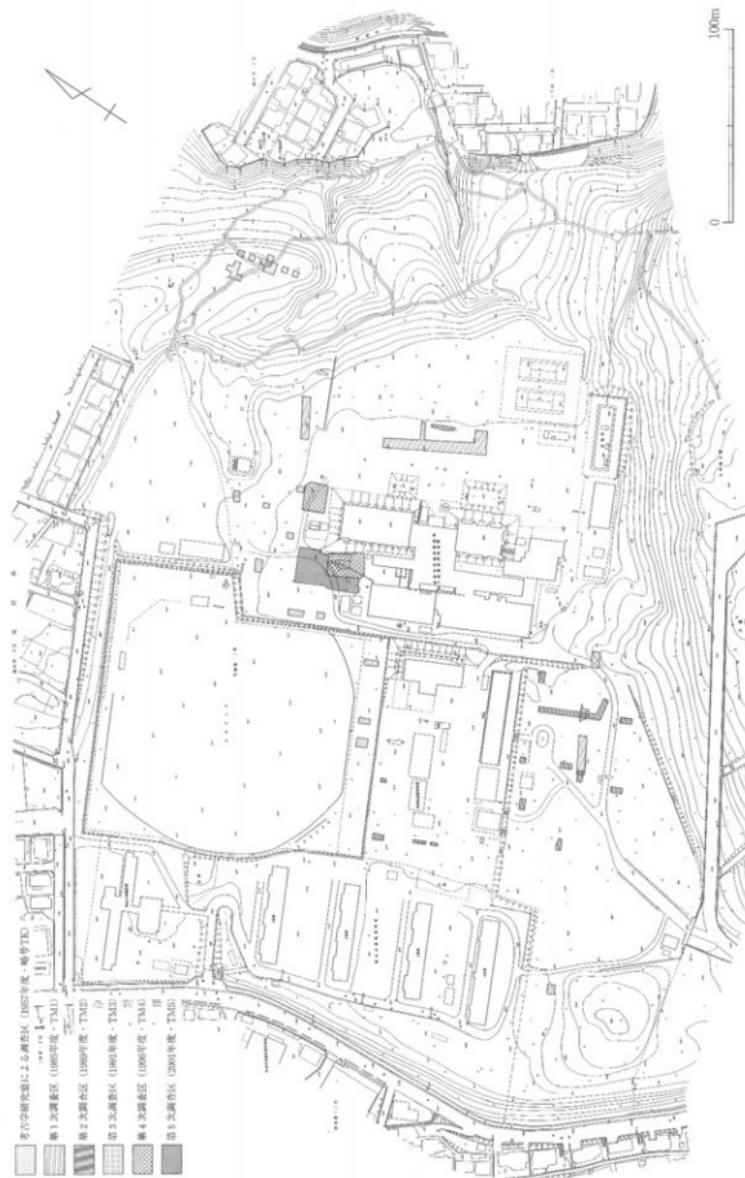


Fig.5 富沢地区調査地点
(TM i.e. Tomizawa Ashinokuchi site)

で使用する電気ケーブルを敷設するための工事に伴うものである。従来の知見から、近代以降の盛土の範囲に収まると考えられたため、立会調査とした。いずれの調査においても、遺構・遺物は発見されていない。

(2) 青葉山地区の調査

青葉山地区では、本調査1件を実施した（図4）。

本調査を実施したのは、理学研究科実験研究棟新館に伴う、青葉山E遺跡第7次調査（AOE7）である。この理学研究科実験研究棟については、1～3期に分けて建設工事を進める計画である。本年度は、2期工事分の事業化が認められたため、この2期工事と一部並行しつつ、3期工事区域の調査を実施することとなった。しかし、本年度の調査予定にはほとんど余裕がない状態であったため、この調査については、翌年度の2002年度に実施することとした。ただし、2期分の工事との関係で、先行して調査を進める必要のある区域のみを、今年度に実施した。このように当地点の調査は2ヶ年に渡るため、調査成果については、2002年度事業を取りまとめる調査年報20において、まとめて報告する。

(3) 富沢地区の調査

富沢地区では、本調査1件を実施した（図5）。

本調査を実施したのは、理学研究科附属原子核理学研究施設のGeV γ 線実験棟新館に伴う、芦ノ口遺跡第5次調査（TM5）である。これについては、本書の第Ⅱ章において報告する。

4. 遺物整理作業

2001年度には、1999年度事業を取りまとめた『東北大学埋蔵文化財調査年報17』を刊行した。1999年度に実施した調査は、翌年度事業である仙台城跡二の丸第17地点の調査を、一部前倒しで行った以外は、立会調査だけであった。そのため、年報17に掲載した調査報告はない。立会調査結果や、他の事業内容を要約して掲載した。

2001年度の遺物整理作業は、前年度に調査を実施した、仙台城跡二の丸第17地点の出土遺物の整理が中心となつた。出土遺物の水洗・注記は、現場作業中にかなり進めであった。そのため当年度の整理作業は、水洗・注記の残った分を終わらせること、各種遺物の接合・分類など、基礎的な作業を中心に行った。その一方で、当年度に調査を実施した二の丸北方武家屋敷地区第7地点で大量の木製品が出土し、その水洗を優先して進めなければならない事態が生じた。二の丸北方武家屋敷地区第7地点の調査が終了した12月以降は、同地点出土の木製品の水洗作業に、多数の人手を割かねばならなくなつた。この影響で、二の丸第17地点の整理作業は、当初計画通りには進行しない結果となつた。

5. 保存処理事業

東北大学埋蔵文化財調査研究センターでは、仙台城跡二の丸出土遺物を中心に、木製品・漆塗製品・金属製品など、保存処理を必要とする遺物を多数保管している。この内、木製品と金属製品については、当センターで保存処理を進めてきている。木製品については、1997年度以降、糖アルコール（ラクチトール）を利用した処理を行っている（年報16）。2001年度は、仙台城跡二の丸第9地点（1990年度調査）の出土木製品を中心に、保存処理を進めた。

当センターでの保存処理作業は、1992年度に含浸槽を設置して以来、専用に使用できる場所がなかったため、やむなくガレージの空きスペースを利用して行ってきた。嚴冬期には気温が零下に下がる環境のため、冬期間の作業は困難で、作業効率の点からも問題を残していた。そのためセンターと施設部で対策を検討してきたが、保存処理作業のためのプレハブ（平屋建・79.1m²）を設置できることとなり、2000年度の末に工事が行われ、2001



図6 保存処理作業室平面図
Fig.6 Sketch map of a laboratory to conserve the archaeological remains

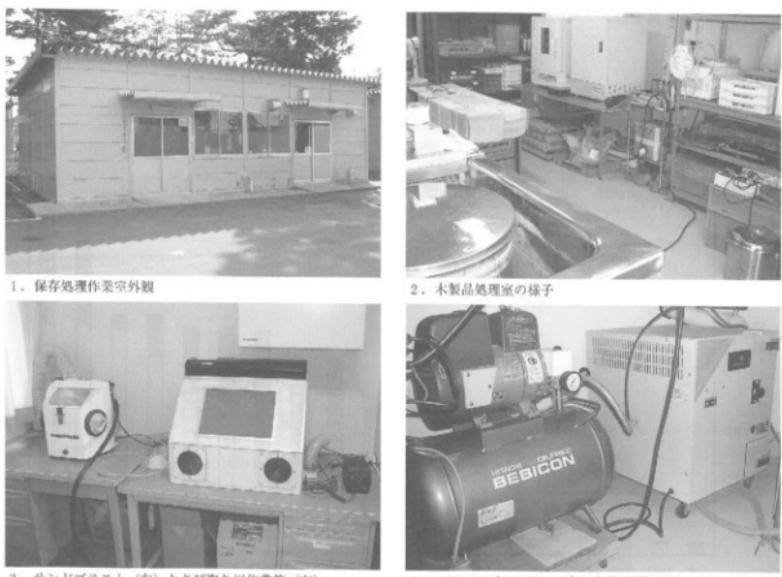


図7 保存処理作業室の状況
Fig.7 Views of a laboratory to conserve the archaeological remains

年度から使用を開始した。施設の平面図と、主要な機器の配置は、図6の通りである。

保存処理作業室は、仕切により2室に区分した。広い側は、一般的な作業室、および処理遺物の保管場所として使用するようにした。狭い側は、洗い場としても使用できるよう、床面排水口を設置した。主に木製品の処理関係の機器と、稼働時に騒音の発生する機器を、こちら側に配置した（図7）。

当センターが実施している調査においては、鉄製品も大量に出土している。鉄製品では、近世の釘類の出土数量が膨大で、充分なクリーニングも実施できず、未処理のまま保管する状態が続いていた。これら大量の鉄製品を効率良く脱塩処理するために、オートクレープを改良した脱塩装置（平山製作所製・DSM-242II-K）を昨年度末に購入した。これに引き続いだ当年度は、金属製品の保存処理に関わる機器を整備することとした。

金属製品のさび取りには、グラインダーなどとともに、エアーブラシが有効である。しかし当センターには、これまでエアーブラシがなく、他機関の機材を使用させていたなどして対処してきた。本年度末に、予算上のやり繩りがついたため、エアーブラシと関連する機器を購入することとした。金属製品のさび取りには、歯科用のサンダーブラストを利用する場合が多いが、従来よく使用されていた機器が製造停止となっていた。そのため、同様の機能を有するものとして、大榮歯科産業製のサイクルジュニアⅢを使用することとし、一部改造した上で納入させた。これに伴い必要となる、エア・コンプレッサー（日立ベビコン0.4LP-7SA）と集塵機（日立RG-70S2）も同時に購入した。作業中の騒音を軽減するために、仕切壁の裏側にエア・コンプレッサーと集塵機は設置した。また、従来から使用していた、金属製品のさび取り用に独自に製作した作業箱についても、集塵機とつなげることができるよう改造した。

これら以外の金属製品処理に関わるものとして、実体顕微鏡（カートン光学NSZT-1LIIT）、顕微鏡用CCDカメラとモニター、真空ポンプ（DA-200型）、導電率計（ES-12型）などを購入した。

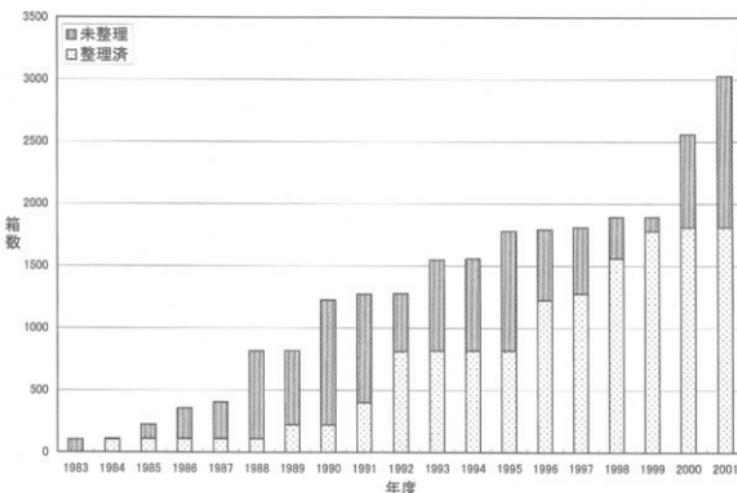


Fig.8 Graph showing transition of amount of artifact in storage (showed by number of case)

6. 資料保管状況

東北大埋蔵文化財調査研究センターでは、ほとんどの遺物は容量30.3リットルのコンテナ（ポリプロピレン製・サンボックス#32）に収納している。このコンテナに入らない大型のものについては、さらに大きなコンテナや、適宜木箱を作成して収納している。全体の遺物総量を把握するために、容器の大小にかかわらず、箱の数で数量を管理している。ただし、保存処理を行う必要のあるものは、別に保管しているため、これには入っていない。当センターの前身である東北大埋蔵文化財調査委員会が発足した1983年度からの、遺物総量の推移を箱数で比較したのが、図8である。

2001年度末時点では、当センターで保管している遺物総量は3,026箱となった。前年度からは466箱の増加である。この内訳は、当年度に調査を実施した仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点出土のものが464箱、青葉山E遺跡第7次調査の当年度分が1箱、芦ノ口遺跡第5次調査出土のものが1箱である。一方整理作業は、2000年度に調査を実施した、仙台城跡二の丸第17地点の作業が継続中のため、整理終了分で新たにカウントしたものはない。その結果、1,809箱が整理・報告済みで、未整理は1,217箱となる。全体の箱数の内、整理・報告済みのものの比率は59.8%となる。

7. 研究活動

(1) 受託研究・共同研究等

2001年度は、受託研究・共同研究等は実施していない。

(2) 学会発表等

センターの業務にかかわる、学会での研究発表等としては、次の発表を行った。

・東北史学会2001年度大会考古学部会 2001年10月7日 於：米沢女子短期大学

「近世建物遺構の基礎構造」 発表者：藤沢敦・京野恵子・高木暢亮

・平成13年度宮城県遺跡調査成果発表会 2002年1月19日 於：岩沼市民会館

「仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点」 発表者：京野恵子

また、宮城県考古学会からの依頼を受けて、同会の会誌『宮城考古学』第4号（2002年5月発行）の「2001年度宮城県内主要発掘紹介」に、「仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点」として、同地点の調査概要を寄稿して紹介した。

(3) 資料調査

センター業務に関わる資料調査等としては、以下のとおりである。

2002年2月14・15日 「文化財保存修復国際会議 専門家会議」 於：奈良県文化会館

藤沢敦・京野恵子

(4) 科学研究費採択状況

2001度は、当センターの調査研究員で、科学研究費等の交付を受けたものはなかった。

8. 教育普及活動

(1) 非常勤講師

2001年度に、当センターの調査研究員で非常勤講師を担当したのは、次のとおりである。

藤沢敦 宮城教育大学 考古学講義（後期）

(2) 保管資料の貸出

当センター保管の資料の貸出等としては、次のとおりであった。

- ・貸出先：仙台市富沢遺跡保存館 平成13年度企画展「土の中からのメッセージ・発掘された仙台の遺跡5」

貸出資料：青葉山E遺跡第3次調査出土繩文土器・石器42点

青葉山E遺跡第3次調査 住居跡写真1点

青葉山A遺跡採集石器3点

仙台城跡二の丸出土陶器5点

貸出期間：2001年4月18日～7月31日

- ・貸出先：仙台市博物館 仙台市史『通史編3 近世1』への写真掲載

貸出資料：仙台城跡二の丸第5地点 西屋敷の建物調査状況写真1点

- ・貸出先：仙台市教育委員会 第35回文化財展「仙台城とその時代－城と町の暮らし－」

貸出資料：仙台城跡二の丸出土陶磁器15点および同写真1点

貸出期間：2001年11月7日～30日

(3) 外部からの派遣依頼等

当センターの業務に関わって、あるいは調査研究員の専門領域に関わる事項での、外部から派遣等の依頼は、2001年度にはなかった。

(4) 広報活動

仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点の調査成果の概要が明らかとなった10月21日に、現地説明会を開催した。参加者は、約100名であった。なお、一般公開に先立って、報道機関向けの発表を行っている。

〈引用・参考文献〉

仙台市教育委員会 1994 『仙台市青葉区文化財分布地図』

仙台市教育委員会 1995 『仙台市太白区文化財分布地図』

東北大学埋蔵文化財調査委員会 1985～1994 『東北大学埋蔵文化財調査年報』1～7

東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1997～2005 『東北大学埋蔵文化財調査年報』8～18

宮城県教育委員会 1998 『宮城県遺跡地図』宮城県文化財調査報告書第176集

第Ⅱ章 芦ノ口遺跡第5次調査 (TM5)

1. 芦ノ口遺跡の立地と周辺の遺跡

芦ノ口遺跡は、仙台市南部の名取川沿いの沖積平野に接する三神峯丘陵の北側に位置している（図1）。現在は、東北大大学宮沢地区にある理学研究科附属原子核理学研究施設と職員宿舎として利用されている。この場所は、敗戦までは陸軍幼年学校が置かれており、戦後、これらの建物を利用して、東北大大学の教養部として使用されていた。その後、1963年に現在の原子核理学研究施設が建設されている。

三神峯丘陵は、標高65m前後で、丘陵の南東側は沖積平野となっている。この間の境界線が長町一利府線にある。長町一利府線は、仙台市太白区長町から宮城郡利府町にかけて北東—南西方向に、約17kmにわたって延びるもので、北西上りの逆断層と考えられている（中田高他1976）。また、長町一利府線の北西側には、大年寺断層と鹿沼坂断層が並行して走っており、副断層を形成している。大年寺断層は、南東上りの逆断層である。この長町一利府線と大年寺断層にはさまれた、幅約1km弱、長さ約8kmの範囲は、隆起帯を形成しており、三神峯丘陵がこれに相当する。三神峯丘陵と東北大大学宮沢地区との間の急斜面は、大年寺断層によって形成された低断層崖にある。三神峯丘陵上の平坦面は、台の原段丘に相当し、芦ノ口遺跡周辺は上町段丘に相当すると考えられる。上町段丘は、台の原段丘より一段標高が低く、調査地点では50~54mである。現在の宮沢地区内には、ほぼ平坦に造成されているが、本来は三神峯丘陵の裾から北側の金洗沢に向かって、緩やかに傾斜して下っていく地形であったものと考えられる。

芦ノ口遺跡の周辺は、仙台平野でも多くの遺跡が存在する地域である。三神峯丘陵一体に広がる三神峯遺跡は、縄文時代前期の集落として古くから知られており、住居跡も発見されている。丘陵の南西端には、円墳2基からなる三神峯古墳群が存在し、埴輪が採集されている（伊東信雄1950）。また、丘陵の北側には土手内横穴墓群が存在するほか、周辺には多くの古墳や横穴墓などが存在している。三神峯丘陵のさらに南側の沖積地では、富沢遺跡（佐藤甲二他1988、太田昭夫他1991）、山口遺跡（田中則和他1984）、都山遺跡（長島栄一1992）、高田B遺跡（荒井格他2000）などの縄文時代晩期の遺構・遺物が確認されている。富沢遺跡では、約2万年前にさかほる埋没林などが発見され、当時の環境の復元にとって極めて重要な資料となっている。また、宮沢遺跡では、弥生時代から近世に至る各時期の水田跡が発見されている。

三神峯丘陵とその周辺は、窓業生産が盛んに行われた地域でもあり、古墳時代の埴輪窯跡である富沢窯跡（5世紀）、須恵器窯跡である金山窯跡（5世紀）や土手内窯跡（7世紀）などが知られている（主浜光朗他1992）。

2. 調査の経緯

(1) 2000年度までの調査（図5）

芦ノ口遺跡は、1976年に野球場建設に伴って発見された。雑木を伐採した際に、若干の土器片が発見されたため、建設工事を中断し、急速東北大考古学研究室によって試掘調査が行われた。その結果、平安時代の竪穴造構などが発見され、土師器・須恵器・須恵系土器が多数出土したほか、縄文時代・弥生時代の土器や石器も出土している（年報3）。

その後、原子核理学研究施設で放射光リングをはじめとした大規模な施設拡充計画が持ち上がり、この計画に先立って遺跡の範囲・性格を確認するために、1985年（TM1）・1989年（TM2）・1991年（TM3）の3次にわたる調査が行われている（年報9）。これらの調査の結果、密度は低いものの、各所で縄文時代・古墳時代・平安時代の遺構・遺物が確認されている。これにより、富沢地区の全域を含む形に遺跡範囲が拡大された。

1996年には、原子核理学研究施設の電源室と照射・測定室の新設と、排水管改修工事に伴って第4次調査が行

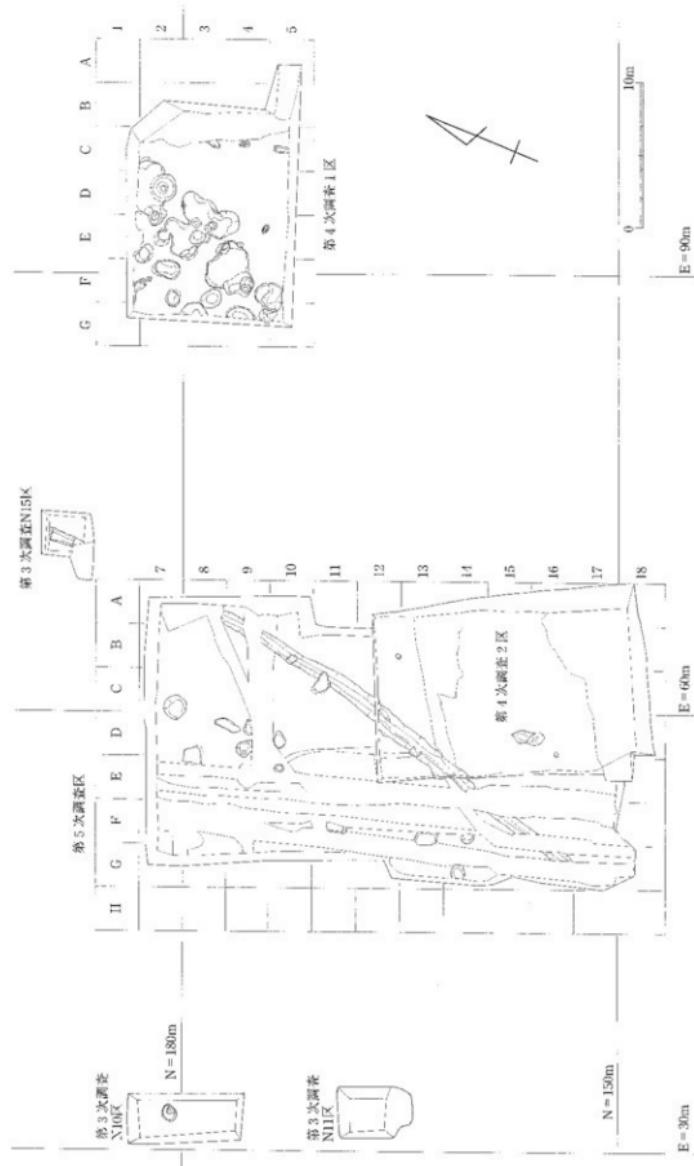


図9 声ノ口遺跡第5次調査区と周辺調査区の位置
Fig.9 Location of TM5 and around other excavations

われた（年報14）。1区からは縄文時代晩期前葉の粘土探掘坑が12基と土器埋設遺構が1基検出された。粘土探掘坑の検出事例は東北地方においても少なく、縄文時代の土器生産を知る上で貴重な資料となっている。2区からは、開闢を挟んで2時期の理沒林が確認されている。また、排水管区からは、古代の堅穴住居跡と考えられる遺構の一部が検出された。埋没林は、C14年代測定法によってより精度の高い測定を行ったが、測定限界を超えており、年代値は得られなかった。しかし、自然環境を考える上での貴重な資料ととらえることができる。

（2）調査地点の位置

調査地点は、仙台市太白区（神峯一丁目、東北大学理学研究科附属原子核理学研究施設構内の北寄りの場所にあたる。今回の調査地点の南側には研究施設の実験室等が存在する。調査は、原子核理学研究施設のGeV γ 線実験棟新館に伴って行われた。

今回の調査地点の南東側には、芦ノ口遺跡第4次調査2区が隣接している（図9）。また、東側には第4次調査1区が、北東側と西側にはそれぞれ第3次調査N15区とN10区が近接している。上記のように、第4次調査1区からは縄文時代晩期前葉の粘土探掘坑などが検出されている。また、年代は明確でないものの、第3次調査N15区からは溝跡1基が、N10区からはピット1基が検出されている。

（3）調査の方法と経過

調査は、2001年11月26日より開始された。重機により盛土を除去した。しかし、調査地点は実験施設内のため、地中には南北方向に何本もの高圧電気ケーブルが埋設されており、誤ってケーブルを切断してしまわないようにはじめの注意を払って行わなければならなかった。そのため、手掘りで盛土を除去しなければならない箇所も多かった。また、ケーブルのたわみによる切断を防ぐため、十分に盛土を除去しきれない箇所も存在した。既存の排水管の下部についても、一部、調査できなかった箇所が存在する。

12月4日から手掘りにより旧表土（3層）の掘り下げを開始した。3層からは石籠が1点出土している。また、調査位置と層序の確認のため、第4次調査2区についても、一部埋め戻し土を除去した。3層直下の6層上面からは、溝やピットなどのプランが検出され、12月11日以降、本格的に6層上面の遺構検出にとりかかった。6層上面からは、散漫な分布ながらも土坑が数基検出された。いずれもプランは不明確な長円形をしており、第4次調査1区で検出された粘土探掘坑の堆土と非常に似た様相を呈していた。粘土探掘坑の堆はオーバーハングしたり、堆土と壁の区別が付きにくいことなどから、遺構の掘り下げは慎重に行った。また、土坑から出土した土器には、保存状態の悪いものが多く、「水を含んだクッキー」状であった。そのため、周囲を発泡ウレタンで固めた上で取り上げた土器もあった。

また、12月18日には、理沒林と層序の確認のため、第4次調査2区の深堀調査区を利用して、土層断面の剥ぎ取りを行った。剥ぎ取りは、上層断面に変性ウレタン合成樹脂「トマックNS-10」を塗布し、その上からガーゼを密着させ、トマックを固結させた。

上記のように、本調査区は第4次調査2区に隣接している。そのため、2区の調査グリッドを継続して、本調査グリッドを設けることとした。しかし、2区の南北方向のグリッド名は、北側から1、2、3・・・と付しており、本調査区は2区より北に位置するため、通し番号を付すことができなかった。そのため、2区南北方向のグリッド名に10を加え、2区における1、2、3・・・を、本調査区ではそれぞれ11、12、13・・・とすることとした。

調査を行った部分の平面図・遺構断面図は縮尺1/20で作成した。写真は35mmのモノクロとカラーリバーサルで撮影した。

3. 基本層序

今回の調査区は、第4次調査2区と隣接しているため、基本的に2区の層序と一致する(図10)。つまり、第4次調査2区北壁が本調査区南壁に当たり、2区西壁が本調査区東壁の一部と一致することとなる。基本層序に違いがないことを確認した上で、今回の調査では層序の断面図は作成しなかった。そのため、層序断面図については、年報14を参照されたい。

1層は大学による盛土、2層は戦前この地にあった陸軍幼年学校時代の盛土と考えられる。層厚は1・2層を合わせて約1~2mである。いずれも近代以降の盛土であり、大半を重機によって除去している。これらの盛土がなされる以前の旧表土として3層が存在する。3層の層厚は約20cm前後である。第2次調査では3層の下に縄文時代の遺物を含む4層と、その下のローム層(5層)が確認された場所も一部あったが、今回の調査区には、4層、5層は存在しなかった。3層直下は6層となっており、6層上面が縄文時代の地表面にほぼ相当すると考えられる。6層は砂と粘土からなる水性堆積層であり、第4次調査1区では約1m、本調査区では約1.2mの厚みを有する。層相の違いから6層は、第4次調査区1区では8枚の層に、本調査区では6A、6B、6Cの3層に細分されている。1区6a~6d層が2区6A層に、1区6e~6h層が2区6B・6C層に対応することがこれまでの調査で確認されている。このうち、6e~6h層、および6B・6C層は、極めて粘性の強い粘土層である。第4次調査区1区と本調査区における粘土探掘坑は、これらの粘土を探掘するためのものと考えられる。

7層は、本調査区では約70cmと厚く堆積する。7層は7a~7d層の4層に細分できた。このうち7a層と7c層が多量の木材や球果などを含んだ泥炭層である。その間には、間層として砂質シルトの7b層が存在する。

8層は、6層と同様の水性堆積層である。本調査区において9層は確認していない。

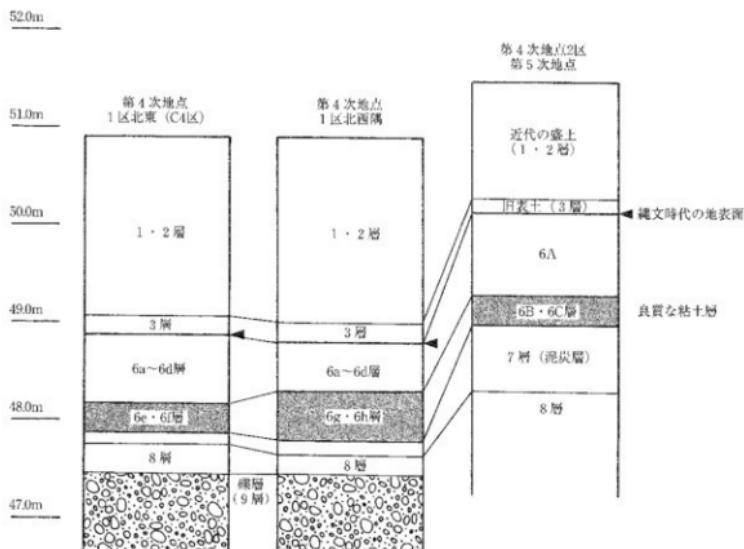


図10 芦ノ口遺跡第5次調査層序模式図
Fig.10 Schematic profiles of TM5

4. 検出遺構

今回の調査では、6層上面から溝1条、土坑10基、ピット3基が検出された（図11）。土坑の多くは、プランが明確ではなく、初めに確認した黒褐色の埋土を掘り下げるとき、上坑の壁にこの黒褐色土が入り込むようになり、改めてプランを確認すると、当初に上坑の壁と考えていた部分は、周囲の粘土層が崩落等によって堆積した埋土であることが判明した。上坑の形状や埋土の堆積状況は、第4次調査1区で検出された粘土探掘坑と類似し、これらも粘土探掘坑である可能性が考えられる。しかし、第4次調査1区の粘土探掘坑のような密集した分布はみられず、個々の土坑の規模も小さい。

【1号溝】（図12、図版1）

上幅約90～130cm、下幅約30～50cm、深さ30～50cmである。溝の方向は北側でN・10°～E、南側ではわずかに東に傾きN・17°～Eである。埋土は5層に分かれている。この溝は、第4次調査2区で検出された1号溝の延長部分であり、第3次調査N15区で検出された溝につながるものと考えられる。埋土5層から土器片が1点出土しているが、表面の劣化が激しく、時期は不明である。この溝は、4号土坑、ピット2を切って掘られているため、これらより新しい時期のものと考えられるが、他に遺物が出土していないため、年代は特定できない。

【1号土坑】（図12、図版1）

G-14区で検出された。高圧ケーブルが上方にあり、東半部分は調査することができなかつたため、全体の形状は不明である。検出面からの深さはおよそ70cmである。埋土の下層には周囲の地山由来の粘土が堆積しており、埋没過程で土坑の壁の崩落等によって堆積したものと考えられる。埋土上層は褐色の自然堆積と考えられる層がみられ、埋土4層、埋土5層は埋没過程で、崩落した粘土層と自然堆積層が混ざったような堆積状況が観察できる。剥片が1点出土しているが、年代は不明である。

【2号土坑】（図12、図版1）

F-11区で検出された。東西方向の両端が、高圧ケーブルによって調査が不可能であったため、全体の形状は不明である。南北方向の幅は上端では約160cm、底面付近では約100cmである。検出面からの深さは約60cmである。底面は北側に向かってわずかに深くなる。埋土の下層には地山由来の粘土層が堆積している。遺物は出土せず、土坑の時期は不明である。

【3号土坑】（図12、図版1・2）

D-10区で検出された。形状は長楕円形を呈している。長軸方向では、検出面で約120cm、底面付近では100cmで、北西側にややオーバーハングしている。深さは約60cmであった。埋土は、地山由来の粘土層が堆積し、粘土層がブロック状に混じり合う箇所も観察できる。

底面近くから、土師器の甕とみられる体部上半破片が出土した。古墳時代前期の塙釜式ものと考えられることから、この土坑の年代もおよそこの頃であると推測する。この土師器は、器体が非常に脆弱で、そのままの状態で取り上げると崩壊する危険があった。そのため、土器面をキムタオルで覆って養生し、硬質発泡性ウレタン樹脂で固めて取り上げた。また、埋土中から木材の破片が出土しているが、残存状況がよくなく、加工の痕跡などはわからなかった。

【4号土坑】（図13、図版2）

C-10・11区で検出され、1号溝に切られている。長楕円形で、西側にオーバーハングした形状をしている。長軸方向では、検出面で約140cm、底面付近では約150cm、検出面からの深さは約60cmであった。埋土は、黒褐色土の間に、地山由来の粘土層が入り込むような堆積を示している。自然堆積の過程で周囲の地山が崩壊して堆積していった可能性が考えられる。遺物が出土していないため、時期は不明である。

【5号土坑】（図12、図版2）

D-9区で検出された。南側部分は、排水管を撤去できないため調査できず、全体の形状は不明である。底面

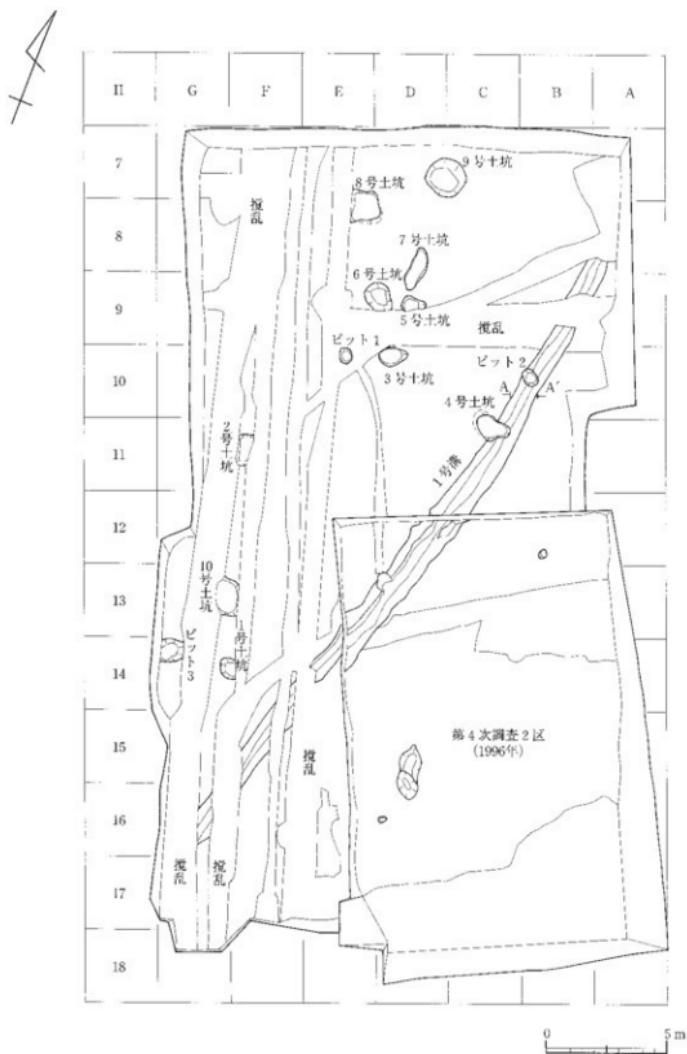


図11 芦ノ口遺跡第5次調査6層上面構造配置図
Fig.11 Plan of archaeological features on the surface of stratum 6 of TM5

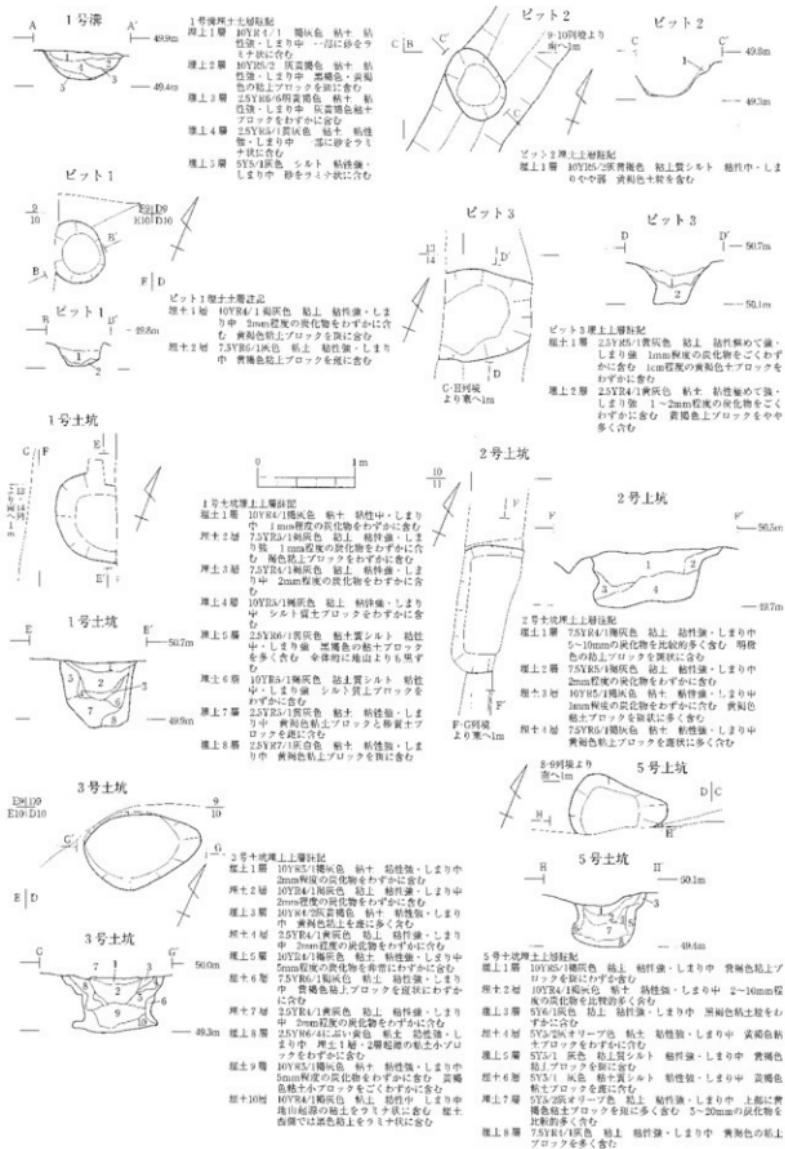


図12 芦ノ口遺跡第5次調査検出遺構(1)
Fig.12 Plans and sections of pits at TM5 (1)

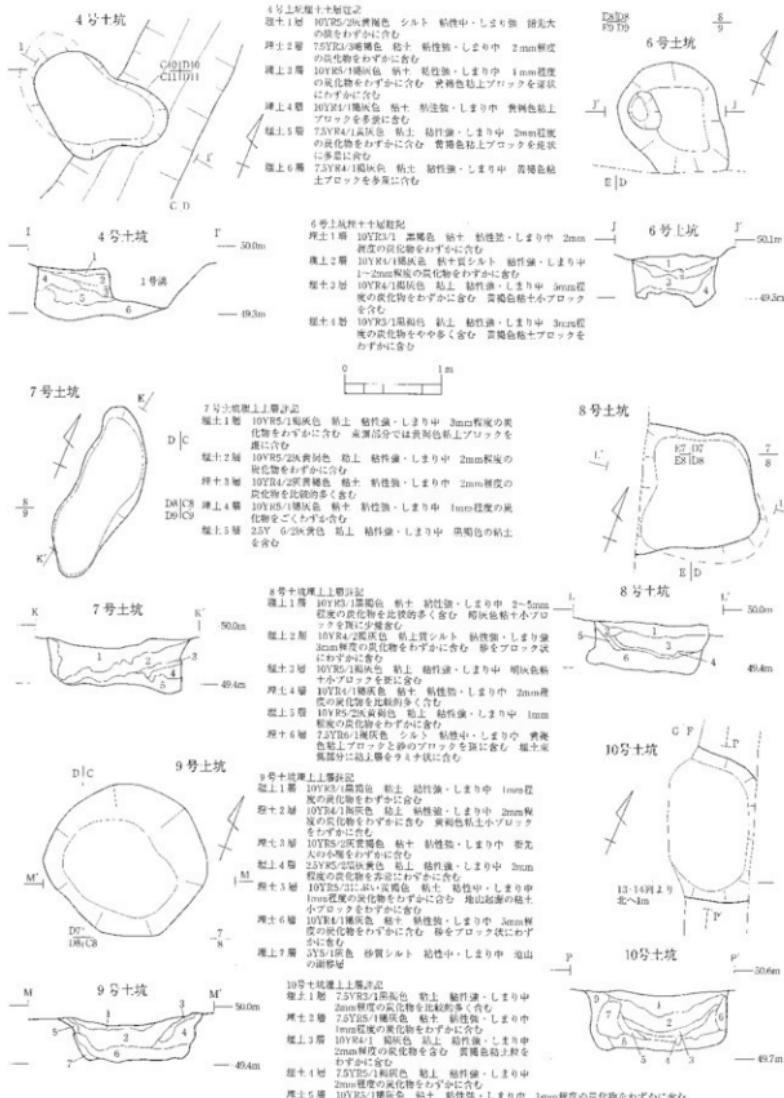


図13 芦ノ口遺跡第5次調査検出遺構(2)
Fig.13 Plans and sections of pits at TM5 (2)

の西側でややオーバーハングした形状をしている。検出面からの深さは約50cmであった。埋土には、地山由来の粘土層がブロック状に入り込んでおり、土坑の壁の土が混入したものと推測できる。本来はもっとオーバーハングした形状を示していたのかもしれない。遺物の出土ではなく、時期は不明である。

【6号土坑】(図13、図版2)

E・D-9区で検出された。排水管残存部分のため、調査できない部分があったが、長楕円形を呈すると考えられる。底面は、一部分だけさらに掘り下げたような状況が観察され、凹凸が顕著である。検出面からの深さは最大で約60cmである。埋土下部には黄褐色粘土がブロック状に混ざっている。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

【7号土坑】(図13、図版2・3)

D-8・9区で検出され、不整な長楕円形を呈している。長軸方向で約170cm、深さ約60cmで、南側部分でわずかに深くなる。遺物の出土ではなく、時期は不明である。

【8号土坑】(図13、図版3)

E・D-7・8区で検出された。土坑の東側は、高圧ケーブルのため調査できず、全体形状はわからない。底面は南西側で一部オーバーハングする。埋土は、黒褐色土の間に、地山由来の粘土層が入り込むような堆積を示している。深さは約50cmである。遺物は出土せず、時期は不明である。

【9号土坑】(図13、図版3)

C・D-7区で検出された。ほぼ円形を呈しており、直径約170cm、底径120cm、深さ約50cmである。底面付近では、黄褐色粘土層が堆積している。遺物の出土ではなく、時期は不明である。

【10号土坑】(図13、図版3)

F・G-13区で検出された。東西両端が高圧ケーブルのため調査できず、全体形状は不明である。深さは約60cmである。埋土6～9層は、地山と非常によく似た黄褐色粘土層であり、土坑の壁面が崩落して堆積したような様相が確認できる。遺物は出土しておらず、年代は不明である。

【ピット】(図12、図版3・4)

ピットは3基検出した。ピット2は、1号溝に切られており、わずかに埋土が残存する程度であった。いずれも褐灰色～黄灰色土に黄褐色粘土ブロックが混ざった埋土をしており、比較的浅い円形をしている。ピット3からは上部器と思われる上器片が出土しているが、小破片で器面の状態も悪いことから時期は断定できない。

5. 出土遺物

出土遺物は非常に少ない(表2)。年代がわかるものは、3号土坑から出土した上部器の破片で、壺の体部とみられる。古墳時代前期の壺蓋式期のものであると考える。その他では、1号溝とピット3から土器の小破片が各1点ずつ出土したが、いずれも残存状態がよくなく年代は不明である。土器以外では、旧表土から石鉈が1点、1号七坑から剣片が1点出土しているが、いずれも年代はわからない(図14、図版4、表3・4)。

また、出土した土器はいずれも脆弱であったため、アクリル系合成樹脂「バイインダーNo.17」を含浸させて補強している。

表2 芦ノ口遺跡第5次調査出土遺物集計表
Tab.2 Distribution of various implements from TM5

出上場所	土器	石器
Ⅲ表土		石範1
1号 sondage上	不明1	
1号土坑壁土		剥片1
3号土坑壁土最下層	上薄器1	
ピット3埋土最下層	不明1	

表3 芦ノ口遺跡第5次調査出土土器観察表
Tab.3 Attribute list of pottery from TM5

No.	出土場所	器種	部位	内面調整	外面調整	文様	炭化物	器型(cm)	回	回版
C1	3号土坑壁土最下層	壺	体部	ナデ・ハラナデ	ハケメ後、ナデ	無	内外面	0.5	-	4

表4 芦ノ口遺跡第5次調査出土石器観察表
Tab.4 Attribute list of stone implements from TM5

No.	出土場所	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	材	回	回版
S1	1号 sondage上	剥片	43.9	33.7	16.6	23.4	珪質頁岩	14	4
S2	Ⅲ表土	石範	75.3	40.1	15.8	40.2	珪質頁岩	14	4

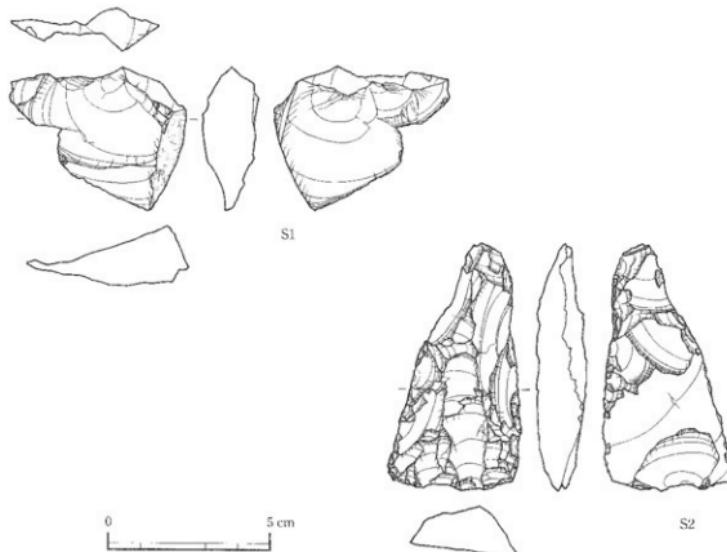


図14 芦ノ口遺跡第5次調査出土石器
Fig.14 Stone implements from TM5

6.まとめ

今回の調査区からは、溝1条、土坑10基、ピット3基が検出された。

溝は、これまでの第3次調査N15区、第4次調査2区でも検出されていたものの延長部分であり、南北方向に延びる一連の溝であることが確認された。しかし、明確な遺物などは出土しておらず、年代は不明である。4号土坑、ピット2などを切って掘り込まれていることから、これらよりは新しい時期のものであることが考えられる。

今回の調査区からは、第4次調査1区で検出された粘土採掘坑と堆積状況などが類似した土坑が検出されており、これらも粘土採掘坑であった可能性が高い。検出された土坑はいずれも深さ50~70cm程度で共通しており、底面付近で横に掘り進んだ結果、オーバーハンプした形状のものや、オーバーハンプした壁が崩落して堆積したような埋土の状況が観察された。しかし、個々の土坑の大きさが小型であること、分布が散漫で重複して掘られた上坑がみられないことなど、第4次調査1区との相違点も挙げられる。

これらをまとめるに次の可能性が考えられる。今回の調査区と1区とでは18mほど離れており、縄文時代晩期前葉の粘土採掘坑の密集地点からは距離がある。第4次調査で検討した結果、2区では1区よりも6B・6C層の良質な粘土層が薄くなり、上層の6A層が厚くなることがわかっている。そのため、土坑を掘り下げたが良質な粘土を効率よく採取できなかったため、土坑も小規模であった可能性が推測できる。出土遺物では、土師器が出土しており、1区の縄文時代の粘土採掘坑群とは別の時代の粘土採掘坑が存在するものと考えられる。芦ノ口遺跡の周辺には古墳時代の窯跡なども存在し、古くから窯業生産が盛んに行われた地域でもあることから、縄文時代以降の土器生産体系についても、今後検討していくことが必要であろう。

〈引用・参考文献〉

- 荒井格他 2000 「高田B遺跡」仙台市文化財調査報告書第242集
- 伊東信雄 1950 「仙台市内の古代遺跡」『仙台市史3別編1』
- 宇佐見義春 1998 「多摩ニュータウンNo.949遺跡」「多摩ニュータウン遺跡」先行調査報告9 東京都埋蔵文化財センター調査報告第52集
- 及川真彦 2000 「多摩ニュータウン遺跡No.247・248遺跡」東京都埋蔵文化財センター調査報告第80集
- 生出慶司・中川久夫・蟹沢聰史 1989 「日本の地質2 東北地方」
- 太田耕夫他 1991 「富沢遺跡第30次調査報告書」仙台市文化財調査報告書第149集
- 北村信・石井武政・寒川旭・中川久夫 1981 「仙台地域の地質 地域地質研究報告（5万分の1地質図幅）」地質調査所
- 佐藤三二他 1988 「富沢遺跡第28次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第114集
- 主浜光則他 1992 「上手内一土手内遺跡・土手内空跡・横穴墓群（B地点）発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第165集
- 須藤隆・藤沢敦・関根達人 1998 「仙台市片ノ口遺跡の縄文時代晩期の粘土探査坑群」[1998年度東北史学会・福島大学史学会合同大会 研究発表要旨]
- 仙台市教育委員会 1995 「仙台市太白区文化財分布地图」
- 仙台市史編さん委員会 1991 「仙台市史 特別編2 考古資料」
- 仙台市史編さん委員会 1999 「仙台市史 通史編1 原始」
- 田中則和他 1984 「山口遺跡II」仙台市文化財調査報告書第61集
- 東北大埋蔵文化財調査委員会 1996 「東北大埋蔵文化財調査年報3」
- 東北大埋蔵文化財調査研究センター 1998 「東北大埋蔵文化財調査年報9」
- 東北大埋蔵文化財調査研究センター 2001 「東北大埋蔵文化財調査年報14」
- 中田高・大槻憲四郎・今泉俊文 1976 「仙台平野西線・長町-利府線に沿う新期地殻変動」『東北地理』28
- 永塚清子・石川隆司・上條朝宏 1992 「多摩ニュータウンNo.248遺跡の粘土探査坑の層位について」[研究論集] XI pp.133~149 東京都埋蔵文化財センター
- 長島栄一 1992 「郡山遺跡第65次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第156集
- 谷地薰・柴田陽一郎 1992 「曲田地区農民農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書II 家ノ後遺跡」秋田県文化財調査報告書第229集
- 山内幹夫他 1988 「真野ダム関連遺跡発掘調査報告 XII 羽白C遺跡（第1次）」福島県文化財報告書第194集

第Ⅲ章 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点（BK7）の調査

1. 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区の立地と歴史

(1) 仙台城と城下の沿革

東北大學の川内地区は、沢とその脇を東西に走る道路によって、川内南地区と北地区に分かれている。この川内南地区は仙台城二の丸が置かれた場所であり、北地区は家臣の屋敷が存在した区域に相当する。

仙台城は、仙台藩初代藩主である伊達政宗によって、慶長5年（1600年）12月24日の繩張始めを嚆矢として、本丸の築造が始められる。この段階では、二の丸は造られておらず、後に二の丸が造られる場所には、政宗の四男である伊達宗泰の屋敷があったとも伝えられる。元和6年（1620年）には、伝伊達宗泰屋敷の北側に、政宗の長女五郎八姫の居館である「西屋敷」が造られる。

政宗は寛永13年（1636年）に死去し、伊達忠宗が二代藩主となる。忠宗は、寛永15年（1638年）に、伝伊達宗泰の屋敷跡に二の丸を造営する。二の丸が造られると、仙台藩の政治・諸儀式のほとんどは二の丸へ移され、藩主の居所も二の丸へ移る。これ以後、二の丸が仙台城の実質的な中枢となり、この状態は幕末まで維持されていくこととなる。

寛永15年に二の丸が造営された時点では、五郎八姫の「西屋敷」が、二の丸の北隣に存続していた。五郎八姫が寛文元年（1661年）に死去すると、もとの「西屋敷」は「天麟院様元御屋敷」と呼ばれ、蔵や作業所など、二の丸に附属する実務的な施設が置かれるよう変化する。そして二の丸は、四代藩主伊達綱村によって、元禄年間に大改造が施される。その際、もとの「西屋敷」の敷地は二の丸に取り込まれ、中奥がもとの「西屋敷」の範囲に大きく拡張された。この改造によって、仙台城は完成した姿を迎えた。その中で二の丸は、文化元年（1701年）の火災ではほぼ全焼する被害を受けつつも從来通り再建され、幕末まで仙台城の中軸として機能していく。

仙台城下は、仙台城本丸の造営に伴って造られていく。慶長6年（1601年）の正月11日に、仙台城の普請始めが行われ、同じ日に「御城下地形ノ絵図ヲ以テ諸士等ノ屋敷割仰付ラル」との記録が残されている（『貞山公治家記録卷之二十一』）。この時以降、城下の建設が進められていったものと考えられる。

正保2年（1645年）の『奥州仙台城絵図』では、仙台城の周辺に「侍屋敷」が広がっていたことが判り、本丸の造営が開始された頃から屋敷が造られていたものと思われる。正保絵図は幕府提出用絵図のため、細かな屋敷割は記されず、屋敷を使っていた人名は判らない。それ以降の藩政用絵図には、屋敷割が記され、人名が書き込まれたものが多くある。川内地区においては、大手門の周囲などに最も上級の家臣の屋敷が置かれ、それ以外の区域にも上級家臣の屋敷が多い。東北大學の川内北地区も、比較的上級の家臣の屋敷が置かれていた。

明治維新による新政府の成立と幕藩体制の崩壊により、仙台城とその周辺も大きく変化する。明治2年（1869年）の版籍奉還により二の丸には勤政庁が置かれ、明治4年（1871年）の廃藩置県後は、仙台城が明治政府の管轄下に移り二の丸には東北鎮台（後に仙台鎮台）が置かれる。本丸の建物は明治の早い時期に取り壊されるが、二の丸の建物は鎮台本營として引き続き利用された。しかし、明治15年（1882年）の火災で、ほとんどが焼失してしまう。そして明治19年（1886年）には仙台鎮台から陸軍第二師団に改称され、明治21年（1888年）には正式に師団常備軍制度が施行され、敗戦まで続くこととなる。二の丸跡には、第二師団の司令部が置かれた。

川内地区の仙台城周辺の武家屋敷地も、明治に入ると取り壊され、その多くは後の第二師団の用地となっていく。東北大學川内北地区には、第二師団の歩兵隊や輜重隊などが置かれていた。

戦後は、川内地区のかつての軍用地一帯が、米軍の駐留地となる。昭和32年（1957年）に米軍から返還された後、川内北地区には東北大學教養部が、川内南地区には文系学部や図書館などが置かれ、現在に至っている。

(2) 二の丸北方の武家屋敷地区の変遷

仙台城下の様相を検討するに際して、基本となる史料が城下絵図である。表5に、これまでに知られている仙台城下絵図の主要なものを示した。城下を描いた絵図でも、簡略なものは除外している。仙台城下絵図の研究は、旧制第二高等学校長の阿刀田令造による『仙台城下絵図の研究』が嚆矢であり、今日に至る研究の基礎となっている。そのため表5には、『仙台城下絵図の研究』における番号と、掲載された付図の番号を記して対照を行った。また近年、『絵図・地図で見る仙台』および『絵図・地図で見る仙台第二編』が刊行され、主要な仙台城下絵図や仙台市街地の地図が大判の印刷で刊行され、利用の便が増した。これらに収録されている絵図については、両書で付された番号を表5に示しておいた。かつて伊達家が所蔵していたものなど、江戸時代の絵図を多数所蔵している宮城県図書館にあるものについては、同館による『宮城県図書館所蔵絵図・地図解説目録』に掲載された番号を、表5にあわせて記載した。

これらの仙台城下絵図には、年代が近接するものもあるため、時期による変遷が判るように選択して、川内北地区周辺の部分を示したのが図16・17である。道路の変化を見るために、明治時代の地図についても、あわせて示しておいた。

現存する仙台城下を描いた最も遅い絵図は、正保2年（1645年）のものであるが、これは幕府提出用の絵図であり、個々の屋敷の区画は描かれていない（図16-1）。道路を見ると、正保絵図以降、明治15年（1882年）の地図（図17-13）に至るまで、基本的に変化がないことが判る。二の丸と北方の武家屋敷との境には、千貫沢とそれを広げた堀がある。この千貫沢や堀沿いに道路が東西に走っているが、それより北側には東西方向の道路は2本ある。ところが現在は、千貫沢沿いの道路の北側には、東西方向の道路は1本だけである。現在のような道路は明治26年（1893年）の地図（図17-14）において、初めて見られるようになる。この東西方向の道路が改変されるのと同時に、大手門前から北へ延びる道路も改変されている。大手門前から北へ延びる道路は、もともとは、千貫沢を渡る筋違橋の北側で鍵の手状に屈曲していたが、この時に屈曲せずにまっすぐ北へ延びる道路へ変わっている。おそらく一連の道路整備として、改変が行われたのであろう。

図17には示さなかったが、明治22年（1889年）製作の「改正仙台市明細全図」という地図も存在する。しかし明治22年の地図では、第二師団司令部に、明治15年（1882年）に焼失した二の丸の旧状を残す建物が描かれ、全体の表現が明治13年（1880年）の地図（図17-12）に類似している。そのため、明治13年の地図をもとに作成された可能性があり、明治22年の地図に描かれた道路が、その時点の状態を表していたのか疑問である。したがって、明治15年から明治26年の間に、川内北地区周辺の道路は、現在見る形に変わっていったものと考えられる。おそらく、明治21年（1888年）の陸軍第二師団の設置に前後して、この区域の整備が進められていったものと考えられる。

明治時代の地図も、その初期のものは、全てを正確に測量して作成されたものではない。明治15年の地図に至っても、現状から見て明らかに方向や距離がずれている部分も多い。ある程度信頼が置けるものは、明治26年の地図以降であるが、この段階では川内北地区周辺の道路は、改変された後である。改変以前の道路の位置を、正確に測量した地図は、今のところ確認できていないことになる。したがって、絵図や明治時代初期の地図をもとに、江戸時代の道路を正確に復元することは難しい。確実に復元するためには、発掘調査で道路を検出し、その位置を確定する他ないが、今までの調査では発見されていない。このような限界を踏まえ、絵図・地図の記載を比較しつつ、江戸時代の道路の位置を、現在の地図上に推定復元したのが図15である。

千貫沢の北側を東西に走るのが「筋違橋通」である。その北側に東西に走る2本の道路が、「中ノ坂通」と「亀岡通」である。二の丸裏門である台所門を出て、千貫橋を渡って北に延びる道路が「裏下馬通」で、それとほぼ平行して西側にあるのが「大堀通」である。今回の調査地点は、この4本の道路に囲まれた、ほぼ方形の区画に相当するものと考えられる。細かな位置関係は、道路の復元が推定に留まるため、厳密には確定できない。

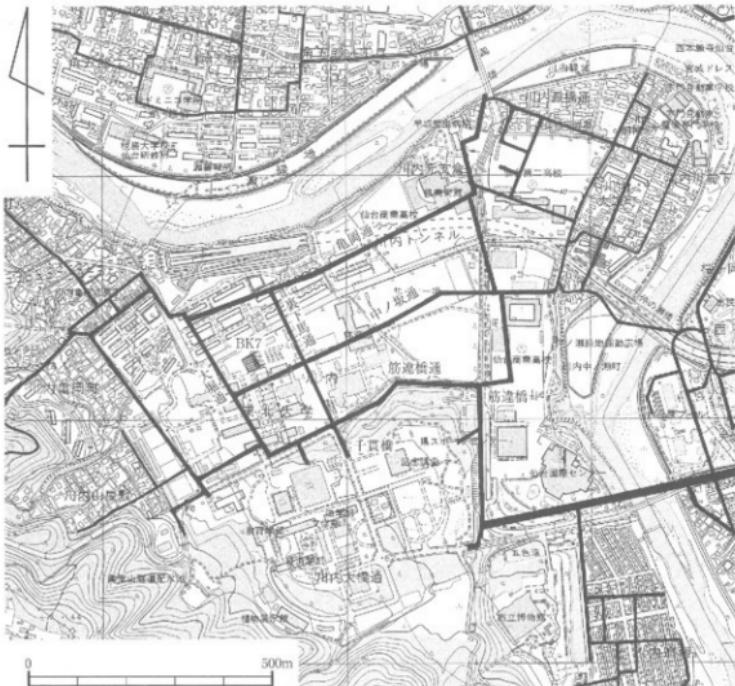


図15 二の丸北方武家屋敷地区における江戸時代の道路の復元
 Fig.15 Reconstruction map of the road of Edo period at BK7

しかし、細かな修正は今後必要としても、これが大きく変わることは考え難く、今回の調査区が、このほぼ方形の区画に相当することは間違いないと考えられる。

この区画内に屋敷を構えていた人名を、城下絵図から拾い出したものが表6である。記載されている人名をもとに、これらの家臣の禄高や家格などについて、次に見てみたい。ただ、記載された家臣の全てについて、詳細が判明している訳ではないが、およその傾向は判明する。検索にあたっては、「私本仙台藩士事典」などを利用した。なお仙台藩では、生産高や知行高を、一般的な石高ではなく、戦国時代以来の貫高で表示していた。貫高と石高の換算は、寛永検地を経て、1貫（1000文）を10石に換算するよう定められた。寛永検地以前の換算については、いくつかの説がある。ただし、ここで検討材料とする屋敷押領者が記載されている藩政用絵図が、寛文4年（1664年）以降のものしか存在せず、全て寛永検地より新しい時期のものとなるので、1貫を10石と換算すれば良いこととなる。

仙台藩の家格は、家格の高い順から、一門・一家・準一家・一族・宿老・着座・太刀上・召出・平士・組士・卒というように分けられていた（表7）。平士は、仙台藩家臣団の主力を構成した家臣で、多くは大番組に属する大番士であった。平士（大番士）は、登城した際に控える部屋の名前をとって、上位から虎の間番士・中の間番士・次の間番士・広間番士に分けられた。組士と卒が下級番士となる。

調査地点が入るほほ四角の区画は、元禄4・5年（1691・92）の絵図（図16-6）までは、区画をほほ4つに分けた大きさか、あるいはそれよりやや小さく分けられている。享保9年以降は、より細かく区分される場合が多くなり、頻繁に屋敷拝領者が入れ替わっていく傾向がある。幕末になると（図17-10）、この区画の南東側に、「小学校」が置かれる。仙台藩では、藩校として養賢堂を置いて、家臣の教育にあたっていた。嘉永5年（1852年）に、門閥子弟の講学所として川内に置かれたのが「小学校」であった。鈴木省三の『仙台風俗志』には、「嘉永五年に建る所にして川内中の坂通りにあり（中略）養賢堂の外こゝに学校を建てられたるは川内一帯は門閥大家が住し居れは其等子弟が通学の便を謀るがためにして樂山公の好学の恩召より出たるものといふ」とされている。樂山公とは、13代藩主伊達慶邦のことである。

この区画を4分する大きさ、あるいはそれよりやや小さい程度の屋敷を拝領していたものとしては、青木掃部（36貫104文・召出）、中村伊右衛門（48貫612文・格式不明）、山崎平左衛門（102貫613文・虎の間）、白石七十郎（30貫文・虎の間）、宮内権六（36貫文・召出）、大河内源太夫（90貫文・召出）、濱田平十郎（33貫313文・虎の間）、市川三右衛門（30貫文・虎の間）、久世平八郎（64貫624文・虎の間）など、家格は召出から平士の中でも最も上位の虎の間番上で、禄高は30貫文以上のもので占められている。その中でも、屋敷地が広い者ほど、禄高が高い傾向があるが、厳密には対応しないようである。

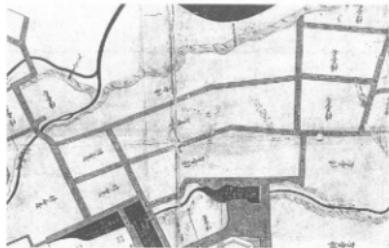
の中でも山崎平左衛門は、虎の間番上でありながら、禄高が102貫613文あり、石高に直すと千石を超える。大河内源太夫が90貫文で続くが、召出であり家格は上である。山崎平左衛門は、この区画の他の家臣と比べると、禄高が著しく高い。しかし、これは例外的な事例と思われる。山崎平左衛門の父は、もとは近江の家で、織田信長の家臣であった。本能寺の変での信長死後は、豊臣秀頼に仕えている。大阪夏の陣で秀頼が死去すると、元和2年（1616年）に伊達政宗に35貫文で仕えることとなった。これ以降、知行地で野谷地開発を活発に行い、102貫を越える禄高はそれによって増加していく結果である。なお、山崎平左衛門は、延宝3年（1675年）には108貫613文となり、禄高はこの時に最も高くなる。その後、天和3年（1683年）には、山崎平左衛門景貞の弟の六兵衛が、宮内家に婿養子となり、それに伴い6貫文が宮内家に分与され102貫613文となった。この宮内家に婿養子に入ったのが宮内六兵衛重蘿（権六）で、図16-4・5を見ると、山崎平左衛門の屋敷の南西側に屋敷を構えていることが判り興味深い。山崎六兵衛が宮内家の婿養子となった天和3年は、図16-5の絵図が描かれた頃にあたる。

一方、享保9年以降に現れる、小さく分割された屋敷を拝領していたものには、横沢軍蔵（30貫文・虎の間）のような禄高の者もいるが、渋谷権七郎（15貫940文・中の間）、志茂傳之助（7貫200文・次の間）、藤間仲左衛門（7貫47文・広間）、喜多山大吉（300俵・虎の間）というように、先に見た広い屋敷地を使っていた家臣よりは、禄高も家格も下がってくる。なお松井玄亮は、30貫文という禄高の割には屋敷は小さいが、医師という立場によるのであろうか。

このように、調査地点がある区画は、17世紀には、30貫文以上の虎の間番士以上の家格の家臣が屋敷を構えていた場所であった。18世紀以降に、屋敷地が小さく区分されるようになってからは、より家格や禄高が下の家臣も、この場所に屋敷を拝領するようになっていった。

表5 主要な仙台城下絵図
Tab.5 List of picture maps where Sendai town was drawn in Edo period

製作年代 (西暦)	名称	「仙台城下絵」「絵図・地図 の研究」 で見る仙台」 2	「絵図・地図 で見る仙台」 2	現所蔵	旧所蔵	図
正保2年 1645	奥州仙台城絵図	一 付図1・14	①	斎藤報恩会	斎藤報恩会	図16-1
寛文4年 1664	仙台御城下絵図	二 付図2	②	宮城県図書館73	伊達家	図16-2
寛文8・9年 1668~69	仙台城下絵図	三 付図15			第三高等学校	図16-3
寛文9年 1669	仙台城下絵図	四 付図3		宮城県図書館74	伊達家	-
寛文・延宝年間(天和2) (1682)	奥州仙台城并城下絵図	五 付図なし		宮城県図書館75	伊達家	-
延宝6~8年 1678~80	仙台市街絵図	六 付図なし		宮城県図書館76	伊達家	-
延宝6~8年 1678~80	仙台城下大絵図			宮城県図書館77		-
延宝6~8年 1678~80	仙台城下大絵図	七 付図4・16		宮城県図書館78	宮城県図書館	図16-4
延宝6~8年 1678~80	仙台藩治絵図	八 付図5			第三高等学校	-
延宝6~8年 1678~80	仙台城下絵図			宮城県図書館79		-
延宝6~8年 1678~80	仙台御城下絵図	九 付図なし		宮城県図書館80	宮城県図書館	-
延宝9年~天和3年 1681~83	仙台城下絵図		①	仙台市歴史民俗 資料館		図16-5
天和2年 1682	奥州仙台城并城下絵図	十 付図6		宮城県図書館81	伊達家	-
天和2年 1682	仙台御城下絵図	十一 付図7			個人	-
元禄4・5年 1691~92	仙台城下五厘掛絵図		③	斎藤報恩会		図16-6
元禄16~享保17年 1703~32	仙台城下絵図	十二 付図8			個人	-
享保9年以降 1724~	仙台城下絵図		②	東北歴史博物館		図16-7
宝曆10年~明和3年 1760~66	仙台城下絵図		⑤	斎藤報恩会		図17-8
安永1~7年 1772~78	仙台城下絵図	十三 付図9			個人	-
安永1~7年 1772~78	仙台城下絵図	十四 付図なし			斎藤報恩会	-
天明3年~寛政元年 1783~89	仙台城下絵図	十五 付図なし			個人	-
天明6年~寛政元年 1786~89	仙台城下絵図	十六 付図10	④	仙台市博物館	個人	図17-9
文化9~14年 1812~17	仙台城下絵図	十七 付図11			個人	-
文政3年 1820	仙台城下絵図	十八 付図12			個人	-
文政3~6年 1826~50	安政補正改仙台城絵図	十九 付図13~17	③	載灰焼失	第二師団	図17-10



1. 正保二年（1645年）奥州仙台城下絵図



2. 宽文四年（1664年）仙台城下絵図



3. 宽文八・九年（1668・69年）仙台城下絵図



4. 延宝六～八年（1678～80年）仙台城下大絵図



5. 延宝九～天和三年（1681～83年）仙台城下絵図



6. 元禄四・五年（1691・92年）仙台城下五箇卦絵図



7. 享保九年（1724年）以降 仙台城下絵図

1・2・6 「絵図・地図で見る仙台」

5・7 「絵図・地図で見る仙台 第二輯」

3・4 「仙台城下絵図の研究」

図16 武家屋敷地区第7地点周辺の絵図・地図（1）
Fig.16 Picture maps around the area of BK7 (1)



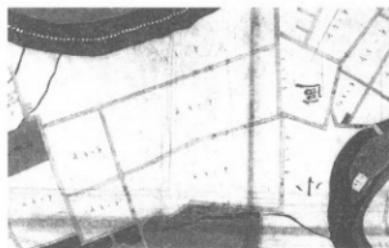
8. 宝曆十～明和三年（1760～66年）仙台城下絵図



9. 天明六～寛政元年（1786～89年）仙台城下絵図



10. 安政三～六年（1856～59年）安政補正改革仙台府給圖



11. 明治8年（1875年）宮城郡仙台町地引図



12. 明治13年（1880年）宮城県仙台区全図



13. 明治15年（1882年）仙台区及近傍村落之図



14. 明治26年（1893年）仙台市測量全図

9・10・14「絵図・地図で見る仙台」

8・11～13「絵図・地図で見る仙台 第二輯」

図17 武家屋敷地区第7地点周辺の絵図・地図（2）

Fig.17 Picture maps around the area of BK7 (2)

表6 武家屋敷地区第7地点関連絵図人名
Tab.6 List of names of *samurai* lived at this location

年代 (西暦)	団	西半部			東半部		
		西=北 西側		西=中	東=北 西側		東=南 東側
		西側	東側	西=南	西側	東側	南側
寛文4年 1664	団16-2	無	中村伊右衛門	伊藤三太夫	青木鶴郎	無	
寛文8・9年 1668~69	団16-3	無		伊藤三太夫	青木鶴郎	無	
延宝6~8年 1678~80	団16-4	白石七十郎	中村伊右衛門	宮内権六	山崎平左衛門	明臣敷	
延宝9年~天和3年 1681~83	団16-5	白石七郎左衛門	中村伊右衛門	宮内権六	山崎平左衛門	月輪卯商	
元禄4・5年 1691~92	団16-6	無	浜谷 権七郎	木賀修造	浜田平十郎	大河内源太夫	無
享保9年以降 1724~	団16-7	渡邊伝五郎	兵家葉期	小畠藏人	黒沢 武?之助	大和田 源之助	新田 秀哲 丈?之進
宝曆10年~明和3年 1760~66	団17-8	横濱軍藏	イトウ 左太夫	米野幸一郎 和田松之助	市川 三右衛門	荒場衛宣	志茂 傳之助
天明6年~安政元年 1786~89	団17-9	和田内記	無	市川三治	小原勘解由	芳賀 伴人	曲岡 仲左衛門
安政3~6年 1856~59	団17-10	和田常之系	高城兼一郎	久世平八郎	喜多山 大吉		松井元亮 小学校

表7 仙台藩の家格
Tab.7 List of status in *Sendai-han*

家格	人数	備考
一門	11	角田右用氏・豆程伊達氏・水沢伊達氏・瀧谷伊達氏・亞米伊達氏・脇谷伊達氏・羽田伊達氏・宮伊達氏・川崎伊達氏・白河氏・三沢氏
二家	17	船貝・秋保・柴田・小梁用・増森・大桑・梶田・村田・黒木・石母田・藤上・中村・石田・中井・丘理・桑川・片倉
準一家	10	猪苗代・天童・松前・尊名・本宮・高京・島西・上遠野・保土原・福原
一族	22	大京町・大郷(郡沢郷)・大郷・大内・西大条・小原・西大立町・中島(江刺郷)・宮内・中島(伊具郷)・茂庭・速鹿・佐藤・高田・片平・下郡山・沼沢・大町(宮城郷)・高城・大松沢・石母田・板
宿老	3	看座のうち・看座の三家(浅鹿・但木・後藤)
右座	28	正月等の儀式で登城し者座して藩主に挨拶する家臣
太刀上	10	正月賀札に太刀を献上し藩主から盾を頒給する家臣
召出一番座	38	正月宴会に召し出される家納
召出二番座	51	正月宴会に召し出される家納
平士(1000石以上)	6	
平士(500石以下)	68	
平士(100石以上)	994	
合計	1258	

2. 調査経緯

(1) 2000年度までの調査

1978年、川内北地区のブル西館の排水管理設工事の跡、石組の井戸などが発見された。この時、本学の文学部考古学研究室によって緊急の調査が行われたのが、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区における最初の考古学的調査であった。しかしこの時は、既に掘削が実施された後に、露出した遺構の記録を作成する緊急の調査であったため、ごく部分的な調査に留まらざるをえなかつた。

東北大大学に埋蔵文化財調査委員会が1983年に設置され、構内遺跡の組織的な調査が開始されると、川内北地区についても遺跡が広がっている可能性に配慮し、必要な措置が取られるようになった。すなわち、施設建設が計画されている場所については試掘調査を行うとともに、營繕工事に際しては、立会調査を実施してきた。その結果、いくつかの調査において、江戸時代の遺構面が残存していることが明らかとなってきた。また、1986年度に実施した二の丸地区第8地点は、二の丸北側に東西に延びていた堀の、北側の岸の部分の調査であった(年報4)。二の丸に伴う堀の部分にかかるため、調査地点名称は二の丸地区の名称を採用したが、調査を実施した場所は川内北地区であった。

これらの調査において、川内北地区においても、江戸時代の遺構面が良好に残存していることが判明してきた。しかも、二の丸の遺構面から、途切れることなく、周辺の遺構面が連続して残っていることも明らかとなってきた。このような成果を受けて、仙台市教育委員会・宮城県教育委員会とも協議した結果、1993年度に仙台城跡の範囲を拡大する措置がとられた。川内北地区に江戸時代の遺構面が良好に残存していることと、二の丸のすぐ外側に位置し、二の丸と密接に関連することから、仙台城跡の一部として扱うこととなった。これにより川内北地区のほとんどが、周知の遺跡の範囲に含まれることとなった。

2000年度までに、当センターおよび前身である埋蔵文化財調査委員会で実施した二の丸北方武家屋敷地区的調査は、第1・4・5・6地点の4地点である(図3)。1985年度に実施した第2地点(BK2)と第3地点(BK3)の調査は、結果的に立会調査で終了したため、欠番としている。

第1地点は、今回の第7地点と一部重なる区域で、1984年度に実施した試掘調査である。当時、課外活動施設の建設候補地であったため、江戸時代の遺構・遺物の有無を確認する目的で、 2×2 mの試掘調査区を3ヶ所設けて調査を行っている。その結果、東よりの調査区で、江戸時代の遺構面が残存していることが確認されている。この試掘調査を実施した後に、課外活動施設の建設場所は変更されたため、今回の第7地点の調査が行われるまでは、それ以上の調査は実施されていない。

第4地点は、1985年度に試掘調査を実施し、1994~1995年度に本調査を行った。試掘調査時には保健管理センターの建設予定地であったが、その後の計画見直しによって課外活動施設が建設されることとなり、工事に先立って本調査を実施した。二の丸北方武家屋敷地区では、初めての大規模な調査となった。江戸時代の初頭から幕末に至る、多数の遺構が検出された(年報13)。

第5地点(BK5)は、教養部学生実験施設(当時)にエレベーターを設置するのに伴い、1989年度に実施した。当初は試掘調査という位置づけであったが、江戸時代の遺構が検出されたため、本調査に切り替えて実施したものである。40m²という小規模な調査であったが、南北方向に延びる溝が1条検出されている(年報7)。

1996年度に実施した第6地点は、給水管理設に伴う調査である。調査面積は少なかったが、比較的多くの遺構が検出されている(年報14)。

今回の第7地点の調査は、川内北地区における二の丸北方武家屋敷地区の大規模な調査としては、1994~95年度に実施した第4地点の調査以来、2ヶ所目の調査となる。

(2) 調査地点の位置

今回の調査は、マルチメディア総合研究棟新宮に伴う調査である。調査地点は、川内北キャンパスの中でも、北端に近い場所で、自転車置き場などとして使われていた場所である（図18）。今回の調査区の東側には、高さ2mを越える段差がある。この段差は、近代以降に人工的に造られたものである。新築される建物は、この段差をまたぐ形で、東西に長く造られる計画であった。段差の下側は、大規模に削平されていると考えられたことから、段差の上の部分を発掘調査の対象とした。

前述のように、今回の調査地点は、二の丸北方武家屋敷地区第1地点の試掘調査と一部重なる場所である。この第1地点の調査以外には、近隣では発掘調査は実施されていない。小規模な掘削に伴う立会調査が実施されたことがあるだけである。

絵図との対比、江戸時代の道路の推定復元などについては第3章1.で述べたが、二の丸北側の、武家屋敷が広がっていた区域にあたる場所である。

(3) 調査の方法と経過

①1984年度試掘調査

調査地点が重なるため、1984年度の試掘調査（BK1）についても、ここで簡単に触れておく。

当時この区域は、課外活動施設の建設予定地となっていたため、江戸時代の遺構面の残存の有無などを確認するために、試掘調査が実施された。建設予定範囲に合わせる形で、2m×2mの調査区を3ヶ所設定し、合計12m²を調査している（図19）。調査は、重機で地山まで掘削して断面を観察する方法で行われており、平面的な精査は全く行われていない。

東側の調査区である1区は、今回の調査区の中に重なる。江戸時代の遺物を含む地層が残存し、江戸時代の遺構面が残っていることが明らかとなった。しかし、平面精査を行わず、江戸時代の遺構面を掘り抜く形で調査されたため、結果的に礎石建物跡などの一部を破壊し、遺構の展開状況が判らなくなる結果をもたらしている。

中央の2区は、今回の調査区のすぐ西側にあたる位置に設けられた。ここでは、表土と近代以降の盛土を除去すると、すぐに地山層が露出し、江戸時代の地層は削平されていた。

西側の3区でも、表土と近代以降の盛土を除去すると、すぐに地山層が露出し、既に削平を受け江戸時代の遺構面は残存していないことが明らかとなった。

②2001年度本調査

2001年度予算においてマルチメディア総合研究棟新宮が決定し、段差をまたぐ形で、東西に長い建物が建てられることとなった。段差の上側にあたる区域は、第1地点の試掘1区の結果から、江戸時代の遺構面が残存していることは確実であったため、工事で破壊される範囲の全面を調査することとした。段差の下側にあたる東側は、大規模に削平されていると考えられたため、この区域については重機で表土を掘削し、遺構が検出された場合には、その区域だけ調査することとした。ただし、段差の東側は、その一部を排土置き場として利用することとしたため、東側部分の掘削は、調査の進行状況に応じて実施することとした。

調査区域は、段差の西側も東側も、それまで自転車置き場として利用され、上屋が設置されていた。この上屋などの支障物の撤去や、現場事務所のプレハブの設置などの諸準備が、年度当初には間に合わなかった。そこで、1984年度の試掘調査1区の周囲を、先行して一部を調査し、基本層序などの確認を行うこととした。

調査は、4月4日から開始した。最初は、少人数で機材置き場や通路の設置などを行った。続いて4月9日に試掘1区周辺の重機掘削を実施した。試掘区の周辺を一回り大きく方形に掘削し、そこから2m幅のトレンチ状に、西側へ約10m掘削した。試掘1区の埋め戻し土を除去したところ、第4地点で確認されているとの同様の、

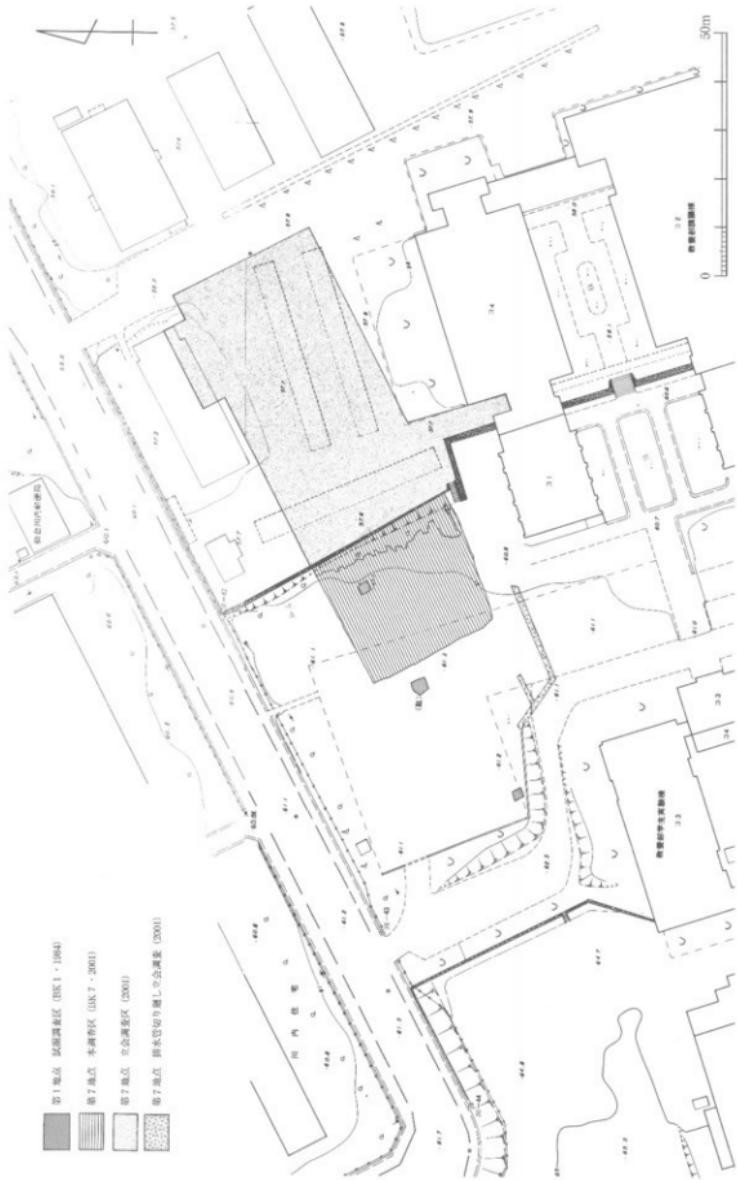


図18 訓室原敷地区第7地点調査区の位置
 Fig.18 Location of DK7 (DK re. Location 7 of sannomiya residence)

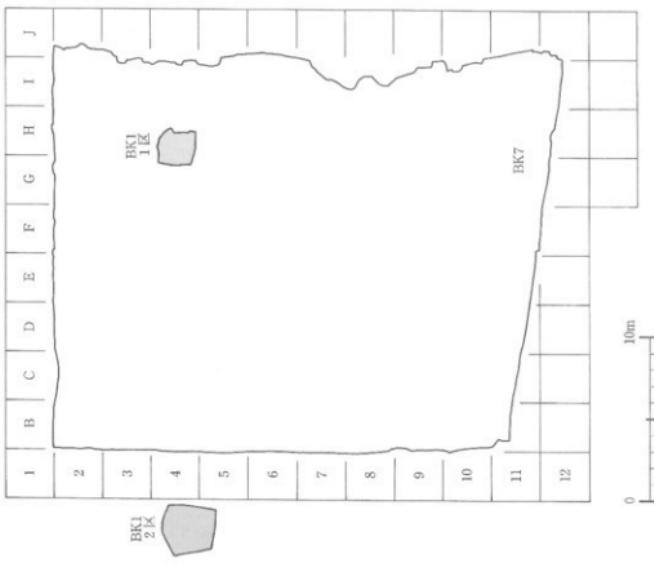


図19 武家屋敷地区第1地点調査区と第7地点調査区の関係
Fig.19 Location of BK1 and BK7

明治初頭頃の畑耕作土が残存しているのが確認され、これを2層とした。第4地点での経験から、明治初頭の畑耕作土には、江戸時代の遺物が多数入り込んでいることが予想されたため、2層上面から精査を行うこととして、周辺は2層上面の精査までを行った。

この試掘区周辺の先行調査と併行して、4月19日より支障物撤去や仮囲設置などを進め、23日から段差西側の調査範囲全体の重機掘削を開始した。重機掘削は5月2日に終了した。

連休明けの5月7日から、作業員を投入した。先行する部分的な調査によって、2層上面に畑の畝状の遺構が存在することが明らかとなっていたため、2層が露出するまで重機で除去すると、畝状遺構を壊してしまうおそれがあった。そのため、1層としてまとめた表土や近代以降の盛土は、若干残して除去した。残った1層の除去と、擾乱内の埋土の除去から作業を開始した。

川内地区の調査では、大規模な擾乱が多く存在するのが通常である。これらの擾乱の中には、かなり深いものも多いが、深さの大小にかかわらず、最初の段階で全て掘り上げることを基本方針としている。これは、井戸などの深い遺構が、擾乱の底面で検出される可能性もあることと、擾乱内の埋土に出来る新しい遺物の混入を防ぐことが目的である。また、整地層をはさむ複雑な遺構の様相を把握するため、調査の最初の段階で擾乱を完全に掘り上げ、断面を充分に観察できるようにするためにもある。

今回の調査区でも、近代以降の擾乱が各所に存在し、全体的な保存状態は良好とは言えない(図20)。2層上面まで達しているものが広範囲に存在する。調査区西よりのC列を、調査区を南北に横切っている大規模な擾乱は、米軍の共同溝によるものである。米軍共同溝の掘り方は、底面の凹凸が激しく、重機で除去しきれない埋土が多量に残り、除去に手間取った。擾乱内の埋土を完全に除去し、その中に深い遺構がないことを確認した。この米軍共同溝の掘り方は、場所によってかなり深くなり危険なため、2層上面の精査が終了し、全景写真を撮影した後に、一定の深さまで埋め戻すこととした。

F・G-5区からF・G-9区にかけて南北に並ぶ、3ヶ所のほぼ方形の擾乱は、大学造成時に重機で掘られたものである。東北大学が川内北地区を利用するようになってからしばらくは、米軍キャンプの建物を使用していた。大学での建物の建設が進められるとともに、これらの米軍時代の建物が壊されていったが、その時の廃材と思われるガラスなどが大量に捨てられていた。

B～D-4区からB～D-7区にかけて並ぶ方形の擾乱は、大きな礫石が2～3個重ねて入れられているもので、第4地点でも同様の礫石が発見されている(年報13)。これらは、陸軍第二師団の建物の基礎と考えられる。E～H-2区からE～H-7区にかけて並ぶ方形の擾乱は、掘り方の内側いっぱいにまでコンクリートが充填されたもので、米軍時代の建物の基礎と考えられる。H～J-10・11区の、段差の脇にあるほぼ長方形の擾乱には、周囲の壁に沿って丸太を組み上げたような施設が、一部残っていた。おそらく、段差から横に入る形で造られた防空壕と思われる。

これらの大規模な擾乱以外にも、大小の擾乱が存在する。擾乱内の埋土の除去にあたっては、重機も利用したが、周囲を破壊しかねない場合には、手掘りによって掘り上げているものも多い。擾乱の中には、掘り方の内側いっぱいにまでコンクリートが充填されている場合もあり、重機で撤去すると、周囲の地層を破壊してしまう。そのため、コンクリートの破碎のため、電動ハンマーを多用した。このような状況のため、擾乱の掘り上げと清掃に予想以上に手間取り、一部は6月下旬までを要した。これが終了した部分から、順次精査に移った。

精査は、2層上面から開始した。2層は畑の耕作土として使用された部分もあり、全体に遺構は少なく、7月6日に終了した。その後、2層以下を掘り下げつつ、順次遺構を確認して精査を続けた。

段差の東側については、排土置き場としていた関係と、この場所に置かれていた自転車置き場の撤去作業の日程から、9月29日から10月5日に、重機での掘削を実施した。建設予定範囲全体にわたって表土を除去したが、さらに深くまで近代以降の盛土が続いていることが明らかとなった。そのため、江戸時代の遺構面が残存してい



図20 武家屋敷地区第7地点調査区模式図
Fig.20 Pattern diagram of location at BK7

る可能性はきわめて低いものと判断して、それ以上の調査は実施しないこととした。

調査が進行し、全体の状況がはは明らかとなってきた10月20日には、現地説明会を開催した。それに先だって、19日に報道機関対象の記者発表を行った。

今回の調査では、調査区南東側に、2号遺構とした大規模なゴミ穴が確認され、膨大な量の木簡や木製品が出た。調査の進め方との関係で、この2号遺構とその周辺が、最後まで作業が残ることとなった。10月末には、他の区域の調査ははは終了し、2号遺構とその周辺の調査に集中して取りかかることとなった。多量の遺物の出土により、作業は難航したが、11月16日に最終状況の全景写真を撮影した。その後、1号遺構で出土した犬の骨格などの特殊な遺物を、ウレタンで包埋して取り上げる作業などを行いつつ、撤収作業を進め、11月23日には全ての作業を終了した。

なお、本建物の付帯工事として実施された、渡り廊下取設工事は9月18日に、污水管迂回工事は12月17・21・25日に立会調査を実施した。いずれにおいても、江戸時代の遺構・遺物は検出されなかった。

③記録方法

調査にあたっては、建物建設予定区域の方向に合わせて、3mグリッドを作成した（図20）。調査に際して設定した基準点の国上座標値は、以下のとおりで、基準点の位置は図20に示した。平面直角座標系は、X系である。グリッドは、北で $28^{\circ} 18' 18''$ 西偏している。

B K 7 - A 日本測地系 X = -193,381.587 世界測地系 X = -193,072.854

Y = + 1,784.902 Y = + 1,485.011

B K 7 - B 日本測地系 X = -193,367.362 世界測地系 X = -193,058.630

Y = + 1,811.315 Y = + 1,511.424

なお、本年報にも掲載した、現在使用している縮尺500分の1地形図などは、旧米の日本測地系によるものである。そこで当面の間、基準点の国上座標値は、日本測地系と世界測地系の座標値を、両方とも掲載することとしている。掲載図版中の座標値についても、日本測地系か、世界測地系のものか、それぞれに明示している。

遺構の実測は、平面図・断面図とともに縮尺1/20を基本とした。ただし、1号遺構で検出された犬の全身骨格については、等倍で実測図を作成している。

近世の遺跡は、その場所が近代以降に様々に利用されている場合が多く、必然的に近代以降の攪乱が多数存在することとなる。また頻繁な建て替えなどにより、多数の変遷段階が認識されることがほとんどである。このような場合、古い段階では、新しい段階の遺構による破壊を受け、保存状況が良くない場合が多い。攪乱や後世の遺構による破壊を遺構実測図で表現する場合、通常は線の太さを最も細くして表現する方法がとられている。しかし、遺構の数が多く複雑に切り合う場合、線の太さの違いだけでは、必ずしも判り易い表現方法とは言えない場合もある。そこで先の年報18に引き続いで、攪乱や後世の遺構による破壊部分を、破線で表現した。これは、新潟県新発田市の新発田城跡の調査報告書などで試みられている方法である（鶴巣ほか1997）。

記録写真は、35mmのカラーリバーサルとモノクロを基本として使用し、全景写真などでは、6×7のカラーリバーサルとモノクロ写真を撮影している。調査状況の写真撮影にあたっては、調査区全域の変遷段階を合わせて、それぞれの段階での全景写真を撮影することが望ましいことは言うまでもない。しかし今回の調査では、調査区全体に広がる整地層がほとんどなく、遺構を掘り上げて含まれる遺物を確認するまで、それぞれの遺構の帰属時期を決定できなかった。そのため、調査途中に変遷段階を設定することは難しく、段階ごとの全景写真を撮影することは不可能であった。次善の策として、できるだけ頻繁に広域での写真を撮影するようにしたが、全景写真を撮影したのは、2層上面と最終状況の2回だけとなっている。

④遺構の名称について

近世遺跡の調査においては、多種多様な遺構が検出される。その際、遺構の詳しい用語まで判明する場合もある一方で、遺構の形状からしか名称を付けられないものも存在する。そのため、異なる基準での名称が混在する場合が多い。本来は、同一基準での命名が望ましいが、作業を進める上での判り易さという点も無視できない。今回使用した遺構名称は、次の通りである。

建物・柱列・杭列・石列・溝・竪状遺構

土坑・井戸・池状遺構・石敷遺構・桶埋設遺構・桿埋設遺構・ピット・落ち込み

これら以外に、大規模なゴミ穴が2基確認された。これらは検出時には池になる可能性を考え、1号池・2号池と呼称したが、調査の進行とともにゴミ穴であることが明らかとなった。そのため、池という呼称はふさわしくなくなってしまった。もともとゴミ穴として掘られたのかも判然としないため、1号遺構・2号遺構との名称を使うこととした。ピット以外の、各時期ごとの遺構の一覧を、表8に掲げておく。

柱穴などのピットについては、建物や柱列を構成することが現場で判明している場合でも、ピット番号として、全体で一連の通し番号を現地で付けた。根固状の縁が検出され、掘り方が判然としない場合も、ピットとして一連番号を付けている。川内地区での調査の場合、遺構が複雑に重なり合うと、現場での検討では、組み合全ての柱穴を確認できない場合が多い。調査後の図面整理の過程で、建物跡や柱列を確認している場合が多数を占める。現地で組み合ったことが判明したものについて柱番号を付すと、その後に同じ建物跡などを構成することが判明したピットの番号と、柱番号が前後する場合が生じる。整理後に柱番号を付け直すと、現地での呼称との間で混乱をきたしかねない。そのため、現地で付ける遺構名称は、通し番号のピット番号に統一し、建物跡や柱列を構成するピットについては、図面整理後に柱番号を新たに付ける形で、名称を変更している。表9・10に、現地で付した遺構名称と、本報告にあたっての遺構名称の対照表を示している。遺物に付された注記は、全て現地での遺構名称となっている。

土坑については、ピットとの区分を、どこにするかという点が問題となる。基本的には規模の大きなものを土坑としている。また、ピットとして名称を付けたが、土坑とした方が良いと考えられるものについても、名称を変更した。溝については、素掘りのものも、石組溝も、合わせて通し番号を付けた。また、木樋が埋められたものも、溝として名称を付けた。

⑤遺物の取り上げについて

近世以降の遺跡の調査においては、それ以前の時代の遺跡と比較すると、遺物の出土量が極めて多くなるのが通常である。その際、破片では特徴が判別し難い瓦などについて、全てを取り上げるか否かが問題となる。

当センターの調査においては、江戸時代に遡る可能性がある遺物については、全て採集することを基本方針としている。今回の調査では、明治時代の早い時期と考えられ、畑の耕作土として利用された可能性のある、2層より下位の層序から出土した遺物については、基本的に全ての遺物を採集している。それより上位の整地層や現在の表土は、まとめて1層として、明らかに近現代のもの以外について、遺物を回収した。ただし、1層と攢乱から出土した遺物の内、瓦については、一定の基準を設けて現地で選別を行った。瓦は、江戸時代のものと、明治以降のものを識別することが、破片の場合ほとんど不可能なものも多い。そこで、長さと幅の判明するもの、軒瓦、刻印や縞刻のあるもの、その他特殊なものについては採集するという基準を設けた。刻印や縞刻の有無などについては、土壤が付着したままでは判別が難しいので、高圧洗浄機で土壤をおおよそ落とした上で、上記の基準に当てはまる資料のみを収集している。

⑥整理作業

今回の調査では、木簡を始めとする木製品が、調査終盤に大量に出土した。出土遺物の水洗と注記の作業は、調査中に一部実施していたが、多くが調査終盤に出上したため、本格的な整理作業は調査終了後に開始することとなった。調査終了と同時に、木製品の水洗作業を優先して開始した。最初に木簡の水洗を行い、続いてその他の木製品の水洗を実施することとした。結果的に、木簡の水洗作業だけで当年度末まで費やこととなった。引き続き翌年度は、木簡以外の水洗と注記から、整理作業を進めた。なお注記作業は、瓦や土師質土器などは、自動注記機械を利用して行った。

当センターでは、調査の翌々年度中に整理作業を終え、報告書を刊行することを基本方針としていた。しかし、2000年度に調査を実施した仙台城跡二の丸第17地点の調査成果を掲載した年報18の刊行が、予算上の問題などもあり、大きく遅れることとなった。また、二の丸第17地点の整理作業も、全般に遅れていた。その影響を受け、二の丸第17地点に引き続いて整理作業を実施する予定の、当地点の整理作業と報告書刊行も遅れることとなった。2004年度に年報18を刊行する目処がたったため、本年報は2005年度に刊行することとした。しかし、多数の木簡を始め、報告書に掲載することが必要な資料の数が膨大なため、一つの冊子とすると、頁数が大きくふくらむことが明らかとなった。当センターの整理作業と報告書刊行は、毎年度ほぼ同じ予算額で進めている。特定の年度だけ報告書の頁数が増大し、印刷費が大きくなることは、他の事業費を圧迫することとなり難しい。そのため、本年報は5分冊に分け、第1分冊を2005年度に、第2～5分冊は、作業の進行にあわせて順次刊行することとした。

近世遺跡の調査では、様々な材質の遺物が出土する。水浸木製品のように、材質に応じて特有の取り扱いを必要とするものも多いことから、遺物の種類ごとに整理作業を進めている。遺物の各種類ごとの細かな整理作業の方法、それぞれの分類基準については、第2分冊に掲載する遺物の報告の各項目の中で記述する。

図面ないし写真を、本報告書に掲載した遺物については、種類ごとに以下の頭文字を決め、その下に通し番号の登録番号を付けている。実測図・写真図版・観察表の番号は、いずれもこの登録番号に統一している。遺物を管理する台帳も、全てこの登録番号をもとに作成しており、保管にあたっても、この登録番号を基礎に管理するようにしている。

原始・古代の遺物

縄文土器・須恵器：C Z 石器：S T

江戸時代以降の遺物

磁器：C J 陶器：C T 軟質施釉土器：C N

土師質土器：C H 丸質土器：C G 土製品：C O

瓦：T

古銭：M C 古銭以外の金属製品：M O

石製品：S

木簡：W T 木製品：W 漆塗製品：W L

ガラス製品：G その他の遺物：O T

3. 基本層序と時期区分

(1) 基本層序

調査地点周辺のもともとの地形は、全体的には、ごくゆるやかに東に向かって下っている（図21）。現在見られる平坦面と段差は、近代以降に行われた切り土と盛り土によって形成されたことが、今回の調査結果からも明らかである。そのため、標高の高い西側ほど、近代の切り土による削平が深くおよんでいるものと思われる。今回の調査地点より西側にあたる、第1地点の試掘2区と3区では、すでに江戸時代の地層は削平されて残存していないかった。今回調査した区域では、その西端に至るまで、近代以降の切り土による削平はまぬがれていた。しかし、近代以降の擾乱が多く、各所で分断され、地層のつながりを把握するのに苦慮する結果となった。

基本層序は、次のように区分した（図22～25）。

1層

現在の表層および近現代の整地層と考えられる地層を、1層として一括した。次の2層より上位にある層は、全て1層としてまとめることとなる。掘削も、ほとんどは重機で行っている。

2層

灰黄褐色からにぶい黄褐色を基調とするが、場所によって色調の変異があり、黒褐色から暗褐色の暗い色調の部分や、褐灰色のような明るい色調の部分もある。土質はシルトで、炭化物や小礫を含む場合が多い。

調査範囲の一部に留まるが、2層の上面は甌状になっている部分がある。二の丸北方武家屋敷地区では、第4地点で広範囲に甌状遺構が検出され、それらは溝状遺構で区画されていた。このような遺構の形態から、畑の跡であると考えられている（年報13）。今回の第7地点では、畑の区画を示すような遺構は検出されていないが、

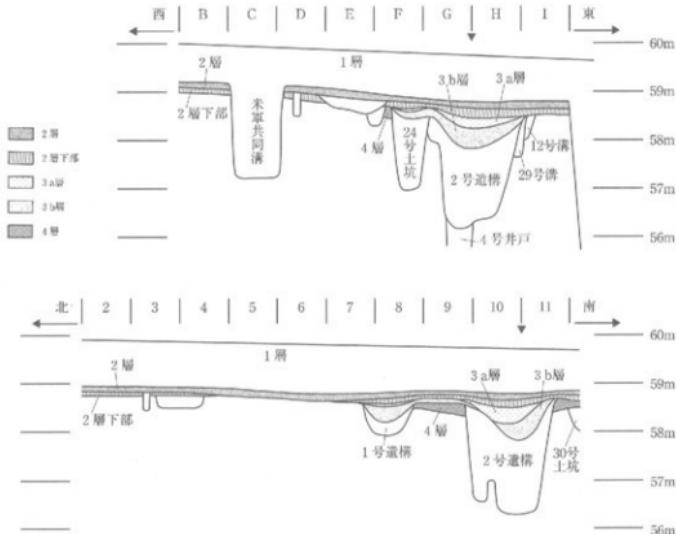


図21 武家屋敷地区第7地点基本層序模式図

Fig.21 Schematic Profiles of BK7

歎状遺構の様相は、第4地点のものに良く類似している。したがって、この2層は、畑の耕作土の可能性が高いと考えられる。

2層下部

土色・土質をはじめ、層相は2層との類似性が強い。灰黄褐色からにぶい黄褐色を基調とするが、場所によつて色調の変異がある。2層同様、色調は黒褐色から暗褐色の暗い色調の部分や、褐灰色のような明るい色調の部分もあるが、全般的に変異の割合が2層より大きい傾向がある。土質はシルトであるが、砂の部分もある。炭化物や小礫を含む場合があることは2層と同じであるが、場所によっては多くの小礫を含む場合もある。

2層と層札の違いが少なく、2層・2層下部とも部分ごとに変異があったため、両者を明確に区分することが難しかった。そのため当初は、2層の一部と考へて調査を進め、2層下部と呼称した。調査が進むにしたがい、この2層下部の上面から掘り込んでいる遺構と、2層下部の下位から掘り込んでいる遺構が、両方とも存在することが明らかとなった。そのため2層下部は、江戸時代の整地層と考えられる。ただし層相から見て、当時の表層に堆積していた土を動かしたものと思われ、地山を削って大規模に土を運んで行われた整地ではない。また、2層下部に相当する層準で、様相の異なる地層も、各所に見られた。いずれも分布範囲が狭く、層の厚さも薄いという傾向がある。分布範囲が狭いため、相互の関係をつかむことは困難であった。層位の関係では、いずれも2層下部相当として矛盾しないものであったため、これらの地層も2層下部に含めた。

3a層

黒褐色シルトを主体とするが、粘土や砂質シルトの部分もある。全体的に、炭化物を多く含む。

次の3b層は大規模なゴミ穴の上面をふさぐように整地したものであるが、ゴミ穴内の堆積層が窪み、それに伴い3b層も窪んだところに堆積したのが3a層である。3a層には多数の遺物が含まれ、この窪みが再度ゴミ穴として利用されたものと考えられる。調査を進めていた過程では、3b層上の窪みは人為的な遺構と考え、20号土坑との名称を付けた。後の遺構の記載でも、20号土坑として説明しているが、陥没に伴う窪みを利用したものであり、20号土坑廻土と3a層は一連の堆積層である。

3b層

黄褐色粘土を主体とする整地層である。地山の黄褐色粘土層を用いたものと思われる。ほとんどは黄褐色粘土で占められ、含有物は少ないが、黄褐色粘土と黒褐色シルトがブロック状に混ざり合った部分もある。大規模なゴミ穴である1号遺構と2号遺構、およびその周辺に分布し、廃棄物を多量に含む地層を、覆い隠すようにして整地されている。

4層

灰黄褐色から褐灰色を基調とし、地山上部の漸移層に近い色調である。土質は、場所によりシルトから粘土まで見られ、一様でない。黒褐色上に、地山起源の黄褐色粘土がまだらに混じっている部分もある。

調査区南東側の、2号遺構の西側から南側にかけての範囲だけに分布していた整地層である。4層が分布している範囲は、地山上面の標高が若干低くなってしまい、この低い部分にだけ整地を行ったものと考えられる。2号遺構は、この4層上面から掘り込まれている。分布範囲が狭いことと、層の様相から、当時の表層に堆積していた土が給源と思われる。

地山

地山は黄褐色粘土を基調とする、ローム起源の水性堆積層で、土色・土質は場所による変異がある。川内地区一帯で観察される地山層と、基本的に変わらない。地山の最上部には、漸移層が形成されている部分も多い。漸移層は、にぶい黄褐色や灰黄褐色を基調とする。調査にあたっては、漸移層も含めて、地山として扱った。なお今回の調査区では、深い擾乱の部分を含めて、段丘疊層が露出しているところは見られなかった。

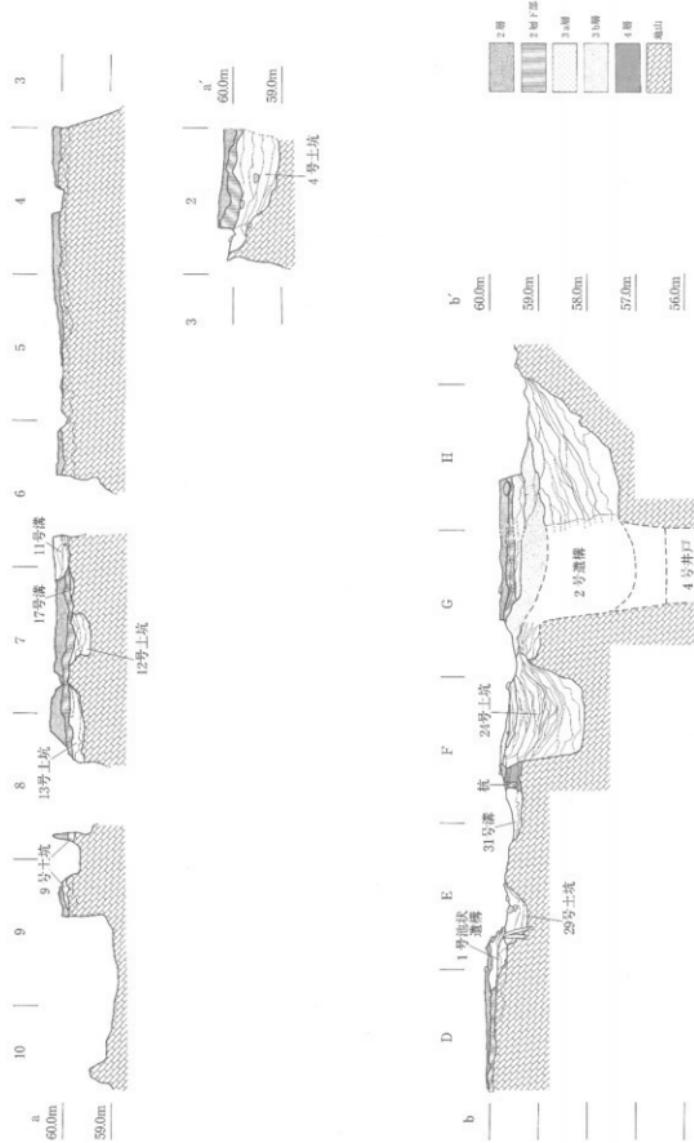


图22 武家堡地区第7地点基本层序断面图
Fig.22 Fundamental layer sections at BK7 (1)

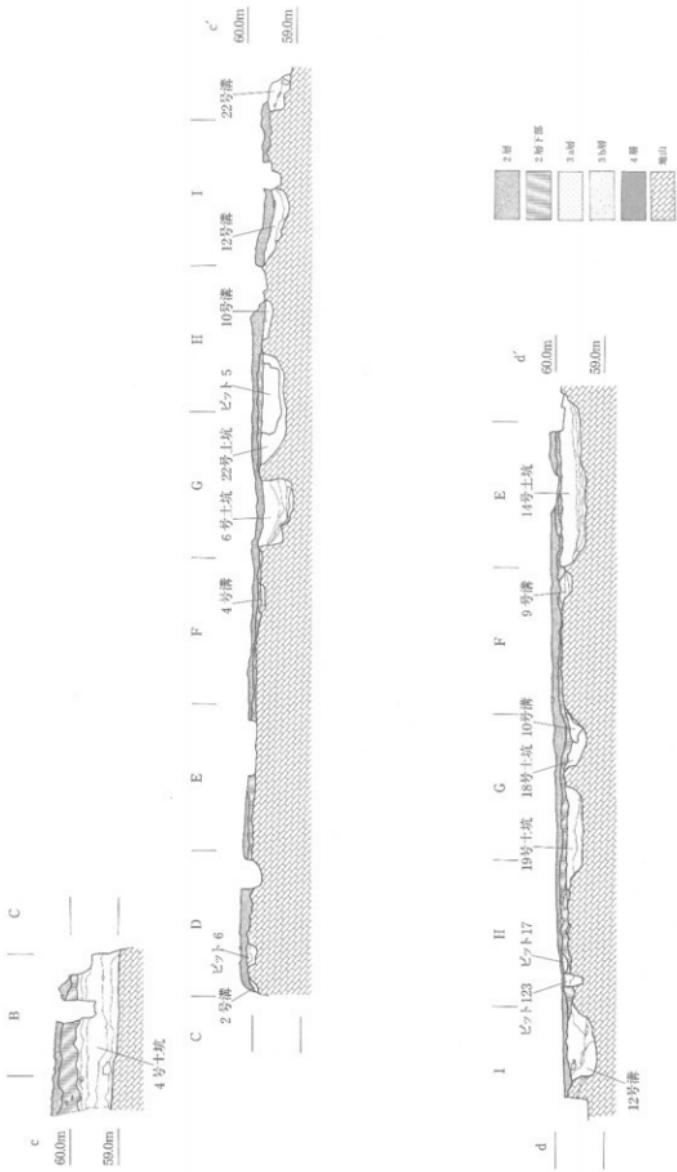


图23 武家屋敷地区第7地点基本层序断面图 (2)
 Fig.23 Fundamental layer sections at BK7 (2)

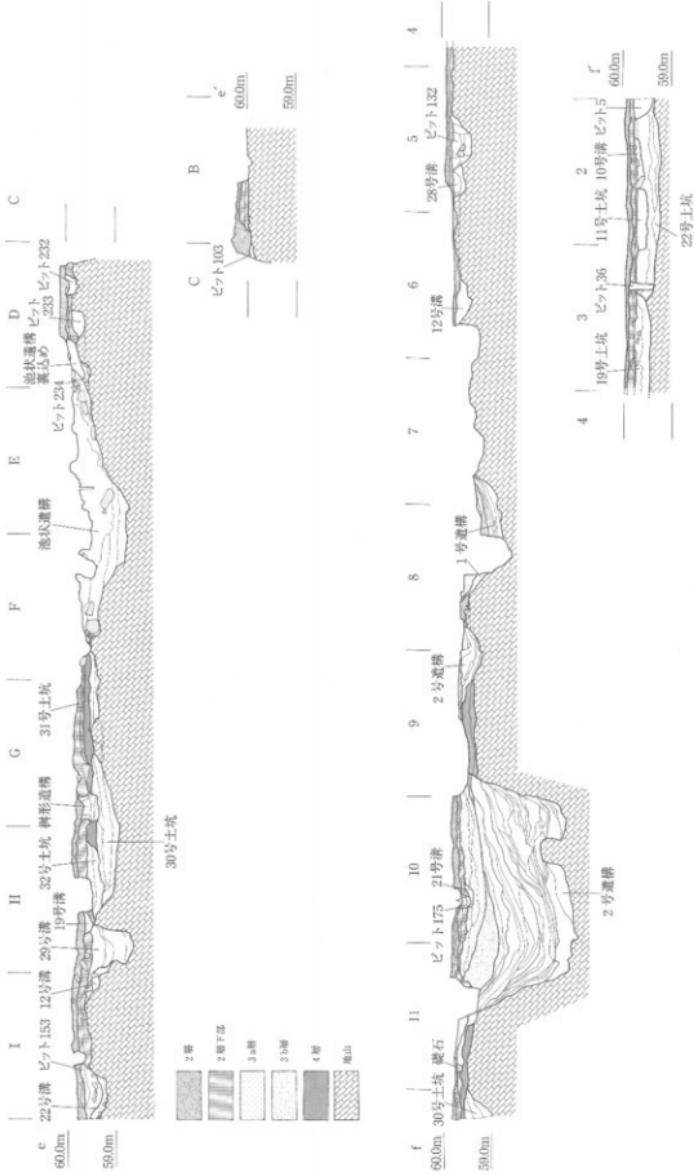


図24 武家屋敷地区第7地点基本層断面図 (3)
Fig.24 Fundamental layer sections at BK7 (3)

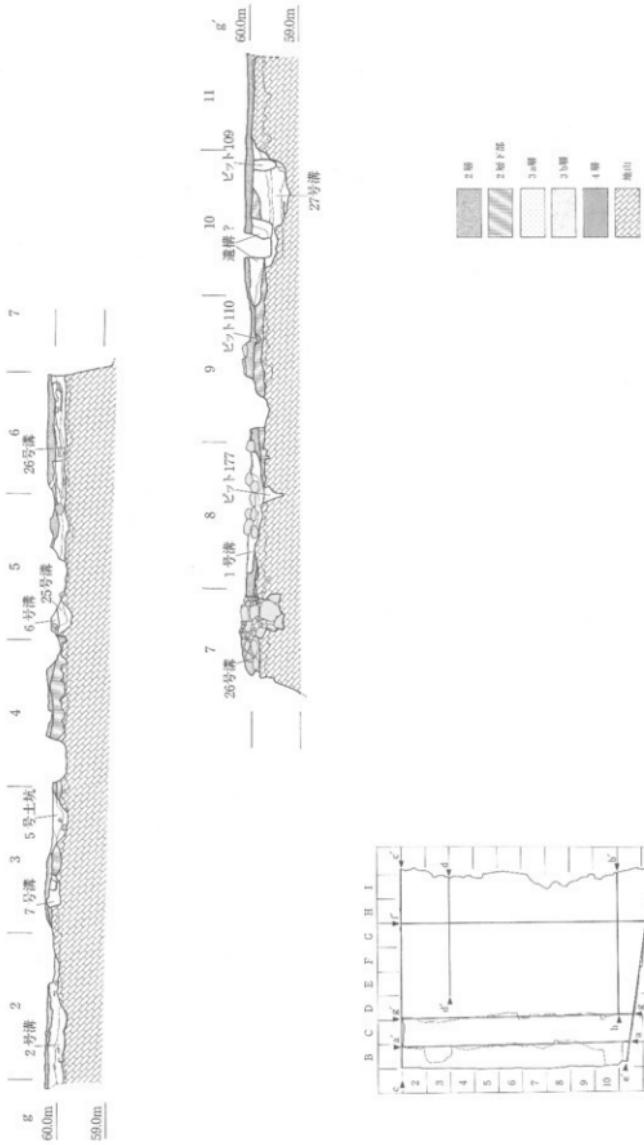


图25 宝家崖地区第7地点基本层断面图 (4)
Fig.25 Fundamental layer sections at BK7 (4)

(2) 遺構の変遷段階の設定

江戸時代より遡る遺構は、純文時代の陥し穴と考えられる土坑が1基発見されている。これは、江戸時代以前の遺構として別に扱う。遺構の変遷段階の設定は、江戸時代以降のものの中で行った。

江戸時代の遺構は、遺構の掘り込み面を基準として時期区分を行うこととし、I期からIV期に大別した。しかし、2層以下の層が、調査区の全域に存在する訳ではないので、それらの層との関係が判明しない遺構も少なくない。また、全般に遺構の検出は難しく、少しずつ掘り下げながら確認作業を繰り返した。そのため、掘り込み面が確定できていない遺構も多い。要所に上層觀察用のベルトを残して調査を進めたが、ベルトにかかっていない遺構については、掘り込み面が確認できないものも少なくない。検出された時点の標高を参考にして、掘り込み面を想定した遺構も多い。

出土遺物から遺構の年代を特定することも、遺物の出土量が少ない場合、困難であった。今回の調査地点では厚い整地層は見られず、同じ場所を繰り返し利用しているため、必然的に新しい遺構に古い遺物が混入する頻度が高くなったと考えられる。しかも、18世紀前葉の享保年間に極めて大規模なゴミ穴が造られ、この時に大量の遺物が当該地に持ち込まれたと考えられる。その結果、18世紀前葉に持ち込まれた可能性の高い遺物が、それ以後の時期に下る遺構にも、多数入り込んでいる。このような状況の中では、遺物が少ない遺構の場合、出土遺物から時期を確定することは難しくなる。

以上のような状況から、所属時期を不明とせざるを得ない遺構も存在する。個々の遺構を区分した理由については、各期の記載において述べるが、全体的な時期区分は、次のような基準で行った。

I期

基本層4層より下位から掘り込まれている遺構を、I期とした。しかし前述のように、4層の分布範囲が極めて狭く、4層との上下関係が判明する遺構は、わずかしかない。続くII期の遺構の中で、4層上面から掘り込んでいることが明らかな遺構から出土した遺物は、細かな点は明確でないところも残るが、おおむね18世紀代以下るものであった。そのため、17世紀代に遡る可能性が高い遺構については、I期に含めることとした。

II期

基本層序の2層下部の下位で、4層より上位から掘り込まれている遺構をII期とした。当期は、遺構の重複が多い区域もあり、検出遺構の全体配置を、ひとまとめにして図示することが困難である。そのため、遺構配置図を二つに分けて図示する。しかし、両者は明確に様相の異なる段階として区分できる訳ではなく、図面を提示する上での便宜的なものである。

III期

基本層序の2層より下位で、2層下部の上面から掘り込まれている遺構をIII期とした。前述のように2層と2層下部の区分が難しい部分も多く、実際の調査においては、II期とIII期の遺構を区別することは、あまりできていない。調査後の整理において区分している場合がほとんどである。

IV期

2層上面の遺構をIV期とした。

(3) 各期の推定期間

I期

I期の遺構の中には、江戸時代初頭に遡る遺物がまとめて出土している遺構もあり、当期の開始が江戸時代の早い時期まで遡ることは確実である。下限については、次のII期の開始時期との関係から、おおむね17世紀末ごろまでとしておきたい。

II期

4層を掘り込んでいるⅡ期の2号遺構と24号土坑からは、享保年間の年号が記された木簡が大量に出土している。年号には幅があるが、おおむね1720年前後に廃棄されたものと考えられる。この24号土坑より切り合い関係から先行することが確実で、なおかつ4層上面から掘り込んでいる遺構が、27号溝である。この27号溝に切られる31号溝が、4層上面から掘り込まれている。したがって、Ⅱ期の開始は、2号遺構・24号土坑の1720年前後という年代よりは、更に遅ることは確実である。ただし、27号溝から出土している陶磁器類は、2号遺構出土のものと、大きさは変わらないもので構成されており、大きく遅るものとは考え難い。なお31号溝からは、年代の明らかな遺物は出土していない。このように、4層上面から掘り込んでいる遺構の中で、18世紀前葉を大きく遅る時期のものは確認できていない。また、4層から出土した遺物は少ないが、京焼系陶器が含まれており、この点からも17世紀まで大きく遅らせることは難しい。なお確定でない部分も残るが、以上の点から、Ⅱ期の開始はおおむね18世紀初頭頃と考えておきたい。

下限については、2層下部が形成された時期が問題となる。2層下部に含まれている遺物は、ほとんどが18世紀代のものであるが、18世紀の中でも幅があるようである。一方、2層下部より下位から掘り込まれている遺構からは、19世紀に下る遺物が出土しているものもある。4号溝・5号溝からは、大堀相馬産の土瓶が出土している。これらは19世紀まで下るものであるが、19世紀中葉以降に多く見られる、簡書きで文様を描いたものは含まれていない。のことから、19世紀前葉頃が、Ⅲ期の下限と考えておきたい。

Ⅲ期

Ⅲ期の開始については、Ⅱ期の下限との関係から、19世紀前葉頃と考えられる。下限については、次のⅣ期が屋敷が取り払われた後の時期であることから、明治初頭頃と考えられる。ただし、次に検討するように、明治維新後、直ちに屋敷が取り壊された訳ではなく、若干の年数は経過していた可能性が高い。

Ⅳ期

Ⅳ期は、畠として利用されていることから、この区域の武家屋敷が取り払われた後であることは確実である。川内地区の武家屋敷が、いつごろ取り払われたのかを明確に示す史料は確認できていないが、古写真や地図から、ある程度の推定は可能である。

大手門近くから大橋方向を撮影した写真が、国際日本文化研究センターに所蔵されており、「日本名城古写真集成」で紹介されている。この写真には、大橋から大手門にいたる道路の北側にあった、登米伊達家と水沢伊達家の屋敷が写っている。内部の様子は判然としないが、両家とも門は撤去されているが、門脇の建物は残っている。この写真的撮影時期は確実でないが、大橋の中程が大きく補修されているように見える。これは、明治8年(1875年)7月の水害で、大橋の中央部が流失した後である可能性が高い。この推定が正しいなら、明治8年頃までは、川内地区的屋敷は、完全には取り払われていないこととなる。今回の調査地点の状況を直接示すものではないが、明治維新後、直ちに屋敷が取り払われたのではない可能性が高いと考えてよいであろう。

明治15年(1882年)の地図(図17-13)では、市街地の建物がある部分には、簡略ながら建物を示す記号が記されているが、今回の調査区周辺には建物を示す記号はない。陸軍省用地のため省略された可能性もあるが、片平地区など市街地の陸軍省用地では記号が記されており、建物が存在しなかった可能性が高いと考えられる。

明治26年(1893年)作成の地図(図17-14)では、既に第二師団関係の建物が整備されており、Ⅳ期が明治26年までは下らないことは間違いない。本章1.で検討したように、明治20年を前後する頃に、道路の位置が動かされて整備されたと考えられる。第二師団関係の建物の整備も、この道路のつけ替えと連動して行われた可能性が考えられる。そのため、Ⅳ期は、おおむね明治20年を前後する時期までと考えて良いであろう。

以上の点から、厳密に確定することはできないが、Ⅳ期は明治初期から明治20年前後までの間に限定され、中でも明治10年代を中心とする可能性が高いと考えられる。

表 8 武家屋敷地区第7地点時期別遺構一覧表
Tab.8 List of all structural remains divided in period

確定名称	現場名称	備考
绳文時代		
33号土坑	ピット204	
1期		
5号建物	なし	個別ピット番号
12号溝	12号溝	
24号溝	24号溝	
25号溝	25号溝	
28号溝	28号溝	
29号溝	29号溝	
30号溝	30号溝	
32号溝	32号溝	
33号溝	33号溝	
9号土坑	9号土坑	13号土坑と一連?
13号土坑	13号土坑	
14号土坑	14号土坑	
25号土坑	25号土坑	
26号土坑	26号土坑	
30号土坑	30号土坑	
31号土坑	31号土坑	南壁セクションのみ
1～Ⅳ期		
8号柱列	なし	個別ピット番号
9号柱列	なし	個別ピット番号
Ⅴ期		
7号柱列	なし	個別ピット番号
4号溝	4号溝	
5号溝	5号溝	
8号溝	8号溝	
9号溝	9号溝	
10号溝	10号溝	
13号溝	13号溝	
15号溝	15号溝	
16号溝	16号溝	
17号溝	17号溝	
21号溝	21号溝	
22号溝	22号溝	
23号溝	23号溝	16号溝と一連?
27号溝	27号溝	
31号溝	31号溝	
1号井戸	1号井戸	
3号井戸	3号井戸	
4号井戸	4号井戸	
1号遺構	1号池	
2号遺構	2号池	
池状遺構古段階	1号石敷	
3号土坑	3号土坑	
4号土坑	4号土坑	
6号土坑	6号土坑	
7号土坑	7号土坑	
8号土坑	8号土坑	
11号土坑	11号土坑	
12号土坑	12号土坑	
15号土坑	15号土坑	
16号土坑	16号土坑	
18号土坑	18号土坑	
19号土坑	19号土坑	
20号土坑	20号土坑	堆土は3層と一連
21号土坑	21号土坑	
22号土坑	22号土坑	
23号土坑	23号土坑	
24号土坑	24号土坑	
27号土坑	27号土坑	
28号土坑	28号土坑	
29号土坑	29号土坑	
32号土坑	32号土坑	南壁セクションのみ
Ⅵ期		
1号建物	1号建物	
2号建物	2号建物	
3号建物	なし	個別ピット番号
4号建物	なし	個別ピット番号
1号柱列	なし	個別ピット番号
2号柱列	なし	個別ピット番号
3号柱列	なし	個別ピット番号
4号柱列	なし	個別ピット番号
5号柱列	なし	個別ピット番号
6号柱列	なし	個別ピット番号
2号溝	2号溝	
3号溝	3号溝	
6号溝	6号溝	
7号溝	7号溝	
11号溝	14号溝	
18号溝	18号溝	
19号溝	19号溝	
26号溝	26号溝	
2号井戸	2号井戸	
2号土坑	2号土坑	
17号土坑	17号土坑	
1号石敷	1号石敷	
石敷遺構	2号石張	
梯段設置構	梯段設置構	
桶形設置構	桶形設置構	
Ⅶ期		
1号溝	1号溝	
11号溝	11号溝	
1号土坑	1号土坑	
5号土坑	5号土坑	
1号石列	1号石列	
鉢状遺構	鉢状遺構	

表 9 武家屋敷地区第7地点遺構名稱对照表 (↑)
Tab.9 List of the strubtual remains name which are collated (1)

地番	確定名稱	参考	時期	Pt	確定名稱	参考	時期	
1	ピット1		新	87	2号柱洞 杖4	1-1-1	火垂	正統年
2	ピット2		新	87	2号柱洞 杖4	1-1-1	火垂	正統年
3	ピット3		新	88	1号柱洞 杖10	1-1-1	火垂	正統年
4	ピット4		新	89	1号柱洞 杖9	1-1-1	火垂	正統年
5	ピット5		新	90	2号柱洞 杖3	1-1-1	火垂	正統年
6	ピット6		新	91	3号柱洞 杖3	1-1-1	火垂	正統年
7	6号柱洞 柱1		新	92	ピット82	1-1-1	火垂	正統年
8	3号柱洞 柱3		新	93	5号柱洞 柱2	1-1-1	火垂	正統年
9	3号柱洞 柱4		新	94	5号柱洞 柱3	1-1-1	火垂	正統年
10	4号柱洞 柱1		新	95	ピット85	1-1-1	火垂	正統年
11	5号柱洞 柱1		新	96	ピット96	1-1-1	火垂	正統年
12	5号柱洞 柱3		新	97	ピット97	1-1-1	火垂	正統年
13	5号柱洞 柱4		新	98	2号柱洞 杖2	1-1-1	火垂	正統年
14	3号柱洞 柱2		新	99	1号柱洞 杖12	1-1-1	火垂	正統年
15	3号柱洞 柱3		新	100	1号柱洞 杖11	1-1-1	火垂	正統年
16	3号柱洞 柱4		新	101	ピット101	1-1-1	火垂	正統年
17	ピット17		新	102	ピット102	1-1-1	火垂	正統年
18	ピット18		新	103	ピット103	1-1-1	火垂	正統年
19	ピット19		新	104	ピット104	1-1-1	火垂	正統年
20	ピット20		新	105	火垂	正統年		
21	ピット21		新	106	7号柱洞 柱1	1-1-1	火垂	正統年
22	ピット22		新	107	火垂	正統年		
23	1号柱洞 柱2		新	108	火垂	正統年		
24	1号柱洞 柱3		新	109	2号柱洞 柱1	1-1-1	火垂	正統年
25	1号柱洞 柱4		新	110	2号柱洞 柱4	1-1-1	火垂	正統年
26	1号柱洞 柱5		新	111	ピット111	1-1-1	火垂	正統年
27	1号柱洞 柱6		新	112	2号柱洞 柱2	1-1-1	火垂	正統年
28	4号柱洞 柱2		新	113	2号柱洞 柱5	1-1-1	火垂	正統年
29	4号柱洞 柱3		新	114	ピット114	1-1-1	火垂	正統年
30	ピット30	4号調査石側方?	新	115	2号柱洞 柱5	1-1-1	火垂	正統年
31	ピット31	4号調査石側方?	新	116	ピット116	1-1-1	火垂	正統年
32	ピット32	柱3	新	117	ピット117	1-1-1	火垂	正統年
33	4号柱洞 柱4		新	118	ピット118	1-1-1	火垂	正統年
34	4号柱洞 柱5		新	119	火垂	正統年		
35	4号柱洞 柱6		新	120	1号柱洞 柱4	1-1-1	火垂	正統年
36	2号柱洞 柱2		新	121	ピット121	1-1-1	火垂	正統年
37	3号柱洞 柱2		新	122	ピット122	1-1-1	火垂	正統年
38	3号柱洞 柱3		新	123	6号柱洞 柱2	1-1-1	火垂	正統年
39	ピット39	4号調査石側方?	新	124	ピット124	1-1-1	火垂	正統年
40	2号柱洞 柱12		新	125	4号柱洞 柱7	1-1-1	火垂	正統年
41	1号柱洞 柱3		新	126	5号柱洞 柱5	1-1-1	火垂	正統年
42	ピット42		新	127	ピット127	1-1-1	火垂	正統年
43	ピット43		新	128	ピット128	1-1-1	火垂	正統年
44	ピット44		新	129	3号柱洞 柱2	1-1-1	火垂	正統年
45	ピット45		新	130	1号柱洞 柱8	1-1-1	火垂	正統年
46	ピット46		新	131	2号柱洞 柱7	1-1-1	火垂	正統年
47	4号柱洞 柱1		新	132	ピット132	1-1-1	火垂	正統年
48	4号柱洞 柱2		新	133	ピット133	1-1-1	火垂	正統年
49	ピット49		新	134	ピット134	1-1-1	火垂	正統年
50	ピット50		新	135	火垂	正統年		
51	6号柱洞 柱3		新	136	ピット136	1-1-1	火垂	正統年
52	ピット52		新	137	ピット137	1-1-1	火垂	正統年
53	ピット53		新	138	ピット138	1-1-1	火垂	正統年
54	3号柱洞 柱2		新	139	ピット139	1-1-1	火垂	正統年
55	3号柱洞 柱3		新	140	火垂	正統年		
56	ピット55		新	141	2号柱洞 柱1	1-1-1	火垂	正統年
57	1号柱洞 柱21		新	142	ピット142	1-1-1	火垂	正統年
58	1号柱洞 柱14		新	143	ピット143	1-1-1	火垂	正統年
59	ピット59		新	144	ピット144	1-1-1	火垂	正統年
60	ピット60		新	145	ピット145	1-1-1	火垂	正統年
61	ピット61		新	146	ピット146	1-1-1	火垂	正統年
62	ピット62		新	147	1号柱洞 柱13	1-1-1	火垂	正統年
63	1号柱洞 柱1-13	柱4+柱持枝	新	148	1号柱洞 柱18	1-1-1	火垂	正統年
64	2号柱洞 柱5		新	149	3号柱洞 柱27	1-1-1	火垂	正統年
65	3号柱洞 柱2		新	150	1号柱洞 柱30	1-1-1	火垂	正統年
66	ピット66		新	151	7号柱洞 柱2	1-1-1	火垂	正統年
67	ピット67		新	152	3号柱洞 柱14	1-1-1	火垂	正統年
68	ピット68		新	153	1号柱洞 柱14	1-1-1	火垂	正統年
69	1号柱洞 柱6		新	154	ピット154	1-1-1	火垂	正統年
70	4号柱洞 柱4		新	155	ピット155	1-1-1	火垂	正統年
71	ピット71		新	156	ピット156	1-1-1	火垂	正統年
72	ピット72		新	157	ピット157	1-1-1	火垂	正統年
73	4号柱洞 柱5		新	158	ピット158	1-1-1	火垂	正統年
74	ピット74		新	159	ピット159	1-1-1	火垂	正統年
75	1号柱洞 柱2		新	160	ピット160	1-1-1	火垂	正統年
76	ピット76	4号調査石側方?	新	161	ピット161	1-1-1	火垂	正統年
77	ピット77		新	162	ピット162	1-1-1	火垂	正統年
78	ピット78		新	163	火垂	正統年		
79	ピット79		新	164	火垂	正統年		
80	4号柱洞 柱1		新	165	ピット165	1-1-1	火垂	正統年
81	火垂	火垂不備	新	166	ピット166	1-1-1	火垂	正統年
82	3号柱洞 柱1		新	167	ピット167	1-1-1	火垂	正統年
83	ピット83		新	168	ピット168	1-1-1	火垂	正統年
84	4号柱洞 柱2		新	169	5号柱洞 柱3	1-1-1	火垂	正統年
85	ピット85		新	170	ピット170	1-1-1	火垂	正統年

表10 武家屋敷地区第7地点遺構名称対照表 (2)
Tab.10 List of the strubtual remains name which are collated (2)

現場名稱	確定名稱	備考	時期	現場名稱	確定名稱	備考	時期
1号建物	1号建物		Ⅲ	1号土坑	1号土坑		IV
2号建物	2号建物		Ⅲ	2号土坑	2号土坑		Ⅲ
なし	3号建物	個別ビット番号	Ⅲ	3号土坑	3号土坑		Ⅲ
なし	4号建物	個別ビット番号	Ⅲ	4号土坑	4号土坑		Ⅱ
なし	5号建物	個別ビット番号	I	5号土坑	5号土坑		IV
なし	6号柱列	個別ビット番号	Ⅲ	6号土坑	6号土坑		Ⅲ
なし	7号柱列	個別ビット番号	Ⅲ	7号土坑	7号土坑		Ⅲ
なし	8号柱列	個別ビット番号	Ⅲ	8号土坑	8号土坑		Ⅲ
なし	9号柱列	個別ビット番号	Ⅲ	9号土坑	13号土坑と一連?		I
なし	10号柱列	個別ビット番号	Ⅲ	10号土坑	欠番		-
なし	11号柱列	個別ビット番号	Ⅲ	11号土坑	11号土坑		Ⅲ
なし	12号柱列	個別ビット番号	Ⅲ	12号土坑	12号土坑		Ⅲ
なし	13号柱列	個別ビット番号	II	13号土坑	13号土坑		I
なし	14号柱列	個別ビット番号	I - II	14号土坑	14号土坑		I
1号構	1号構		IV	15号土坑	15号土坑		II
2号構	2号構		III	16号土坑	16号土坑		II
3号構	3号構		III	17号土坑	17号土坑		III
4号構	4号構		II	18号土坑	18号土坑		II
5号構	5号構		II	19号土坑	19号土坑		II
6号構	6号構		III	20号土坑	20号土坑	埋土は3a層と一連	II
7号構	7号構		III	21号土坑	21号土坑		II
8号構	8号構		II	22号土坑	22号土坑		II
9号構	9号構		II	23号土坑	23号土坑		II
10号構	10号構		II	24号土坑	24号土坑		II
11号構	11号構		IV	25号土坑	25号土坑		I
12号構	12号構		I	26号土坑	26号土坑		I
13号構	13号構		II	27号土坑	27号土坑		II
14号構	14号構		III	28号土坑	28号土坑		II
15号構	15号構		II	29号土坑	29号土坑		II
16号構	16号構		II	30号土坑	30号土坑		I
17号構	17号構		II	31号土坑	31号土坑	南壁セクションのみ	I
18号構	18号構		III	32号土坑	32号土坑	南壁セクションのみ	II
19号構	19号構		III	ピット204	33号土坑	範文	
20号構	欠番	22号構と混同	-	1号井戸	1号井戸		II
21号構	21号構		II	2号井戸	2号井戸		III
22号構	22号構		II	3号井戸	3号井戸		III
23号構	23号構	16号構と一連?	II	4号井戸	4号井戸		II
24号構	24号構		I	1号池	1号造佛		II
25号構	25号構		I	2号池	2号造佛		II
26号構	26号構	18号構と一連?	III	1号石敷	池状遺構	新古2段階に区分	II - III
27号構	27号構		II	2号石敷	石窓遺構		III
28号構	28号構		I	3号石敷	梯壇設置構		III
29号構	29号構		I	4号石敷	梯壇設置構		III
30号構	30号構		I	1号石列	1号石列		IV
31号構	31号構		II	2号石列	筑状遺構		IV
32号構	32号構		I				
33号構	33号構		I				

4. 検出遺構

前述した各期ごとに、検出遺構を以下に報告していく。

各期の最初に遺構配置図を示した。Ⅰ期とⅣ期については、遺構配置図は1枚にまとめたが、Ⅱ期とⅢ期については、遺構配置図を2つに分けて作成している。このⅡ期とⅢ期は、時期的に新旧2段階に区分できる訳ではない。1枚で図示しようとすると、切り合が多いことなどから、煩雑で判り難い図面となることから、2枚に分離したものである。その際、比較的古い遺構と新しい遺構に分けて図示したが、それそれが新旧の段階差を示すものではない。あくまでも、判りやすく図示するための、便宜的な措置である。本来は、2枚の遺構配置図を合わせたのが、Ⅱ期・Ⅲ期の遺構配置図となるものと考えていただきたい。

検出遺構の個々の報告にあたっては、重なり合う遺構を分離して、別々に図面を提示すると、膨大な紙幅が必要となる。そのため、区域ごとにまとめて平面図を提示する。平面図は、おむね調査区北東部→北西部→南東部→南西部の順に提示した。ただし、当該期の遺構の多寡によって、まとめて提示している場合もある。断面図は、直前の平面図と対応する形で、平面図に統けて掲載している。

各時期の状況が把握しやすいように、前節の説明と重複する部分もあるが、全体的な配置状況を各時期の最初に記述する。その後に、個々の遺構について記載する。遺構の記述は、遺構の種類ごとにまとめ、遺構番号順とした。平面図の掲載順序とは異なるが、平面図に合わせて配列しようとすると、逆に煩雑になると思われるところから、遺構の種類ごとにまとめて記載することとした。1号遺構・2号遺構・池状遺構などの大規模な遺構を最初にし、次いで建物跡・柱列・溝・井戸・土坑・その他の遺構の順序を基本とした。写真図版も、記載順序と同様に配置したが、配列の便宜によって、一部変更した部分もある。

川内地区の調査においては、整地層や古い遺構の埋土に、新たな遺構が造られていた場合、遺構確認が難しい部分も多い。そのため、必ずしも全ての遺構を認識できているか、小確実な場合もある。建物や柱列などで、当然柱穴が想定されるにもかかわらず検出されていない場合には、本来存在しないのか、検出できていないのか、両方の可能性がある。個々の遺構の報告において逐一記載しないが、常に両方の可能性が想定される。

先述したとおり、今回の調査では、遺構の掘り込み面を基準として時期区分した。しかし、それらの基準となる地層が調査区の全域に存在する訳ではなく、それらの地層との関係が判明しない遺構も多い。遺構の検出が難しく、基本層序との関係が充分確認できなかった場合も多い。特に、2層下部の上面か、それとも2層下部の下面からの掘り込みであるか、判別が難しい事例が多数存在した。そのため、所属時期が不確定であったり、不明とせざるを得ない遺構も存在する。主要な遺構については各期に区分したが、その根拠や、他の時期に動く可能性が残る場合などは、個別の遺構の項目で記載した。個別のビットなどでは、所属時期が確定できず、複数時期にまたがる可能性が残る場合が多数ある。それらについては、可能性のある全ての時期の平面図に記載した。

掘立柱の建物・柱列については、柱材が残存している場合には、柱の形状は判明し易い。今回の調査においては、柱痕跡を検出することは全般に難しく、柱材が残存していない場合には、柱形状はほとんど判明していない。柱形状を判別できなかった場合には、特に形状を記載していない。柱の大きさについては、丸柱では径、角柱では一辺の長さとなるが、形状がはっきりしないものも含めて、全て太さとして記載した。

遺構の方向は、真北からの方向を、0.5度きぎみで記載した。その際、比較が行いやすいように、東西方向に延びる遺構である場合にも、直交する方向に直し、北からの傾きとして示している場合もある。

出土遺物の詳細は第2～4分冊で報告するので、遺構の報告においては、詳細に述べることはしない。まとまって出土している場合や、時期決定に関係するような遺物、その他特徴的なことを中心に記載する。

(1) 江戸時代以前の遺構（図26、図版12）

今回の調査地点では、江戸時代以降の遺構が圧倒的多数を占める。それより古い時期の遺構は、縄文時代の陥し穴と考えられる33号土坑が、1基発見されただけである。出土遺物も、江戸時代以降のものが圧倒的多数を占め、それより古いものは、縄文土器2点、須恵器1点、古代の瓦1点、石器2点が出土しているだけである。これらの遺物は、江戸時代以降の地層・遺構から出土しており、本来の位置を保ったものではない。

二の丸北方武家屋敷地区では、いくつかの地点で、江戸時代以前の遺物が出土している。第4地点では、江戸時代以前に遡る自然の沢状の落ち込みが検出され、その埋土最上部から、縄文時代中期前葉、弥生時代前期後半から中期中頃にかけての、縄文土器・弥生土器と石器が出土している（年報13）。縄文土器・弥生土器104点、石器374点と、ややまとまとった数が出土しているが、沢状の落ち込みの埋土最上部から、散漫な分布状態で出土しており、周囲からの流れ込んだものである可能性が高い。同地点では、古代の瓦3点や須恵器1点も出土している。また、武家屋敷地区第8地点（2002年度調査）では、石器が2点出土している。武家屋敷地区第9地点（2003年度調査）では、縄文土器1点と古代の土師器1点が出土している。

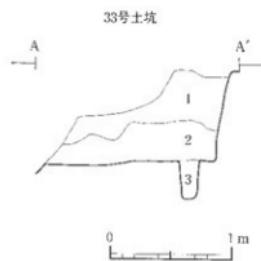
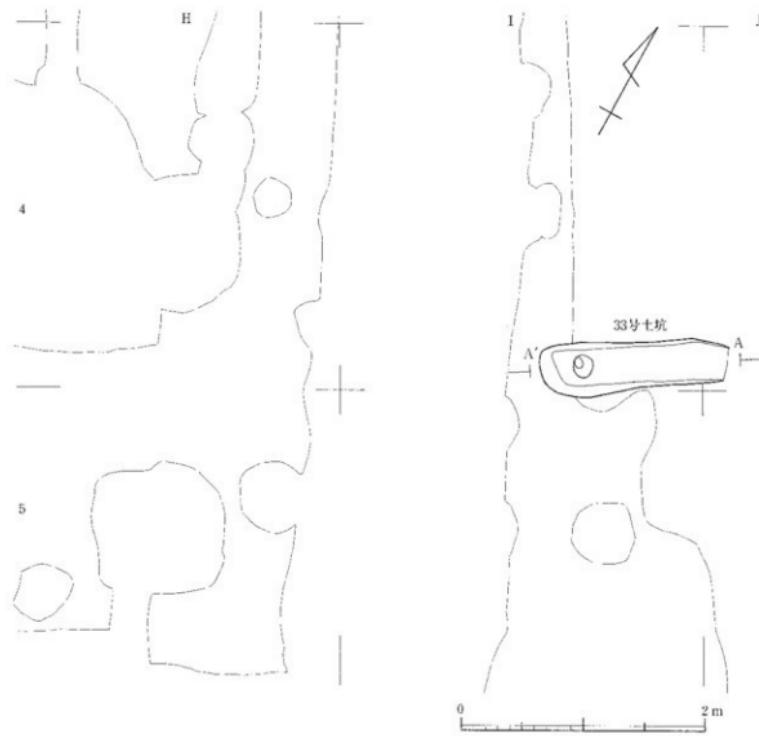
千賀沢を渡った二の丸地区でも、江戸時代以前の遺構や遺物が発見されている。第4地点では石器5点、縄文土器1点が出土している（年報5）。第6地点では、断面の観察だけなので詳細は不明ながら、底面が焼けた横穴状の遺構が発見され、窯跡の可能性も指摘されている。ここからは、ロクロ成形の土師器甕が1点出土しており、平安時代のものと考えられる（年報3）。

このように、川内地区では、千賀沢をはさんだ南北両側において、縄文時代や弥生時代、あるいは古代の遺構や遺物が、散発的ではあるが発見されてきた。今回検出された陥し穴と考えられる土坑は、遺物が伴っていないことから時期を確定することはできないが、形態的特徴から縄文時代の陥し穴の可能性が高いと考えた。縄文時代の陥し穴と断定することはできないが、本地点では縄文土器や石器が出土していることから、本地点やその周辺に、縄文時代の何らかの活動領域が存在したことは間違いないものと推測される。

【33号土坑】（図26、図版12）

I・J-4・5区の地山面で検出された。東側は擾乱によって破壊されている。残存部分の形態から、本来は東西に長い長方形形状の平面形と推定される。長軸方向はN-58°-Eである。東西の残存部分の長さは160cm。幅は上幅で48cm、底面の幅は28cm程度である。深さは、76cmを測る。壁の傾斜は少なく、垂直に近い急傾斜で掘られている。底面の西側には、直径18cm、深さ32cmの円形の小ピットが1基認められる。埋土の上半部には、ブロック状の土を多く含み、押め戻されている可能性がある。この点は、陥し穴とするには、やや疑問が残る部分である。遺物は出土しておらず、遺物から時期を特定することはできない。

東側が残存していないため、平面形には明確ではないところが残るが、細長い形態になるものと思われる。このような平面形態や、深く急傾斜に掘られている点、底面に小ピットが存在するなどの特徴から、細長い形状の陥し穴である可能性が高いものと考え、縄文時代に所属する可能性が高いと考えた。



1. 10YR4/2灰青褐色 シート・粒状・しまり中・黄褐色粘土ブロックをまだらに多く含む。
 2. 10YR4/4褐色 粘土質シルト・粘土質シルト・しまり強・黄褐色の粘土ブロックをわずかに含む。
 3. 10YR5/4(2)ぶい黄褐色・枯土質シルト・粒状強・しまり強・ $\phi 10\text{mm}$ 程度の灰化物をわずかに含む。地山和源と含まれる黄褐色粘土ブロックを多く含む。

図26 武家屋敷地区第7地点江戸時代以前の遺構
Fig.26 Features belonging to before Edo period

(2) 江戸時代以降の遺構

① I期の遺構（図27～32、図版13～17）

I期は、基本層4層より下位から掘り込まれている遺構であるが、4層の分布範囲が調査区東南部の極めて狭い範囲に限られているため、4層との上下関係が判明する遺構はわずかしかない。以下のI期の遺構の記載で、4層との関係を特に記していないものは、4層が分布しないため関係が判らない場合である。続くII期の開始時期との関係から、I期はおおむね17世紀末までと考えられる。そのため、出土遺物から17世紀代に遡る可能性が高い遺構については、I期に含めている。

I期の遺構は、溝が展開する以外、全体に遺構密度は低いと言える。

調査区東よりのH・1列には、規模の大きな12号溝が南北方向に延びている。12号溝は、17世紀でも中業以降の可能性が高い。この12号溝と直交する小規模な溝が、12号溝の西側に展開し、同時に存在した可能性も考えられる。これらは、屋敷地を区画する施設の可能性が考えられるであろう。26号土坑も、これらの溝と一緒に施設となる可能性がある。これら以外の遺構はあまり多くない。

D・E-3～5区の14号土坑は、出土遺物から17世紀初頭に遡るもので、今回の検出された江戸時代の遺構では、最も古いものである。17世紀でも古い段階に確実に遡る遺構は、今回の調査では、この14号土坑だけである。調査区西端のB-7・8区で検出された9号土坑・13号土坑は、一連の遺構となる可能性があり、出土遺物から17世紀後半代と考えられる。調査区南端のG・H-12区には30号土坑がある。4層下面から掘り込んでおりI期に所属することは確実であるが、遺物が出土していないため、細かな時期は判らない。このように、I期には規模の大きな土坑が存在することが特徴の一つと言えるが、それらの細かな時期は一致せず、特に集中して造られている区域がある訳ではない。

E・F-8・9区には、5号建物と25号土坑が存在する。これらは、切り合い関係などからI期の可能性が高いと考えたが、更に新しい時期に下る可能性も残っている。

D・E-7～9区で検出された8号柱列と9号柱列は、切り合い関係からIII期より遡る可能性が高いが、I期かII期の両方の可能性が考えられる。どちらに所属させるべきか判断に困ったため、I期とII期の両方の平面図に記載している。断面図はI期の中に含めて示した。遺構の報告は、I期の最後に記載することとした。写真図版も、I期の最後に示した。

【5号建物】（図31・32、図版13）

E・F-9区で検出した、掘立柱建物である。後世の削平が激しい場所にあり、掘り込み面は判明しない。後述する25号土坑の傾きと、方向が類似する。このような方向の遺構は、今回の調査区では5号建物と25号土坑以外には見られないことから、両者は関連する遺構である可能性が高いと考えられる。25号土坑は、多数のピットが重なりあうこの区域の中でも、最も古い遺構であり、検出レベルも低い事から、I期に遡る可能性が考えられた。この25号土坑との関係で、5号建物もI期に含めた。ただし、推定を重ねたものであり、II期以降に下る可能性も残っている。

北辺と東辺が検出されただけである。北辺では、6尺3寸を1間とした場合の半間の間隔で、柱穴が3基検出された（注2・3・4）。柱1の西側には、25号土坑が存在するが、寸法はそろわず、直接つながるものか否か判らない。東辺は、半間の間隔で柱が1基（注1）南側に延びる。これより南側は搅乱が激しく、統一是判らない。仙台城の二の丸地区や二の丸北方武家屋敷地区におけるこれまでの調査では、江戸時代の中で柱間寸法が、6尺5寸から6尺3寸へ変化することが確認されている。6尺5寸は、元和6年（1620）の西屋敷造営まで使われていたことが確実である（年報9）。6尺3寸は、17世紀末の元禄年間より前から使われたことが判っているが、どこまで遡るかは確定できていない（年報18）。また、寛永4年（1627）に造営が開始された、伊達政宗の隠居城である仙台市若林区の若林城では、6尺5寸が使用されていたと考えられる（仙台市教育委員会2005）。

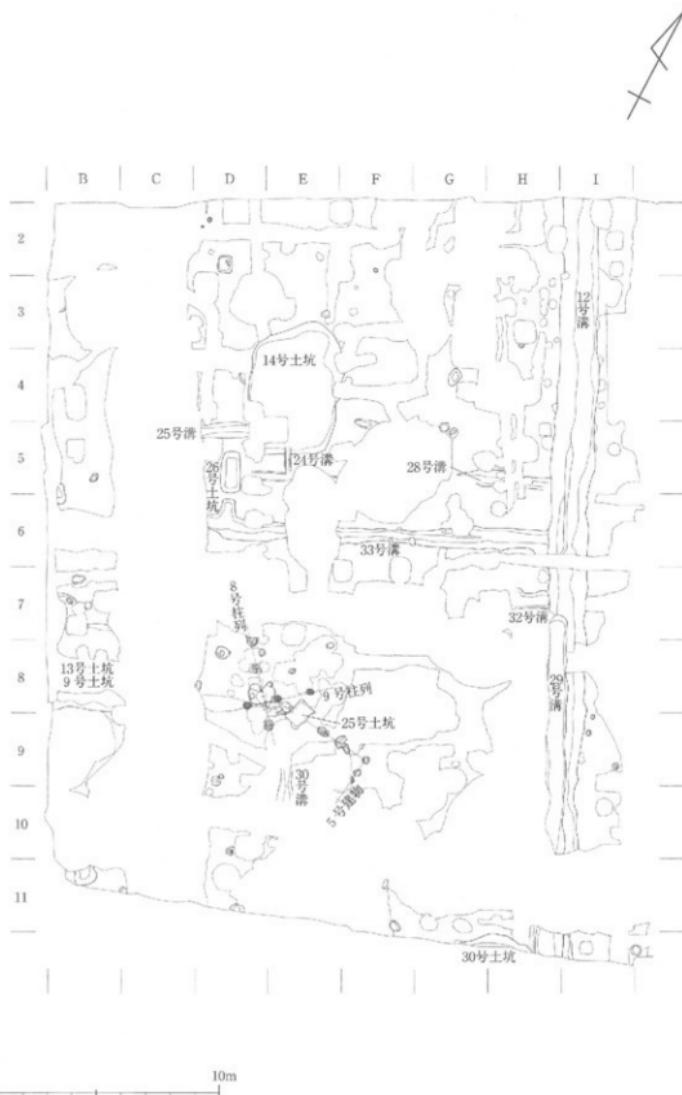


图27 武家屋敷地区第7地点Ⅰ期造構配置図
Fig.27 Distribution of features belonging to phase I at BK7

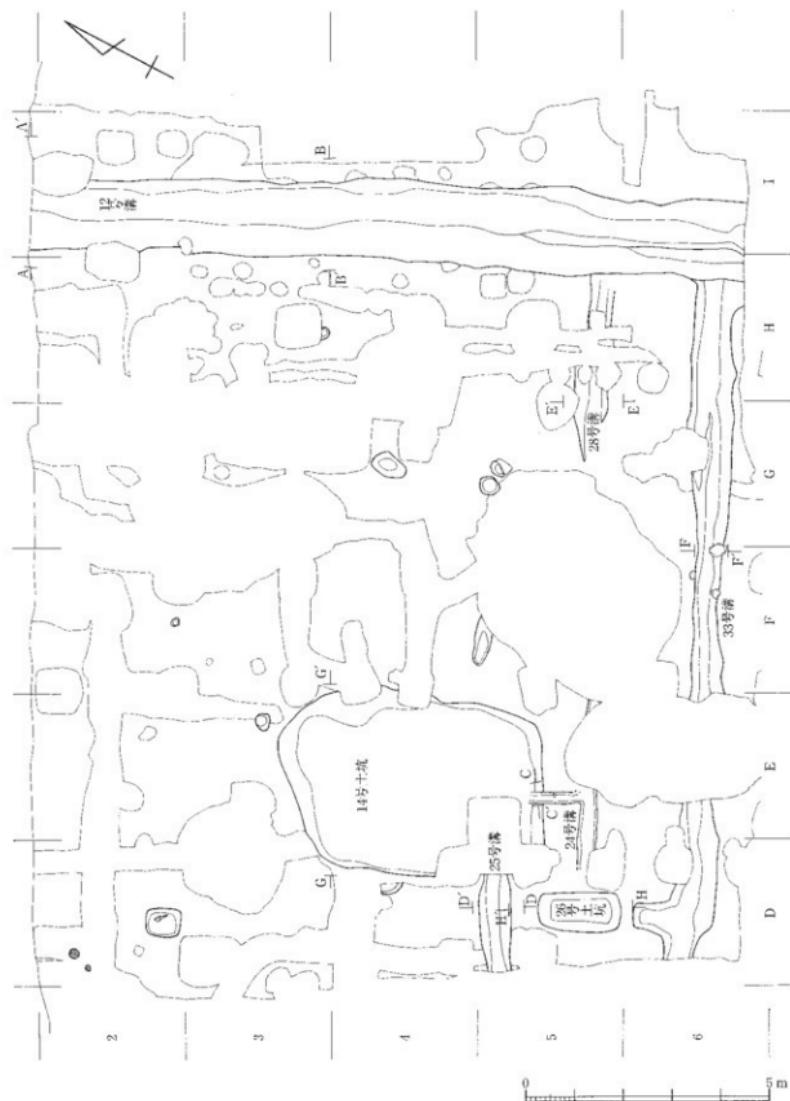


図28 武家屋敷地区第7地点Ⅰ期の遺構 (1)
Fig.28 Features belonging to phase I at BK7 (1)

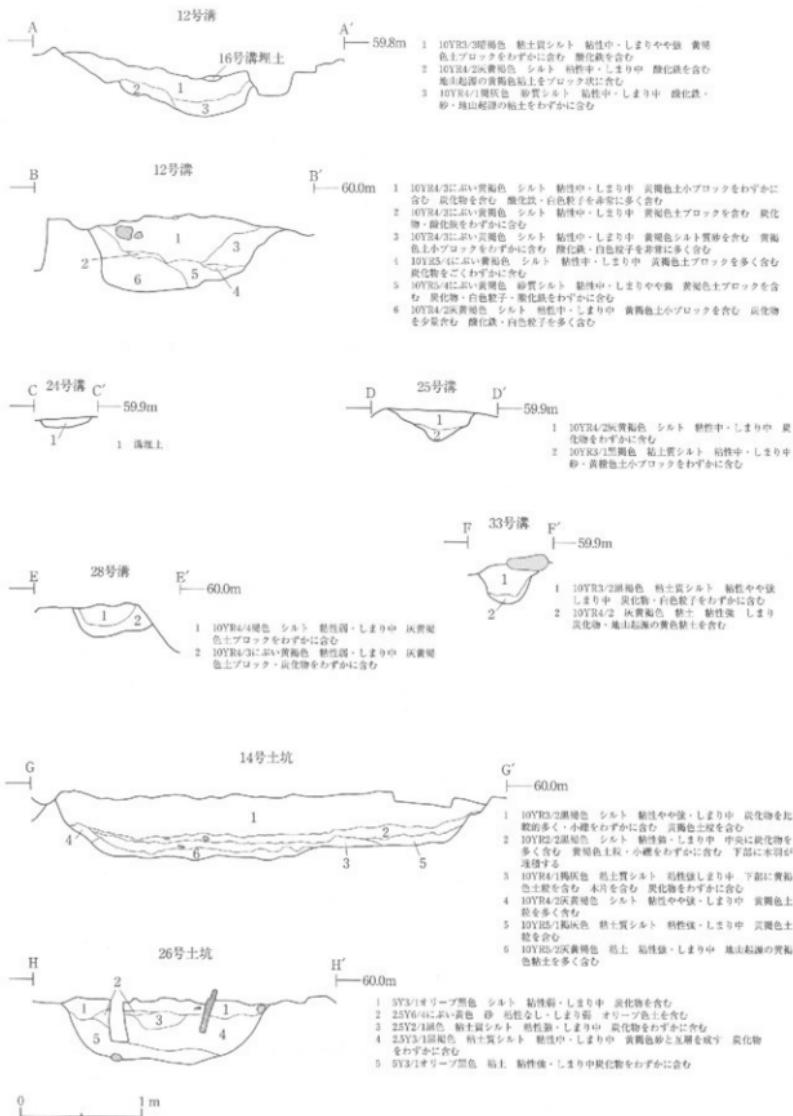


図29 武家屋敷地区第7地点Ⅰ期の遺構（2）
Fig.29 Features belonging to phase I at BK7

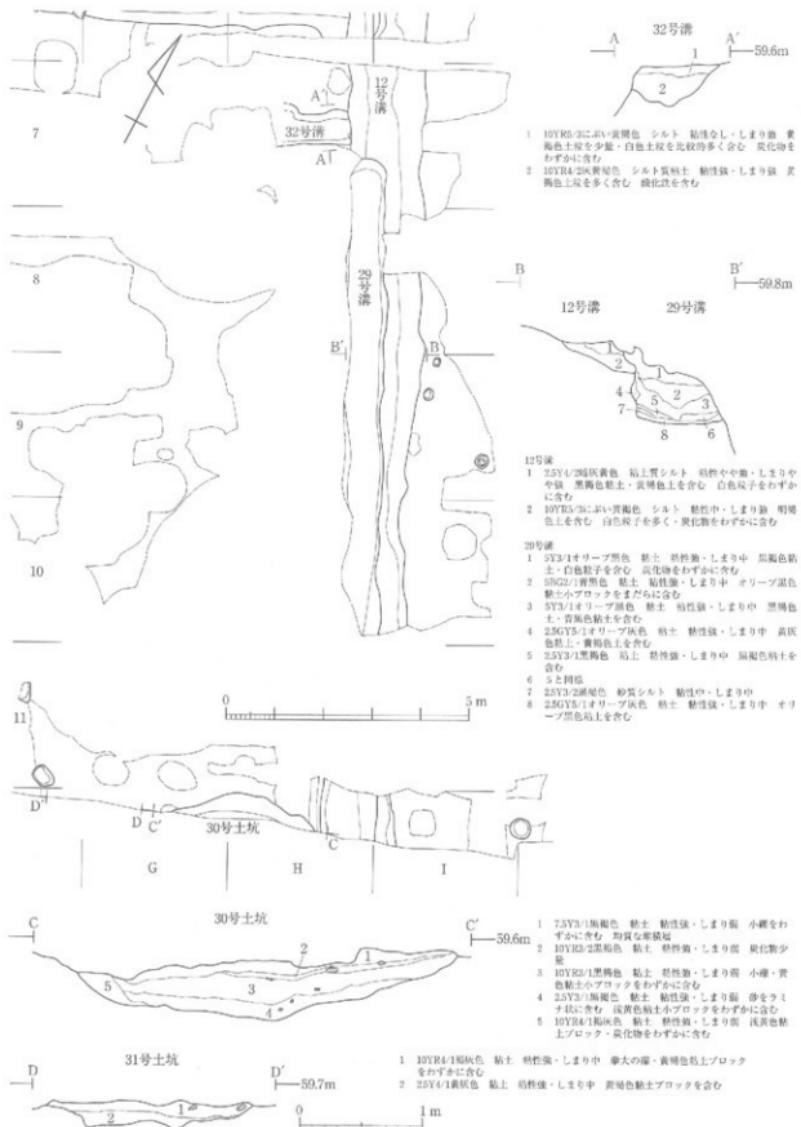


図30 武家屋敷地区第7地点1期の遺構(3)
Fig.30 Features belonging to phase I at BK7 (3)



図31 武家屋敷地区第7地点Ⅰ期の遺構(4)
Fig.31 Features belonging to phase I at BK7 (4)

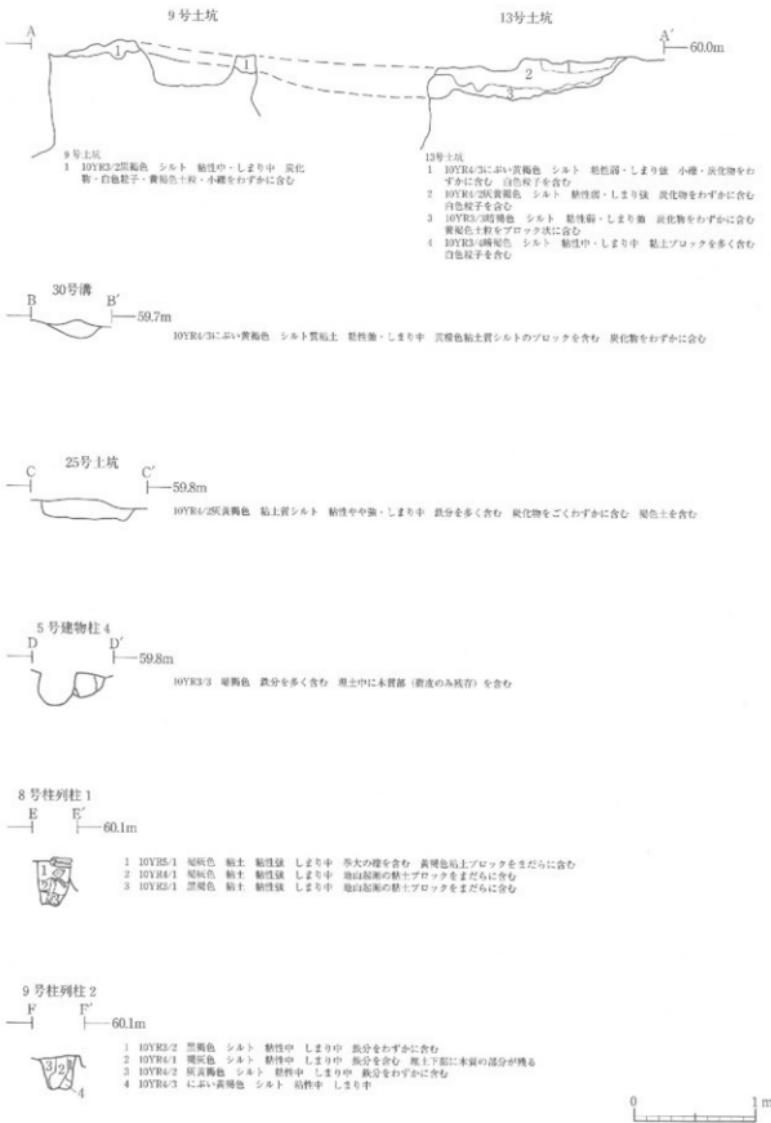


図32 武家屋敷地区第7地点Ⅰ期の遺構(5)
Fig.32 Features belonging to phase I at BK7 (5)

これらの知見から、寛永4年（1627）までは確実に6尺5寸が使われ、遅くとも17世紀末までに6尺3寸へ変化していたと考えられる。したがって、5号建物がⅠ期に所属するとしても、17世紀前葉より古い時期には遡らないものと考えられる。

南北方向の柱筋の方向は、N-5°-Eとなる。柱4がピット170に切られている。柱穴の形状は、柱3が不整形を呈する以外は、直徑25~30cm程度の、ほぼ円形である。深さは20cm程度である。柱痕跡は確認できていないが、柱4では本質部の痕跡が確認されており、これが柱の痕跡であるとすると、太さは17cmほどとなる。いずれの柱穴からも、遺物は出土していない。

【12号溝】（図28・29・30、図版13・14）

H・I列を南北に延びる素掘りの溝で、南北とも調査区外へ延びる。途中、攪乱で途切れる部分もあるが、31m分を検出した。4層との関係ははつきりしないが、Ⅱ期の2号遺構より古い29号溝に切られており、さらに遡ることは間違いない。出土遺物は磁器・陶器・土師質土器・瓦をはじめ、各種の遺物が出土しているが、量は多くない。陶磁器は、17世紀代に通る。遺物量がさほど多くないため、確実に時期を限定することは難しいが、店津や志野・織部のような、17世紀でも初頭や前葉の資料は含まれていないので、中葉以降と考えられる。ただしH-12区では、大堀相馬庵窯など18世紀代に下る遺物が、比較的まとまって出土している。これらは、他の区域と明らかに様相が異なっており、混入の可能性が高い。II-12区では、12号溝埋土に掘り込む形で18世紀代の遺構が造られていたにもかかわらず、検出できずに合わせて12号溝埋土として調査してしまった可能性が高いものと考えられる。

ほぼ一直線に伸びる溝で、方向はN-26°-Wである。上幅140~165cm、下幅20~85cm、深さ60~70cmで、断面形状は船底形を呈する。底面レベルはほぼ平坦で大きな変化は無いが、調査区北壁際と比べると、南壁際では10cm以上低くなっている。北から南へ流れていたものと考えて良いであろう。28号溝、33号溝、32号溝が合流していた可能性がある。いずれの溝より底面レベルは12号溝が低く、12号溝に流れ込んでいたと考えられる。12号溝とそれと一緒に存在した可能性のある溝の埋土は、いずれも自然堆積と考えられるが、ラミナ状の堆積はほとんど確認できない。

【24号溝】（図28・29、図版14）

D・E-5区で検出された素掘りの溝である。24号溝の東側の延長上には28号溝が位置している。いずれも西から東に向かって流れていたことが推測され、東西方向の向きもほぼ同じであることから、一連の溝であった可能性も考えられることからⅠ期に含めた。

Ⅰ期の14号上坑を切っている。E-5区で東西方向から北に分岐する。北端はⅢ期の18号溝に、西端はⅡ期の26号溝に、東端は攪乱によってそれぞれ切られており、その先は確認できなかった。さらに、Ⅱ期の15号上坑によって一部切られている箇所もあり、断片的な検出状況である。東西部分は長さ3.5mを検出し、南北部分は1mを検出した。溝の上幅は24~40cm、下幅12~24cm、深さ8cm前後と浅い。東西部分の方向はN-65°-E、南北部分の方向はN-28°-Wである。底面のレベルは東で若干低くなっている。北側、西側から東側に流れていた可能性が考えられる。遺物は出土していない。

【25号溝】（図28・29、図版14）

D-5区で検出された素掘りの溝で、東西方向に延びている。Ⅲ期の7号溝を切っており、東西両端は攪乱によって破壊されているため、統一是不明である。残っていた長さは2mである。上幅48~64cm、下幅20~32cm、深さ約24cm、断面形状は船底形を呈する。方向はN-59°-Eである。遺物は陶器と土師質土器がごくわずか出土している。陶器には呉器手碗が含まれる。切り合い関係から比較的遅い時期と考えられることと、溝の方向が25号溝や33号溝などと平行し、関連する遺構である可能性が考えられるため、Ⅰ期に含めた。

【28号溝】(図28・29、図版14)

G・II-5区で検出された東西方向に延びる素掘りの溝である。2層の下位から掘り込まれているが、2層下部以下の基本層が存在しない場所であるため、掘り込み面は不明である。II期の遺構群に切られ、12号溝に合流する33号溝などと平行し、同様の溝である可能性が高いと考え、I期に含めた。

東端は擾乱によって破壊されており、12号溝のところまでは残っていない。西端はG-5区で途切れてしまい、その先は検出されなかった。検出できた長さは3.8mである。II期の8号溝・23号溝、III期の1号建物・2号建物などに切られている。溝の上幅44~68cm、下幅16~28cm、深さ24cm程度で、断面形状は逆台形を呈する。方向はN-67°-Eである。底面のレベルは、他の遺構に切られている箇所があるため明確ではないが、東側で若干低くなっている、東に向かって流れていた可能性が考えられる。遺物は、瓦の破片が1点出土しているだけで、年代が判明する遺物は出土していない。28号溝の西側の延長上には24号溝が位置している。いずれも西から東に向かって流れていたことが推測され、東西方向の向きもほぼ同じであることから、一連の溝であった可能性も考えられる。12号溝との関係は、28号溝の東端が壊されているため明らかではない。南の6列を東西に延び、12号溝に合流する33号溝とはほぼ平行していることから、同じように12号溝に直交し合流する溝である可能性が高いと考えられる。12号溝の東側に28号溝の統きが検出されることは、28号溝と12号溝が合流していた可能性が高いことを示すものであろう。

【29号溝】(図30、図版14・15)

II・I-7~12区で検出した、南北方向に延びる素掘りの溝である。4層が分布しない区域にあるため、掘り込み面からは、I期かII期の区分はできない。12号溝の西端に重なるように造られている。7列より北側には延びないが、12号溝が埋没した後、ほぼ同じ場所で造り替えられた可能性が高いため、12号溝と同じI期に所属させた。時期の判明するような遺物は出土しておらず、II期に下る可能性も残っている。その場合、II期の2号遺構に切られていることから、これよりは古くなる。

西側のほとんどが、II期の2号遺構に壊されている。11列では、擾乱によって大きく破壊されている。北側は7列で途切れ、南側は調査区外へ延びている。検出した長さは、11mである。ほぼ真っ直ぐに延びており、方向は、N-27°-Wで、12号溝とはほぼ同じである。底面レベルは、南側がわずかに低いことと、北側が途切れることから、北から南へ流れていると推定される。上幅110cm前後、下幅60~70cm、深さ70~80cmで、壁は急激に立ち上がり、断面形状は箱形に近い。北端の壊も急に立ち上がる。埋土は、黒褐色土を主体とし、下部では粘土や砂がラミナ状に堆積している。水流のある状態で、自然に堆積したものと考えられる。遺物は磁器・陶器・土師質土器・瓦がわずかに出土しているが、細かな特徴が判るような資料はない。これら以外には、木製品や木羽がやや多く出土している。

【30号溝】(図31・32、図版15)

E-9・10区で検出した、南北方向に延びる素掘りの溝である。北側は擾乱で破壊され、南側はII期の27号溝によって切られており、長さ1.4mを検出できただけである。II期の27号溝は切り合い関係から、II期の中でもかなり古い時期になることが考えられている。30号溝はそれよりさらに古いため、I期に遡る可能性が高いものと考えた。ただし、II期に下る可能性も残っており、その場合はII期でも最も古い時期になるであろう。上幅45~65cm、下幅10~25cm、深さ15cmで、断面形状は浅い船底状を呈する。方向はN-28°-Wである。遺物は出土していない。

【32号溝】(図30、図版15)

II-7区で検出された、東西方向に延びる素掘りの溝である。西側は擾乱によって破壊されている。東側は12号溝にぶつかり、南側はII期の2号遺構によって切られている。残存範囲はごく限られており、長さ1.3m分を検出ただけである。上幅64~88cm、下幅36~44cm、深さ30cm程度で、方向はN-62°-Eである。断面形状

は、船底状を呈する。12号溝との前後関係は、調査時には充分確認できなかった。当初は12号溝に切られると考えていたが、同時存在の可能性も残っている。12号溝の東側には延びていないようであり、この点は同時存在の可能性が高いことを示す。いずれにせよ、12号溝と同時か、あるいは古いものであることからⅠ期に含めた。遺物は出土していない。

【33号溝】(図28・29、図版15)

D～H-6区で検出された。2層下部の下位から掘り込んでいるが、4層は分布しない区域であるため、4層との関係は不明である。東西方向に延びる素振りの溝で、D-6区では一部北側に65cmほど突き出す部分が確認された。突き出した場所の北側には、26号土坑が存在し、関連する施設であった可能性が考えられる。西端は擾乱によって壊されており、東端は12号溝に連結するものと考えられる。東西の長さ14m分を検出した。Ⅲ期の3号溝・26号溝、Ⅱ期の15号土坑に切られており、擾乱によって部分的に破壊されている箇所もある。12号溝と一連の溝と考えられることから、12号溝と同様にⅠ期に含めた。ほぼ直線的に延びるが、D-6区では北側に若干屈曲するようであるが、すぐ西側が擾乱で破壊されており判然としない。上幅48～96cm、下幅16～48cm、深さは30cm前後で、方向はN-65°～Eである。底面のレベルは、東側が西側より30cm程度低くなっている。西から東に流れていたのではないかと推測される。33号溝として取り上げた遺物はない。ただし、調査時の遺物の取り上げに際して、混亂があった可能性がある。33号溝が12号溝と一連の溝であったため、両者を分離せずに、12号溝として遺物を取り上げてしまった可能性が排除できない。そのため、12号溝出土とした遺物に、33号溝出土の遺物が含まれる可能性が残っている。

【9号土坑】(図31・32、図版16)

B-8区で検出された土坑である。北側、東側、西側が擾乱によって破壊されており、南側の一部もⅣ期の1号土坑に切られているため、全体の形状は不明である。残存部分の大きさは、東西方向で300cm、南北方向で90cm、深さは15cmである。1号土坑に切られるため判然としないが、南辺の形状は、ほぼ直線的に延びるようである。検出面の標高や埋土の様相、出土遺物から見て、擾乱を挟んで北側に隣接する13号土坑と一連の土坑であった可能性が高い。掘り込みは浅い窪み状を呈し、壁はなだらかに立ち上がる。埋土からは磁器、陶器、土師質土器や瓦、木製品などが出土しているが、遺物量はいずれも少ない。出土遺物で細かな時期を確定できるものはないが、17世紀後半代に遡る可能性がある。一連の土坑であった可能性が高い13号土坑が、17世紀代に遡ると考えられることから、Ⅰ期の遺構であると判断した。

【13号土坑】(図31・32、図版16)

B-7区で検出された土坑である。東側、南側、西側が擾乱によって破壊されており、北側部分のみが残存しているため、全体の形状や規模は不明である。9号土坑の項目でも述べたように、9号土坑と一連の土坑である可能性がある。残存部の大きさは東西方向で240cm、南北方向で70cm、深さは30cmである。北辺も擾乱で破壊されており、一部が残るにすぎないが、直線状を呈している。9号土坑の南辺も直線状を呈しており、両者が一連の土坑であった場合、全体として方形を基調とする平面形状となるものと推定される。規模は、東西方向300cm以上、南北方向360cm程度となり、かなり大規模な土坑であったと考えられる。9号土坑と同様、掘り込みは浅い窪み状を呈し、壁はなだらかに立ち上がる。埋土は3層に分かれる。遺物はさほど多くないが、各種の遺物が出土している。磁器では碗・皿類、陶器では唐津の刷毛目大鉢や呉器手碗などが出土しており、17世紀後半代に遡るものと考えられる。古銭が2点出土し、1点は渡来銭であるが、もう1点は寛永通宝(古寛永)である。このことは、当遺構が寛永13年(1636)より遡らないことを示している。瓦類では平瓦・丸瓦類と亀形の掘え物が出土している。その他には、土師質土器、瓦質土器や基石が出土している。出土遺物からⅠ期の遺構であると判断した。

【14号土坑】(図28・29、図版16)

D・E-3～5区で検出された。2層下部の下位から掘り込まれている。14号土坑周辺には4層が分布していないため、4層との関係は不明である。出土遺物から、17世紀代でも早い時期に遡ることは間違いないと考えられることから、Ⅰ期の遺構と判断した。Ⅰ期の24号溝、Ⅲ期の18号溝、26号溝に切られる。搅乱によって部分的に破壊されている箇所があるが、およそ南北方向に長い長方形もしくは不整形を呈するものとみられる。南北約570cm、東西約380cm、深さ約52cmである。規模が大きいことが特徴と言えるが、遺構の性格は判然としない。埋土は6層に分けられ、埋土からは陶器・磁器・土師質土器・瓦質土器や加工木などが、比較的多く出土している。土坑の底部付近では、陶磁器類がやまとめて出土している。しかし、ゴミ穴といえるほどまとめて出土している訳ではない。陶器では、唐津窯向付、志野窯小中皿、瀬戸美濃窯搔鉢、天目碗などがみられ、17世紀代でも初頭に遡るものと考えられる。今回検出された江戸時代の遺構の中では、最も遡る遺構で、当地点が江戸時代初頭から利用されていたことを示すものである。

【25号土坑】(図31・32、図版16)

E-8・9区で検出された土坑である。この周囲には、多数のビットが重なりあっているが、25号土坑は切り合ひ関係から見て、これらの中で最も古い。遺構が複雑に重なる区域のため、掘り込み面は確認できていないが、検出レベルも最も低い。これらの点から、Ⅰ期に遡る可能性が高いものと考えたが、Ⅱ期に下る可能性も残っている。ほぼ長方形を呈し、規模は南北の長さ120cm、東西の幅80cm、深さは16cmである。杭の痕跡と思われる小ビットが、西側に沿って3ヶ所認められた。西辺の傾きはN-15°-Wで、東側の5号建物の方向と近い。遺物は、土師質土器の皿が1点出土しているだけである。

【26号土坑】(図28・29、図版17)

D-5区で検出された。Ⅲ期の26号溝の下面で検出されており、26号溝より古い。南北方向に長い、隅丸の長方形を呈しており、南北170cm、東西80cm、深さ52cmを測る。26号土坑の南側に東西に延びる33号溝には、北側へ突出する部分がある。この突出部分が、26号土坑に対応する位置に設けられている。この点から26号土坑は、33号溝と一緒に、区画の一部を担う遺構である可能性が考えられる。そのため、33号溝と同じくⅠ期にした。26号土坑と33号溝の間に、25cm程の間隔が空いている。埋土は黒色～黒褐色土が主体を占め、場所によっては砂と粘土質シルトがラミナ状に堆積する。流れ込んだ土砂や有機質分、雨水などがたまつた状態の中で堆積したものと考えられる。断面図に見える杭は、上部に存在した26号溝に伴う可能性が高い。陶器や加工木などがわずかに出土しているが、時期が判るような資料はない。

【30号土坑】(図30、図版17)

調査区南端のG・H-12区で検出した土坑で、南側は調査区外へ延びている。4層下面より掘り込んでいることから、Ⅰ期に遡る遺構である。ほとんどが調査区外へ延びるため、平面形状は判然としない。検出した範囲を見る限りでは、円形に近い形状を呈するものと考えられる。南壁際での東西の長さは315cmで、これより大きくなることは確実であろう。同じく南壁際での深さは60cm程度で、さらに深くなる可能性がある。底面をほとんどを覆う下部の埋土は、砂がラミナ状に入るもので、少なくとも下部の埋土は、水流のある中で、自然に堆積したものと考えられる。遺物は出土していない。

【31号土坑】(図30、図版17)

平面精査では検出できなかったが、調査区南壁のセクションの検討の際に確認できたものである。南壁F・G列のセクションで確認したものの、4層下面から掘り込まれていることから、Ⅰ期に遡る。平面形状は不明であるが、南壁セクションでは、上幅173cm、下幅125cm、深さ22cmの逆台形の断面形状を呈する。平面精査を行えていないため、出土遺物はない。

【8号柱列】(図31・32・38、図版17)

8号柱列と次の9号柱列は、先述のようにⅠ期かⅡ期の判断がつかなかった遺構である。便宜的に、Ⅰ期の遺構の最後に記載する。

D・E-7～9区で検出された、北西-南東方向に延びる掘立柱列である。切り合い関係より、Ⅲ期の1号柱列より古いことは確実であるが、より詳しい時期は不明である。そのため、Ⅰ期あるいはⅡ期の遺構とした。8号柱列と次の9号柱列は、ほぼ直交する方向で、両者は近接した時期の所産である可能性が高いものと考えられる。このような方向を示す遺構は、当地点では他にない。

柱穴3基が確認され、柱間寸法は4尺と考えられる。柱1と柱2の間に、もう1基、柱穴が存在していたと推定されるが、1号柱列の柱7と重なるため、これによって壊されてしまったものと考えられる。柱1が1号柱列の柱6によって、柱2が1号柱列の柱8と柱14によって切られている。方向はN-42°-Wである。柱穴は、径45～60cmのほぼ円形を呈すが、方形に近いところもある。深さは35～40cm程度で、掌大から人頭大の石を、柱の脇に詰めるように入れているものもある。柱1では柱材が残存していた。保存状態が良くないので詳細は不明であるが、太さ10cm以下の細い柱であったようである。磁器や瓦がわずかに出土しているが、時期などが判明するような資料はない。

【9号柱列】(図31・32・38、図版17)

D・E-8区で検出された、南西-北東方向に延びる掘立柱列である。柱筋の傾きが、直交する方向に直してN-41.5°-Wとなり、8号柱列とはほぼ同じである。先述のように、両者は近接した時期の所産である可能性が高いものと考えられ、同様にⅠ期あるいはⅡ期の遺構とした。

3基の柱穴が検出されており、柱間寸法は4尺2寸と考えられる。4尺2寸は、1間を6尺3寸とした場合の2間分、すなわち12尺6寸を3等分した寸法である。このような柱間寸法は、1間=6尺3寸が採用されて以降に出現すると考えられる(年報18)。このことから、1間=6尺5寸が使われていた17世紀前葉までは、少なくとも適らないと考えられる。

柱穴はいずれも、径30～35cmのほぼ円形から楕円形を呈し、深さは15～25cm程度である。柱痕跡は、3基とも太さ10cm程度の細いものである。遺物は出土していない。

②II期の遺構（図33～49、図版18～34）

基本層序の2層下部の下位で、4層より上位から掘り込まれている遺構をII期とした。4層の分布範囲が調査区東南部の狭い範囲に限られるため、4層との上下関係が判明する遺構は少ない。以下で、特に4層との関係を記していないのは、4層が分布しないため関係が判らない場合である。

II期は、遺構の重複が多い区域もあり、検出遺構の全体配置を、ひとまとめにして図示することが困難である。そのため先述のように、遺構配図を2つに分けて図示する。しかし両者は、時期的に新旧2段階に区分できる訳ではない。比較的古い遺構と新しい遺構に分けて図33と図34に示したが、それぞれが新旧の段階差を示すものではない。あくまでも、判りやすく図示するための、便宜的な措置である。本来は、2枚の遺構配図を合わせたものが、II期の遺構配図となるものと考えていただきたい。遺構の全体的な配置状況も、2つの配置図を合わせた形で記述する。

4層上面から掘り込んでいるII期の遺構から出土した遺物の年代や、4層出土遺物の様相から、II期の開始はおむね18世紀初頭頃と考えられる。一方、19世紀前葉頃が、III期の下限と考えられる。出土遺物から、この時期に入ると考えられる遺構については、II期に含めている。

II期は、遺構が集中する区域と、遺構が少ない区域とに分かれる。調査区の北東部や南東部では、多数の遺構が存在し、II期を通じて、様々な遺構が造られ続けていたと考えられる。それ以外の区域では、遺構密度は低く、遺構が存在しない時期もあったと推定される。

調査区東端には、22号溝が南北に延びる。区画溝と考えられるI期の12号溝を、東にずらして造り直した可能性を考え、当期に含めたもので、異なる時期に動く可能性も残っている。

調査区北東よりのF～H-2～4区では、多数の土坑が切り合って、次々と造られている。この中の18号土坑は、不整形の土坑で、遺物が比較的まとまって出土していることから、ゴミ穴の可能性がある。18号土坑以外の土坑の性格は明らかではないが、比較的浅く、長方形に近い形態のものが多い。形態の似た土坑が重なることは、性格の類似する土坑が、この区域で繰り返し造られた可能性を示している。これらの土坑が多数造られた後に、小規模な溝が展開する。これらの溝には、屈曲するものや、分岐するものもあり、全てが同時に存在したものではない。これらの溝も、何處か造り替えられたものと考えられる。

この調査区北東部において、切り合い関係から最も新しい4号溝や10号溝は、2層下部の下面から掘り込まれていることが確認でき、II期に遡ることは確実である。一方、切り合い関係から最も古い段階と考えられる22号土坑からは、小片ながら大堀相馬産と考えられる陶器碗が出土しており、18世紀以降であることは間違いないと思われる。22号土坑とは切り合い関係がないため、直接の関係は判らないが、同様に最も古い段階と考えられる23号土坑からは、年代の判る遺物が出土していない。23号土坑を切っている18号土坑は、出土遺物から、18世紀中頃を前後する時期と考えられる。23号土坑は、それより古いことは確定であるが、どこまで遡るかは判らない。このように、23号土坑のみ不確定な部分が残るが、それ以外の一連の土坑や溝は、掘り込み面と切り合い関係から、全てII期に所属することが明らかである。この区域の類似した土坑が、全てII期のものであることから、23号土坑もII期に含まれる可能性が高いものと考えた。

調査区中央に近いE-5～7区には、15号土坑がある。比較的多くの遺物が出土しており、ゴミ穴と考えられる。出土遺物から、18世紀末から19世紀初頭頃の可能性があり、II期でも新しい遺構である。

調査区南東よりには、逆L字状に広がる2号遺構が存在する。大規模なゴミ穴で、膨大な量の各種遺物が出土した。多数の木簡が出土しており、年号を記したものから、享保5年（1720）を前後する頃に使われていたと推定される。木簡の記載内容からは、二の丸地区からゴミが運ばれて捨てられたものと考えられる。2号遺構の下面では、4号井戸が検出された。4号井戸を使用しなくなつてから、さほど時間を空けずに2号遺構が造られた可能性を考え、4号井戸もII期に含めたが、I期に遡る可能性も残っている。

2号遺構の北寄りには1号遺構が隣接し、2号遺構の西側には21号土坑が隣接する。これらからは、2号遺構と類似する遺物が大量に出土している。いずれもゴミ穴として利用されたもので、2号遺構とは同時に使われていたと考えられる。

調査区南東部では、2号遺構などが埋まつた後、3b層によって整地されている。3b層の整地は、ゴミ穴である2号遺構、1号遺構、24号土坑の上部一帯に施されており、廃棄物を大量に含むこれらのゴミ穴の堆上を、覆い隠すようにしている。3b層の整地は、本来平垣に施されたと推測されるが、ゴミ穴内の堆積層が産み、それに伴って3b層も産んだと考えられる。この産んだ部分が、20号土坑である。遺構配置図には20号土坑は記載していないが、他の遺構と重なって表現が難しいため、別に図37に示した。20号土坑の埋土は、基本層3a層が相当する。3a層が堆積した後には、21号溝が造られている。

調査区東南部は、2号遺構の段階より新しい遺構は少なく、上述した20号土坑と21号溝以外には、16号土坑が存在する程度である。しかし、礎石と考えられるピットが、多数存在している（図版34）。列状に川原石を並べたものもある。この区域ではⅢ期にも多数の礎石が存在しているが、Ⅲ期の礎石とは検出レベルが異なる礎石があり、Ⅱ期のある時期に、この区域に礎石建物が存在したことは間違いないと思われる。しかし、確認された礎石の組み合わせは、充分把握できず、建物を復元できなかった。浅い掘り込みに川原石を据えただけのものもあり、石が動かされた場合、確認できなかつたものが存在した可能性もある。

24号土坑の西側の、調査区中央南よりの区域には、27号溝が東西に延び、西端で南に屈曲する。この27号溝は24号土坑に切られている。27号溝の南側には31号溝が逆L字状に屈曲して造られているが、31号溝は27号溝に切られている。この31号溝は、4層上面から掘り込んでいることが確認されており、31号溝や27号溝がⅡ期に下ることは間違いない。27号溝の南側には、28号土坑と29号土坑が並んでいる。27号溝出土の陶磁器は、2号遺構や24号土坑と、基本的に共通するものであった。また、28号土坑と29号土坑、27号溝からは、少數ながら木簡が出土している。これらの点から、いずれも、2号遺構などと近い時期のものと考えられる。

27号溝の北側には、Ⅰ期かⅡ期かの判断がつかなかつた8号柱列と9号柱列が存在するほか、27号土坑が存在するが、他の遺構は少ない。

調査区中央の南端では、27号溝や28号土坑・29号土坑より新しい段階に、池状遺構の古段階が造られたと考えられる。池状遺構の東岸は1時期のみであったが、西岸では新段階の岸の下層から、より古い段階の岸が確認された。池状遺構新段階はⅡ期に下る遺構であるが、古段階は、Ⅱ期に遷る可能性が高いと考えた。直接的な前後関係ははっきりしないが、2号遺構などのゴミ穴が機能していた時期よりは、新しいものと考えられる。

調査区西壁よりの、米軍共同溝から西側の区域では、遺構密度はあまり高くない。調査区北西隅には4号土坑がある。本来の形状は不明であるが、かなり大規模な遺構である。調査区南西隅には1号井戸と3号土坑が造られる。その間に、17号溝や12号土坑が存在する程度であった。

【1号遺構】（図38・39・40、図版18）

G・H-7・8区で検出された、ゴミ穴と考えられる遺構である。2号遺構と同様に、3b層の整地によって埋められており、ほぼ同時に存在したと考えられる。出土遺物の様相も、2号遺構と基本的に共通することから、Ⅱ期の遺構と判断した。

北側の一部と西側は、擾乱によって破壊されている。1号遺構の東側は、2号遺構と接している。近代以降の溝状の擾乱が、この場所で両遺構を横切る形で、東西に延びていた。それを利用して、先行して掘り下げを行い、埋土の状況を確認した（図40）。1号遺構と2号遺構がやや深む程度まで埋没した段階で、3b層の整地で埋められていた。そのため、1号遺構埋土と2号遺構埋土上の、直接の新旧関係はつかめなかつた。ほぼ同じ時期に使われたと考えられる。

1号遺構の平面形状は、東西に長いほぼ椭円形を呈す。西側は擾乱で壊されているが東西の長さ330cm以上、

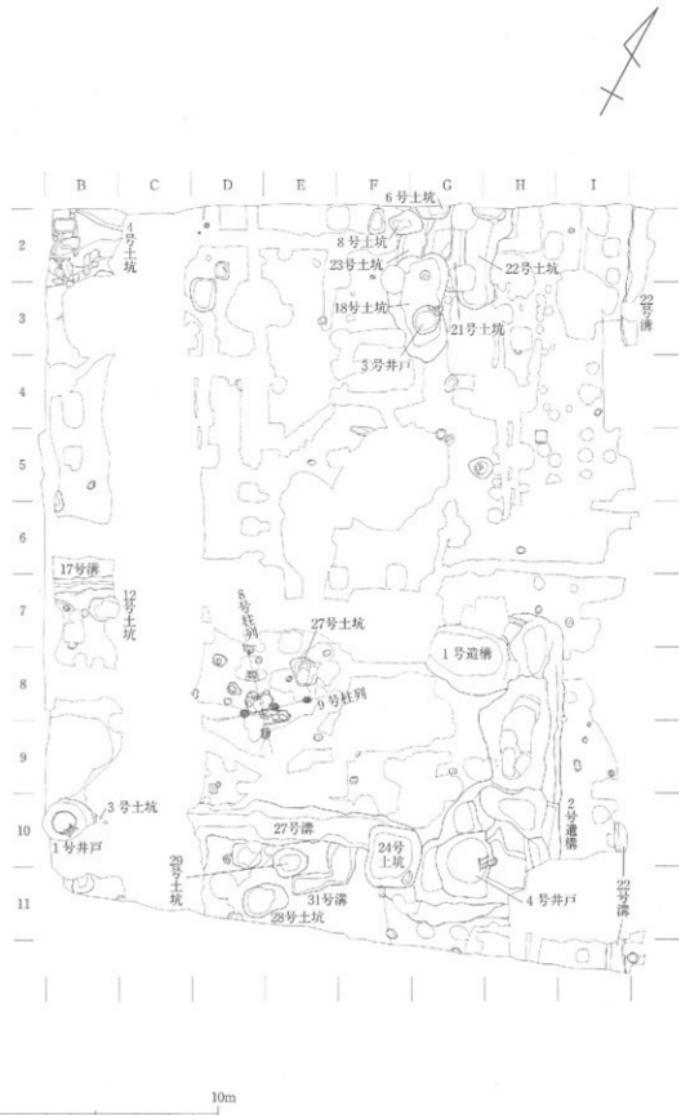


图33 武家屋敷地区第7地点II期遗構配図(1)
Fig.33 Distribution of features belonging to phase II at BK7 (1)



Fig.34 Distribution of features belonging to phase II at BK7 (2)



図35 武家屋敷地区第7地点II期の遺構（1）
Fig.35 Features belonging to phase II at BK7 (1)

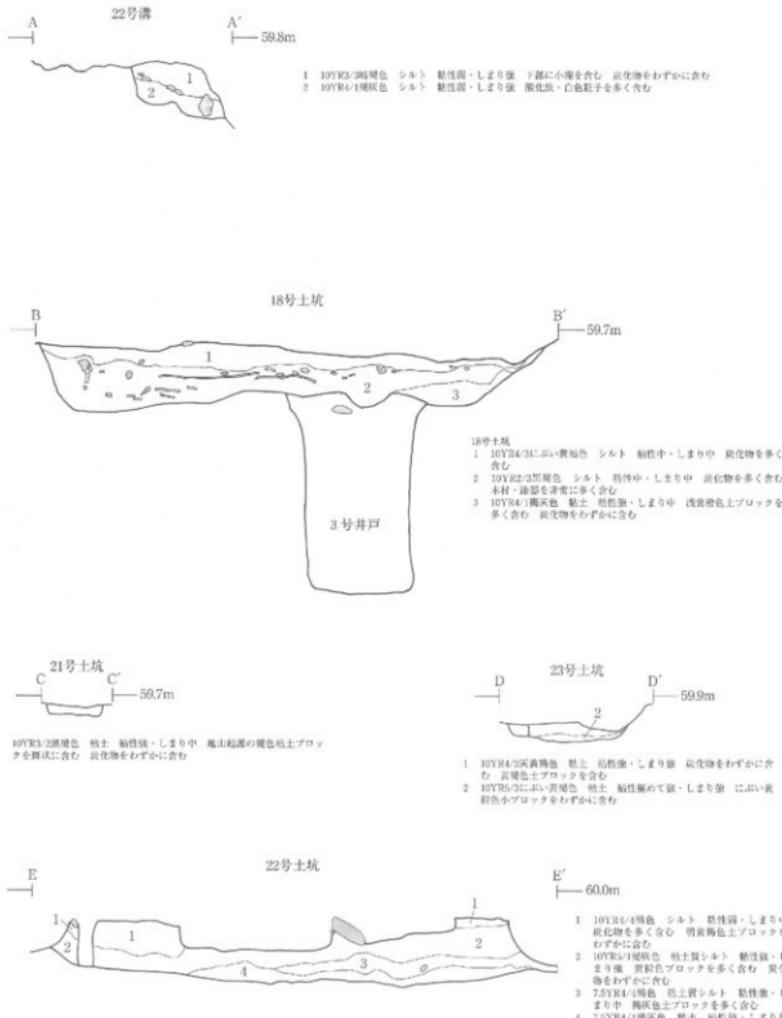


図36 武家屋敷地区第7地点II期の遺構(2)
Fig.36 Features belonging to phase II at BK7 (2)

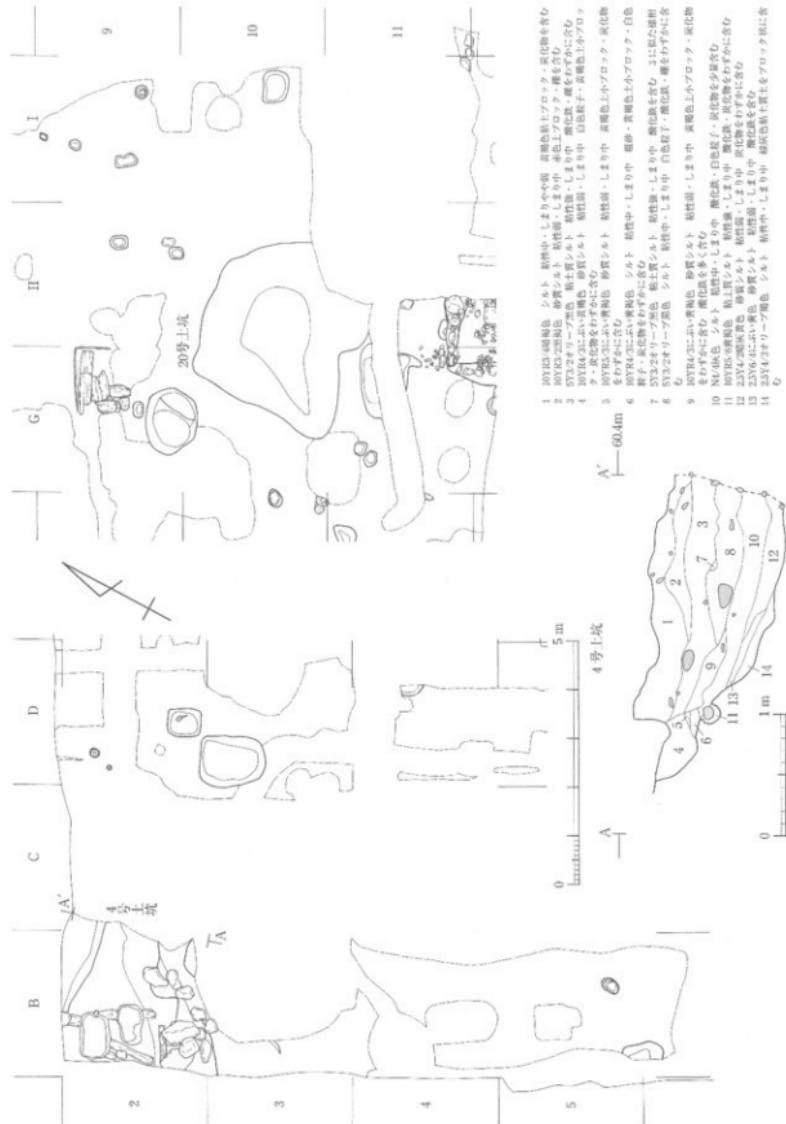


図37 武家屋敷地区第7地点II期の遺構(3)
Fig.37 Features belonging to phase II at BK7 (3)

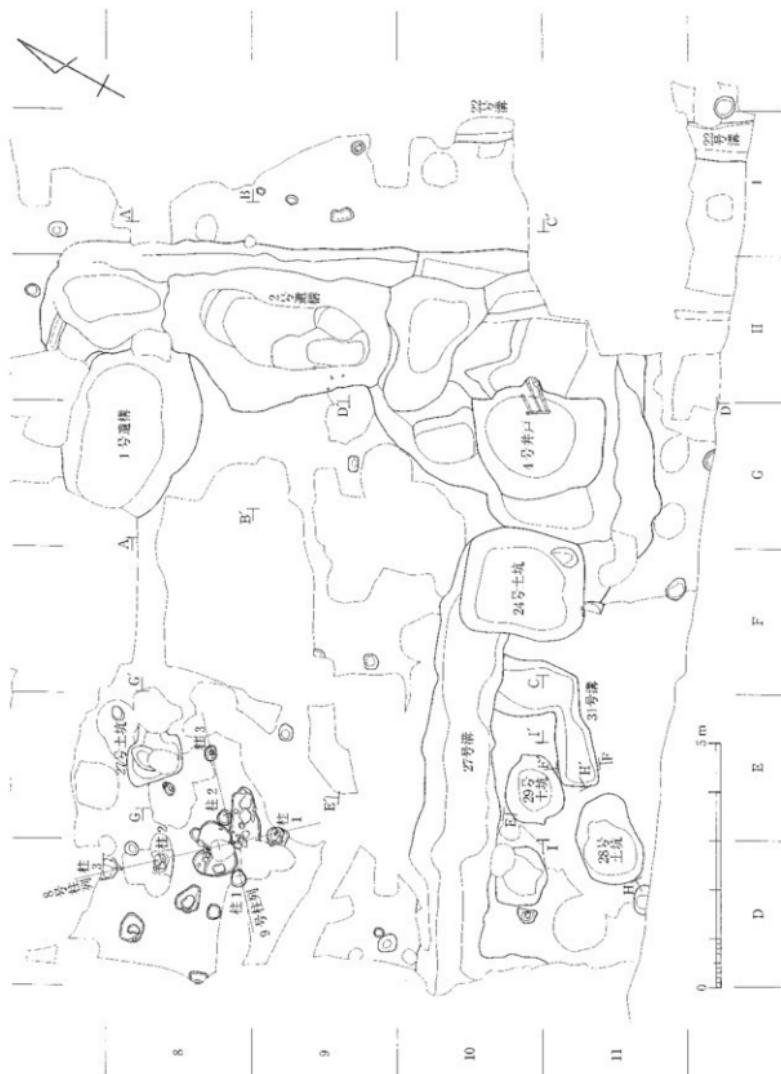


図38 武家屋敷地区第7地点Ⅱ期の構造(4)
Fig.38 Features belonging to phase II at BK7 (4)

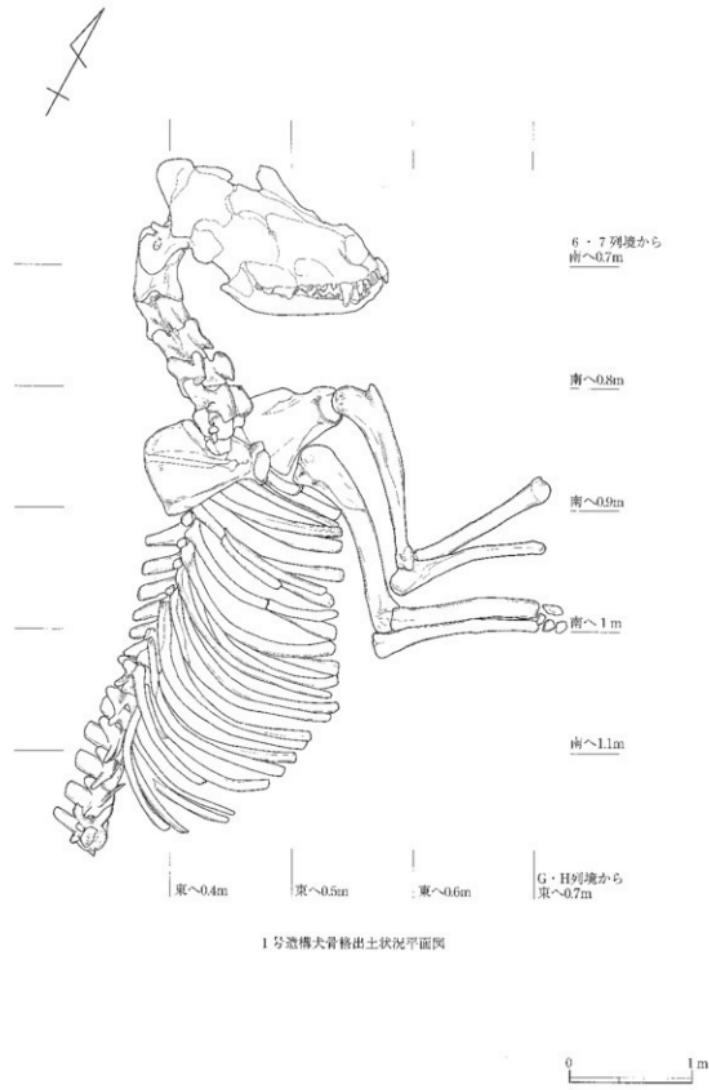


図39 武家屋敷地区第7地点II期の遺構 (5)
 Fig.39 Features belonging to phase II at BK7 (5)

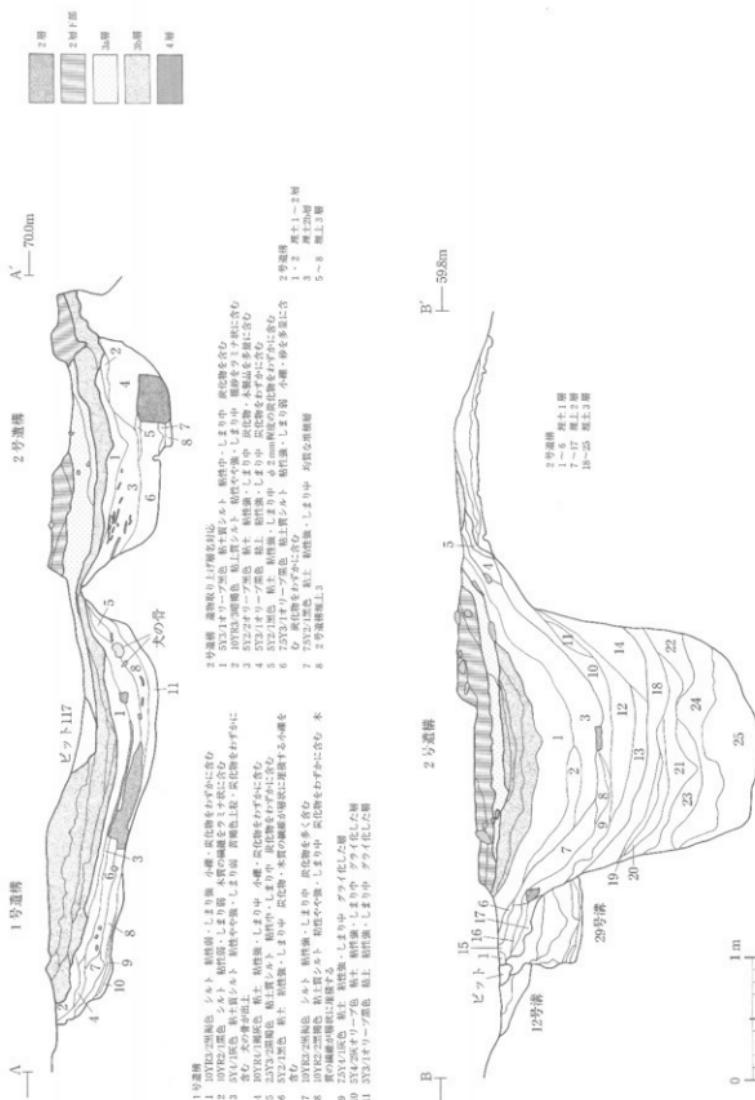


図40 武家屋敷地区第7地点II期の遺構 (6)
Fig.40 Features belonging to phase II at BK7 (6)

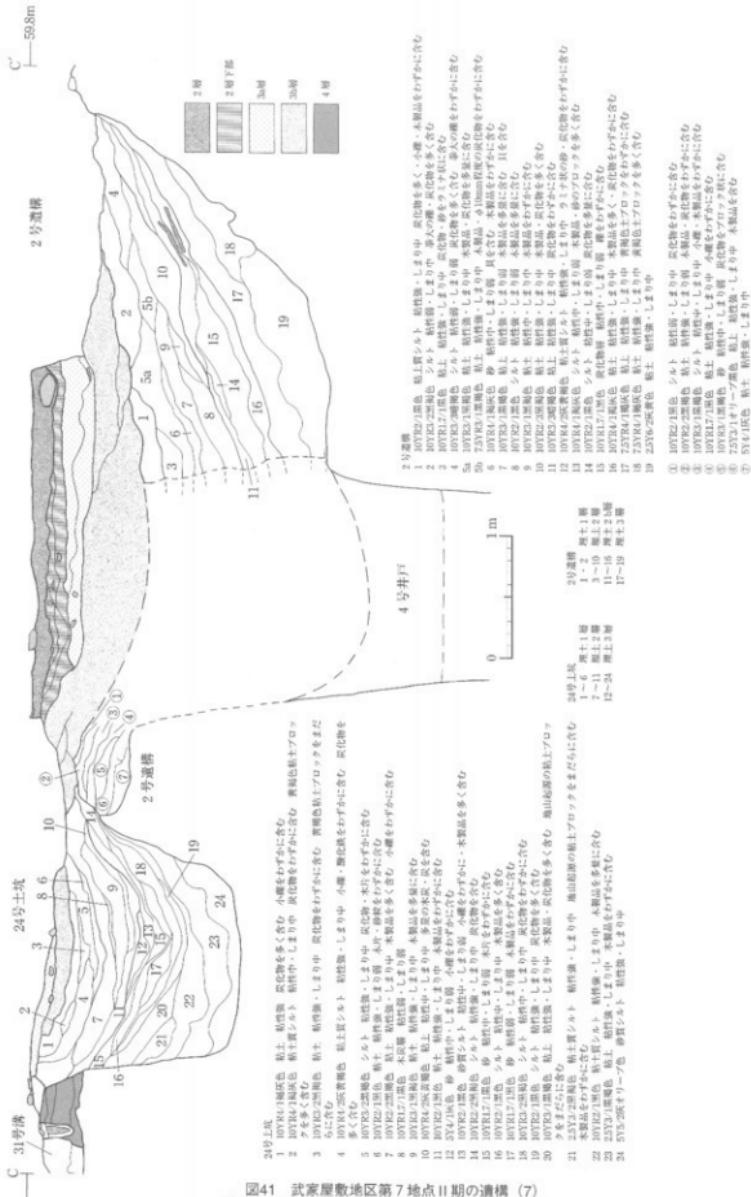


図41 武家屋敷地区第7地点II期の構造(7)
Fig.41 Features belonging to phase II at BK7 (7)

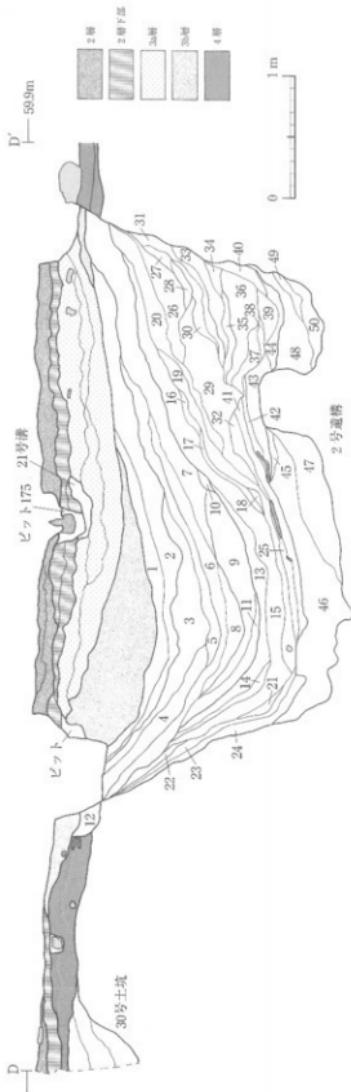


図42 武家屋敷地区第7地点II期の遺構 (8)
Fig.42 Features belonging to phase II at BK7 (8)

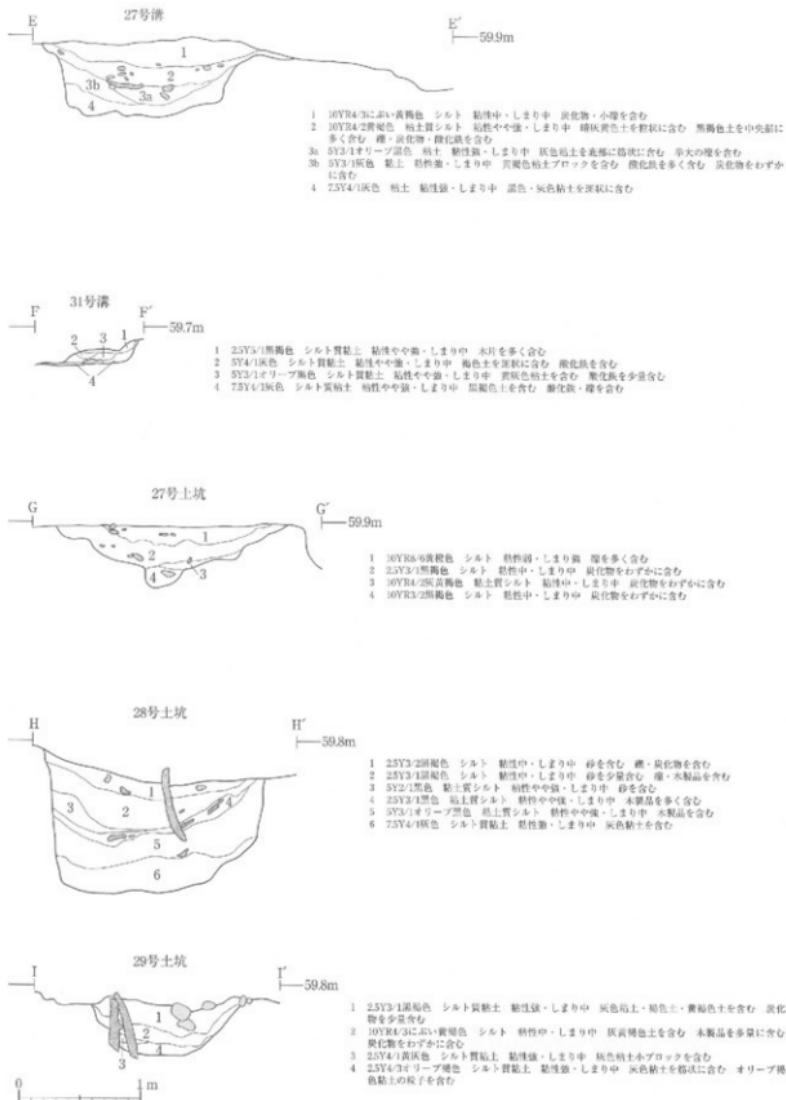


図43 武家屋敷地区第7地点II期の遺構(9)
 Fig.43 Features belonging to phase II at BK7 (9)

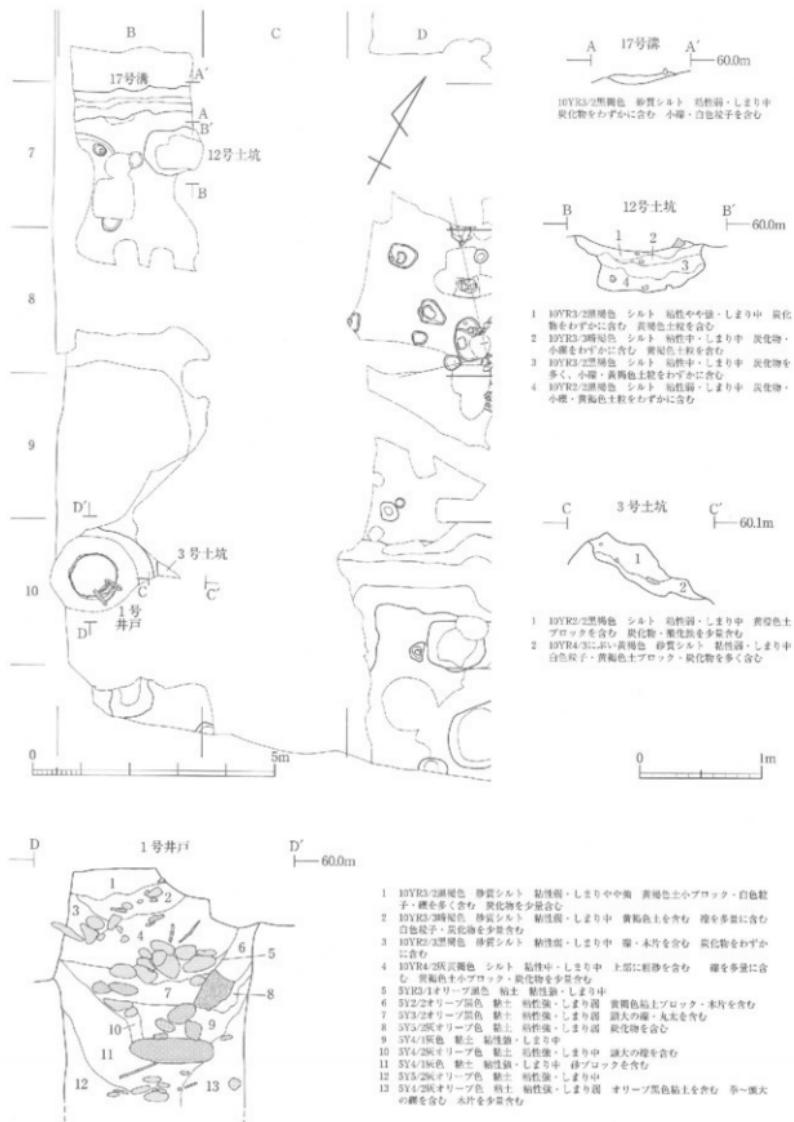


図44 武家屋敷地区第7地点Ⅱ期の遺構 (10)
Fig.44 Features belonging to phase II at BK7 (10)



図45 武家屋敷地区第7地点II期の構造(11)
Fig.45 Features belonging to phase II at BK7 (11)



図46 武家屋敷地区第7地点II期の遺構(12)
Fig.46 Features belonging to phase II at BK7 (12)

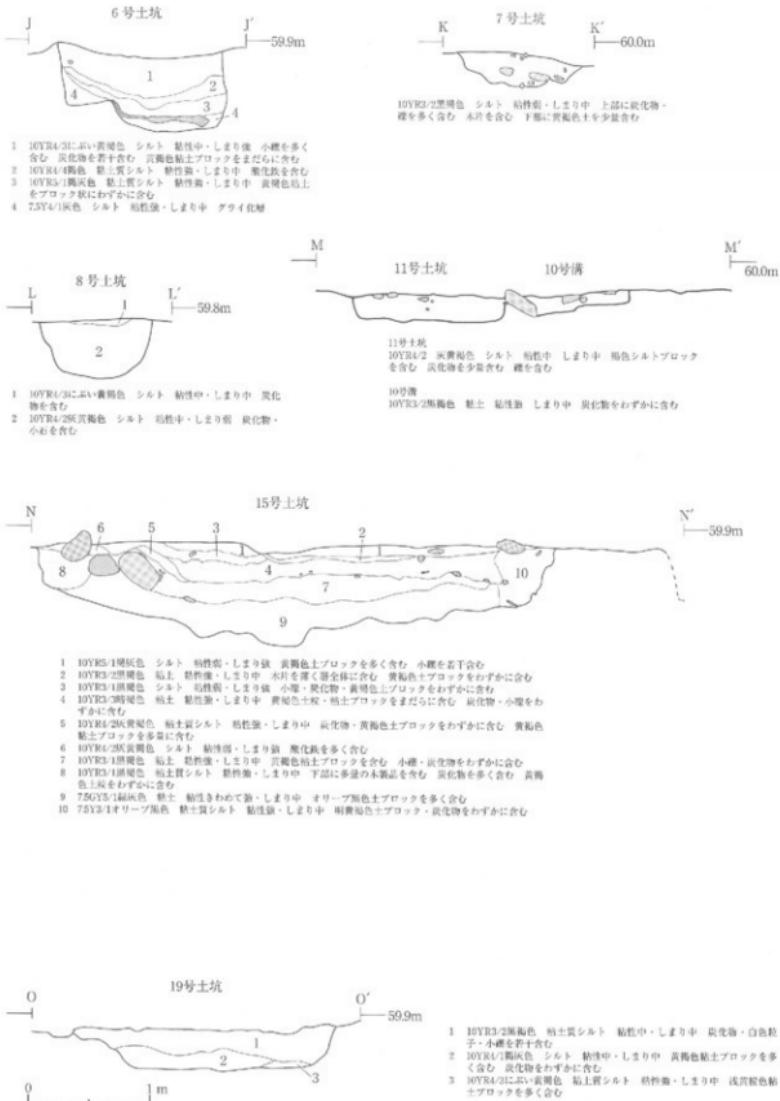


図47 武家屋敷地区第7地点II期の遺構(13)
Fig.47 Features belonging to phase II at BK7 (13)



図48 武家屋敷地区第7地点II期の遺構(14)
Fig.48 Features belonging to phase II at BK7 (14)

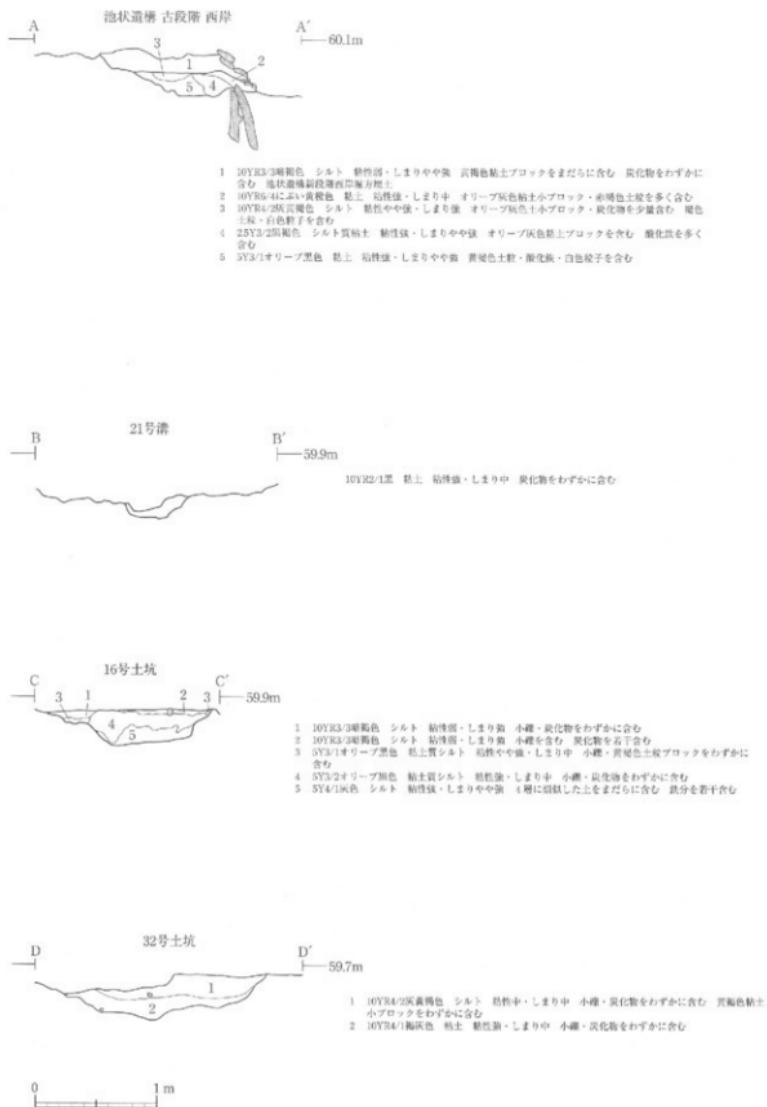


図49 武家屋敷地区第7地点II期の遺構 (15)
Fig.49 Features belonging to phase II at BK7 (15)

北側も搅乱で一部壊されているが南北の長さ290cm程度で、深さは80cmである。埋土は、黒褐色を基調とする、有機質を多く含むものである。様々な種類の遺物が大量に出土している。特に、木製品が多い。木筒も8点出土している。特筆されることとして、東よりの場所から、犬の骨格が、解剖学的位置を留めたまま検出された（図39）。前肢の先端付近と、骨盤から後肢部分が欠けている。1号遺構の中央部に延びる、東西方向の搅乱によつて壊されてしまったことによる。本来は全身の骨格がそろっていたものと考えられる。解剖学的位置を留めていることから、死亡した犬をそのまま埋めたものと考えられる。新たに埋納用の穴を掘った痕跡は確認できなかつた。埋土の中に、他の遺物と同じように埋もれており、ゴミと一緒に廃棄されたような出土状況である。

【2号遺構】（図38・40・41・42、図版19・20・21）

G・H-7～11区で検出された、ゴミ穴と考えられる大規模な遺構である。基本層4層上面から掘り込まれており、ほとんど埋まつた後に、上面に3b層の整地が行われていることから、II期に属する遺構である。年号を記載した木筒が多数出土しており、享保5年（1720）を前後する頃に使われていたと考えられる。

南東隅のH-10・11区に大規模な搅乱があり、この部分は大きく壊されている。東辺は、I期の29号溝を切つている。先述のように、1号遺構と接しているが、両者はほぼ同時に使われていたと考えられる。南西側は24号土坑と接している。2号遺構の埋土を切つて、24号土坑が造られており、24号土坑が新しい。ただし、出土遺物に違いは見られず、2号遺構がほぼ埋没した後、ほとんど間を空けずに24号土坑が造られたものと考えられる。2号遺構の底面からは、4号井戸が検出されている。4号井戸が完全に埋まつてから改めて2号遺構全体を掘つたのか、4号井戸が埋まらない状態で周囲を掘り広げていったのか、どちらであったのかは明らかにはできない。4号井戸の埋土は、埋没後に収縮して陥没していったと考えられる。そのため4号井戸の埋土と、2号遺構の埋土との関係が、明瞭につかめなかつた。4号井戸を使用しなくなつてから、さほど時間を空けずに2号遺構が造られた可能性が高いものと考えておきたい。

2号遺構の全体形状は、逆L字に近い平面形状を呈する。南北の最大長12.8m、南側での東西の最大長7.2mとなる。最も深いところで、約250cmの深さがある。底面には激しい凹凸があり、複数の土坑が連続したような形状を示している。壁は、いずれの場所でも急激に落ち込んでいる。このような形状が、ゴミ穴として使うために掘られた結果であるのか、あるいは別な目的で掘られたものであるのかは、はっきりしない。土取りなどの目的で掘られた穴が、ゴミ穴に転用された可能性もある。

埋土には、様々な遺物が含まれ、廃棄単位ごとに区分することも可能な状態であった。微細遺物の採集のために、G-11区の南北方向のセクションから、ブロックサンプルを探集した。それ以外の遺物の取り上げは、大きな段階として、埋土1層・2層・3b層・3層と区分して行った。なお、東西方向のセクションの内、G-11区の部分は、断面図が作成できていない。2号遺構では、各所にベルトを設定して掘り進んでいたが、最後に残つたのがこの場所であった。突き出る形でベルトを残したところ、下部の余り詰まつてない埋土がベルトの重みで変形し、ベルトが陥没し倒壊してしまつたため（図版20-5）、断面図が作成できなかつたものである。

有機質遺物が、とりわけ大量に含まれているのは、埋土2層と埋土2b層である。鉋屑のような木材の削りカスが層をなしている部分もあつたが、これらは遺物として取り上げてはいない。埋土1層は、埋土2層と比べると有機質遺物は比較的少ない。埋土3層は、全体に遺物はあまり含まれていないが、板材など比較的大型の木材は、埋土3層から出土している場合が多い。

出土遺物には、近世遺跡から出土する、あらゆる種類が含まれていると言ってよいほど、様々な種類の遺物がある。これらの遺物量も膨大で、一つの遺構から出土した遺物量としては、これまでの川内地域の調査では、最も多い。食物残渣も大量に捨てられており、種子や貝・骨も大量に含まれていた。ハエの蛹が密集している状態も検出されており、植物残渣などが腐敗したところに発生したものと思われる。食物残渣などの腐敗臭が漂い、ハエが群れをなしてたかっていた様子が想像される。

木簡は545点、墨書きある木製品も40点と、これまでの調査では最も多い量が出土している。木簡の記載内容から見て、これらは二の丸に運び込まれた物資に付けられていた荷札と考えられるものが主体を占める。いずれも破片数であるが、土師質土器皿は1万5千点以上、白木の箸は2万5千点あまりと、膨大な量が出土している。二の丸で行われた宴席で利用されたものが、まとめて捨てられたものと考えて良い。このような出土遺物の様相は、武家屋敷地から出たゴミではなく、二の丸のゴミが運び込まれたことを示すものと言える。

【池状遺構古段階】(図48・49、図版22)

D・E-10・11区で検出した、池状遺構の古い段階の、西岸と考えられる遺構である。池状遺構の新段階は、Ⅲ期に下るものと考えられる。東岸は、一時期のみが検出され、新段階のものと考えられる。一方、西岸では、新段階の石組の下層に、もう一段階の石列、杭列、石敷が確認された。新段階の石組とほぼ同じ位置で検出されており、これを古段階とした。

古段階については、西側の岸が検出されただけとなる。東側については、新段階に造り替えられる際に、古い段階の岸は壊されたものと考えられる。底面も、新段階に造り替えられた際に、掘り下げられたと思われる。北側は擾乱によって破壊されている。Ⅱ期の28号土坑、29号土坑を切って造られている。

古段階の西岸に伴う掘り方は、途中で方向を変え、多角形状に掘られている。北東側の延びは、搅乱もあり明確でない。確認できた掘り方の深さは20cm程度である。掘り方内の西よりの所に、石列が16mの長さで直線的に延びている。10~15cm程度の大きさの川原石を並べたような形をしており、石を積み上げたような状況ではない。方向はN-19°-Wである。石列の東側にはほぼ平行するように、2.7mの長さで杭列が確認されている。位置関係から、池状遺構古段階の西岸の護岸に関わるものと考えられる。杭列の東側には、10cm未満の小円錐が散かれていた。杭列はほぼ直線的に延び、方向はN-9°-Wである。杭の形状は、丸材や丸材を割ったもので、太さ7~10cm程度である。打ち込まれた部分の長さは、50~60cm程度である。なおF-10区に、1.05mの長さで、東西方向に延びる杭列が確認された。池状遺構古段階西岸の杭列と関連するものである可能性も考えられるが、確実な関係はつかめなかった。

古段階の掘り方埋土からは、磁器、陶器、土師質・瓦質土器などが出土しているが、量は少ない。陶器には、18世紀代と考えられるものもあるが、細片のため詳しいことは判らない。

【7号柱列】(図45・46、図版23)

D・E-2区で検出された掘立柱列である。4号溝の南側に沿って、平行して造られており、同時に存在した可能性が高いと考え、4号溝と同じⅡ期とした。方向はN-25°-Wである。3基の柱穴が検出されており、柱間寸法は7尺4寸と、やや特殊な柱間寸法である。柱2が一部搅乱で壊されている。東側は、これ以上延びていかないようである。西側は、米軍共同溝による大規模な搅乱もあり、これより先の延びは不明である。柱穴の形状は、側々の差が大きい。柱1は、一辺20cm程度のほぼ方形を呈する。柱3は、長軸38cmの不整形である。深さは18~25cm程度である。柱痕跡は、柱3で太さ10cm程度のものが確認されている。遺物は、瓦の細片が出土しているだけである。

【4号溝】(図45・46、図版23)

D~F-2区で検出された。2層下部の下位で検出されていることからⅡ期に含めた。東西に延びる溝で、西側をⅢ期の2号溝に切られている。東側は搅乱やピットによって切られているが、鍵の手状に北側に曲がり、調査区外へ延びていく。8号土坑との切り合い関係は、両者が重なる部分に搅乱があり判らない。残存している東西の長さ約7.9m、幅約80cm、深さ約14cmである。東西方向は残存箇所で、N-64°-Eである。底面の標高は、西側で59.95m前後、東側で59.83m前後と、西から東に流れていたものと考えられる。E・F列境で5号溝と接続し、一連の溝であると考えられる。溝の脇の部分には人頭大の甕が置かれている箇所があり、石組溝であったことが推測される。また、石の抜き取り痕と考えられるピットも確認される。加えて、4号溝の南岸では、一部に

木材が据えられている箇所があった。この木材は保存状態が良くないため、木樋か、あるいは護岸の板材であったのか、はっきりしない。一部では、木材の上に石組が重なって検出されている。このことから、新旧2時期に分かれ、改修して石組溝とした可能性が考えられる。出土遺物には、陶磁器類、瓦、木製品などがある。陶器では大堀相馬産の中型丸碗や、青土瓶などが出土しており、19世紀前葉頃と思われる。出土遺物からは、Ⅱ期の中でも、最も新しい段階の遺構であると考えられる。

【5号溝】(図45・46、図版23)

E・F-2・3区で検出された。ピット68を切っている。南北方向に走る溝で、E・F-2区で4号溝と連結し、4号溝と一連の溝になる。一部に擾乱で破壊されている箇所があり、南端は途中で途切れ、確認できなかつた。人頭大的甕が据えられている箇所があり、4号溝と同様に、石組溝であったと考えられる。残存する南北長約3.3m、最大幅92cm、深さ約20cmである。遺物は、陶磁器類がわずかに出土している。陶器では、灯明皿や大堀相馬産の輪白釉の土瓶などの破片がみられ、19世紀前葉頃と思われる。4号溝と同じく、Ⅱ期の中でも、最も新しい段階の遺構であると考えられる。

【8号溝】(図45・46、図版23・25)

南北方向に延びる素掘りの溝で、H-4～6区で検出された。ピット42と46に切られている。南北両端は擾乱によって壊されており、その続きは不明である。中央部付近も一部擾乱によって破壊されている。残存する南北長約3.5m、上幅約32cm、下幅20～25cm、深さ約8cmで、方向はN-28°～Wである。底面には細かな凹凸があるため、どちらの方向に流れたかは不明である。遺物は出土していない。すぐ西側には23号溝が位置しており、ほぼ同規模で同じ方向に並んでいるため、造り替えられた可能性もある。遺構の性格は不明である。2層より下位で検出されているが、この場所には2層下部や4層などが分布しないため、掘り込み面は特定できなかつた。後述する23号溝や、それと関連があると思われる16号溝と、溝の方向や形状が類似しており、大きくは同じ段階に属すると考えられる。16号溝の掘り込み面が2層下部の下位であることから、8号溝も大きくは同じ時期のⅡ期に相当するものと推測される。

【9号溝】(図45・46、図版24)

F-3・4区で検出された素掘りの溝である。2層下部の下位から掘り込まれており、Ⅱ期のものと考えられる。Ⅲ期の4号建物の柱2に切られている。西側では直角に屈曲しており、南方向と東方向に向かうが、両端は擾乱によって破壊されており、続きを検出することはできなかつた。9号溝の東方向には、G-3区に15号溝が位置しており、9号溝が15号溝に統合していく可能性もある。しかし、両者の間は10号溝に切られているため、つながりは不明である。また、これらの溝が重複する部分が、18号土坑の埋土上にあったため、18号土坑と9号溝、あるいは15号溝の埋土とを認識することが非常に難しく、溝のつながりを確認することはできなかつた。上幅約60cm、下幅約30～35cm、深さ約16cmである。遺物は、磁器、瓦、土師質土器などがごくわずか出土しているが、年代が明らかになるようなものはなかった。

【10号溝】(図45・46・47、図版24)

F～H-2～4区で検出された。2層下部の下位から掘り込まれており、Ⅱ期に属する。F-4区、G-2区、G-4区、H-2区の3ヶ所で、ほぼ直角に屈曲する。またF-4区には、二股に分岐する箇所がみられる。北側は調査区外に続き、分岐した西端と南端は擾乱によって破壊されており、その続きを確認することはできなかつた。Ⅱ期の15号溝、18号土坑、21号土坑、22号土坑を切っており、一部擾乱によって壊されている箇所がある。溝の上幅35～65cmで、北端では上幅100cm程に広くなる。下幅は15～45cm、深さ約14cmである。東西方向のG・H-2区の東西方向の部分はN-23°～E、G-2～4区の南北方向の部分はN-19°～Wで、F・G-4区の東西方向部分はN-30°～Wである。溝の底面には、部分的に大小の円窪がみられる箇所があつた。これらの窪は溝全体に渡るものではなく、場所による粗密の差が大きい。特に密集する部分は、溝の内部に、疊を詰め

込んだような状況を呈している。縁が密集している箇所は、その下位に18号土坑や21号土坑が存在している場所にあたる。のことから、土坑の埋土にあたり、底面が柔らかい部分に縁を敷いている可能性が考えられる。しかし、これらの縁が何を目的としていたのかや、溝の用途などについては明らかにはできなかった。遺物は、陶磁器類、瓦などが若干出土している。陶磁器はおおよそ18世紀代のものと考えられるが、植木鉢や鉄瓶など19世紀に下る可能性がある陶器などもわずかにみられる。

【13号溝】(図45・46、図版24)

I - 2区で検出された。南北方向に延びる素掘りの溝である。北端は調査区外に延び、南端は搅乱によって破壊されており、続きは不明である。2層の下面から掘り込まれているが、2層下部は存在しない箇所であるため、厳密な掘り込み面はわからず。南北の残存長約2.6m、上幅20~25cm、下幅5~15cm、深さ約5cmで、方向はN-23°-Wである。下に重なって12号溝が位置する。12号溝の埋土上面は、中心付近がやや窪んでおり、そこに造られた小規模な溝である。窪んだところの排水を目的とする溝であろうか。12号溝より新しいため、II期の可能性が高いものと考えたが、I期に遡る可能性も残る。遺物は出土していない。なお、13号溝の周囲を含む、12号溝中央部の埋土上面には、縁がやや集中して分布していた。12号溝埋土上面の、地盤が緩い部分に敷かれた可能性がある。

【15号溝】(図45・46、図版25)

G - 2・3区で検出された素掘りの溝である。G - 3区ではほぼ直角に屈曲するとと思われるが、屈曲部分は搅乱によって破壊されている。11号土坑、18号土坑、19号土坑、22号土坑を切っている。北端、西端ともに10号溝によって切られている。北端の続きは不明である。西端では、10号溝をはさんだ西側に9号溝が位置するため、これにつながっていく可能性がある。ただし、これらの遺構が18号土坑の埋土上にあるため、埋土の識別が難しく、さらに10号溝に切られていたため、9号溝と15号溝のつながりを明確にすることはできなかった。南北部分の方向は、N-25°-Wである。南北の残存長約3.2m、上幅30~50cm、下幅15~30cm、深さは約4cmとかなり浅い。掘り込み面を確認することができなかつたが、II期の10号溝より古く、同じくII期の11号土坑や、19号土坑などより新しいことから、15号溝もII期に属するものと考えられる。遺物は陶磁器、瓦などが若干出土している程度である。

【16号溝】(図45・46、図版25)

南北方向に延びる溝で、H - 3・4区で検出された。2層下部の下位から掘り込まれており、掘り込み面からII期に所属するものと考えられる。北端はピット104によって切られ、その続きは明確でない。南端は搅乱によって壊されており、搅乱を隔てたH - 5・6区には、16号溝のほか延長線上に23号溝が位置している。同じ方向を示していることから、16号溝とつながる可能性があるが、詳細はわからなかった。残存する南北長約1.7m、上幅15~25cm、下幅5~15cm、深さ約4cmとかなり浅い。方向はN-29°-Wである。底面は場所によって凹凸があり、流れの方向は不明である。遺物は出土していない。

【17号溝】(図44、図版26)

B - 7区で検出された東西方向に延びる素掘りの溝である。2層下部下面から掘り込まれており、大崩落馬糞の灰軸輪や京焼系陶器など、18世紀代の遺物が出土している。これらの点から、II期の遺構と判断した。東西とも搅乱によって破壊されており、その先の延びは不明である。残存していた長さは2.5mである。ほぼ直線的に延びており、方向はN-26.5°-Wである。上幅50~65cm、下幅10~15cm、深さ8cm前後で浅く、緩やかに落ち込んでいる。底面レベルは東側がわずかに低く、西から東へ流れていた可能性がある。遺物は、磁器、陶器、土師質・瓦質土器が出土しているが、量は少ない。先述のように、陶器には18世紀代のものが含まれる。

【21号溝】(図48・49、図版26)

G - II - 10区で検出した東西方向の溝である。3a層上面から掘り込んでおり、2層下部に覆われていること

から、Ⅱ期の遺構である。20号土坑埋土でもある3a層が堆積した後、3a層を掘り込んで造られている。底面の南北両側に据えられた木材を検出したことで、溝が存在することが判明した。護岸のためのものと考えられるが、保存状態が良くないため、木材の本来の形状などは判らない。南北両側の木材の幅は約20cmである。北側の木材は、東西の長さ2.1m分が残存していた。南側はピットで壊された部分が多く、わずかしか残されていない。方向はN-31°-Wである。掘り方は、平面精査では把握できず、断面でのみ確認できた。上幅52cm、下幅30cm、深さ20cmで、断面形状は逆台形に近い。遺物は、磁器と土師質土器が、わずかに出土しているだけである。

【22号溝】(図35・36・38、図版26)

調査区の東端を南北に延びる溝である。北側のI・J-2・3区と、南側のI-10~12区において検出した。調査区東側の近代以降に造られた段差によって削平されており、残存状態は良くない。さらに、各所で搅乱によって壊されているが、北側では長さ5.7m、南側では長さ5.7mが検出された。直線的に延びていた場合、5・6列のわずかに残されている部分で検出されても良い位置関係にあるが、検出できていない。もともと存在しなかったのか、この区域では途切れていたのか明確にはできなかった。中間の検出できていない部分は問題が残るが、北側と南側の検出された部分は、ほぼ直線につながって延びており、方向はN-26°-Wである。ほとんどの区域で、搅乱によって東側が破壊されており、幅は判明しない。調査区南壁に近い場所は南側が残存しており、ここでは上幅75~85cm、下幅42~60cmである。深さは50cm前後で、断面形状は逆台形を呈する。底面のレベルは、北壁際と南壁際で差がほとんどなく、流れている向きは不明である。

22号溝は、搅乱などによって、2層下部や1層との関係は把握できなかった。出土遺物で、時期を限定できるようなものもない。そのため、区画溝と考えられるⅠ期の12号溝を、東にずらして造り直した可能性を考え、当期に含めたもので、異なる時期に動く可能性も残っている。Ⅱ期の2号遺構などが造られていた時期には、以前の12号溝の位置に重なることから、区画がずれていた可能性が高いと思われる。22号溝は、12号溝より東側に2mほどずれた位置にあり、位置関係としてはふさわしい。そのため、このⅡ期に、12号溝をずらして造り直した可能性が高いものと考えた。

磁器、陶器、土師質土器、瓦などが出土しているが、遺物量はわずかで、時期を決定できるようなものはない。軟質施釉土器が1点出土している。幕末に出現する焰焰とは異なるのか、詳細は判らない。犬を象った土人形が1点出土している。

【23号溝】(図45、図版25)

南北方向に延びる素掘りの溝で、II-5・6区で検出されている。Ⅲ期の1号建物の柱22~25、同じくⅢ期の2号建物の柱12、ピット46に切られている。南端は削平によって途切れ、北側は搅乱によって壊されている。搅乱の北側延長線上には16号溝が同じ方向に位置しており、一連の溝となる可能性があるが、詳細はわからない。残存する南北長約3.8m、上幅30~45cm、下幅20~30cm、深さ約6cmで、方向はN-31°-Wである。ピットなどで切られている箇所が多いため、底面の高低差が不明確で、どちらの方向に流れていたかはわからなかった。すぐ東側には8号溝が位置している。これらは、ほぼ同規模で同じ方向に並んでいるため、造り替えられた可能性があるが、詳細は不明である。2層より下位で検出されていることは確実であるが、2層下部や4層などが分布しない場所であるため、掘り込み面は断定できなかった。8号溝や16号溝は、23号溝と方向や形状が類似しており、大きな段階は同じ頃ととらえて差し支えないものと推測される。16号溝の掘り込み面が2層下部の下位であることから、23号溝も大きくは同じ時期のⅡ期に相当するのではないかと考えられる。遺物は、陶器、瓦などが、ごくわずかに出土しているだけである。

【27号溝】(図38・43、図版27)

D~F-10区で検出した素掘りの溝で、Ⅱ期の24号土坑に切られ、Ⅱ期の31号溝を切って造られている。31号溝が4層上面から掘り込まれているため、27号溝もⅡ期に属する遺構であることが判明する。東端は24号土坑に

切られているため不明であるが、24号土坑の東側には延びていかることから、24号土坑のところで途切れるものと考えられる。西側は擾乱によって破壊されており、その直前で南側に屈曲する。ほぼ直角に屈曲するものと思われるが、その先の延び方は、擾乱によって壊されており不明である。おおむね直線的に東西に延びており、検出できた東西の長さは9.4m、方向は直交する方向に直してN-24°-Wである。上幅120~195cm、下幅40~105cm、深さ65cm前後で、断面形状は逆台形に近い形状を示す。底面レベルには顕著な変化がなく、流れていた方向は判らない。遺物は、磁器、陶器、土師質土器、木製品がややまとまって出土している。木簡も1点出土している。陶磁器類の様相は、2号遺構などと類似し、これらに近い時期と考えられる。他には、土人形、瓦、金属製品、石製品が出土しているが、量は少ない。

【31号溝】(図38・43、図版27)

E-F-10・11区で検出した素掘りの溝で、4層上面から掘り込まれているため、Ⅱ期の遺構とした。27号溝に切られている。途中で屈曲しており、西側は途切れ、北側は27号溝に切られている。27号溝より北側には延びていないようである。西端に近い所は、Ⅲ期の池状遺構新段階によって削平されており、わずかに残存する程度である。南北部分の方向はN-19.5°-W、東西部分の方向は直交する方向に直してN-35°-Wである。底面レベルは、ほとんど変化がない。上幅50~118cm、下幅15~85cm、深さ22cm前後で、断面形状は逆台形を呈する。遺物は、磁器と木製品がわずかに出土しているだけである。

【1号井戸】(図44、図版27・28)

B-10区で検出された。Ⅳ期の3号土坑を切っている。Ⅳ期の1号土坑に切られている。円形の掘り方の中に、桶を据えて井戸戻としたものである。調査区東壁際にあり、崩落の危険性があったため、内部の掘り下げは、検出面から3.5mほどのところで中止した。セクション図も、190cmほど掘り下げたところまでにとどめている。掘り方の直径は180cmで、その中に直径95~100cmの桶を据えている。内部には、木製の梯子がほぼ完全な形で埋没していた。井戸の内部に置かれた梯子が、そのまま埋められたものと考えられる。梯子は、両側が太い角材を用い、横木は細い角材が使われている。埋土には、部分的に30~70cm大の礫が含まれており、これらの礫はある程度まとまっていることから、井戸を埋め戻す際に投げ込まれたものであると推定される。出土した磁器は18世紀前葉のものが中心であり、陶器は大堀相馬産の碗など18世紀のものが中心である。底面まで掘り下げていないため、これらの遺物が1号井戸の時期を示すものかどうか確実ではないが、埋められたのは、18世紀の可能性が高いと判断して、Ⅱ期に含めた。陶磁器以外では、土師質・瓦質土器、瓦、漆塗や漆塗りの皿などの木製品などが出土している。

【3号井戸】(図35・36、図版28)

G-3区で検出された。18号土坑を完掘後、その後面で検出されたため、掘り込み面は不明である。18号土坑より古く、出土した磁器が17世紀末より新しい時期のものと考えられることから、Ⅱ期に属するものと考えられる。直径114cm、検出面からの深さ約310cmである。18号土坑によって上部が破壊されていると考えられるため、本来の深さは、さらに深くなる。比較的整った円形をしており、形態からは素掘りの井戸と考えられる。ただし、1号井戸、4号井戸などと比べると、井戸の底面が標高57.7m程度と浅いところで検出されており、実際に井戸として機能していたかどうかは不明である。遺物は、磁器がごくわずか出土しているだけである。

【4号井戸】(図38・41、図版28)

G-H-10・11区の、2号遺構の底面で検出された。4号井戸の埋土が埋没後に取締して陥没したと考えられることと、この部分の土層観察用セクションが陥没により変形・倒壊したため詳細な観察ができなかったことから、4号井戸の埋土と2号遺構の埋土との関係は充分明らかにできていない。そのため、4号井戸が完全に埋まってから改めて2号遺構全体を掘ったのか、4号井戸が埋まらない状態で周囲を掘り広げていたのか、どちらであったのかは明らかにはできていない。4号井戸を使用しなくなつてから、時間を空けずに2号遺構が造られ

た可能性を考え、同じⅡ期に含めたが、Ⅰ期まで遡る可能性も残っている。

検出面が2号遺構の底面であり、遺構面よりすでに2mほど下がった場所であった。そのため、4号井戸の埋土は2号遺構の底面から50cmまで掘り下がったが、危険なため、それ以上の掘り下げは行っていない。掘り方の径230cm前後で、桶や石組などの施設は確認されておらず、素掘りの可能性が高い。東壁際に、太い竹が3本並んで、差し込まれたように、立って入れられていた。また、この3本の竹を固定したのか、横木状の木材も確認されている。埋土はほとんど掘り下げていないので、出土遺物は少ない。上師質土器の皿、瓦、木製品が少量出土しているだけで、時期などが判明する遺物はない。

【3号土坑】(図44、図版28)

B-10区で検出された土坑である。大部分が搅乱によって破壊されており、わずかに残った部分も、上端は1号井戸によって切られている。そのため、本来の全体形状は不明である。残存している部分の深さは40cmである。埋土は2層に分かれるが、いずれも均質な層である。遺物は、土師質上器の皿と竹製品がわずかに出土しているだけで、時期のわかるような遺物はない。1号井戸に切られていることから、Ⅱ期もしくはさらに遡る時期の可能性がある。Ⅰ期に遡らせる積極的根拠もないため、Ⅱ期に含めておいた。

【4号土坑】(図37、図版28・29)

B・C-2・3区で検出された土坑である。北側と西側は調査区外へと伸び、東側と南側も搅乱によって破壊されているため本来の形状や大きさは不明である。遺構の外縁は、南側の一部が残っているだけである。かなり大規模な遺構になることは確実であるが、ほとんど破壊されており、遺構の性格は明らかでない。残存部分の大きさは東西285cm、南北270cmで、これ以上の規模になることは間違いない。深さは110cmである。南側部分には大きさ30~80cmの礫が並んでいた。石組み状の構造を持っていた可能性もあるが明確にはできなかった。上部の埋土1・2層からは19世紀の陶磁器が、埋土5層以下の下部の埋土からは18世紀の陶磁器が出土しており、上部の埋土は異なる遺構の埋土である可能性も残っている。下部から出土した遺物の年代が、4号土坑が使われた時期を示すものと考え、Ⅱ期の遺構と判断した。出土遺物は比較的多く、磁器、陶器、土師質・瓦質上器が、ややまとまって出土している。その他には、瓦、硯や火打ち石などの石製品、漆塗や箸などの木製品など、様々な種類の遺物が出土している。底面には丸太が横たわっており、その上から植物纖維で編んだ俵が検出されている。下部のみが残されていたが、残された部分の形状からは、内部に土砂が詰められた状態で置かれていたと考えられる。のことから、藁などで編んだ俵を利用した、上蓋であったと考えられる。

【6号土坑】(図45・47、図版29)

G-2区の調査区北壁際で検出されており、北側は調査区外に延びているため、形状は不明である。2層下部の下位から掘り込まれておらず、Ⅱ期と考えられる。東西長約140cm、深さ約60cmである。遺物は、陶器がわずかに出土しているほか、加工木がやや多く出土している。6号土坑の東側約2mのところには、ピット5が検出されている。ピットとしたが、形態や規模が6号土坑に類似する。そのため、6号土坑とピット5は、規模の大なる柱穴であった可能性もある。ただし、柱痕跡などは検出できていない。

【7号土坑】(図45・47、図版29)

E-3区で検出された。西側が2号土坑によって切られており、全体形状は不明である。残存箇所で、南北幅約100cm、深さ約26cmを測る。埋土は1層で、土坑の底面には拳大~人頭大ほどの川原石がいくつかみられた。出土遺物は、磁器、陶器、土師質土器、加工木などが少量出土している。陶磁器では、志野産の小中皿が1点出土しているほか、特徴が判明する遺物はほとんどない。わずかに、大堀相馬産の灰釉陶器の細片が出土している。ごく細片のため混入の可能性も残るが、18世紀代の可能性高いものと考え、Ⅱ期に含めた。

【8号土坑】(図45・47、図版29)

F・G-2区で検出された。西側の上端部分は搅乱により一部破壊されているが、不整構円形を呈するものと

推測される。23号土坑を切っている。4号溝との関係は、両者が重なる部分に搅乱があり判らない。残存する東西の長さ140cm、南北の幅は95cm、深さ約48cmである。磁器、陶器、土師質土器、加工木や木羽などが若干出土している。出土した陶器類は18世紀代のものと推測される。切り合い関係から、Ⅱ期の23号土坑よりは新しいが、出土遺物が18世紀代のものと考えられることから、8号土坑についてもⅡ期に相当するものと推測される。

【11号土坑】(図45・47、図版30)

G・H-2・3区で検出された。Ⅱ期の15号溝に切られており、同じくⅡ期の21号土坑と22号土坑を切っている。この切り合い関係から、Ⅱ期の造構であると判断される。搅乱によって一部が破壊されているが、東西に長い長方形を呈していると思われる。長軸約270cm、短軸約120cm、深さ約20cmを呈する。埋土は1層である。土坑の用途は不明である。遺物は、陶磁器、瓦、土師質土器などが出土しているが、出土量はあまり多くない。

【12号土坑】(図44、図版30)

B-7区で検出された土坑である。2層下部の下面から掘り込まれており、大堀相馬産の灰釉陶器など18世紀代の陶器が出土しており、Ⅱ期の造構と判断した。東側を米軍共同溝によって壊されているが、全体の形状は長方形に近い形を呈すると考えられる。残存部の大きさは東西方向で120cm、南北方向で90cm、深さは30cmである。磁器、陶器、土師質土器や瓦、木製品が出土しているが、いずれも出土量は少ない。

【15号土坑】(図45・47、図版30・31)

E-5～7区で検出された。2層下部を掘り下げた後に検出しておらず、2層下部の下位から掘り込まれていると考えられることからⅡ期に含めた。また、出土遺物も、Ⅱ期の造構として差し支えない。南北方向に長い不整楕円形を呈しており、南側は溝状に延びていくようであるが、搅乱で壊されており詳細は不明である。1期の24号溝、33号溝を切っている。残存している南北の長さは515cm、東西幅は125cm、深さ84cmを測る。埋土の下部からは、陶磁器類、瓦、木製品などが多量に出土しており、ゴミ穴であったと推測される。中でも加工痕のある木材や杉の樹皮の出土が多く、木材工作をした後のゴミなどが主に廻棄されていたのではないかと推測する。北側では人頭大の川原石がまとまっている場所がある。出土した陶器には、大堀相馬産の灰白釉の中型碗や、鉄軸の湯瓶などがみられ、18世紀末から19世紀前葉頃のものと考えられる。

【16号土坑】(図48・49、図版31)

G-9・10区で検出した。大堀相馬産陶器など、18世紀と考えられる陶器が含まれていることから、Ⅱ期に属するものと判断した。直接切り合わないが、2号造構と極めて近い場所に造られており、同時に存在したとは考え難い。基本層3層や4層との関係は不明であるが、2号造構などが使われなくなつてから、造られたものと推定される。搅乱によって、西側の上部が削平されているが、東西にやや長い楕円形状を呈する。東西の長さ140cm、南北の幅105cm、深さ29cmである。底面は平坦ではなく、段差がつく。磁器、陶器、土師質土器皿、煙管椎首が出土しているが、いずれもわずかな量である。

【18号土坑】(図35・36、図版31・32)

F・G-2・3区で検出された。2層下部の下位から掘り込まれており、Ⅱ期に含めた。出土遺物の様相も、Ⅱ期として差し支えない。一部、搅乱によって壊されているが、南北方向に長い不整楕円形を呈している。南北幅約450cm、東西幅約215cm、深さ約56cmを測る。10号溝と15号溝に切られている。ピット43と61は、18号土坑の埋土上面で検出されている。一方18号土坑は、21号土坑、23号土坑を切っている。また、18号土坑を先掘後、その底面からは3号井戸が検出されている。埋土は3層に分けられ、磁器、陶器、土師質土器、木製品、竹製品などが比較的多く出土しており、ゴミ穴として使われた可能性がある。陶器では、大堀相馬産の中型丸碗や灰釉腰折碗、京・信楽産の色絵中碗などが出土しており、18世紀代のものと考えられる。また、鉄軸の土鍋や東北産と考えられる甕なども出土しており、これらは18世紀でも新しい時期に下る可能性も考えられる。

【19号土坑】(図45・47、図版32・33)

G・H-3・4区で検出された。2層下部の下位から掘り込まれている。Ⅱ期の15号溝に切られ、同じくⅡ期の22号土坑の一部を切っており、Ⅱ期に含まれることが明らかである。搅乱によって破壊されている部分もあるが、およそ南北に長い長方形を呈するものと考えられる。南北幅約320cm、東西幅約196cm、深さ約32cmで、埋土は3層に分けられる。土坑の用途はわからない。陶磁器類、瓦などが出土しているが、出土量は少ない。陶器では、大堀相馬産の鉄絵を施した灰釉中皿などが出土しており、18世紀でも新しい時期、あるいは19世紀に入った段階の様相が伺える。

【20号土坑】(図37・41・42、図版32)

G・H-10・11区で検出された3b層上面の窪みである。2号遺構、1号遺構、24号土坑が埋まつた後、これらのゴミ穴の上面を覆うように、地山起源の黄褐色粘質土の3b層が整地される。下部の2号遺構埋土や、あるいは更に下位の4号井戸の埋土が、収縮したのか陥没していったと思われる。それに伴い、3b層の上面も窪んだものと考えられる。この窪みを、20号土坑とした。人為的な造構と言うよりは、自然に形成されたものと考えた方が良いであろう。陥没によって形成された落ち込みは、不整形を呈し、緩やかに落ち込む。南北375cm、東西405cm程度の大きさで、最も深いところで53cm程度の深さである。20号土坑に堆積した埋土が、基本層3a層である。3a層が堆積した後には、21号溝が造られている。遺物は、3a層として取り上げたものと、20号土坑として取り上げたものがある。様々な種類の遺物が、かなりまとまって出土しており、この窪みがゴミ穴として再利用されたものと考えられる。陶磁器類は、2号遺構などに近い様相を示しており、時期的にも近いものと考えられる。ただし、木簡は出土しておらず、この点では2号遺構と異なる。

また、20号土坑の北側のG-9区では、3b層と同様の黄褐色粘土を整地した上に、木の板を敷いた部分が見つかっている。時期的に3b層と一連の構造と考え、20号土坑と合わせて図37に図示しておいた。

【21号土坑】(図35・36、図版32・33)

G-2・3区で検出された。搅乱や、Ⅱ期の10号溝と18号土坑に切られている。また、同じくⅡ期の22号土坑を切っている。周囲に遺構や搅乱が多くあることから、掘り込み面を確定することはできなかったが、切り合い関係よりⅡ期の造構と考えられる。全体形状は不明であるが、およそ南北に長い不整形を呈すると考えられる。南北両側は搅乱により破壊されているが、残存する南北の長さは約255cm、東西幅約60cmを測る。埋土は1層で、深さ約8cmと非常に浅く、土坑の用途はわからない。遺物は陶器と土師質土器がそれぞれ1点出土しているのみである。

【22号土坑】(図35・36、図版33)

G・H-2・3区で検出された。2層下部の下位から掘り込まれている。出土遺物に、18世紀代の大堀相馬産の中型丸瓶が含まれることから、Ⅱ期に相当するものと考えられる。搅乱によって、一部破壊されている箇所がある。北側はピット5に切られ、さらに調査区外へ延びている。西側は21号土坑に切られている。全体形状は判らないが、およそ南北に長い不整形を呈している。南北の長さは最大で約410cm、東西幅150~165cm、深さ約48cmを測る。土坑の用途は不明である。埋土からは、陶磁器類や瓦などが出土しているが出土量はあまり多くはない。

【23号土坑】(図35・36、図版33)

F・G-2区で検出された。6号土坑、8号土坑、18号土坑に切られている。切り合い関係から、この区域に分布する土坑の中では、最も古い段階と考えられる。年代の判る遺物が出土しておらず、どこまで遡るかは判らない。23号土坑以外の一連の土坑や溝は、掘り込み面と切り合い関係から、全てⅡ期に所属することが明らかである。この区域の類似した土坑が、全てⅡ期のものであることから、23号土坑だけを、更に遡らせる特段の理由も無いので、Ⅱ期に含まれる可能性が高いものと考えた。南北に長い不整形を呈しているが、全体の形状は不明である。残存する南北幅約170cm、東西幅約110cm、深さ約16cmである。形状などから土坑の用途を推測するこ

とは困難である。出土遺物は、瓦質の捕鉢が1点出土しているのみである。

【24号土坑】(図38・41、図版19・33・34)

F・G-10・11区で検出した土坑で、大量の遺物が出土し、ゴミ穴と考えられる土坑である。4層上面から掘り込まれている。2号遺構と27号溝を切っているが、出土遺物の様相は共通しており、2号遺構と同様に享保5年(1720)頃に使われていたゴミ穴と考えられる。隅丸方形を呈し、南北255cm、東西220cm、深さ165cmで、壁は急に立ち上がる。南壁の東西両側に、小ビットが造られており、足場用のものかも知れない。埋土には大量の遺物が含まれ、その内容で細かく分層できるが、大きく3層に分けて遺物を取り上げた。埋土2層と埋土3層からは、木製品などの有機質遺物が大量に出土している。出土遺物には、様々な種類の遺物があり、遺物量も多い。全体の様相は、2号遺構出土の遺物と共通する。種子や貝などの食物残滓も大量に含まれていた。木簡も28点、墨書きある木製品も3点出土している。土師質土器と白木の箸が、大量に出土している点も、2号遺構と同様である。そのため、24号遺構も2号遺構と同様に、二の丸のゴミが遊び込まれて捨てられたものと考えられる。

【27号土坑】(図38・43、図版34)

E-8区で検出された。掘り込み面は不明であるが、出土した陶磁器が18世紀代のものと考えられることから、II期の遺構と判断した。IV期の1号建物の柱33、1号柱列の柱16に切られている。東側部分を1号建物の柱33に切られるため全体の形状ははっきりとはしないが、やや不整な、長方形に近い形を呈していた可能性がある。大きさは南北110cm、東西100cm、深さ50cmである。中央付近が、一段深くなっている。磁器、陶器、加工木などが、わずかに出土している。

【28号土坑】(図38・43、図版34)

D・E-11区で検出した。池状遺構古段階に切られている。4層は分布しないため、掘り込み面は明らかでない。陶磁器類が18世紀代のものと考えられることと、木製品が多数出土し、墨書きある木製品も1点出土するなど、出土遺物の様相が2号遺構などと類似するため、近い時期のものと考えII期に含めた。北東から南西方向に長い、楕円形から長方形に近い形を呈している。長軸の長さ190cm、短軸の幅125cm、深さ120cmである。断面図に見える杭は、池状遺構古段階に伴うもので、28号土坑に伴うものではない。磁器、陶器、土師質土器、瓦、木製品、金属製品が出土している。木製品がややまとまって出土している以外は、遺物量は少ない。

【29号土坑】(図38・43、図版34)

E-10・11区で検出した。池状遺構古段階に切られている。4層は分布しないため、掘り込み面は明らかでない。陶磁器類が18世紀代のものと考えられることと、木製品が多数出土し、木簡も1点出土している。28号土坑と同様に、出土遺物の様相が2号遺構などと類似するため、近い時期のものと考えII期に含めた。北東から南西方向に長い、楕円形に近い形を呈している。長軸の長さ150cm、短軸の幅120cm、深さ48cmである。断面図に見える杭は、池状遺構古段階に伴うもので、28号土坑に伴うものではない。磁器、陶器、土師質土器、瓦、木製品が出土している。木製品がややまとまって出土している以外は、遺物量はわずかである。

【32号土坑】(図49)

平面精査では確認できなかったが、調査区南端のセクションの検討によって確認できたものである。南壁柱列のセクションで確認したもので、掘り込み面が、2層下部より下位で、4層上面であることが確認できたため、II期に所属する遺構であることが明らかとなった。平面形状は不明であるが、南壁セクションでは、上幅165cm、下幅115cm、深さ38cmで、壁は緩やかに立ち上がる。平面精査を行っていないため、出土遺物はない。

③Ⅲ期の遺構（図50～60、図版35～45）

基本層序の2層より下位で、2層下部の上面から掘り込まれている遺構をⅢ期とした。基本層の2層と2層下部の区分が難しい部分も多く、実際の調査においては、Ⅱ期とⅢ期の遺構を区別することは、あまりできていない。調査後の整理において区分している場合がほとんどである。その際、検出された時点の標高や、礎石の場合は石の上面の標高などを参考にして、掘り込み面を想定した遺構も多い。

Ⅲ期の開始については、Ⅱ期の下限との関係から、19世紀前葉頃と考えられる。下限については、次のⅣ期が屋敷が取り戻された後の時期であることから、明治初頭頃と考えられる。ただし、明治維新後、直ちに屋敷が取り戻された訳ではなく、若干の年数は経過していた可能性が高い。

Ⅲ期の遺構配置図も、2枚に分けて図示した。2つの配置図は、遺構を記した図面は同じであるが、建物跡や柱列の組み合わせを示すラインを、分けて示したものである。Ⅲ期では、1号建物と2号建物が、同じ場所で重なっており、両者を合わせて図示すると、煩雑で判りにくくなる。そのため、Ⅲ期の中でも最も新しい時期と考えられる1号建物のみを、2枚目の遺構配置図（図51）に示し、1号建物以外の遺構を図50に示している。ただし、1号建物のみが、新しい時期の遺構として分離されるものではない。あくまでも、判りやすく図示するための、便宜的な措置である。本来は、2枚の遺構配置図を合わせたのが、Ⅲ期の遺構配置図となるものと考えていただきたい。遺構の全体的な配置状況も、2つの配置図を合わせた形で記述する。

調査区の北東部に、建物跡や柱列が集中している。ほぼ同じ場所で、2号建物、3号建物、4号建物が造られている。これらの建物の周間に、3～6号柱列が造られる。また、2号建物と一部が重なり、調査区北東部から中央部にかけて広がる1号建物が造られる。Ⅲ期の存続期間から見て、これらの建物などは、比較的短い時間で造り替えられていったものと考えられる。これら以外にも、調査区南東部にも礎石と考えられるものが分布している（図版37）。礎石の組み合わせが判明せず、建物を復元できなかったが、東南部にもⅢ期に礎石建物が存在したことは間違いないと思われる。G-11区には、かなり大きな礎石も検出されており、規模の大きな建物が存在した可能性もある。これらの礎石と一部重なるが、南東部では、19号溝、17号土坑、石敷遺構や、植や枆を埋設した遺構が分布している。

2号建物や4号建物の西側にある、調査区の北半部でも、中程から西よりの区域には、2号溝、6号溝、18号溝・26号溝、木樁を埋設した7号溝が分布し、溝が多く造られていることが特徴である。その他には、ゴミ穴と考えられる2号土坑が分布する。北東部の建物や柱列が展開する区域とは、明らかに様相が異なっており、区域ごとに使われ方に差があったことを示すと考えられる。

調査区中程から南半部では、D・E列に南北方向の1号柱列や2号柱列が伸び、屋敷地を区画するものと考えられる。1号柱列のすぐ東側の南壁沿いには、石組で護岸した池状遺構がある。

調査区西よりの、米軍共同溝より西側の区域では、14号溝や2号井戸がある程度で、遺構密度は低い。

【池状遺構新段階】（図57・58、図版40）

D～F-10～12区で検出された、石組で護岸された遺構である。形態から、池となる可能性が高いと考え、池状遺構とした。東岸は一時期の石組だけが検出されているが、西岸では石組の下層に、もう一段階古い護岸が確認されている。そのため、池状遺構は新古の2段階に分離した。古段階はⅡ期に遡る可能性があるため、Ⅱ期で記載した。ここでは新段階のみについて記載する。

新段階の掘り方は、2層下部の上面から掘り込まれており、Ⅲ期に所属すると考えられる。埋土からは陶磁器類が比較的多く出土しており、19世紀代に下る遺物が主体を占める。19世紀中葉以降に普及する軟質施釉土器の培塿も出土している。このため、幕末ごろまで使用されていた可能性が高いと考えられる。

北側が攪乱によって壊されており、南側は調査区外へ延びる。東岸と西岸は緩やかに湾曲しており、北側で回り込みつながっていくものと思われる。南壁際での東西の幅は、石組の内側で測って4.3m程度である。東岸は、

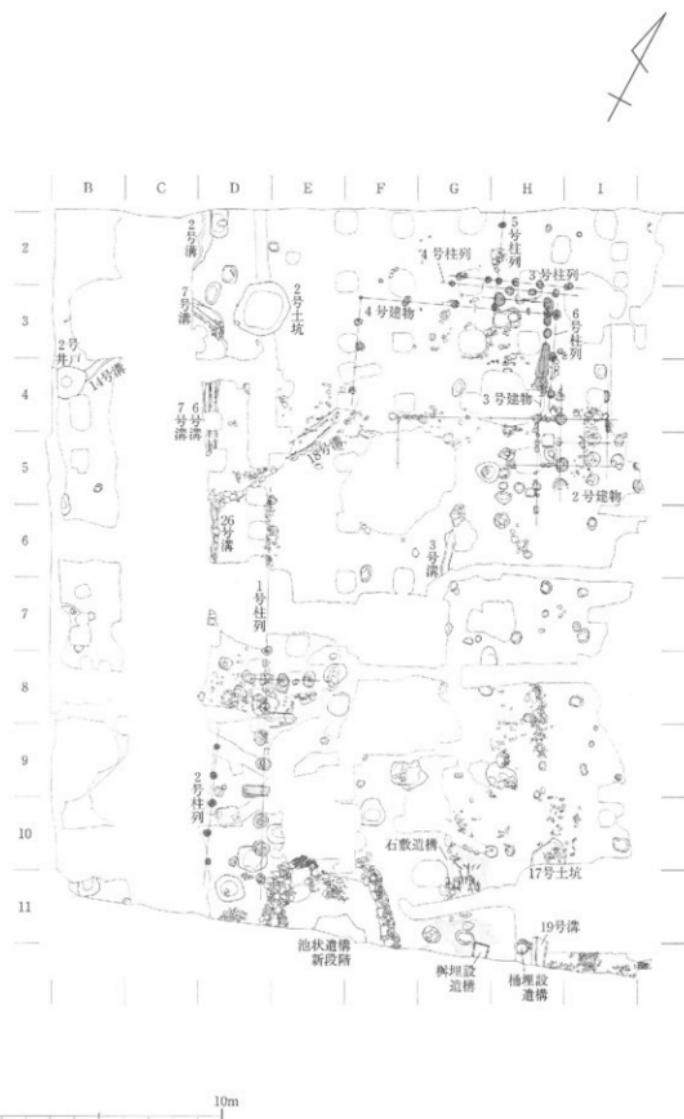


图50 武家屋敷地区第7地点III期遗构配置图(1)
 Fig.50 Distribution of features belonging to phase III at BK7 (1)



Fig.51 武家屋敷地区第7地点Ⅲ期遺構配置図(2)
Fig.51 Distribution of features belonging to phase III at BK7 (2)

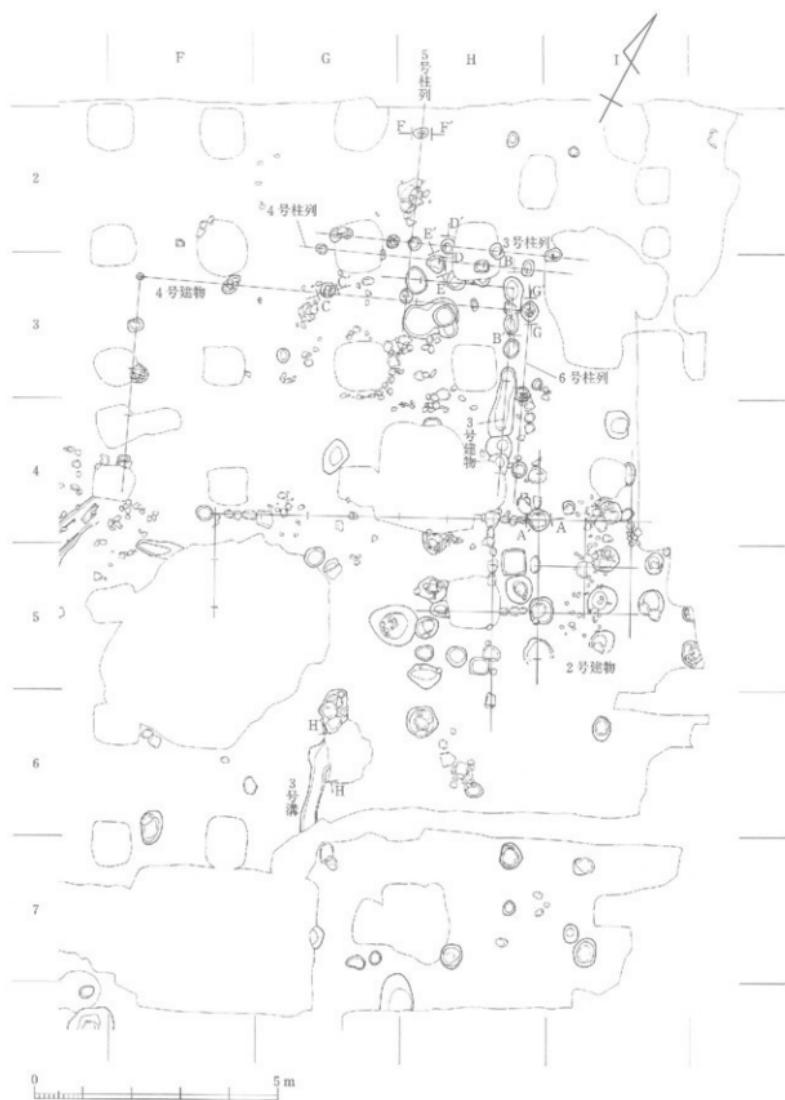


図52 武家屋敷地区第7地点Ⅲ期の遺構 (1)
Fig.52 Features belonging to phase III at BK7 (1)

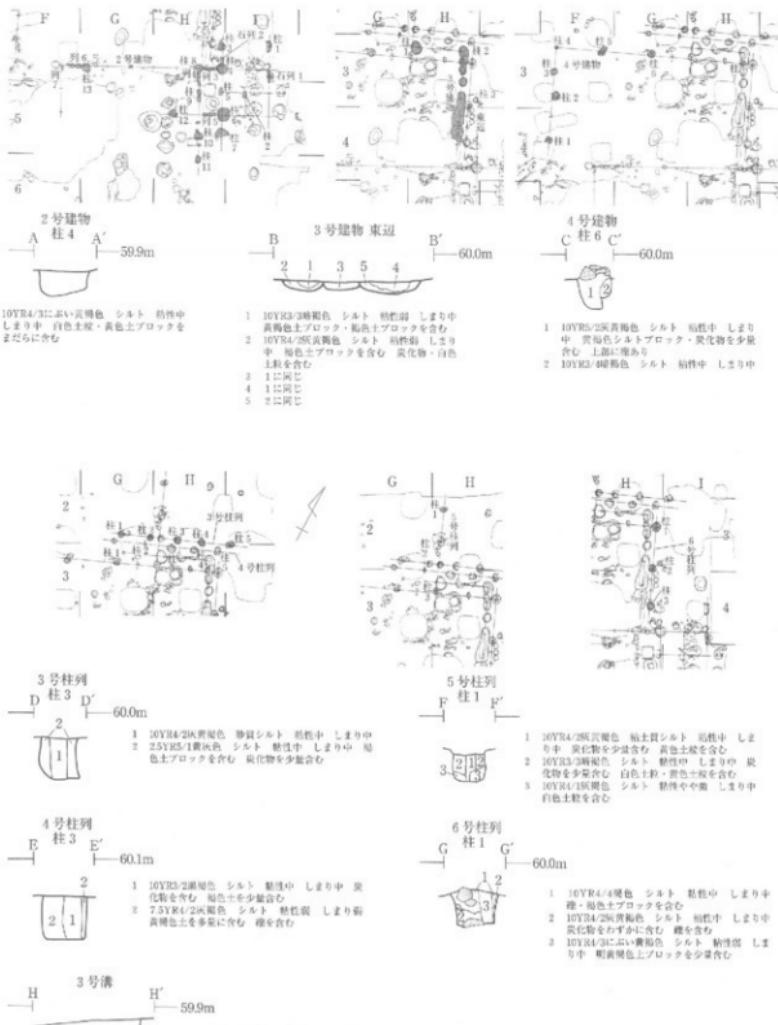


図53 武家屋敷地区第7地点III期の遺構(2)
Fig.53 Features belonging to phase III at BK7 (2)

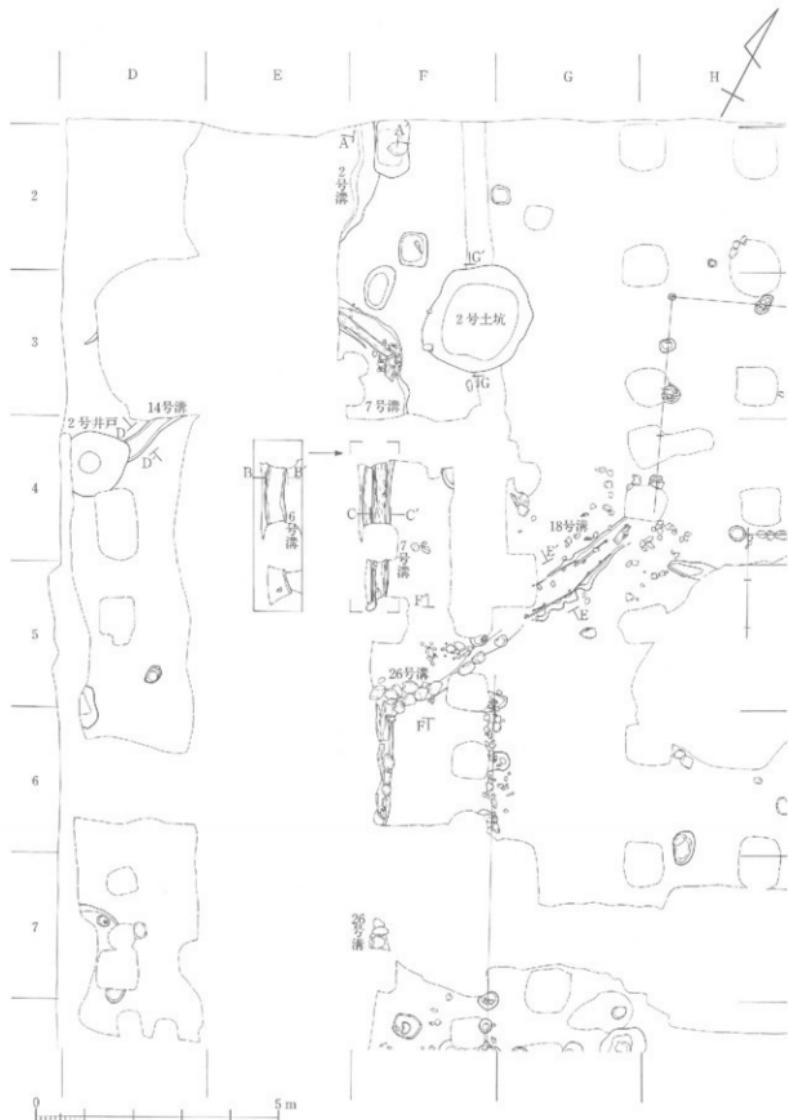


図54 武家屋敷地区第7地点III期の遺構 (3)
Fig.54 Features belonging to phase III at BK7 (3)

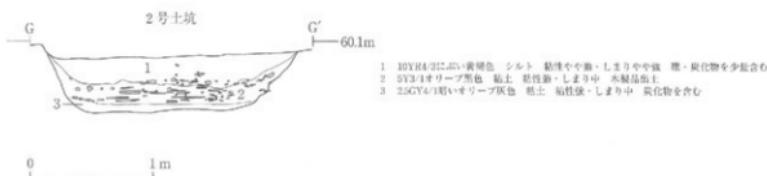
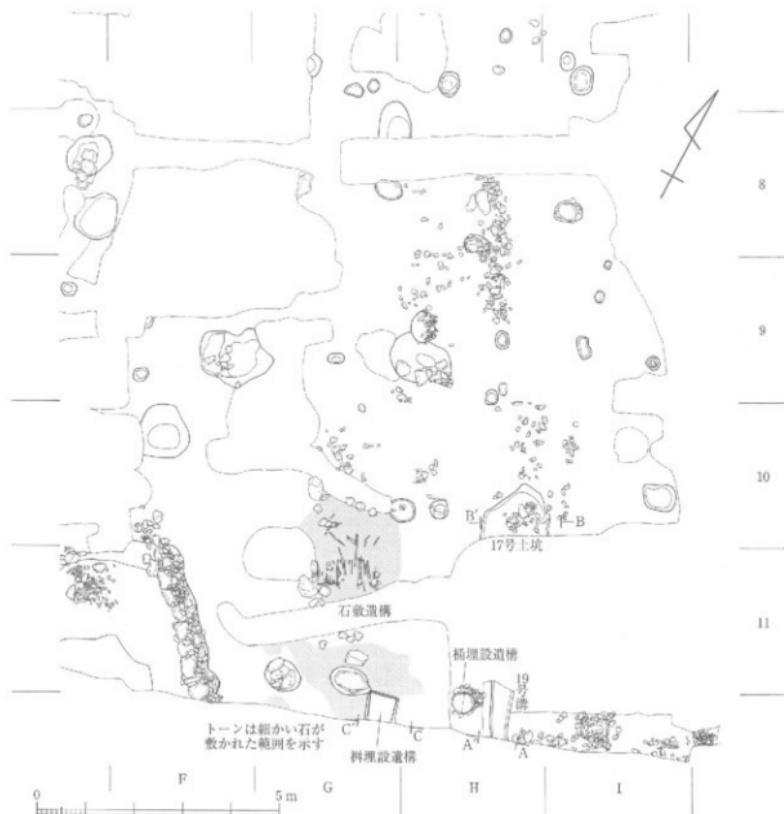
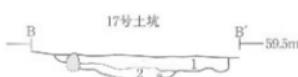


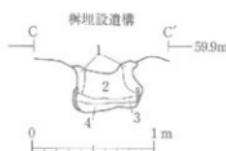
図55 武家屋敷地区第7地点Ⅲ期の遺構(4)
Fig.55 Features belonging to phase III at BK7 (4)



19YR4/1褐色
シルト 粒性弱・しまり強 硫化物をブロック状
に多く含む 小礫をわずかに含む



1 7.5YR8/1褐色
シルト 粒性弱・しまり強 硫化物を多く含む
2 10YR4/1褐色
粘土質シルト 粒性弱・しまり中 黄褐色土粒土ブロック
をさらにわずかに含む 硫化物をわずかに含む
2 10YR3/2褐色
シルト 粒性中・しまり中 明洪褐色土粒をまばら
に含む



1 10YR4/2灰褐色
シルト 粒性弱・しまり弱 硫化物を多く含む
2 10YR4/1褐色
粘土質シルト 粒性弱・しまり中 黄褐色土粒土ブロック
をさらにわずかに含む 硫化物をわずかに含む
3 7.5YR3/1褐色
粘土 粒性弱・しまり中 硫化物をわずかに含む 硫化
物をわずかに含む
4 7.5YR3/1褐色
粘土 粒性弱・しまり中 硫化物をブロック状に含む

図56 武家屋敷地区第7地点III期の遺構(5)
Fig.56 Features belonging to phase III at BK7 (5)

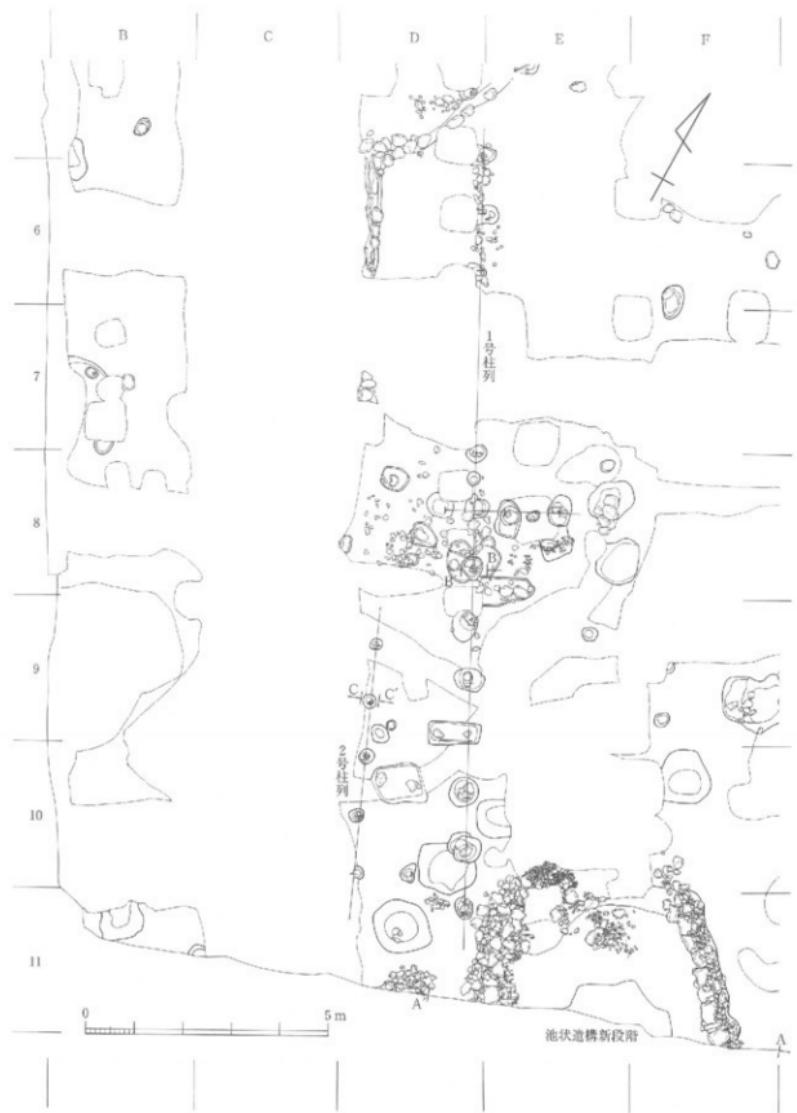


図57 武家屋敷地区第7地点III期の遺構 (6)
Fig.57 Features belonging to phase III at BK7 (6)

池状構造新段階

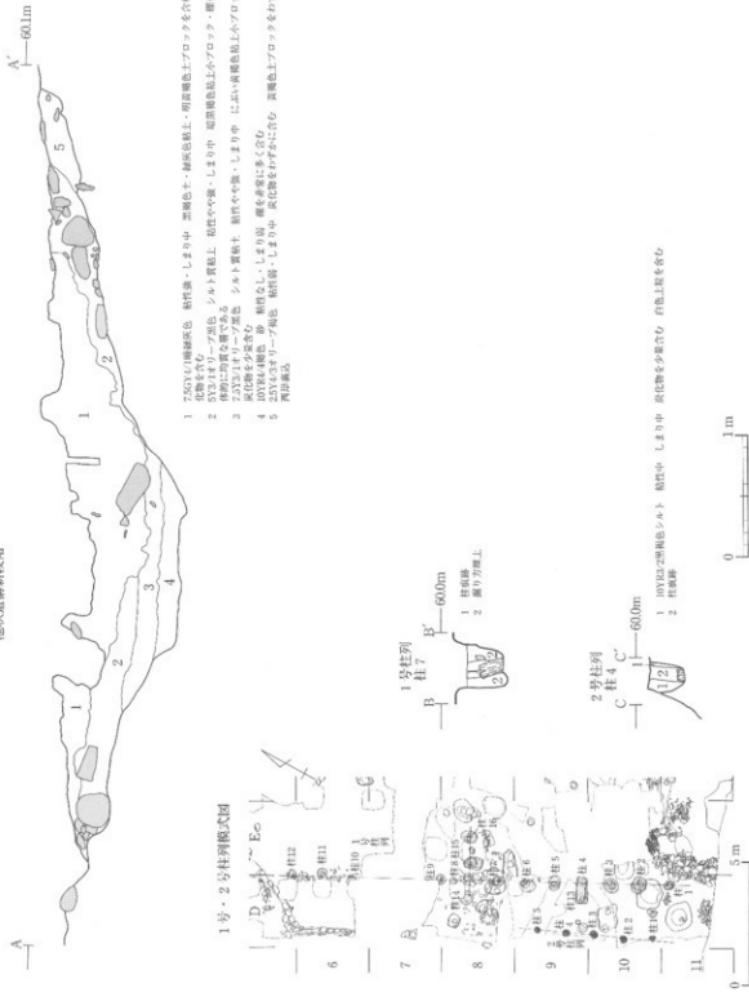


図58 武家屋敷地区第7地点Ⅲ期の遺構 (7)
Fig.58 Features belonging to phase III at BK7 (7)

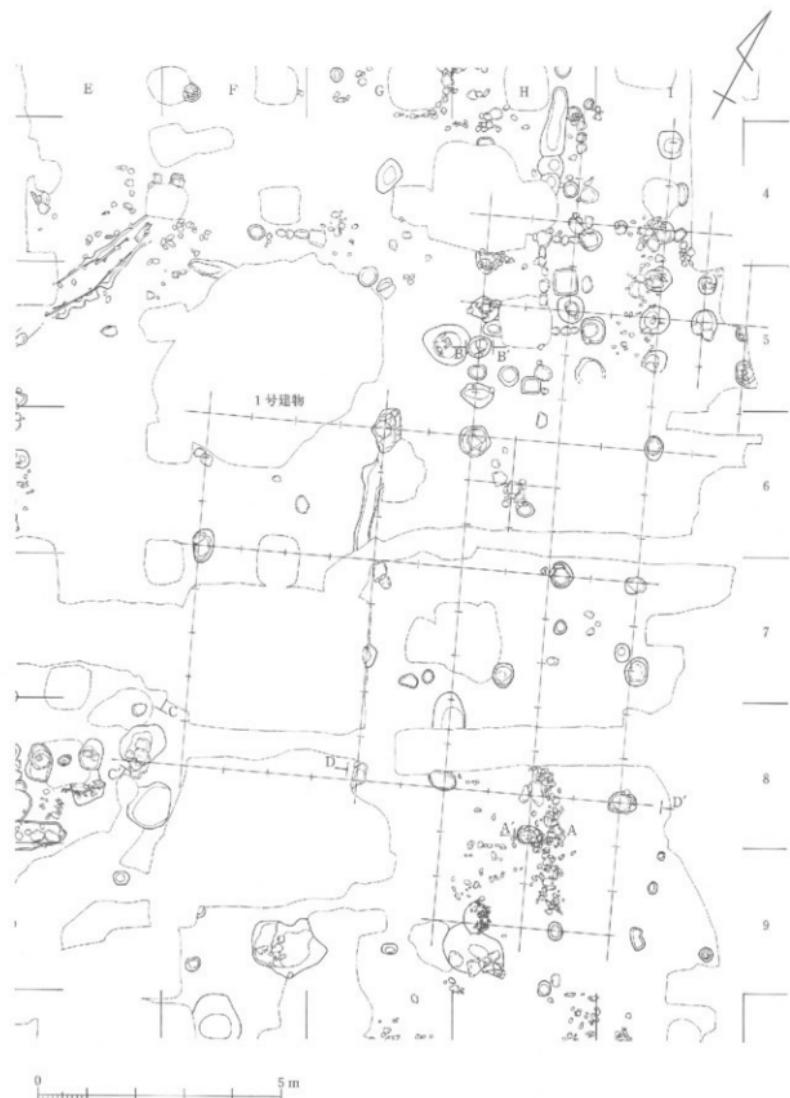


図59 武家屋敷地区第7地点III期の遺構 (8)
Fig.59 Features belonging to phase III at BK7 (8)



図60 武家屋敷地区第7地点Ⅲ期の遺構(9)
Fig.60 Features belonging to phase III at BK7 (9)

柱20 10Y4-31-31黄褐色 シルト 粘性弱 しまりや強 に含む黄褐色土小プロック
柱27 10Y4-31-31黄褐色 シルト 粘性弱 しまりや強 に含む黄褐色土小プロックを含む。
柱27 柱27を含む。炭化物を少含む。

柱13 10Y3/4-26黄褐色 シルト 粘性強 しまり強 黄褐色土小プロックを含む。

柱13 10Y3/4-26黄褐色 シルト 粘性強 しまり強 黄褐色土小プロックを含む。

30~50cm程度の大きさの亜角礫を掘えており、背後には10~15cm程度の川原石を詰めて、裏込めとしている。西岸は、東岸ほど石組の残存状況が良くなく、残された石は、東岸より小振りである。川原石で裏込めがなされているのは同じである。底面は南壁際の中央部で、一段深くなっている。南壁際での深さは110cmで、さらに深くなっていくものと考えられる。北側よりの底面には、細かな円礫が敷かれていたが、全体には及んでいない。調査区南壁のセクションにはかかっていないが、底面近くには、細かな円礫からなる砂礫層が北側に堆積していた。最上部の埋土1層はブロック状の土が混じり合うもので、ある程度埋没した後、人為的に埋め戻されたと考えられる。遺物は、磁器、陶器がやまとまつて出土している。土師質・瓦質土器、軟質施釉土器、瓦はあまり多くない。他に、木製品、金屬製品、石製品も出土している。

【1号建物】(図59・60、図版35)

E~J-4~9区で検出した礎石建物である。2層下部上面から掘り込まれていると判断し、Ⅱ期に含めた。いくつかのピットと切り合っているが、切り合い関係が判る場合は、いずれのピットよりも1号建物が新しい。2号建物の柱12が、1号建物の柱23と、わずかに重なるが、前後関係はあまり明確にできなかった。次に述べるように、柱間寸法から考えて、1号建物の方が2号建物より新しいと考えられる。

1号建物の柱間寸法は、1間が6尺と考えられる。6尺3寸の可能性も想定し、様々な可能性を検討したが、ズレが生じてしまう。一方、6尺と考えると、おむね合致することから、1間の寸法は6尺であったと判断した。これまでの二の丸地区や武家屋敷地区の調査では、江戸時代には6尺が使われている例は無い。江戸時代初期に6尺5寸が使われた以外は、6尺3寸が使われている。一方、武家屋敷地区第4地点で発見された、明治時代の第二部屋の建物では、1間の寸法が6尺となっていることが確認されている(年報13)。6尺が使われ始める時期については、事例が少なく確定できないが、明治時代以降に変化したと考えた方が良いであろう。その場合、1号建物の時期が問題となる。2層が薄い部分が多いため、1号建物が2層の下位から掘り込まれているという認識が誤っている可能性も完全には排除できない。しかし、2層を除去してから礎石の上面が露出しているものが多く、ここでは2層より下位から掘り込まれてⅢ期に相当するとしておきたい。ただし、柱間寸法から見て、1号建物がⅣ期に下る可能性は完全に否定できない。またⅢ期の存続時期は、明治初頭まで含む可能性が高いため、1号建物がⅢ期に属し、その中でも最も新しい明治初頭になる可能性は高い。しかし、明治初頭は屋敷が取り扱わしていく時期であり、その中で、なにゆえ新たに建物を建てたのか疑問が残る。

各所で搅乱と重なっており、本来礎石が存在したにもかかわらず、搅乱によって壊されている場合も多いと思われる。柱12や柱17は柱筋から微妙にずれるため、異なる造構を構成する可能性もあるが、他の礎石との関係も考慮し、1号建物を構成するものと考えた。残されていない礎石があった可能性もあることから、建物の詳細な構成は明らかではない。南北方向の柱間は、1間間隔で柱筋が通ることが多い。一方東西方向は、1間間隔とならずに、1間半間隔をとる部分も多い。北半部では、半間間隔で礎石が設けられている部分が多い。南半部でも、比較的柱筋が通る場所の間に、半間間隔で礎石が認められる場所もある(柱20・21・33)。柱15の北側には、地覆石に石が並んでいる部分もある(右列)。全体としては、南北方向では9間分、東西方向では6間半分を確認したこととなる。方向はN-24°-Wである。

礎石は、20~55cmの大きさの円礫から亜角礫を用いており、南側ほど大きな石が使われている傾向がある。掘り方内に直接礎石を据えている場合がほとんどで、根固めとなる小礫が入っているのは、柱21だけである。大きな石が、二重に重なっている場合もある。柱19や柱23など、複数の石を組み合わせたように積み重ねている場合もある。このような、大きな石を重ねたり、複数の石を組み合わせる礎石の据え方は、江戸時代の建物にはほとんど見られない方法である。遺物は、磁器、陶器、土師質土器、瓦、木製品が出土しているが、いずれも量はわずかである。

【2号建物】(図52・53、図版36)

F～I-4～6区で検出された礎石建物である。2層下部上面から掘り込まれており、Ⅲ期の遺構と判断される。3号建物とは直接の切り合い関係はつかめていないが、位置関係から見て、同時存在は難しいと考えられる。3号建物は礎石が全て取り払われているのに對して、2号建物は礎石がほとんど残されている。この点から、3号建物が古く、その礎石が取り払われた後に、2号建物が造られたと考えるのが自然であろう。擾乱で各所が壊されているものと思われる。遺物は出土していない。

礎石と礎石をつなぐ石列状の地覆石からなる。柱間寸法は1間を6尺3寸としており、場所によって半間間隔で礎石が据えられている。方向はN-27.5°-Wである。全体として、東西4間半、南北2周半の範囲が検出できたが、さらに広がっていたと思われる。礎石は25～35cmの川原石を用いており、幅35～50cmの掘り方に据えられている場合が多い。掘り方は20～30cm程度と深く、それを埋め戻した上に礎石を置いている。根固め石が詰められている例はない。礎石の中には、掘り方が明瞭にとらえられなかつたものもある。掘り方がはっきりしない礎石には、床束を支える礎石であった可能性も考えられるであろう。

礎石をつなぐ地覆石と考えられる石列部分は、礎石より一回り小さい15～20cm程度の川原石を用いている。石列の部分は、石の周側を少しづつ削りながら、掘り方の検出に努めたが、明確な掘り方はほとんど確認できなかった。石の大きさとほとんど同じ程度の範囲を、わずかに詰めた程度の掘り方であったと推定される。そのため石が動かされてしまうと、掘り方の検出は極めて難しくなってしまう可能性が高い。

地覆石は、本来は礎石の間をつなげていたと想定されるが、わずかしか石が残されていない場合も多い。柱1の南側には石列1があるが、他と比べると石の並びがはっきりしない。石列2は、柱3と柱4をつないでいるが、柱3より北側にも延びていた可能性がある。石列3は、柱4から柱8をつなぐが、柱8の西側にも1個だけ石が残されており、さらに西側へ石列が延びていたことは間違いない。柱8から柱9を経て、石列4が南へ延びるが、柱11までつながっていた可能性がある。石列5は、柱6から西へ延びるが、これとは別に、柱6の南にも石があり、南へも石列が延びていた可能性がある。石列6は柱13から西へ延び、半間のところで南に延びる石列7につながる。この石列6は、石列3と一直線に並んでおり、本来は石列がつながっていた可能性が高い。地覆石がある場所は、建物の主要な構造を支える部分と考えられるが、残されていない礎石や地覆石が存在した可能性もあることから、建物全体の詳細な構成は明らかではない。

【3号建物】(図52・53、図版37)

H-3・4区で検出した礎石建物である。礎石は残されておらず、掘り方のみが検出されている。柱1が5号柱列の柱3を切り、東辺が4号建物の柱7と6号柱列の柱3を切っている。直接の切り合い関係はないが、2号建物とは位置関係から見て、同時存在は難しいと考えられる。上述のように、礎石を取り除いた3号建物が古く、2号建物が新しい可能性が高い。このように、3号建物より新しい遺構も古い遺構もⅢ期と考えられることから、3号建物もⅢ期と判断した。礎石を取り除いた後の、浅い掘り方のみが残存していると考えられる。遺存状態は悪く、東辺の一部と、北辺の礎石掘り方1基を検出しただけである。方向はN-24°-Wである。6尺3寸を1間としていると考えられる。柱の礎石は1間間隔で据えられていたと推定した。北辺の柱1は単独で存在しているが、東辺は浅いピットが列状に連なっている。礎石をつなぐ形で、地覆石が列状に据えられていたと考えられる。掘り方の幅は、25～50cm程度で、深さは6～8cm程度と浅い。東辺の断面を見ると、図で1・3・4として示した層が、石の抜き取り跡の壇上で、2・5が掘り方の壇上であると考えられる。遺物は、磁器、陶器、土師質・瓦質土器、軟質施釉土器が出土しているが、いずれもわずかな量である。

【4号建物】(図52・53、図版37)

F～H-3・4区で検出した、掘立柱建物である。北辺と西辺のみが確認できており、それ以外の延び方は判明していない。1間を6尺3寸とした柱間寸法で造られている。西辺は、半間間隔で柱穴が配されている。北辺

は、1間間隔で柱穴が造られているが、柱6と柱7の間は、2間分の間隔が空いており、ちょうど中間に柱穴がみられない。柱7が、3号建物の東辺に切られている。また、搅乱によって破壊されている部分もある。方向はN-23.5°-Wである。柱穴の形状や規模は、違いが大きい。北西隅の柱4は、径15cm程度のはば円形で、極めて小さい。他の柱穴は、25~45cmの大きさで、ほぼ円形のものや、隅丸方形のものまで変化が大きい。礫が入れられているものが多く、柱の脇に詰めたと考えられる。遺物は、磁器、陶器、土師質土器皿がわずかに出土しているだけである。

4号建物の周囲には、後述する3~6号柱列が造られている。いずれも方向がN-22.5~23.5°-Wで、4号建物とはほぼ同じである。同時に存在したか否かは確定できないが、位置関係から見て、密接に関連する可能性が高いものと考えられる。4号建物は3号建物に切られているが、5号柱列と6号柱列も3号建物に切られており、切り合ひ関係からも、ほぼ同じ段階と考えて矛盾しない。6号柱列は、2層下部上面から掘り込まれており、Ⅲ期に属することは確実である。以上の点から、4号建物と3~6号柱列は、ほぼ同じ段階の遺構と考え、いずれもⅢ期の遺構とした。

【1号柱列】(図57・58、図版38)

D-E-5~11区で検出された、南北方向の掘立柱列である。控え柱を伴いながら、南北に長く伸びる柱列であることから、屋敷地を区画する塀であったと考えられる。2層より下位で、2層下部上面から掘り込まれていると考えられることから、Ⅲ期とした。Ⅰ期もしくはⅡ期の8号柱列、Ⅱ期の27号溝、池状遺構古段階を切っている。柱1より南側に延びていた場合、柱穴がもう1基、調査区内で検出されても良い位置関係にあるが、検出できていない。池状遺構新段階の西岸の掘り方によって塀されている可能性もあるが、明確にはできていない。そのことでもあって、池状遺構新段階との前後関係は把握できていない。

南北方向の柱筋では、途中の7区で搅乱により壊されているが、12基の柱穴が検出されている。柱間寸法は3尺9寸と考えられる。搅乱で途切れる柱9と柱10の間は、この寸法では合わないため、この部分だけ異なる寸法が使われていた可能性がある。柱1から柱12まで、15.6mの長さを検出したこととなる。方向はN-27°-Wである。柱4と柱8には西側に控え柱の柱穴(柱13・14)が確認できた。柱14は独立した柱穴であるが、柱13は柱4と同じ掘り方に入れられている。南北の柱筋から控え柱までの寸法は2尺のようである。控え柱が付く柱8では、東側にも直交する柱筋が延びていく。南北の柱筋から2尺のところに柱15があり、さらに3尺9寸のところに柱16がある。控え柱を兼ねて、東側に延ばしたものであろうか。

柱穴は、径40~65cmのはば円形を呈するものが多いが、隅丸方形に近いものもある。控え柱と同じ掘り方におさめる柱4・13は、長さ108cm、幅50cmの長方形の掘り方である。柱穴の深さは32~66cmで、やや差が大きい。柱7では柱材が残されており、太さ12cm程度の丸材と思われる。川原石を詰め込んだものも多く、柱の脇に詰めるように入れたものと考えられる。東側に延ばされた柱15と柱16では、方形の板材を礎板として底面に敷いていた。遺物は、磁器、陶器、土師質・瓦質土器、軟質施釉土器、土鉢、瓦、弾丸、火打石が出土しているが、いずれも量はわずかである。

【2号柱列】(図57・58、図版38)

D-9・10区で検出された、南北方向の掘立柱列である。2層の下面より掘り込まれており、Ⅲ期に属すると考えられる。5基の柱穴が検出されており、柱間寸法は3尺9寸と考えられる。方向はN-23°-Wである。南側は搅乱によって破壊されている。北側は、対応する柱穴が見当たらないことから、これ以上延びていかないようである。Ⅱ期の27号溝を切っている。柱穴は、径25~30cmのはば円形で、深さは30cm前後である。柱2・3・4で柱材が残っていた。径10cm前後の丸材である。遺物は、陶器と土師質土器の皿がそれぞれ1点出土しているだけである。

【3号柱列】(図52・53、図版38)

G～I-2・3区で検出された、東西方向の掘立柱列である。5基の柱穴が検出されており、柱間寸法は3尺7寸と考えられる。方向は、直交する向きに直して、N-225°-Wである。II期の15号溝、11号土坑、21号土坑を切っている。擾乱によって削平されている部分もある。東側の延びは、Ⅳ期の落ち込みなどがあり、不明である。西側は、対応する位置に柱穴は検出されていない。柱穴は、径25～35cmのほぼ円形を呈し、深さは30cm前後である。柱3では柱痕跡が確認されており、太さは14cmである。柱2では、川原石が詰められたような状態で確認されており、柱の脇に詰めるように入れたものと思われる。遺物は、土師質土器皿と瓦がわずかに出土しているだけである。

【4号柱列】(図52・53、図版39)

G・H-2・3区で検出された、東西方向の掘立柱列である。3号柱列のすぐ南側に平行している。5基の柱穴が検出されている。このうち、西側の柱1から柱3までの2間分は、柱間寸法が4尺である。一方、東側の柱3から柱5までの2間分は、柱間寸法が3尺となっている。同じ柱列で、途中で柱間寸法が変わっている。方向は、直交する向きに直して、N-225°-Wである。II期の15号溝、11号土坑、18号土坑を切っている。擾乱によって壊されている部分もある。東側の延びは、Ⅳ期の落ち込みなどがあり、不明である。西側は、対応する位置に柱穴は検出されていない。柱穴は、梢円形から隅丸長方形を呈し、長軸の大きさで25～38cm、深さは30～40cmである。柱1・3・5で柱痕跡が確認されており、太さは11～16cmである。遺物は、磁器、陶器、土師質土器皿がわずかに出土しているだけである。

【5号柱列】(図52・53、図版39)

H-2・3区で検出された、南北方向の掘立柱列である。3基の柱穴が検出されており、柱間寸法は3尺7寸と考えられる。方向はN-225°-Wである。柱1と柱2の間は2間分の間隔があいており、その中間に川原石がまとめて置かれていた。5号柱列と関係するものかもしれないが明確ではない。北側は調査区外へ延びていく可能性がある。南端の柱3の位置が、4号建物の北辺と一致するため、一連の構造となる可能性もある。柱3が3号建物の柱1に切られている。II期の11号土坑、19号土坑を切っている。柱穴は、径25～30cmの円形から梢円形を呈し、深さは30cm前後である。柱3で柱痕跡が確認されており、太さは8cmである。出土遺物は磁器、土師質土器皿、瓦がわずかに出土しているだけである。

【6号柱列】(図52・53、図版39)

H-3・4区で検出された、南北方向の掘立柱列である。3基の柱穴が検出されており、柱間寸法は5尺5寸と考えられる。方向はN-23.5°-Wである。柱1が4号建物の柱7の、すぐ東側に並んでおり、一連の構造となる可能性もあるが、明確ではない。2層下部上面から掘り込まれており、Ⅲ期と判断した。柱2が、3号建物の東辺に切られている。2間分のみの検出であり、南北がさらに延びるかどうかは、はっきりしない。柱穴は、径30～40cm程度の、ほぼ円形を呈し、深さは30cm前後である。柱1では、底面に礎板として川原石が置かれていたが、柱痕跡の位置はずれていた。柱痕跡の太さは10cm程度で、柱のまわりに、川原石を詰めている。出土遺物は、陶器1点と土師質土器皿が1点出土しているだけである。

【2号溝】(図54・55、図版42)

C・D-2区で検出された。2層の下で検出されているが、2層下部が存在しない場所であるため、2層下部との関係はわからない。4号溝、ピット6を切っている。残存部分が南北に長い形状をしていることから溝と推測した。共同溝による擾乱の東側で検出されており、大部分が擾乱によって破壊されている。遺構の立ち上がりの東側部分だけが検出されており、遺構底面などは確認できない。そのため、本來の機能が溝であったのかどうかは確実でない。共同溝擾乱を挟んだ西側のB-2区では4号土坑が検出されており、4号土坑の規模などから、その東辺という可能性も考えたが、出土遺物の時期がずれるため、異なる遺構と判断した。残存部分の南北の長

さ245cm、深さは20cmである。陶器、土師質・瓦質土器などがごくわずか出土している。陶器では大堀相馬産の青土瓶の破片がみられ、19世紀前葉以降のものであろうと考えられる。掘り込み面は確定できなかったが、出土遺物からⅢ期に属する可能性が高いものと考えた。

【3号溝】(図52・53、図版42)

G-6区で検出された。2層を掘り下げて検出されているが、2層下部や4層が存在しない場所であるため、掘り込み面は特定できなかった。大堀相馬産の鉄軸を施した陶器の瓶が出土しており、19世紀に下る可能性があることから、Ⅲ期に属する可能性が高いと判断した。南北方向に延びる素掘りの溝であるが、南北それぞれが搅乱によって破壊されているため、展開などは不明である。I期の33号溝を切っている。残存する長さ約1.8m、上幅約30cm、下幅約20cm、深さ約14cmと規模は非常に小さい。方向はN-16°-Wである。磁器、陶器、土師質土器、土人形、瓦が出土しているが、いずれもごくわずかである。

【6号溝】(図54・55、図版42)

D-4・5区で検出された南北方向に走る素掘りの溝である。2層下部の上面から掘り込まれており、掘り込み面から当期に属するものと考えられる。25号溝を切っている。溝の南北端や中央部は、搅乱によって破壊されているため、つながりなどの全体形状は不明である。検出できた長さは2.8mである。上幅は約34cm程度、下幅約25~30cm、深さ6cm程度で、方向はN-30°-Wである。6号溝の下位には、一部重なって同じ方向に7号溝が存在する。しかし、6号溝が断片的であることなどから、両者の関係は不明である。遺物は、陶器、土師質土器がごくわずか出土している程度である。

【7号溝】(図54・55、図版42・43)

C・D-3~5区で検出された。2層下部上面から掘り込まれており、25号溝を切っている。掘り込み面からⅢ期と判断される。木樋を据え付けた溝で、南北方向に延び、D-3区で「くの字」状に西に折れる。南北部分の方向はN-28°-W、屈曲部分より西側は、N-81°-Wである。ピット59を切っている。南端と西端は搅乱により破壊されているため、つながりは不明である。木樋の幅は約17cm、掘方幅は約32~60cmである。木樋の高さは残りのよいところで約8~10cm程度、板材の厚さ2~3cm程度であるが、保存状態が悪く、ほとんど残存していない箇所もある。木樋の屈曲部分は、木材を斜めに加工して、溝の曲がりに合わせて据えられている。木樋の残存状態があまり良くないため確実ではないが、木樋底面のレベルは北側でわずかに高いことから、北から南に向かって流れていたのではないかと推測される。遺物は、磁器、陶器、土師質土器、軟質施釉土器、寛永通宝が出土しているが、いずれもごくわずかである。

【14号溝】(図54・55、図版43)

B-4区で検出された素掘りの溝である。掘り込み面ははっきりしないが、比較的高いレベルで確認されたことから、Ⅲ期に含めた。北側部分を搅乱に、南側を2号井戸によって切られているため、本末の長さは不明である。残存部分の長さは1.4mで、上幅は40cm、深さは6cmとごく浅い。方向はN-70°-Wである。検出範囲が狭いため、流れている方向は判らない。遺物は出土していない。

【18号溝】(図54・55、図版43・44)

E-4・5区で検出された。2層の下面から掘り込まれており、Ⅲ期の可能性が高いと考えたが、Ⅱ期に遡る可能性も残っている。I期の14号上坑を切っている。南西から北東にのびる溝で、北側、南側ともに搅乱によって破壊されており、そのつながりは確認されなかった。検出した長さは約3mである。高さ8~10cmほどの薄い板が、溝の側板として据えられており、底面は素掘りのままである。側板の隙ぎ目では、板が重なりをもって配置されている。側板の内側には杭が打たれ、側板が倒れないように作られている。溝の脇方には、石を抜き取ったような痕跡が確認される。このことから、本末は石組の溝であったが、後に側板を用いて作り替えている可能性が考えられる。側板の幅28~52cm、深さ約8cm、堀方の幅約48~76cmで、方向はおよそN-27°-Eである。

る。底面のレベルが北東側でわずかに低いことから、南西から北西に流れていた可能性が考えられる。18号溝の南西には26号溝が位置する。26号溝との関係については、後の26号溝で詳述するが、18号溝と26号溝は一連の溝であった可能性が高い。陶磁器類、瓦などが若干出土している。

【19号溝】(図56、図版44)

H-11・12区で検出された素掘りの溝である。2層の下位で、2層下部の上面から掘り込まれており、Ⅲ期に属する遺構である。北側部分は擾乱によって破壊され、その先の延び方は不明である。南側は調査区外に延びていく。I期の29号溝を切っている。検出できた長さは1.2mだけである。方向はN-22°-Wである。幅は44cm、深さは16cmで、断面形状は船底状を呈する。磁器、陶器、土師質土器、土製品、鉄釘が出土しているが、いずれもごくわずかな量である。

【26号溝】(図54・55、図版43・44)

D-E-5・6区で検出された溝である。2層の下位で検出されていることから、Ⅲ期の可能性が高いと考えたが、Ⅱ期に遡る可能性も残っている。I期の14号土坑と26号土坑を切っている。D-6区では南から北に延びている。検出した長さは2.8m、方向はN-25°-Wである。D-5区では北東に折れる。北東に延びる部分で検出した長さは3.1m、方向はN-28°-Eである。石組溝であったと推測されるが、石組みの抜けてしまっている箇所もある。D-6区では、溝の両端と、西側掘り方は擾乱によって破壊されている。D-5区でも溝の北西側では、石組みや掘り方は検出できなかった。溝の深さは約10~12cm程度で、底面のレベルから南から北東に流れていたものと推測される。

26号溝の北東には18号溝が位置している。2つの溝がつながる箇所にはちょうど擾乱があり、下面の14号土坑埋土と重複する箇所でもあるため、一連の溝かどうかを明確にすることはできなかった。しかし、18号溝と26号溝の方向がほぼ同じであり、いずれも底面は北東方向に低くなっていること、18号溝には石組溝を作り替えた痕跡があり、元々は石組溝であった可能性があることなど、溝の特徴に共通点がみられる。また、26号溝のD-5区では、数本の杭が確認されているが、この場所は、26号溝北西側の石組や掘り方が検出できなかったところである。18号溝では、石組溝を側板と杭を用いて改修していることが推測された。26号溝でも、この箇所では石組が除去され、側板と杭を用いた改修が行われた可能性が考えられ、改修方法にも類似した特徴が推測される。これらのことから、18号溝、26号溝は、一連のものであった可能性が挙げられる。D-6区で検出された木材については、石組を補強したものなのか、埋土に残された木本であるのかは残存状況がよくなかったため、不明である。遺物は陶磁器、木製品などが若干出土している。

【2号井戸】(図54、図版44)

B-4区で検出された遺構である。西側部分を擾乱で破壊されており、14号溝を切っている。掘り方はほぼ円形を呈し直径は132cm、深さは約180cmである。井戸枠や石組などは伴っておらず、素掘りである。形状から井戸と考えたが、1号井戸や4号井戸と比べると浅いため、井戸として機能できたか疑問が残る。半割して約60cmほど掘り下げたところで埋土が崩落したため、断面図は作成できなかった。底面には、ほとんど分解していない植物質からなる層が、厚く堆積していた。掘り込み面ははっきりしないが、調査の早い段階で検出され、検出面のレベルも比較的高いため、Ⅲ期に属すると判断した。磁器、土師質・瓦質土器、加工木が出土しているが、ごくわずかな量で、時期などが判るものは無い。

【2号土坑】(図54・55、図版45)

D-E-2・3区で検出された。2層を掘り下げている際に検出されており、2層下部の上面が掘り込み面と考えられる。掘り込み面や出土遺物から、Ⅲ期に属すると推測される。南北約230cm、東西約200cmの不整形円形を呈する土坑で、深さは約112cmである。浅い擾乱により、南北方向に土坑の中心付近が一部破壊されていた。II期の7号土坑を切っている。埋土は3層に分けられ、埋土2層からは陶磁器、瓦、土師質土器、瓦質土器、木

製品など多数の遺物が出土している。特に、陶磁器、木羽や加工木、樹皮などの出土が多く、ゴミ穴の可能性が考えられる。また、木製の鉢が完形に近い状態で出土している。大堀相馬産の縫白釉、青釉や鉄絵の土瓶などが出土しており、19世紀前葉から中葉頃のものと考えられる。

【17号土坑】(図56、図版45)

H・I-10区で検出された。掘り込み面は確定できなかったが、比較的高いレベルで検出されていること、陶器に19世紀に下るもののが含まれることから、Ⅲ期の遺構と考えた。南側が搅乱によって壊されており、全体の形状は判らない。東西の幅145cm、南北の残存高105cm、深さ20cmである。埋土には礫がやや多く含まれている。上層質土器皿がやや多く出土しているが、下層に存在する20号土坑や2号遺構などに本来含まれていたものが、混じり込んだ可能性がある。それ以外には、磁器、陶器、土鈴、瓦、加工木が出土しているが、いずれもごくわずかである。

【石敷遺構】(図56、図版41)

G・H-10~12区では、2層下部上面に細かな礫や川原石が敷きつめられていた。石敷きの範囲は不整形であるが、東西3.3m、南北4.9mの範囲に及んでいる。南側は、調査区外まで延びていくものと考えられる。石敷きの北よりの部分は、石敷きの上に、細い木材が並べて敷かれている。木材が敷かれている範囲は、東西125cm、南北120cmである。この部分は、石敷きの上面が若干窪んでおり、その区域に木材が敷かれていた。ちょうど、下層の2号遺構や4号戸井戸の上にあたり、これらの遺構埋土が沈み込んだ関係で、窪んだ地盤の弱いところに敷きつめたものと考えられる。木材が敷かれた窪んだ場所には、砂質土が堆積していた。磁器、陶器、上層質・瓦質上器、軟質施釉土器、土製品、瓦、加工木が出土しているが、いずれも少量である。陶器には、相馬産の縫白釉で胸輪を描いた端反小碗が含まれており、幕末まで下る可能性がある。

【桷埋設遺構】(図56、図版41)

調査区南壁際の、G-11・12区で検出した。側面部分に方形の木材が残存しており、楔形のものを埋設した遺構であると考えられる。2層より下位で2層下部を掘り込んでいることから、Ⅲ期の遺構と判断した。Ⅲ期の石敷遺構とⅠ期の30号土坑を切っている。南側は調査区外へ延びる。東西の幅55cmの掘り方に、ほぼ同じ大きさの桟状の木製品を埋設している。掘り方の深さは約40cmである。遺物は出土していない。

【桶埋設遺構】(図56、図版41)

調査区南壁際の、II-11・12区で検出された、桶が埋設された遺構である。桶は上部を除いて、ほぼ完全な形で残っていた。搅乱で削平された中で検出されているため、掘り込み面は判らない。すぐ南側の調査区南壁での基本層序の標高と比較して、2層下部上面から掘り込んでいる可能性があるものと考えてⅢ期とした。しかし、判断に悩む微妙な高さであり、掘り込み面が2層下部下面の可能性も残る。その場合にはⅡ期に属することとなる。直径80cmの掘り方の中に、径45cmの桶が埋設されている。掘り方の内部には、植の周囲を取り回すように、径15~20cmの円環を敷き詰めている。掘り方の深さは80cm程度で、埋土は1層である。桶の内部に堆積した埋土は2層に分かれ。遺物は磁器、陶器、土鈴質土器皿、瓦、木製品が掘り方から出土しているが、いずれもごくわずかな量である。

④IV期の遺構（図62～64、図版46～47）

2層上面から掘り込まれている遺構をIV期とした。

IV期は、烟として利用されていることから、この区域の武家屋敷が取り扱われた後の時期にあたる。やや不確実な部分も残るが、IV期は明治初期から明治20年前後までの間に限定され、中でも明治10年代を中心とする可能性が高いと考えられる。

調査区北よりのE～H-2・3区で、烟の可能性がある畝状遺構が検出されている。二の丸北方武家屋敷地に第4地点では、畝状遺構を取り囲む溝が検出されており、烟の区画が判明したが（年報13）、今回の調査では、烟の区画を示すような遺構は検出されていない。今回の調査では、2層の残存状態があまり良くないため、烟がどれだけの広がりを有していたのかは明らかにできなかった。

畝状遺構以外の遺構は少なく、遺構密度は低い。溝が2条と、土坑2基、石列1条などが検出されているだけである。また、落ち込みとしたものが2基ある。2層の上部を覆う上が、直接入り込むもので、異なる埋立て埋められている遺構とは区別して、落ち込みとした。2層上面の最後の段階で掘られて、そのまま整地で埋められたものと考えられる。

これらの遺構は、南西側に、やや集中する傾向がある。これらの遺構が広がる区域では、烟は造られていないかった可能性を示すものであろう。

【畝状遺構】（図62・64、図版46）

E-2・3区で3列、G・H-2・3区で4列の畝状の高まりが、東西方向に、平行して並んでいる。2層上面が畝状に高まっており、2層が烟の耕作土として使われたと考えられる。2層の残存状態が良くなく、擾乱で破壊されている場所も多い。そのため、それぞれの畝状の高まりが、もともと途切れていたのかどうかは判然としない。畝状遺構を取り囲む溝のような、烟を区画する遺構は検出されていない。畝状の高まりの下幅は50～75cm、上幅は15～35cm、高さは3～6cm程度と低く、残り具合は良くない。方向は、平均的な場所で計測すると、N-65°～Eである。

【1号溝】（図63・64、図版46）

D・E-8・9区で検出した溝で、新古の2段階に分かれる。いずれも2層上面から掘り込まれていると考えられることから、IV期とした。

古段階の溝は、両側に径10cm未溝の小ピットが並んでおり、杭を打った痕跡と考えられる。杭を立て、その外側に板を置くことで護岸としていた可能性が考えられる。西側は擾乱によって破壊されている。検出した長さは1.8mで、方向はN-25°～Eである。掘り方の幅50～70cmで、南北の杭列の間の幅は20～25cmで、深さは28cm前後である。検出した範囲が狭いため、どちらに流れていたかは明らかでない。東側には、径5～10cm程度の円錐を敷き並べた部分がある。疊が密に敷かれている範囲は、東西の長さは130cm、南北の幅50cm程度である。この石敷が検出された場所は、擾乱による削平が大きく、石敷を造る際の掘り込み面は確認できなかった。1号溝の東側に連続する位置に造られていることから、一連の遺構と考えた。特に、新段階の溝の、石組の内側の軸に対応する可能性がある。

新段階の溝は、古段階の溝とはほぼ同じ位置で造られている。両岸に川原石を並べた石組溝である。幅65cmほどの掘り方の中に、長軸の長さ25～40cm程度の川原石を並べており、深さは20cm前後である。検出した範囲が狭いため、どちらに流れていたかは明らかでない。北岸が北側へ屈曲しており、ほぼ直角に曲がって北側へ延びていたものと思われるが、西側が擾乱によって破壊されており、詳しいことは判らない。1号溝の南側にも、南北方向に類似した大きさの石が並んでおり、1号溝と関連する可能性もある。しかし、南岸の対応する位置には延びていないようであり、関係は不明である。東側には、古段階で述べたように石敷きがあり、それにつながっていた可能性が高い。検出した長さは、北岸の石組で東西2.6mである。東西部分の方向は、N-63°～Eで、

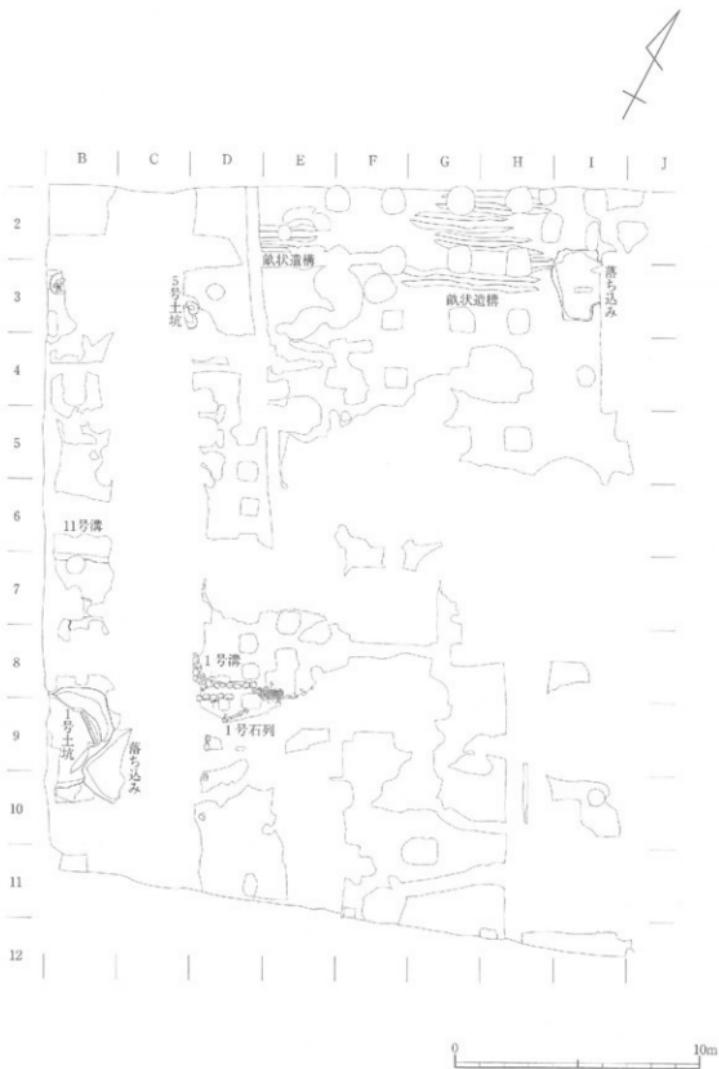


図61 武家屋敷地区第7地点IV期造構配置図
Fig.61 Distribution of features belonging to phase IV at BK7

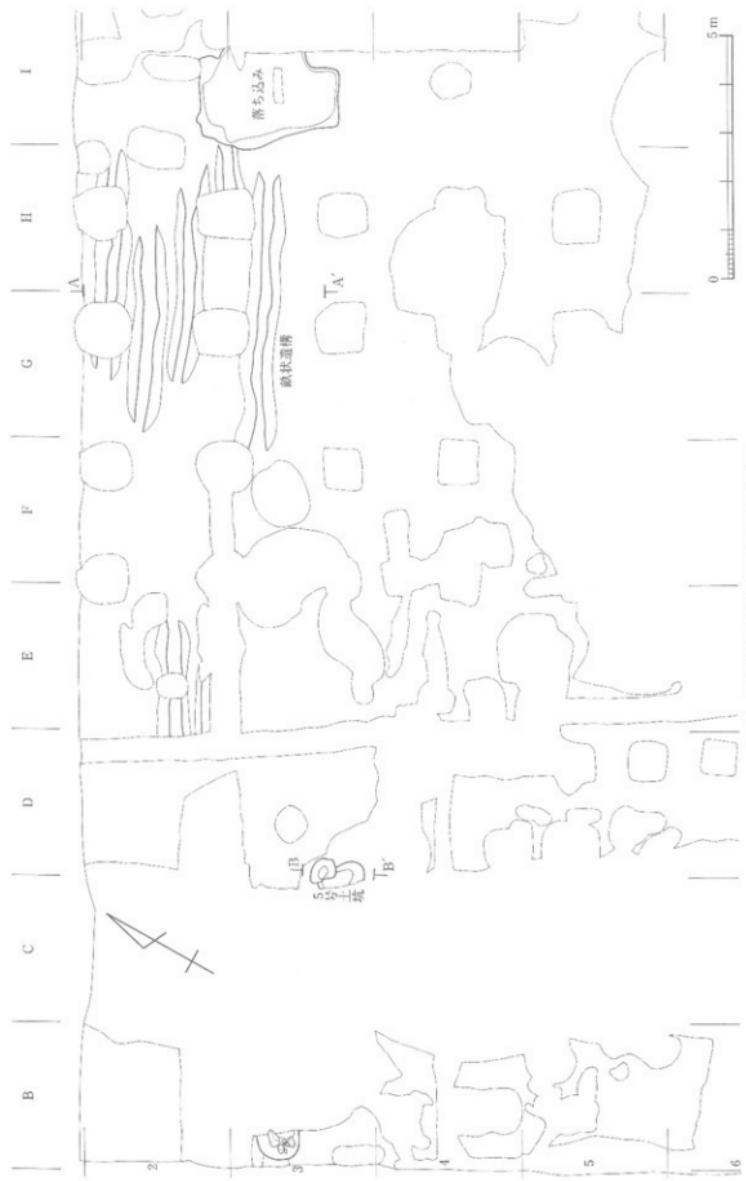


図62 武家屋敷地区第7地点IV期の遺構⁽¹⁾
Fig.62 Features belonging to phase IV at BK7 (1)

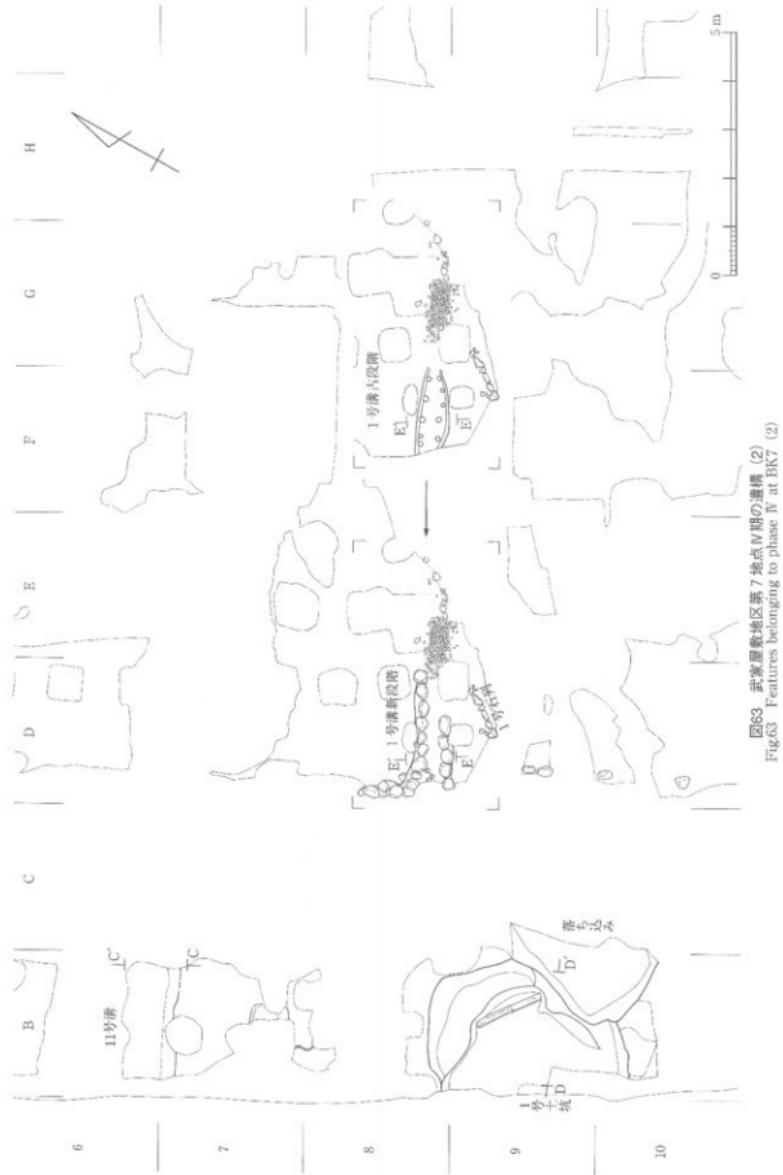


図63 武富里地区第7地点IV期の遺構
Fig.63 Features belonging to phase IV at DK7 (2)

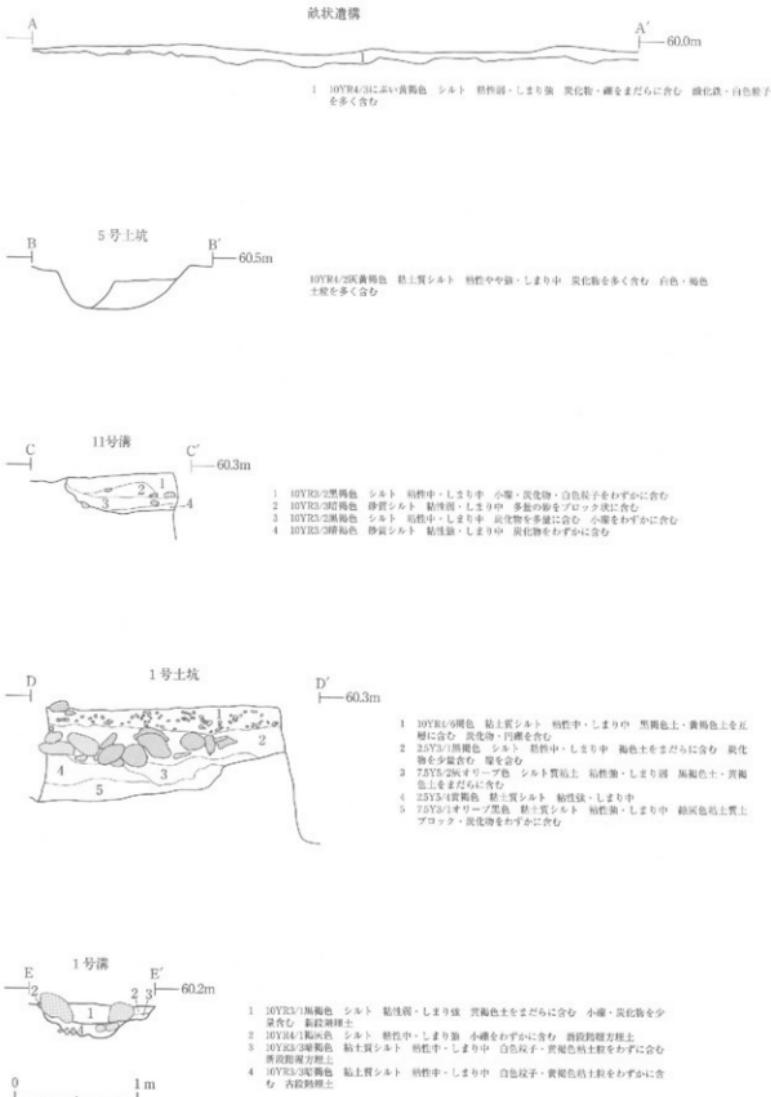


図64 武家屋敷地区第7地点Ⅳ期の遺構(3)
Fig.64 Features belonging to phase IV at BK7 (3)

古段階とほぼ同じである。

磁器、陶器、土師質・瓦質土器、瓦など、各種の遺物が出土しているが、遺物の量はさほど多くない。

【11号溝】(図63・64、図版47)

B - 6・7区で検出された溝である。2層上面で検出されたことから、IV期の遺構であると判断した。北側、東側、西側の3方向が擾乱によって破壊されているため、全体の形態ははっきりしないが、東西方向に延びる溝と考えられ、方向はN-63°-Eである。検出した長さは2.4mで、北側が破壊されているため幅は不明であるが、残存する幅は110cmである。深さは32cm前後で、断面形状は逆台形に近い。検出した範囲が狭いため、どちらに流れていたかは明らかでない。磁器、陶器、土師質・瓦質土器、瓦、硯など、各種の遺物が出土しているが、遺物の量はさほど多くない。

【1号土坑】(図63・64、図版47)

B - 8~10区で検出された土坑である。調査区の西よりの区域では、2層がほとんど分布しないので、掘り込み面は明らかでない。出土した磁器や陶器の様相から、幕末から明治初頭に下る可能性が高いと考えられるため、IV期の遺構であると判断した。西側は調査区外へ延び、南東部分が2層の落ち込みに切られているため大きさは不明であるが、本来は長方形、あるいは隅丸形を呈したものと考えられる。残存部分の大きさは、南北方向で410cm、東西方向で280cm、深さは75cmである。埋土の堆積はほぼ水平である。上部の埋土には礫が大量に含まれており、人為的に埋め戻されたことが確実である。特に埋土2層には、大きいものでは径20cmほどの礫が多数含まれている。磁器、陶器、瓦、土師質土器、硯などが出土している。また底面付近で、長さ約150cmの角材が出土している。

【5号土坑】(図62・64、図版47)

C・D - 3区で検出された。2層上面から掘り込まれており、掘り込み面からⅣ期と判断される。西側は米軍共同溝による擾乱により破壊されており、北側の一部はピット3により切られているため、全体形状は不明である。残存部分の最大長50cm、深さ約34cmである。遺物は出土せず、遺構の性格も不明である。

【1号石列】(図63、図版46)

1号溝の南側のD - 9区で検出されたもので、長軸の大きさ15~25cm程度の川原石を一列並べたものである。2層上面で造られており、IV期とした。北東-南西方向に延びており、方向はN-58°-Wである。両側とも擾乱によって破壊されており、残存していた長さは1.15mである。石列をはさんで両側の2層上面の標高は、特に変わることもない。遺構の性格は判らない。

(3) 小結

検出遺構の報告の最後に、各時期の遺構の様相について簡単にまとめるとともに、いくつかの問題点を指摘しておきたい。

江戸時代以前の遺構は、縄文時代の階級になる可能性のある土坑が挙げられるだけである。他にも古代の遺物が出土しているが、遺構は見つかっていない。いずれにせよ、江戸時代以前には、遺構・遺物はわずかで、この地点の利用は、限られたと考えられる。

江戸時代以降は、各時期を通じて、様々な遺構が造られる。整地層との関係から、Ⅰ期からⅣ期に区分できた。この内のⅣ期は、明治時代に入って、武家屋敷が取り扱われた時期と考えられる。煙の巻状の遺構が検出されており、他の遺構は少ない。Ⅳ期については、屋敷が取り扱われて以後の様子を示すので、これ以上の検討は、特に加えない。以下では、江戸時代の武家屋敷として使われていたと考えられる、Ⅰ期からⅢ期について、若干の検討を加えてみたい。

Ⅰ期からⅢ期の遺構を比べると、各時期によって、遺構の様相が異なっている。その内容を考えるにあたって、今回の調査区が、絵図に見られる屋敷地の区画の中で、どのような位置にあるのかを検討しておきたい。

本章の1. (2)において、調査区の位置が、城下絵図で示されたどの場所にあたるかを検討した(図15)。東を裏下馬通、西を大堀通、北を亀岡通、南を中ノ坂通に囲まれた、方形の区画の中に、今回の調査区が入ることは間違いない。その中の詳細な位置関係については、道路の位置が特定できていないことから、明確でない。南北方向の裏下馬通の位置は、千貫橋の位置からほぼ確定であるが、それ以外の道路については、詳細な位置を推定することはできない。特に、東西方向の道路の位置は、推定する手掛かりがまったく無く、およその位置を示したにすぎない。そのため全体の位置関係から推測するに留まるが、四方を道路に囲まれた区画の中で、東西・南北とともに、道路に近いところとは考え難い。道路から内側に入った、奥まったところに位置する可能性が高いと考えられる。

今回の調査区では、Ⅲ期の東側を除くと、建物跡が極めて少ない。特にⅠ期は、区画施設と考えられる溝以外には、遺構が極めて少ない。Ⅱ期でも調査区の各所でゴミ穴が検出されており、表の主要な建物が造られた場所でないことは確実であろう。このことは、今回の調査区が、屋敷地の裏手の、あまり建物が建てられていない区域であったことを示す可能性がある。絵図の検討結果と、このような遺構の様相は、おおまかには対応するものと考えて良いであろう。このように考えた場合、調査区の中に屋敷地の境界が入ってくる可能性が高い。しかし、屋敷地を区切る区画施設と考え得る遺構は、Ⅰ期からⅢ期を通じて、あまり検出されていないことは問題である。Ⅰ期の12号溝、Ⅱ期の22号溝、Ⅲ期の1号柱列・2号柱列などが屋敷を区画する施設になる可能性がある遺構である。これらだけで、江戸時代の全ての期間を通じて区画していたと考えるには、その数が少ないと言わざるを得ない。この点に関しては、屋敷の塊となる施設を、道路に近い表側はともかく、裏手の部分でどれだけ整備していたのかについて、改めて考えてみる必要があるだろう。必ず、溝や堀で区画していたのかどうかは、再検討の必要がある。簡素な区画施設や、生け垣などが使われていた場合、発掘調査でその痕跡が検出できるかどうか問題である。考古資料以外の様々な面から、今後検討を加えていく必要があるだろう。

調査区が位置すると考えられる四方を道路に囲まれた区域は、大きさは4つに区画されている(図16・17、表6)。今回の調査で検出された遺構との関係で注目されるのは、南東の区画である。この区画は、延宝6～8年(1681～83)の絵図では「月暉和尚」とされているが、その前後の絵図では記載が無いか、「明星敷」とされている。すなわち、寛文4年(1664)から元禄4・5年(1691～92)の絵図まで、一時期を除くと、空き屋敷であったと考えられる。続く、享保9年(1724)以後とされる絵図では、南東部の区画は3つに区分され、それぞれに人名が書かれている。

Ⅱ期の2号遺構、1号遺構、24号土坑は極めて大規模なゴミ穴で、ゴミ穴に捨てられた膨大な廃棄物の内容や

本箇の記載内容から、二の丸のゴミが運ばれて捨てられた可能性が考えられる。ところが、家臣が使用している屋敷地に、二の丸のゴミを運び込むことは考え難い。空き屋敷であった場合には、その空き地にゴミ穴を掘って捨てたと考えることも可能であろう。Ⅱ期に大規模なゴミ穴が造られていた調査区の南東部が、絵図で空き屋敷とされている南東部の区画に入るすると、ゴミ穴が造られた理由を説明し易くなる。

2号遺構などから出土した本箇の記載された年号は、享保5年（1720）を中心として、若干の幅がある。新しいところでは、確実なものとしては享保12年（1727）まであり、確実ではないが可能性のあるものとしては享保18年（1733）まである。人名が記されるようになる絵図の年代は、享保9年を上限とすると考えられているもので、実際にはもう少し下る時期に作成された可能性もある。微妙な部分が残っているが、年代的には合致する可能性はある。

しかし、このように考えた場合には、Ⅱ期の22号溝や、先行するⅠ期の12号溝などが問題となる。これらの溝が屋敷地を区画する施設であった場合、2号遺構などは、区画の西側となってしまう。溝との位置関係が逆であれば問題がないが、残されている絵図では、南西の区画が空き屋敷であったことは無い。あるいは、絵図が残されていない、元禄4・5年（1691～92）から享保9年（1724）ごろまでの間に、南西部の区画が一時的に空き屋敷であった可能性を想定することもできなくもないが、現状では根拠が薄いであろう。いずれにせよ、これ以上検討を進めていく材料はなく、確実なことは言えない。今後、周辺の調査が進んだ段階で、再度検討することが必要である。

Ⅲ期になると北東部に建物跡が集中する他、それまで区画施設の見られない場所に、1号柱列や2号柱列が造られている。これらのこととは、屋敷の区画が変化した可能性を示すものであろう。絵図では、享保9年（1724）以後の絵図から、区画が細かく分割されるようになる。一つの区画が小さくなるため、それまで奥まった場所にも、建物を建てる必要が生じたことが推測される。区画が細かくなしていく時期は、Ⅲ期の年代とは合わないが、変化の方向としては合致すると言えるだろう。

このように、検出された遺構を絵図と関連させて解釈することは簡単ではない。明解な結論を得ることが難しいが、大まかな様相では、一定の関連が見られそうである。周辺区域の調査の進展に合わせて、更なる検討を加えていくことによって、少しずつであっても、解明していくことが必要であろう。

最後に、調査区域の様相を検討するにあたっても、様々に関連すると思われる礎石建物の保存状況について、触れておきたい。江戸時代では、簡素な構造の建物には掘立柱建物が残ると考えられるが、主要な建物は礎石建物に変化していったと思われる。建築史的検討が必要であるが、少なくとも18世紀後半以降は、民家建物においても、母屋は礎石建物となっている可能性が高い。ところが、川内北地区の調査においては、礎石建物の検出事例が少ない。掘立柱建物や掘立柱列は多数発見されるのに、礎石建物はあまり見つからない。この問題を考える上で、Ⅲ期の2号建物や3号建物の調査成果は、重要であると思われる。2号建物や3号建物では、掘り方が深い礎石もあるが、わずかに掘り詰めた程度で石を据えている場合も多い。地覆石の場合、その傾向が特に強い。このような場合、石が取り除かれると、掘り方の検出は極めて難しい。あるいは、後世の削平がわずかでも、痕跡が残らなくなってしまう。このような事例を見ると、礎石建物が検出されなかっただとしても、もともと存在しなかったのかどうか、慎重に検討する必要がある。同時に、礎石建物のわずかな痕跡を見落とさないために、丁寧な調査の方法が求められるであろう。

〈引用・参考文献〉

- 阿刀田令造 1996 「仙台城下絵図の研究」東北報恩会博物館図書部研究報告 4
- 坂田勝編 1995 「私本仙台藩上事典」創栄出版
- 佐藤 円 1979 「近世武「住宅」」叢文社
- 鎌木省三 1997 「仙台風俗志」(1977年歴史図書社より再刊)
- 仙台市教育委員会 1967 「仙台城」
- 仙台市教育委員会 2005 「仙台市若林城跡（第5次調査）」「平成17年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨」55~60頁
- 仙台市史図録編纂委員会編 1980 「増補改訂版 日で見る仙台の歴史」宝文堂
- 仙台市史編さん委員会編 1997 「仙台市史資料編 3 近世 2 城下町」仙台市
- 仙台市史編さん委員会編 1997 「仙台市史特別編 4 市民生活」仙台市
- 仙台市史編さん委員会編 2001 「仙台市史通史編 3 近世 1」仙台市
- 仙台市史編さん委員会編 2004 「仙台市史通史編 5 近世 2」仙台市
- 高倉淳はか編著 1994 「絵図・地図で見る仙台」今野印刷
- 高橋富雄はか編著 1979 「角川日本地名大辞典 4 宮城県」角川書店
- 東北大學埋蔵文化財調査委員会 1985 「東北大學埋蔵文化財調査年報 1」
- 東北大學埋蔵文化財調査委員会 1986 「東北大學埋蔵文化財調査年報 2」
- 東北大學埋蔵文化財調査委員会 1990 「東北大學埋蔵文化財調査年報 3」
- 東北大學埋蔵文化財調査委員会 1992 「東北大學埋蔵文化財調査年報 4・5」
- 東北大學埋蔵文化財調査委員会 1993 「東北大學埋蔵文化財調査年報 6」
- 東北大學埋蔵文化財調査委員会 1994 「東北大學埋蔵文化財調査年報 7」
- 東北大學埋蔵文化財調査研究センター 1997 「東北大學埋蔵文化財調査年報 8」
- 東北大學埋蔵文化財調査研究センター 1998 「東北大學埋蔵文化財調査年報 9」
- 東北大學埋蔵文化財調査研究センター 1999 「東北大學埋蔵文化財調査年報 10」
- 東北大學埋蔵文化財調査研究センター 1999 「東北大學埋蔵文化財調査年報 11」
- 東北大學埋蔵文化財調査研究センター 2000 「東北大學埋蔵文化財調査年報 13」
- 東北大學埋蔵文化財調査研究センター 2001 「東北大學埋蔵文化財調査年報 14」
- 東北大學埋蔵文化財調査研究センター 2001 「東北大學埋蔵文化財調査年報 15」
- 東北大學埋蔵文化財調査研究センター 2005 「東北大學埋蔵文化財調査年報 18」
- 西和太 1990 「岡解古建築入門」彰国社
- 本田勇編著 2003 「史料仙台伊達氏家臣団事典」丸善
- 三浦正幸監修 2002 「最新日本名城古写真集成」別冊歴史読本第27巻第14号 新人物往来社
- 宮城県図書館 1993 「宮城県立美術館所蔵絵図・地図解説目録」
- 村上直、木村健、藤野保 1988 「藩史大事典第1巻北海道・東北編」雄山閣
- 吉岡一男ほか編著 2005 「絵図・地図で見る仙台 第二輯」今野印刷
- 渡辺信大ほか編著 1994 「宮城県姓氏家系大辞典」角川書店

REPORT
OF THE ARCHAEOLOGICAL RESEARCH ON THE CAMPUS OF
TOHOKU UNIVERSITY
Vol.19-1, MARCH 2006

The Archaeological Research office
On the Campus, Tohoku University
1-1,Katahira,2chome,AobaWard,Sendai 980-8577 JAPAN

Summary

On the campus of Tohoku University a lot of archaeological sites are known. Among them, Sendai Castle is the most famous and largest one. Almost all of the south part of Kawauchi campus is located on its secondary citadel area. The north part of Kawauchi campus is located on the sites of samurai residences. Tomizawa campus includes Jomon and Kofun period site.

In Japan, if existing circumstances need to be changed in the known site area, excavation research on the buried cultural properties must be carried out. According to legal procedures, the commission for research, which was organized in 1983, carried out many salvage excavations for 11 years. It was reorganized into the Center in 1994, to improve conditions of research. The Center mainly carries out salvage excavations of archaeological sites on the campus, analyzes these records and remains and publishes excavation reports. Conservation and exhibition of archaeological heritage, studies about structure of sites, artifacts, technique of excavation and preservation are important duties.

This volume carries the report of salvage excavations of TM5 on Tomizawa campus and BK7 on Kawauchi campus, which was conducted by the Archaeological Research Center on the Campus of Tohoku University in 2001. In the excavation of BK7, a lot of artifacts have been excavated. So these are reported in the book in separate volumes. This report is the first separate volume, and describes about the archaeological features of BK7. We report about the artifacts and analyses of natural science on the 2nd to 5th separate volume.

TM5 site (the 5th excavation of Ashinokuchi site at Tomizawa campus)

This area was excavated prior to construction of a building for the GeV γ -ray experimental device at the Laboratory of Nuclear Science. The area of the excavation was 512m².

A ditch, 10 clay mining pits and 3 pits were found from this area. This ditch had been already found at TM3 and TM4, and these are parts of the same ditch. Because there is no artifact clearly dated from this ditch, the date of this ditch is unknown.

Ten clay mining pits at TM5 are similar to those at TM4. The clay mining pits at TM4 were dated to the Final Jomon period based on the artifacts. But the size and distribution of the clay mining pits at TM5 are smaller than TM4. A haji-ware vessel belonging to the early Kohun period was found from clay mining pit No.3. So it is inferred that these clay mining pits are dated to the Kohun period.

BK7 site (Loc.7 of samurai residences located at the side of north outer moat of Ninomaru, i.e. Secondary Citadel of Sendai Castle)

This area was excavated prior to construction of a building for Multimedia Education and Research Complex. This area was samurai residences located at the side of north outer moat of Ninomaru in Edo period. At BK7, a trap pit was the only archaeological features before Edo period. A lot of archaeological features were found that are dated from Edo period to Meiji period. And these archaeological features are classified into 4 major stages.

Phase I

Phase I is from around the initial period of the 17th century to the end of the 17th century. At the east part of this excavation area, there was a ditch running in north and south direction. And being crossed this ditch at right angles, there were also some small-scale ditches. It is supposed that the ditch was the facility to divide the area into individual residences, but its detailed date is not clear. There are a few features. From No.14 earthen pit, some porcelain and glazed ceramics dated to the initial Edo period are excavated. It shows that this area was occupied since the initial Edo period.

Phase II

Phase II is from around the initial period of the 18th century to the early part of the 19th century. There were some huge garbage pits at the southeast part of this excavation area, and a lot of wooden tablets and wooden implements written in black ink (Indian ink) were found from these garbage pits. The era name of around 1720 was written on these wooden tablets. The contents of these wooden tablets show that the garbage was carried in and dumped here from the Secondary Citadel of Sendai Castle. Besides, a lot of earthen pits and ditches were found overlapped on each other at the northeast part of this excavation area.

Phase III

Phase III is from around the early part of the 19th century to around 1870(the early part of Meiji period). Some buildings were constructed on foundation stones, some buildings were with pillars embedded directly in the ground and some lines of pillar-holes were reconstructed over and over around the northeast part of this excavation area. At the south part of this excavation area, a pond was found, its bank was protected by stones.

Phase IV

Phase IV is from around 1870 to around the 21st year of Meiji (1888), when the Japanese Imperial Army was disposed at the site. Some structural remains such as ridges were found at the north side of this excavation area. There are a few ditches and earthen pits. But the density of the archaeological features was low. It was the result that the samurai residence area had been abolished at the Meiji Restoration period.

The aspects of the archaeological features at each major stage are different. It reflects the differences in land-use patterns at each stage.

写 真 図 版

図版 1～4：芦ノ口遺跡第5次調査（TM5）検出遺構・出土遺物

図版 5～47：仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点（BK7）検出遺構



1. 調査区全景（北東から）



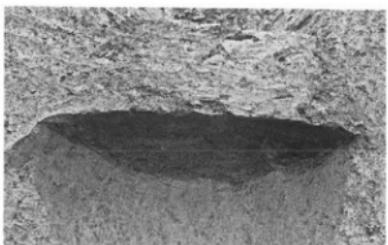
2. 調査区全景（北から）



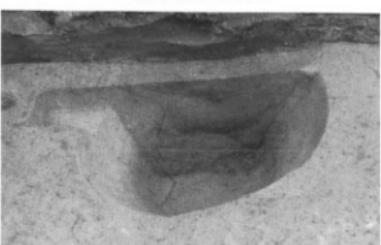
3. 調査区全景（南から）



4. 調査区全景（北西から）



5. 1号溝セクション（北から）



6. 1号土坑セクション（西から）



7. 2号土坑（西から）



8. 3号土坑セクション（北から）

図版1 芥ノ口遺跡第5次調査全景・検出構造 (1)
PL1 Views and features at TM5 (1)



1. 3号土坑（南から）



2. 4号土坑セクション（南から）



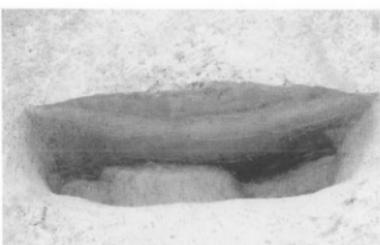
3. 4号土坑（北から）



4. 5号土坑セクション（北から）



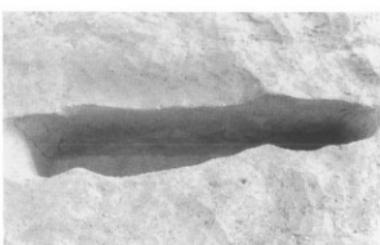
5. 5号土坑（北から）



6. 6号土坑セクション（北から）

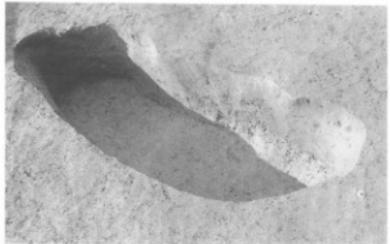


7. 6号土坑（北から）



8. 7号土坑セクション（西から）

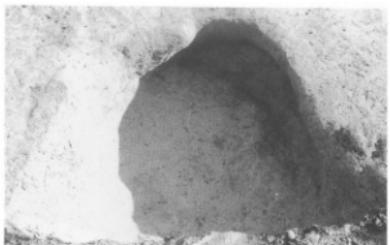
図版2 芦ノ口遺跡第5次調査検出遺構 (2)
PL2 Features at TM5 (2)



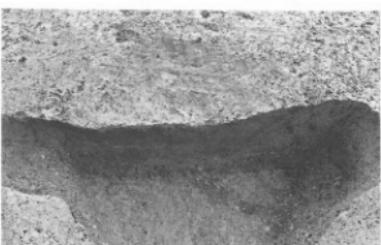
1. 7号土坑（東から）



2. 8号土坑セクション（北から）



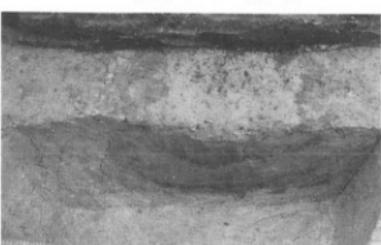
3. 8号土坑（西から）



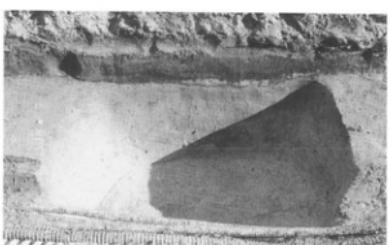
4. 9号土坑セクション（北から）



5. 9号土坑（南から）



6. 10号土坑セクション（西から）

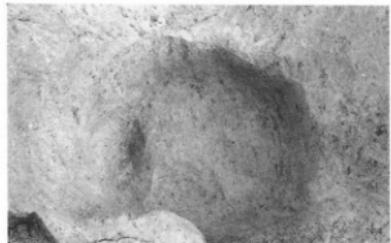


7. 10号土坑（東から）



8. ピット1セクション（南から）

図版3 芦ノ口遺跡第5次調査検出遺構（3）
Pl.3 Features at TM5 (3)



1. ピット 1 (西から)



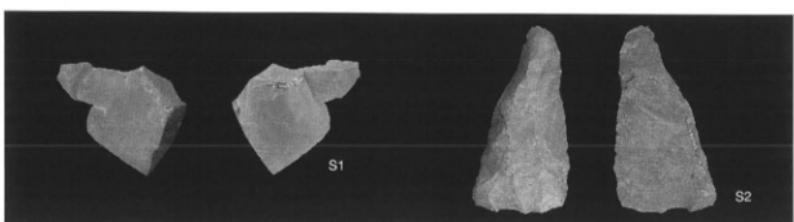
2. ピット 2セクション (北から)



3. ピット 3セクション (東から)



4. ピット 3 (西から)



S1

S2



C1

S1・2 S=1:2

C1 S=1:3

図版4 芦ノ口遺跡第5次調査検出遺構(4)・出土遺物
Pl4 Features at TM5 (4), pottery and stone implements from TM5



1. 調査前全貌（北西から）



2. 東側最終状況（南から）



3. 東側最終状況（南から）



4. 西側最終状況（南から）

図版5 武家屋敷地区第7地点全景 (1)
Pl.5 Views of BK7(1)

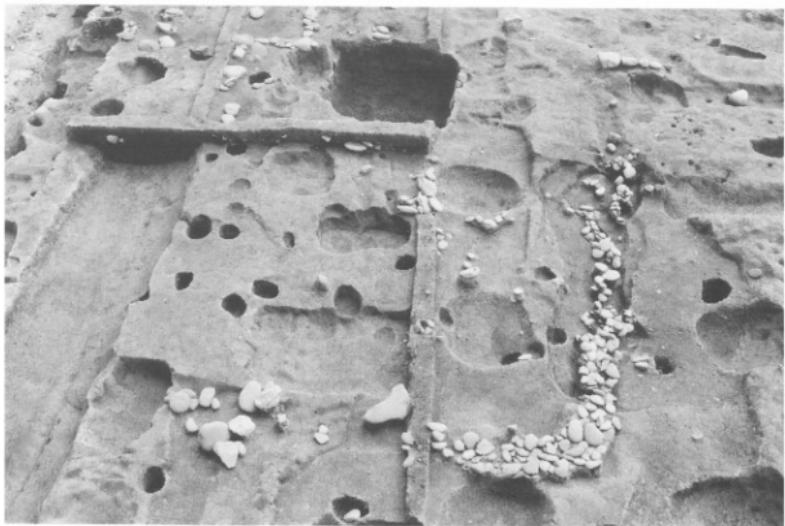


1. 西側最終状況（北から）



2. 東側最終状況（北から）

図版 6 武家屋敷地区第 7 地点全景 (2)
Pl.6 Views of BK7(2)



1. 北東部Ⅱ～Ⅲ期（北から）



2. 南東部Ⅱ～Ⅲ期（南から）

図版7 武家屋敷地区第7地点全景（3）
Pl.7 Views of BK7(3)



1. 各期全景（北から）



2. 各期全景（西から）

図版 8 武家屋敷地区第 7 地点全景 (4)
Pl.8 Views of BK7(4)



1. 調査区北壁B列セクション（南から）



2. 調査区北壁D列セクション（南から）



3. 調査区北壁E列セクション（南から）



4. 調査区北壁F列セクション（南から）



5. 調査区北壁G列セクション（南から）



6. 調査区北壁H列セクション（南から）



7. 調査区北壁I列セクション（南から）



8. 調査区北壁I・J列セクション（南から）

図版9 武家屋敷地区第7地点広域セクション(1)
Pl.9 Cross sections of BK7(I)



1. 調査区南壁I列セクション（北から）



2. 調査区南壁II・I列セクション（北から）



3. 調査区南壁II列セクション（北から）



4. 調査区南壁G列セクション（北から）



5. 調査区南壁F・G列セクション（北から）



6. 調査区南壁D・E列セクション（北から）



7. 調査区南壁D列セクション（北から）

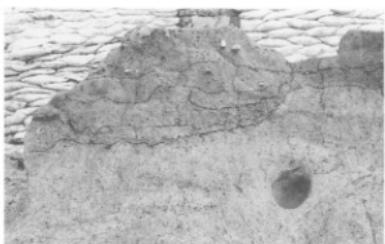


8. 調査区南壁B列セクション（北から）

図版10 武家屋敷地区第7地点広域セクション(2)
Pl.10 Cross sections of BK7(2)



1. 共同溝西壁 8・9列セクション (東から)



2. 共同溝西壁 7・8列セクション (東から)



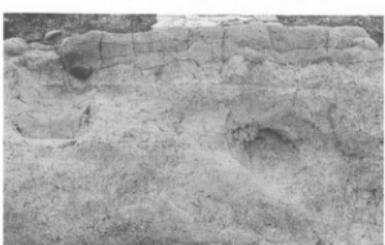
3. 共同溝西壁 7列セクション (東から)



4. 共同溝西壁 6・7列セクション (東から)



5. 共同溝西壁 6列セクション (東から)



6. 共同溝西壁 4・5列セクション (東から)



7. 共同溝西壁 4列セクション (東から)



8. 共同溝西壁 2列セクション (東から)

図版11 武家屋敷地区第7地点広域セクション(3)
PL11 Cross sections of BK7C3



1. 共同溝東壁 2・3列セクション (西から)



2. 共同溝東壁 4・5・6列セクション (西から)



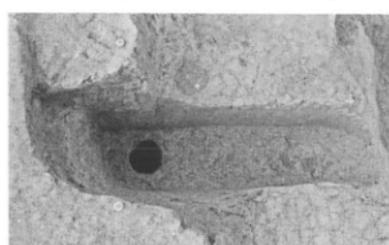
3. 共同溝東壁 7列セクション (西から)



4. 共同溝東壁 8・9列セクション (西から)



5. 共同溝東壁 10・11列セクション (西から)

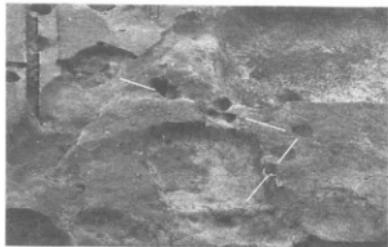


6. 33号土坑 (南から)



7. 33号土坑セクション (東から)

図版12 武家屋敷地区第7地点広域セクション(4)、縄文時代の遺構
Pl.12 Cross sections and features of Jomon period at BK7



1. 5号建物（南から）



2. 5号建物セクション（南から）



3. 12号溝（北から）



4. 12号溝I-2・3区（北から）



5. 12号溝3・4列境ベルト北側セクション（北から）



6. 12号溝調査区北壁セクション（南から）

図版13 武家屋敷地区第7地点Ⅰ期の遺構 (1)

Pl.13 Features of phase I at BK7(I)



1. 24号溝（東から）



2. 24号溝セクション（北から）



3. 25号溝（南から）



4. 25号溝セクション（東から）



5. 28号溝（東から）



6. 28号溝セクション（東から）



7. 29号溝・12号溝セクション（北から）

図版14 武家屋敷地区第7地点Ⅰ期の遺構 (2)

Pl.14 Features of phase I at BK7(2)



1. 29号溝 (南から)



2. 30号溝セクション (南から)



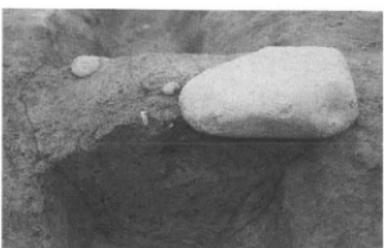
3. 32号溝セクション (東から)



4. 33号溝D・E - 6区 (東から)



5. 33号溝F～H - 6区 (南から)



6. 33号溝セクション (西から)

図版15 武家屋敷地区第7地点Ⅰ期の造構(3)
Pl.15 Features of phase 1 at BK7(3)



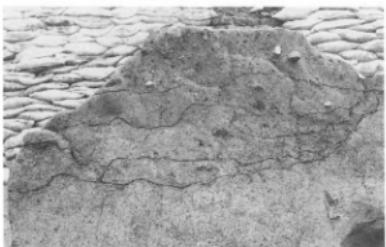
1. 9号土坑（西から）



2. 9号土坑セクション（東から）



3. 13号土坑（南から）



4. 13号土坑セクション（東から）



5. 14号土坑（北から）



6. 14号土坑セクション（北から）



7. 25号土坑（南東から）



8. 25号土坑セクション（南西から）

図版16 武家屋敷地区第7地点Ⅰ期の遺構 (4)

Pl.16 Features of phase I at BK7(4)



1. 26号土坑（東から）



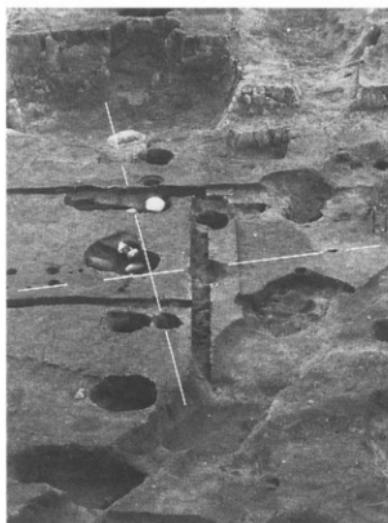
2. 26号土坑セクション（東から）



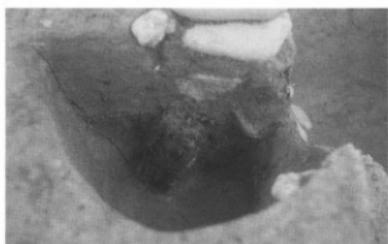
3. 30号土坑セクション（東から）



4. 31号土坑調査区南壁セクション（北から）



5. 8号柱列・9号柱列（南から）



6. 8号柱列柱1セクション（北から）



7. 9号柱列柱2セクション（北から）

図版17 武家屋敷地区第7地点Ⅰ期・Ⅰ～Ⅱ期の遺構
PL17 Features of phase I and phase I ~ II at BK7



1. 1号遺構（南から）



2. 1号遺構南北セクション（東から）



3. 1号遺構・2号遺構G～I～8区東西セクション（南から）



4. 1号遺構G・H～8区東西セクション（南から）



5. 1号遺構埋土3層遺物出土状況（西から）



6. 1号遺構埋土3層大骨格出土状況（西から）



7. 1号遺構埋土3層縄籠出土状況（南から）



8. 1号遺構埋土3層陶器出土状況（北から）

図版18 武家屋敷地区第7地点II期の遺構 (1)
PL18 Features of phase II at BK7(I)



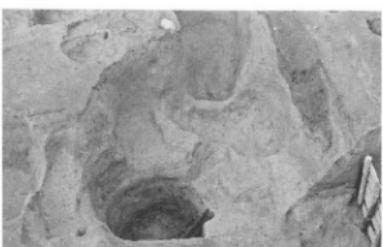
1. 2号遺構・24号土坑（南から）



2. 2号遺構G・H-7～9区（南から）



3. 2号遺構II-7～8区（北から）



4. 2号遺構G・H-9～11区（南から）



5. 2号遺構G・H-9～11区（東から）



6. 2号遺構G・H-9～11区（西から）



7. 2号遺構II-8～9区（西から）



8. 2号遺構II-8～9区（東から）

図版19 武家屋敷地区第7地点II期の遺構 (2)
PL19 Features of phase II at BK7(2)



1. 2号遺構II-9区南北セクション（東から）



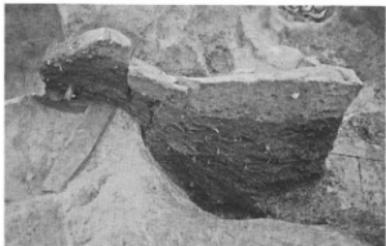
2. 2号遺構II-8区南北セクション（東から）



3. 2号遺構II-10・11区南北セクション（東から）



4. 2号遺構II-10区南北セクション細部（東から）



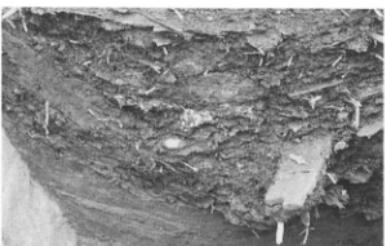
5. 2号遺構II-11区東西セクション（南から）



6. 2号遺構II-11区東西セクション（南から）



7. 2号遺構II-8区東西セクション（北から）



8. 2号遺構II-8区東西セクション細部（北から）

図版20 武家屋敷地区第7地点II期の遺構 (3)
Pl.20 Features of phase II at BK7(3)



1. 2号遣拂II - I - 8区東西セクション (南から)



2. 2号遣拂II - 7 - 8区埋土 3層遺物出土状況 (北から)



3. 2号遣拂 II - 7 - 8区埋土 4層遺物出土状況 (東から)



4. 2号遣拂 II - 8区埋土 2層遺物出土状況 (北から)



5. 2号遣拂 II - 8区埋土 2層アワビ貝殻出土状況 (北から)



6. 2号遣拂 II - 11区埋土漆器出土状況 (北から)



7. 2号遣拂 II - 11区埋土 2b層漆器出土状況 (東から)



8. 2号遣拂 II - 11区埋土 2層ハエの鉢出土状況 (北から)

図版21 武家屋敷地区第7地点II期の遺構
PL.21 Features of phase II at BK7(4)



1. 池状遺構古段階（南から）



2. 池状遺構古段階（北から）



3. 池状遺構古段階西岸（東から）



4. 池状遺構古段階西岸杭列（東から）



5. 池状遺構古段階D-E-11区東西セクション（南から）



6. 池状遺構古段階D-E-11区東西セクション（南から）



7. 池状遺構古段階西岸発出土状況（南から）



8. 池状遺構古段階西岸の石敷確認状況（東から）

図版22 武家屋敷地区第7地点II期の遺構
Pl.22 Features of phase II at BK7(5)



1. 7号柱列（北から）



2. 7号柱列柱3セクション（東から）



3. 4号溝・5号溝（北から）



4. 4号溝木材出土状況（北から）



5. 4号溝セクション（東から）



6. 5号溝セクション（南から）



7. 8号溝（東から）

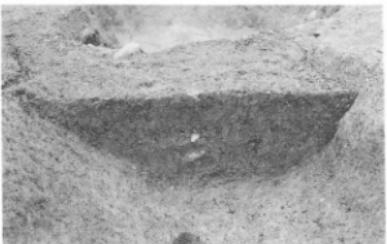


8. 8号溝セクション（北から）

図版23 武家屋敷地区第7地点II期の遺構 (6)
PL23 Features of phase II at BK7(6)



1. 9号溝（北から）



2. 9号溝セクション（東から）



3. 10号溝（北から）



4. 10号溝G-3区セクション（南から）



5. 10号溝F-4区セクション（西から）



7. 13号溝（北から）



6. 13号溝セクション（南から）

図版24 武家屋敷地区第7地点II期の遺構 (7)

Pl.24 Features of phase II at BK7(7)



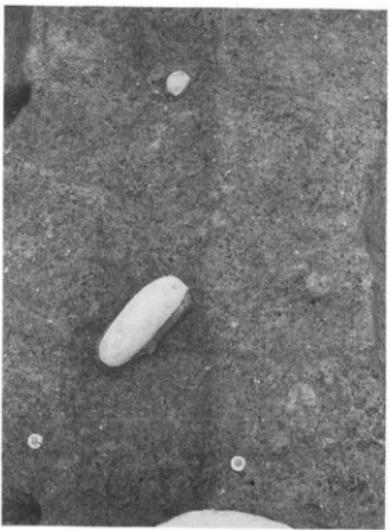
1. 15号溝 (南から)



2. 15号溝セクション (東から)



3. 16号溝セクション (北から)

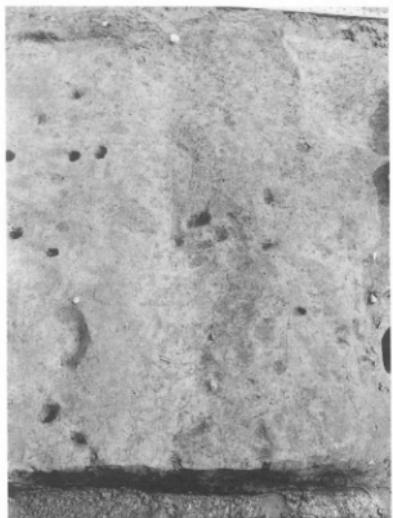


4. 16号溝 (南から)



5. 23号溝・8号溝 (南から)

図版25 武家屋敷地区第7地点II期の遺構 (8)
Pl.25 Features of phase II at BK7(8)



1. 17号溝（西から）



2. 17号溝セクション（西から）



3. 21号溝（北から）



4. 22号溝Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区（北から）



5. 22号溝Ⅳ区北壁セクション（南から）



6. 22号溝Ⅳ区南壁セクション（北から）

図版26 武家屋敷地区第7地点II期の遺構 (9)
Pl.26 Features of phase II at BK7(9)



1. 27号溝（西から）



2. 27号溝セクション（東から）



3. 31号溝（南から）



4. 31号溝セクション（東から）



5. 1号井戸（西から）



6. 1号井戸梯子検出状況（北から）

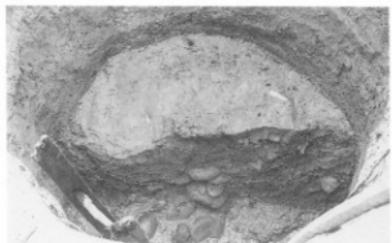


7. 1号井戸セクション1回目（東から）



8. 1号井戸セクション2回目（東から）

図版27 武家屋敷地区第7地点II期の遺構 (10)
Pl.27 Features of phase II at BK7(10)



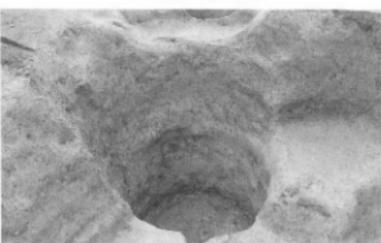
1. 1号井戸セクション3回目（東から）



2. 3号井戸（北東から）



3. 4号井戸（北西から）



4. 4号井戸（東から）



5. 3号土坑（南から）



6. 3号土坑・1号井戸セクション（南から）



7. 4号土坑（北から）

図版28 武家屋敷地区第7地点II期の遺構 (11)
Pl.28 Features of phase II at BK7(11)



1. 4号土坑遺物出土状況（西から）



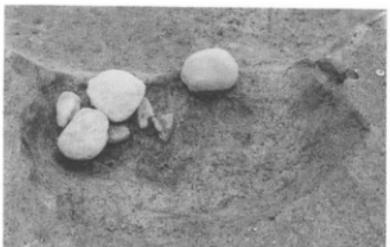
2. 4号土坑出土南御俵（東から）



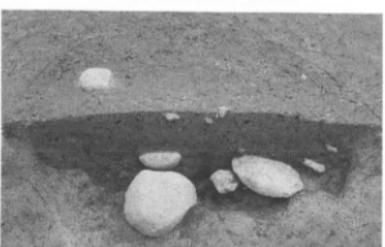
3. 4号土坑セクション（東から）



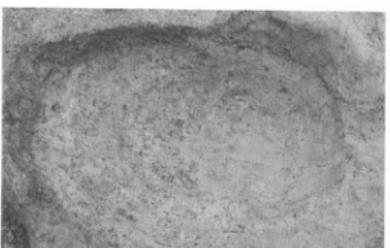
4. 6号土坑セクション（南から）



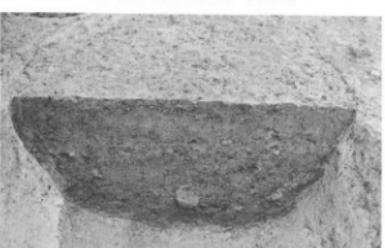
5. 7号土坑（東から）



6. 7号土坑セクション（西から）



7. 8号土坑（北から）



8. 8号土坑セクション（西から）

図版29 武家屋敷地区第7地点II期の遺構 (12)
Pl.29 Features of phase II at BK7(12)



1. 11号土坑（東から）



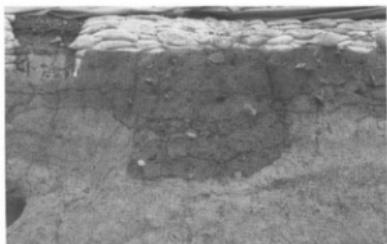
2. 11号土坑（北から）



3. 11号土坑セクション（東から）



4. 12号土坑（北から）



5. 12号土坑セクション（東から）



6. 15号土坑（西から）



7. 15号土坑木材出土状況（東から）

図版30 武家屋敷地区第7地点II期の遺構 (13)
PL30 Features of phase II at BK7(13)



1. 15号土坑セクション上部（西から）



2. 15号土坑セクション下部（西から）



3. 16号土坑（西から）



4. 16号土坑セクション（西から）



5. 18号土坑（北から）



6. 18号土坑（西から）



7. 18号土坑セクション（西から）

図版31 武家屋敷地区第7地点II期の遺構 (14)
Pl.31 Features of phase II at BK7(14)



1. 18号土坑遺物出土状況（西から）



2. 19号土坑セクション（北から）



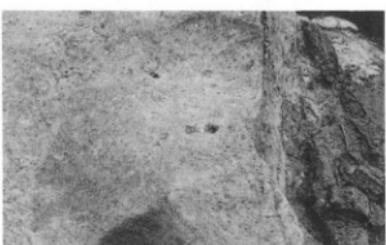
3. 20号土坑（北から）



4. 20号土坑南北セクション（東から）



5. 20号土坑II-10|X底面遺物出土状況（東から）



6. G-9 区板敷状遺構（北から）



7. 21号土坑（北から）

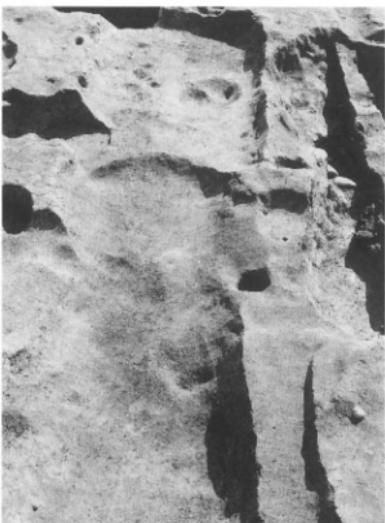
図版32 武家屋敷地区第7地点II期の遺構 (15)
Pl.32 Features of phase II at BK7(15)



1. 21号土坑セクション（南から）



2. 23号土坑セクション（北から）



3. 19号土坑・22号土坑（北から）



4. 23号土坑（北から）



5. 24号土坑（南から）



6. 24号土坑（北から）

図版33 武家屋敷地区第7地点II期の遺構 (16)
PL33 Features of phase II at BK7(16)



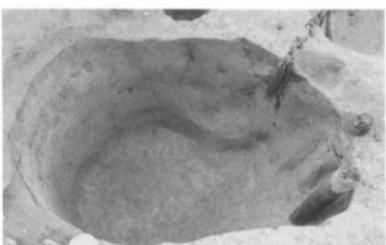
1. 24号土坑セクション（南から）



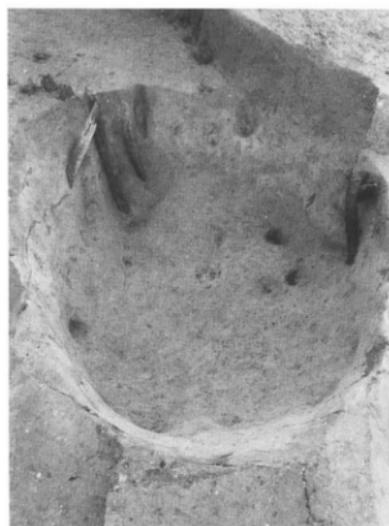
2. 24号土坑F-11区埋土2層下出土状況（北から）



3. 27号土坑セクション（南から）



4. 28号土坑（南から）



5. 29号土坑（東から）



6. 28号土坑セクション（南から）



7. G・H-11・12区雑石等検出状況（南から）

図版34 武家屋敷地区第7地点II期の造構 (17)
Pl.34 Features of phase II at BK7(17)



1. 1号建物北東部（北から）



2. 1号建物南東部（北から）



3. 1号建物北東部（東から）



4. 1号建物北東部（西から）



5. 1号建物柱19セクション（北から）



6. 1号建物柱24セクション（南から）



7. 1号建物柱13セクション（南から）



8. 1号建物柱27セクション（南から）

図版35 武家屋敷地区第7地点III期の遺構 (1)
PL35 Features of phase III at BK7(1)



1. 2号建物 (北から)



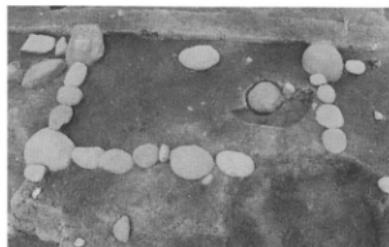
2. 2号建物東部 (北から)



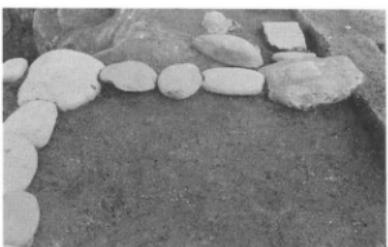
3. 2号建物 (西から)



4. 2号建物東部 (西から)



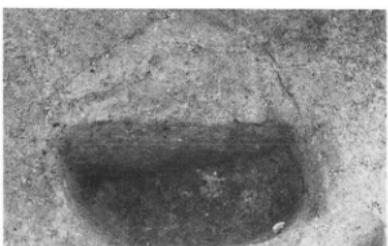
5. 2号建物石列3~5 (西から)



6. 2号建物石列3・4 (南から)



7. 2号建物石列6 (北から)



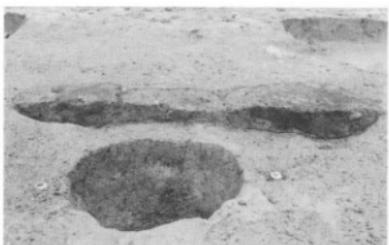
8. 2号建物柱4セクション (北から)

図版36 武家屋敷地区第7地点III期の遺構 (2)

Pl.36 Features of phase III at BK7(2)



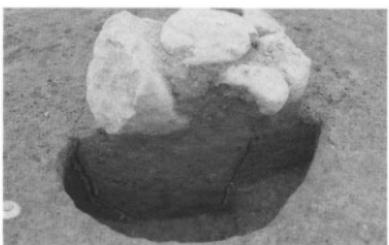
1. 3号建物（北から）



2. 3号建物東辺セクション（東から）



3. 4号建物（北から）



4. 4号建物柱6セクション（南から）



5. 東南部礫石等（南から）

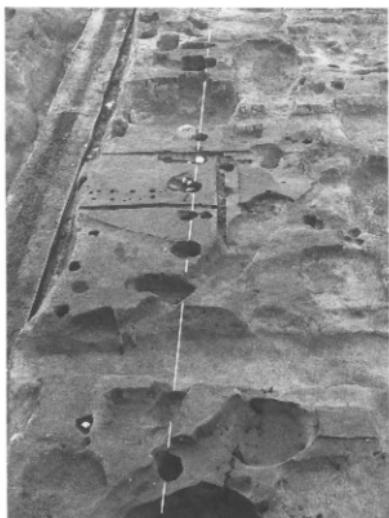


6. 東南部礫石等（北から）



7. G-11区礫石等検出状況（北から）

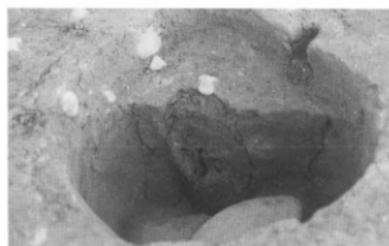
図版37 武家屋敷地区第7地点Ⅲ期の遺構 (3)
Pl.37 Features of phase III at BK7(3)



1. 1号柱列 (南から)



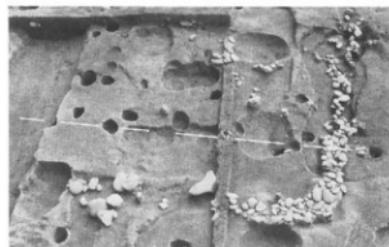
2. 2号柱列 (北から)



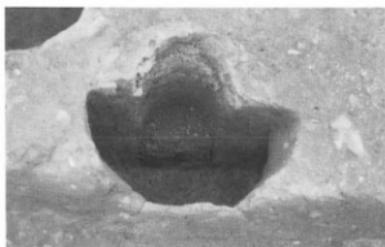
3. 1号柱列柱 7セクション (北から)



4. 2号柱列柱 4セクション (南から)

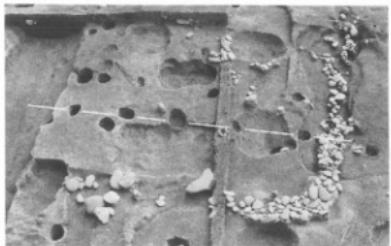


5. 3号柱列 (北から)

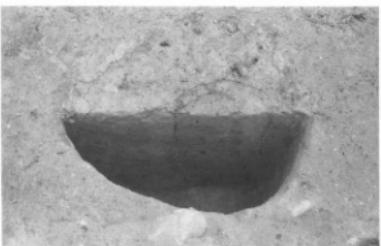


6. 3号柱列柱 3セクション (東から)

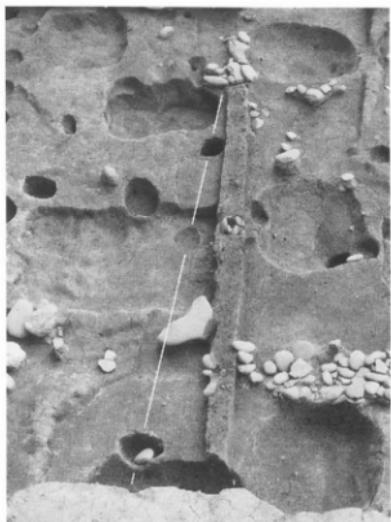
図版38 武家屋敷地区第7地点III期の遺構 (4)
PL38 Features of phase III at BK7(4)



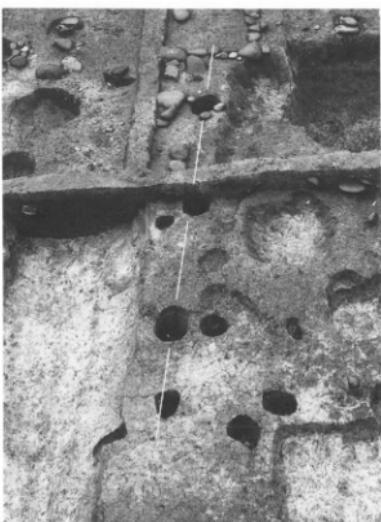
1. 4号柱列（北から）



2. 4号柱列柱3セクション（東から）



3. 5号柱列（北から）



4. 6号柱列（北から）



5. 5号柱列柱1セクション（南から）



6. 6号柱列柱1セクション（東から）

図版39 武家屋敷地区第7地点Ⅲ期の遺構 (5)
Pl.39 Features of phase III at BK7(5)



1. 池状遺構新段階（西から）



2. 池状遺構新段階（南から）



3. 池状遺構新段階東岸石組（西から）



4. 池状遺構新段階調査区南壁セクション（北から）



5. 池状遺構新段階砂疊層・遺物検出状況（南から）



6. 池状遺構新段階砂疊層堆積状況（西から）



7. 池状遺構新段階E-11区遺物出土状況（南から）

図版40 武家屋敷地区第7地点Ⅲ期の遺構
Pl.40 Features of phase III at BK7(6)



1. 石敷造構上部の木材（南から）



2. 石敷造構（南から）



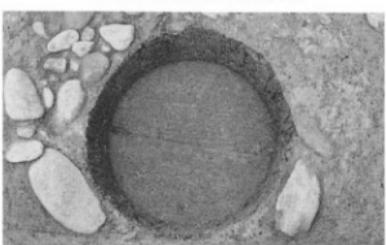
3. 痢埋設造構（北から）



4. 痢埋設造構セクション（東から）



5. 痢埋設造構（西から）



6. 痢埋設造構内部の状況（西から）



7. 痢埋設造構セクション（南から）



8. 痢埋設造構掘方セクション（西から）

図版41 武家屋敷地区第7地点Ⅲ期の造構（7）
PL41 Features of phase III at BK7(7)



1. 2号溝（北から）



2. 2号溝セクション（南から）



3. 3号溝セクション（東から）



4. 6号溝（北から）



5. 6号溝セクション（南から）



6. 7号溝D-3区（東から）

図版42 武家屋敷地区第7地点Ⅲ期の遺構 (8)
Pl.42 Features of phase III at BK7(8)



1. 7号溝（北から）



2. 7号溝D～4・5区（東から）



3. 7号溝セクション（北から）



4. 14号溝（南から）



5. 14号溝セクション（南西から）



6. 18号溝・26号溝D～5区（南西から）

図版43 武家屋敷地区第7地点III期の遺構 (9)
Pl.43 Features of phase III at BK7(9)



1. 18号溝E - 4・5区木材検出状況（北から）



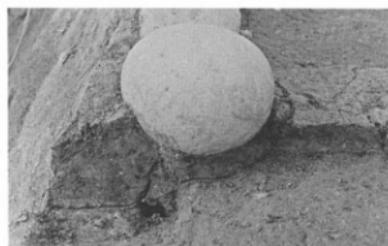
2. 18号溝セクション（北東から）



3. 18号溝・26号溝D - 5・6区（東から）



4. 26号溝セクション（東から）



5. 26号溝セクション（南から）



6. 19号溝セクション（北から）



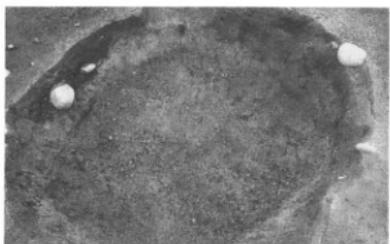
7. 2号井戸（西から）



8. 2号井戸セクション（北から）

図版44 武家屋敷地区第7地点Ⅲ期の遺構 (10)

Pl.44 Features of phase III at BK7(10)



1. 2号土坑（北から）



2. 2号土坑セクション（東から）



3. 2号土坑遺物出土状況（北から）



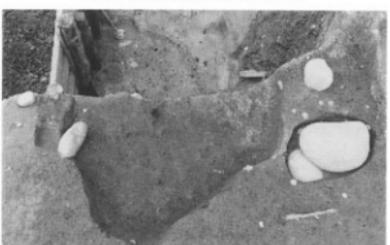
4. 2号土坑木製出土状況（南から）



5. 2号土坑下駄出土状況（南から）



6. 2号土坑漆輪出土状況（東から）



7. 17号土坑（北から）



8. 17号土坑セクション（北から）

図版45 武家屋敷地区第7地点III期の遺構 (11)

PL45 Features of phase III at BK7(11)



1. 瓦状造構 G・H-2・3区（北から）



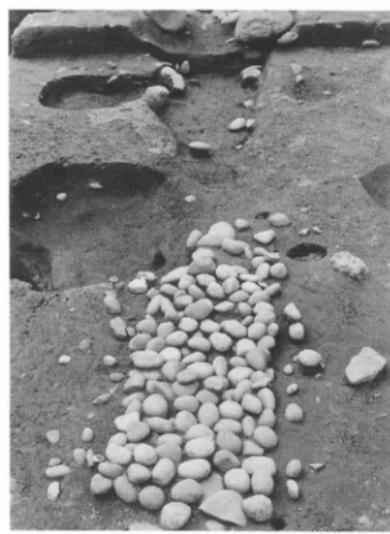
2. 瓦状造構 G・H-2・3区（北東から）



3. 瓦状造構 E-2区（北から）



4. 1号溝新段階・1号石列（東から）



5. 1号溝古段階（東から）

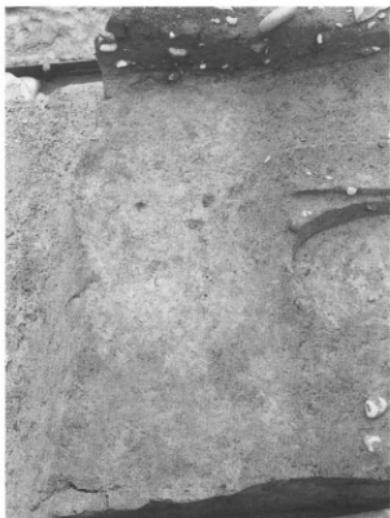


6. 1号溝新段階セクション（東から）



7. 1号溝古段階セクション（東から）

図版46 武家屋敷地区第7地点IV期の造構 (1)
PL46 Features of phase IV at BK7(l)



1. 11号坑（西から）



2. 11号坑セクション（東から）



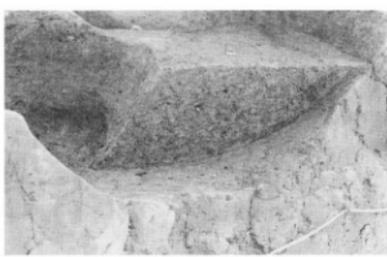
3. 1号土坑（西から）



4. 1号土坑（南から）



5. 1号土坑セクション（南から）



6. 5号土坑セクション（西から）

図版47 武家屋敷地区第7地点IV期の遺構（2）
Pl.47 Features of phase IV at BK7(2)

報告書抄録

ふりがな	とうほくくだいがくまいぞうぶんかざいちょうきねんばう						
書名	東北大学埋蔵文化財調査年報						
副書名							
卷次	19						
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	阿子島香・藤沢敦・柴田恵子・高木暢充						
編集機関	東北大学埋蔵文化財調査研究センター						
所在地	〒980-8577 宮城県仙台市青葉区片平二丁目1-1 TEL022-217-4995						
発行年月日	西暦2006年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
仙台城跡 二の丸北方 武家屋敷地区	宮城県 仙台市 青葉区川内41	04100 01033	38°15'32"	140°50'57"	2001.5.7~11.23	810	マルチメディア総合研究棟 新宮
芦ノ口遺跡	宮城県 仙台市太白区 三神峯 丁目他	04100 01315	38°13'35"	140°51'20"	2001.11.26 ~12.20	512	GeV γ線実験 室新宮
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
仙台城跡 二の丸北方 武家屋敷地区 第7地点	城館	近世	建物跡・廐棄土坑・溝・堀跡・池状遺構・ビット	陶磁器・瓦・木製品・木筒・金属製品・土製品・石製品			
芦ノ口遺跡 第5次調査	集落跡	縄文時代 古墳時代	溝・土坑	縄文土器・土師器・石器			

東北大学埋蔵文化財調査年報19 第1分冊

平成18年3月31日

発行 東北大学埋蔵文化財調査研究センター
〒980-8577 仙台市青葉区片平2丁目1-1
東北大学生命科学研究所内
TEL 022 (217) 4995

印刷 株式会社 東北プリント
TEL 022 (263) 1166
